

令和7年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金

社会福祉推進事業

介護福祉士養成課程における  
災害時の介護に係る教育のあり方  
に関する調査研究事業

報告書

令和8（2026）年3月

株式会社 日本能率協会総合研究所



## 目次

第1章 本事業の背景・目的と実施内容 .....	1
1. 本事業の背景・目的 .....	2
2. 本事業の全体像 .....	2
3. 本事業の実施概要 .....	3
第2章 グループインタビューの結果 .....	9
1. 参加者の基本属性 .....	10
2. 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力 .....	11
3. 被災地での介護活動における課題 .....	12
4. 介護福祉士養成施設における学びへの期待 .....	12
第3章 アンケート調査の結果 .....	13
1. 介護福祉士養成施設等アンケート調査 .....	14
2. 介護福祉士アンケート調査 .....	47
第4章 ヒアリング調査の結果 .....	125
1. 介護福祉士養成施設等ヒアリング調査 .....	126
2. 介護福祉士ヒアリング調査 .....	127
第5章 介護福祉士養成施設等における災害時の介護に係る教育事例集 .....	129
第6章 本事業の結果と今後の課題・展望 .....	131
1. 本事業の結果 .....	132
2. 今後の課題・展望 .....	133
参考資料	135
巻末 介護福祉士養成課程における災害時の介護に係る教育事例集	



## 第1章 本事業の背景・目的と実施内容

---

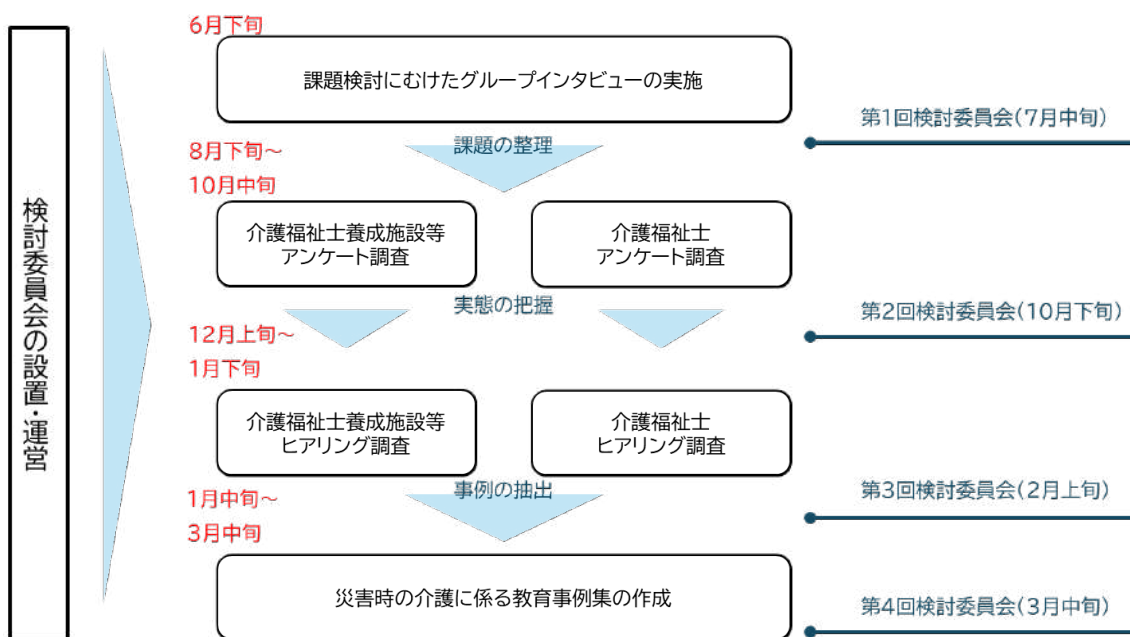
## 1. 本事業の背景・目的

2019年の介護福祉士養成課程のカリキュラム改正では、「介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き(日本介護福祉士養成施設協会, 2019)」において、災害に関する事項が盛り込まれた。他方で、このカリキュラム改正では災害時の介護に係る具体的な教育内容は示されておらず、介護福祉士養成施設等においては教育の方針や内容について共通理解が定まっていない状況にあると考えられる。

上記背景のもと、本事業では介護福祉士養成課程における教育の実態と過去の災害時において活動した介護福祉士の知見を踏まえ、それぞれの介護福祉士養成施設等において災害時の介護に係る教育のあり方について検討する際に参考とできる教育事例集を作成することを目的とする。

## 2. 本事業の全体像

本事業の全体像は下記の通り。



### 3. 本事業の実施概要

#### (1) 検討委員会の設置・運営(委員構成、オブザーバー、事務局、開催経過)

介護福祉士養成施設等における実態と課題を把握し、実効性のある事例集を作成するために、「介護福祉士養成課程における災害時の介護に係る教育のあり方に関する検討委員会」を設置した。

#### ■委員

氏名(敬称略・五十音順・ ◎委員長)	所属・役職等
午頭 潤子	白梅学園大学 子ども学部 家族・地域支援学科 准教授
佐藤 沙織	日本赤十字東北看護大学 介護福祉短期大学部 介護福祉学科 講師
高野 晃伸	公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会 中部学院大学 短期大学部 社会福祉学科 教授
舟田 伸司	公益社団法人 日本介護福祉士会 常任理事
松尾 恵	全国福祉高等学校長会 熊本県 教育庁県立学校教育局 高校教育課 指導主事
八木 裕子 ◎	東洋大学 福祉社会デザイン学部 社会福祉学科 教授

#### ■オブザーバー(厚生労働省)

氏名(敬称略)	所属・役職等
高橋 健司	厚生労働省 社会・援護局 福祉基盤課 福祉人材確保対策室 室長補佐
鈴木 真智子	同室 介護福祉専門官
山崎 彩夏	同室 資格・試験係長
松本 薫	同室 資格・試験係

#### ■事務局(日本能率協会総合研究所)

氏名	所属・役職等
富本 尚徳	福祉・医療・労働政策研究部 主任研究員
河合 信太郎	同事業部 研究員

検討委員会は対面・オンラインの併用方式により、1回あたり2時間、計4回開催した。開催概要は以下の通り。

■開催概要

回	開催日	議題
1	2025年7月17日(木)	1. 検討委員会委員のご紹介 2. 事業概要について 3. グループインタビューおよび養成施設等調査について 4. 介護福祉士調査について
2	2025年10月31日(金)	1. 養成施設等アンケート調査の中間報告 2. 養成施設等へのヒアリング調査について 3. 介護福祉士アンケート調査の中間報告 4. 介護福祉士へのヒアリング調査について
3	2026年2月2日(月)	1. 養成施設等アンケート調査の報告 2. 養成施設等ヒアリング調査の報告 3. 介護福祉士アンケート調査の報告 4. 介護福祉士ヒアリング調査の報告 5. 教育事例集の構成・内容について
4	2026年3月10日(火)	1. 教育事例集の内容について 2. 検討委員会委員のご挨拶

(2) 課題把握のためのグループインタビューの実施

調査目的	被災地の介護実践で求められる事項や平時に必要な備え等について聞き取りをおこない、災害時の介護における課題を把握するとともに、アンケート調査項目の検討に反映する。
調査対象	災害時における活動経験の豊富な介護福祉士(4名)
調査対象抽出方法	日本介護福祉士会による推薦
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 過去の災害時における活動内容と課題</li> <li>・ 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力</li> <li>・ 介護福祉士養成課程で学んでほしい事項 等</li> </ul>
調査方法	オンライングループインタビュー
調査実施日	2025年6月26日

### (3) 介護福祉士養成施設等アンケート調査の実施

調査目的	介護福祉士養成施設等における災害時の介護に係る教育の実態や課題を把握するとともに、ヒアリングに協力可能な対象を把握する。
調査対象	全国の介護福祉士養成施設および福祉系高等学校の教員(教務主任)
調査対象抽出方法	日本介護福祉士養成施設協会および全国福祉高等学校長会の協力を得て会員施設へ周知・回答依頼
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本属性</li> <li>・ 災害時の介護に係る教育の内容</li> <li>・ 災害時の介護に係る教育に関する課題 等</li> </ul>
調査方法	Web アンケート
調査実施期間	2025年9月8日～10月20日
有効回答数	180 件(配布数:529 件 有効回答率:34.0%)

### (4) 介護福祉士アンケート調査の実施

#### ①一次調査

調査目的	災害時の活動実態を把握する二次調査に協力可能な介護福祉士を抽出する。
調査対象	介護福祉士資格保有者
調査対象抽出方法	<p>職能団体等の協力団体より会員および関係者へ周知・回答依頼</p> <p>※協力団体 日本介護福祉士会、介護福祉士養成施設協会、福祉系高等学校長会、日本知的障害者福祉協会、日本在宅介護協会、全国介護事業者協議会</p>
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 被災地での活動経験の有無</li> <li>・ 二次調査への協力意向 等</li> </ul>
調査方法	Web アンケート
調査実施期間	2025年8月5日～8月29日
有効回答数	8785 件

## ②二次調査

調査目的	過去の災害において①被災した、②応援活動に従事した経験のある介護福祉士から、被災地での活動の実態や課題、活動を踏まえた教訓を把握するとともに、ヒアリングに協力可能な対象を把握する。
調査対象	一次調査で協力に同意を得られ、連絡先を把握できた介護福祉士
調査対象抽出方法	一次調査結果をもとに抽出
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本属性</li> <li>・ 被災地での介護活動と課題</li> <li>・ 被災地での活動経験を踏まえた平時の備え 等</li> </ul>
調査方法	Web アンケート
調査実施期間	2025年9月8日～10月20日
有効回答数	254 件(被災:116 件、応援:163 件 ※重複あり)(配布数:649 件 有効回答率:39.1%)

## (5) 介護福祉士養成施設等ヒアリング調査の実施

調査目的	介護福祉士養成施設等において、とくに先駆的な教育を実施している事例を収集し、教育事例集に反映する。
調査対象	介護福祉士養成施設等
調査対象抽出方法	アンケート調査等から、先駆的な取り組みが確認でき、ヒアリング調査に協力可能と回答した養成施設等を抽出
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 災害時の介護に係る授業の内容</li> <li>・ 授業実施上の工夫と課題</li> <li>・ 学生の反応や感じられる教育効果 等</li> </ul>
調査方法	対面・オンライン、追加アンケート調査
調査実施期間	2025年12月～2026年2月
実施件数	20 件(ヒアリング:7件、追加アンケート:13 件)

(6) 介護福祉士ヒアリング調査の実施

調査目的	過去の災害において①被災した、②被災地で応援活動に従事した経験のある介護福祉士から被災地での活動の実態を聞き取り、教育プログラムで活用できるような活動事例を収集する。
調査対象	介護福祉士
調査対象抽出方法	アンケート調査から困難な環境での活動を確認でき、ヒアリング調査に協力可能と回答した介護福祉士
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 発災後の具体的な活動内容と課題</li> <li>・ 活動における葛藤や迷い</li> <li>・ 活動で感じた課題・教訓 等</li> </ul>
調査方法	対面・オンライン
調査実施期間	2025年12月～2026年2月
実施件数	5件

(7) 災害時の介護のポイントと教育事例集の作成(目的、読み手、構成・内容)

目的	介護福祉士養成課程の学生が、介護福祉士として災害現場において要配慮者の生活を守るための方法や備えを学ぶための材料を提供し、教員が教育内容を検討する際のきっかけになることを目的とする。
読み手	介護福祉士養成課程の教員 介護福祉士養成課程の生徒・学生 介護福祉士が所属する介護現場
構成	はじめに(目的、読み手、構成) 1. 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力 2. 災害時の介護福祉士の活動 3. 各養成施設等の災害時の介護に係る教育事例 4. 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力を養う教育事例



## 第2章 グループインタビューの結果

---

## 1. 参加者の基本属性

下記の条件をもとに日本介護福祉士会に推薦を依頼し、4名の介護福祉士の協力を得た。

### 【条件】

(全員共通の条件)

- ・ 能登半島地震で介護福祉士としての活動経験(被災・応援のいずれか)がある方
- ・ 西日本豪雨(2018)、熊本地震(2016)、東日本大震災(2011)のいずれかで介護福祉士としての活動経験(被災・応援のいずれか)がある方
- ・ 男女がともに含まれる

(最低1名は含める条件)

- ・ 49歳以下の方
- ・ 現職で高齢者施設・障害者施設に勤めている方

### ■グループインタビュー参加者の基本属性

	性別	年代	現職種別	活動経験
1	男性	50代以上	高齢	能登半島地震(応援) 台風19号(応援) 西日本豪雨(応援) 熊本地震(応援)
2	女性	40代以下	障害	能登半島地震(応援) 東日本大震災(応援)
3	女性	50代以上	高齢	能登半島地震(応援) 東日本大震災(応援) 福井水害(被災)
4	女性	50代以上	高齢	能登半島地震(応援) 東日本大震災(被災)

## 2. 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力

グループインタビューの内容から、災害時に介護福祉士に求められる6つの資質・能力を抽出した。

求められる資質・能力	主な発言 ※事務局により一部加工
災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援する側の思いというより、被災された方々を中心とした考え方で、伴走していく・支えるという視点は非常に大事</li> <li>・ 災害時は、介助してあげようという意識になりがちだが、結果として自立支援を妨げることになるという視点は、特に大事にしないといけない考え方</li> <li>・ 実践能力が高いというのはケースが変わっても対応できることであり、自立支援というのは外せないものになるため、日頃からそういったケアをできているのかは非常に大事</li> <li>・ 避難所にいる利用者や施設が避難所となっている利用者は、日常を求めている</li> </ul>
支援に必要な情報を見極め・収集する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今、現場で支援するにはどの情報が必要か、適切かつ具体的に収集できる能力は、通常の介護過程の展開とはまた違うだろう</li> <li>・ 介護過程の展開を自力です。場面を見て、書類を見て考えるのではなく、その人を見てすることが必要</li> <li>・ アセスメントシートを使ってアセスメントするわけではない。介助しながら、その人の情報を収集していく</li> </ul>
チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 受け取った情報や自分が収集できた情報を、必ず他の人たちにつなげていかなければいけない</li> <li>・ ケアによって状態像を把握するだけではなく、他職種に展開をするという大事なつなぎの役割もある</li> <li>・ 単に要配慮者へのアセスメントのみならず、全体の把握、多職種連携のなかで誰がどんな役割を果たすのかが分かって、初めて連携ができる</li> </ul>
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ うまくいかないことだらけ、だから工夫をする、だから考えるという力は絶対に必要</li> <li>・ 知識・技術があっても、知恵がなければ災害時は対応できない。やり方が分かっていたり、知識があつたとしても、その状況下で選択・実践するには、本当に知恵をどれだけ働かせられるかだと思う</li> <li>・ 色々なアイデアを持ちながら、状況を非審判的に受け入れるということは非常に重要</li> </ul>
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ テキストやマニュアルがあるわけでもないため、何が正解かが本当に分からない手探りの状態で活動した</li> <li>・ 日頃から与えられた介護だけではなく、物の考え方や工夫を自ら考える基本的な姿勢が、準備として必要ではないか</li> </ul>
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分で自分の身を守ること・自分のコンディションを整えること・セルフケアも必要になる</li> </ul>

### 3. 被災地での介護活動における課題

介護活動における課題	主な発言 ※事務局により一部加工
避難先での受入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ どの避難所を見ても、障害のある自閉系の方や医療的なケアが必要な最重度な方はいない。避難所に入れない</li> <li>・ 被災者に、障害がある子どもをどうにかして、と言われ、みんなと一緒に遊べる子だよ、こういうふうに言ったらできるよ、悪気があったわけでもない、という説明をした</li> </ul>
プライバシーの確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プライバシーがない。例えば排せつの介助が必要なのに、ベッドが置いてあるところにカーテンがない</li> </ul>
多職種との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1.5 次避難所で、要配慮者が滞留すると見立てた介護福祉士と移動してもらうという行政の考えが衝突した</li> <li>・ 縦割り行政でなかなか話が詰められない</li> <li>・ DWAT や他の介護団体とどのようにつながっていくのか、いかにして活動してもらうかは非常に大きな問題</li> </ul>

### 4. 介護福祉士養成施設における学びへの期待

学びへの期待	主な発言 ※事務局により一部加工
介護の基本の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 養成校で介護の基本はこうだということをきちんと学んだ子たちは、何年もたってからでもその考え方が残っている。それが介護教育の本質的な部分の非常に重要なところ。</li> <li>・ 災害支援では、本人が持つ本質的な介護に対する考え方が、究極の状態の中で露呈してくる</li> </ul>
自分事として捉える体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 被災地での体験を自分事として聞く機会を設けるとするのは、疑似体験も含めて非常に重要な視点</li> <li>・ 近隣施設の防災訓練など、実際に身近なところから経験すると学びに入りやすいだろう</li> <li>・ 事例や実際の体験から、考えられることや行動できることを、実りあるものとして感じるために、介護福祉士会との一層の連携や、被災された方々との交流は非常に大事</li> </ul>
被災者への想像力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 上辺だけの言葉かけが相手を傷つけることや、自分の状況に嫌悪感を持っている方への声かけで余計追い込んでしまうということもある。そういった基本的な学びは必要</li> <li>・ 心理的な部分で、被災して失ったものの大きさなどを想像する力は、学生さんだけでなく一般の介護職もそうだが、持っていてほしい</li> </ul>

## 第3章 アンケート調査の結果

---

### ※調査結果の表示方法

- ・ 回答は各質問の回答者数(n)を基数とした百分率(%)で示している。また、小数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳の合計が 100.0%にならない場合がある。
- ・ 複数回答が可能な設問の場合、回答者が全体に対してどのくらいの比率であるかという見方になるため、回答比率の合計が 100.0%を超える場合がある。
- ・ クロス集計の場合、無回答を排除しているため、クロス集計の有効回答数の合計と単純集計(全体)の有効回答数が合致しないことがある。なお、クロス集計とは、複数項目の組み合わせで分類した集計のことで、複数の質問項目を交差して並べ、表やグラフを作成することにより、その相互の関係を明らかにするための集計方法のことである。

## 1. 介護福祉士養成施設等アンケート調査

### (1) 調査結果の概要

#### <回答者の基本属性>

- ✓ 回答者の学校種別は、専門学校が45%で最も多く、次いで福祉系高等学校が多くなっていた。
- ✓ 回答者の規模(介護福祉士養成課程の1学年の平均生徒・学生数)は、10~19人が約3割で最も多く、次いで20~29人が多くなっていた。
- ✓ 回答者の8割以上は、介護福祉士養成課程の教員もしくは生徒・学生を、被災地へ派遣した経験がなかった。

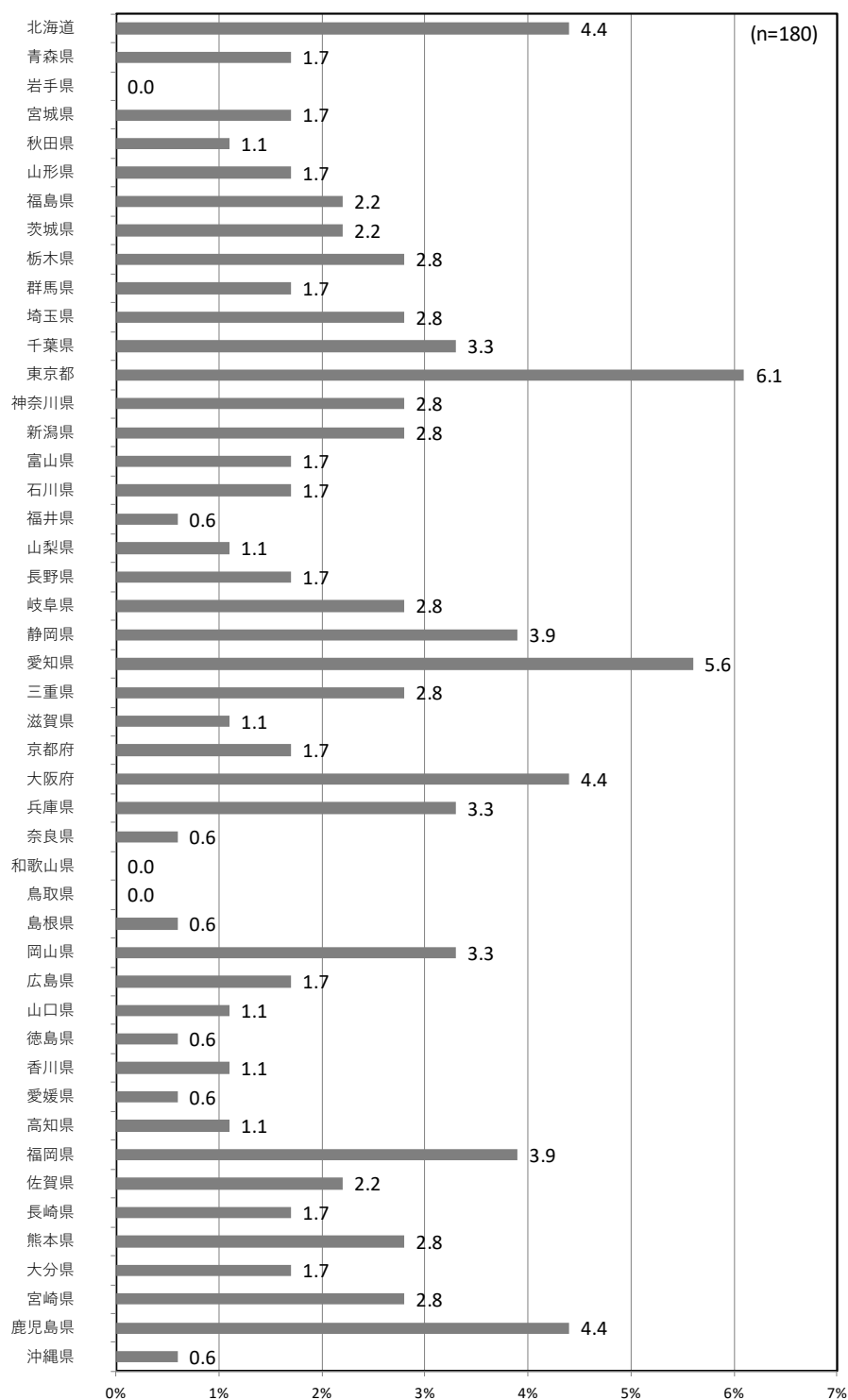
#### <災害時の介護に係る教育について>

- ✓ 災害を扱う科目の対象は、4年制大学と福祉系高等学校で2年生が最も多くなっていた一方で、短期大学は1年生が主、専門学校は1年生と2年生が同程度であった。
- ✓ 災害を扱う授業のカリキュラムは「介護の基本」「生活支援技術」が主だった。
- ✓ 授業の実施方法は、いずれの学校種別でも「座学・講義」が9割を占める一方で、「被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練」は約1割だった。
- ✓ 4年制大学は他の学校種別と比較して、実習先での取組や被災環境を想定した演習・訓練など実践的な取組が多くなっていた。また、他の学校種別より課題を挙げる割合も少なかった。
- ✓ 福祉系高等学校では調べ学習が他の学校種別よりも多くなっており、探究的な学習に力を入れている傾向が読み取れた。他方で、課題として教員自身の知識・経験の不足を挙げる割合が他の学校種別よりも高くなっていた。
- ✓ 教員の被災地への派遣実績がある養成施設等は、そうでない養成施設等と比較して多様な方法で教育を実施していた。
- ✓ 災害時の介護に係る授業を実施するうえでの課題は、時間の制約が約60%で最も多く、次に教材の不足や教員自身の知識や経験の不足が多くなっていた。
- ✓ 6つの資質・能力では、「チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力」が「伝えられている」「十分に伝えられている」と「ある程度伝えられている」の合計)の割合が最も多く、「被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力」が「伝えられている」の割合が最も少なかった。
- ✓ 実施したいができていない取組として、「特になし」という回答が約25%であり、そもそも災害に関する教育として実施すべき内容の検討が十分に進んでいない介護福祉士養成施設等も少なくない可能性が確認できた。

## (2) 調査結果の詳細

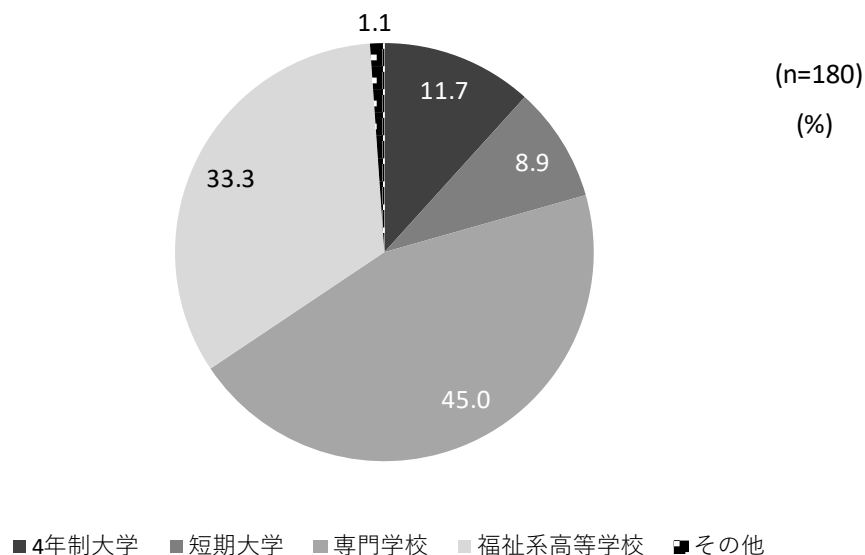
### 問1. 貴校の所在地を教えてください。(SA)

回答者の所在地は、東京都が最も多く、次いで愛知県が多くなっていた。岩手県、和歌山県、鳥取県は0件だった。



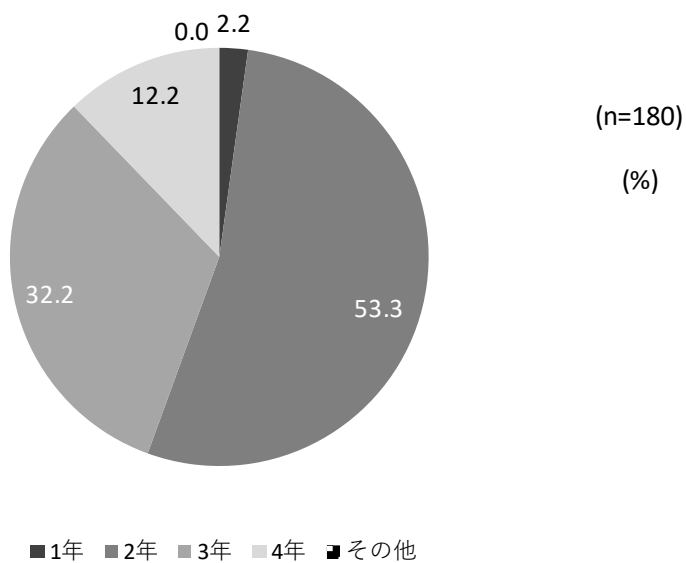
問2. 貴校の学校種別を、以下よりお選びください。(SA)

回答者の学校種別は専門学校が最も多く、次いで福祉系高等学校が多くなっていた。



問3. 貴校の介護福祉士養成課程の修業年限を、以下よりお選びください。(SA)

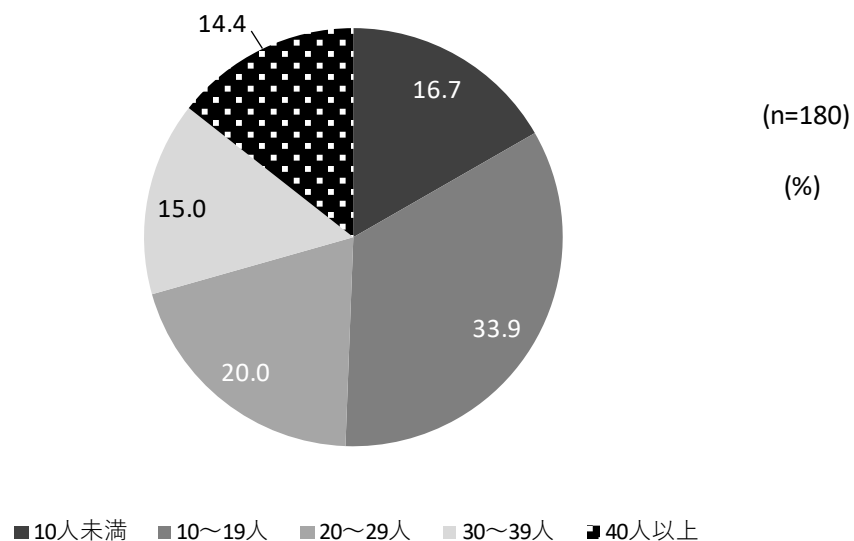
介護福祉士養成課程の修業年限は、短期大学および専門学校からの回答が多かったことに伴い、2年が50%以上となっていた。



問4. 貴校の介護福祉士養成課程における、2025 年4月末時点の1学年あたりの平均生徒・学生数を教えてください。なお、小数点以下は四捨五入して整数でお答えください。

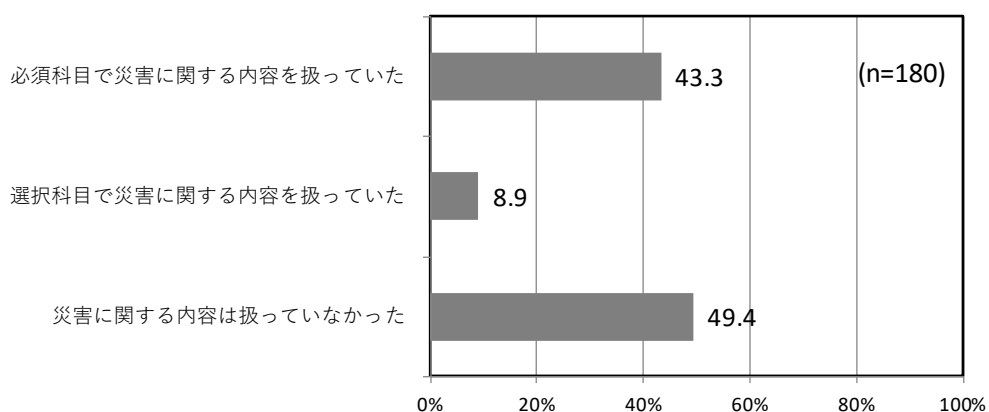
(数値記入)

介護福祉士養成課程の1学年あたりの平均生徒・学生数は、10～19 人が 33.9%で最も多く、次いで 20～29 人が多くなっていた。



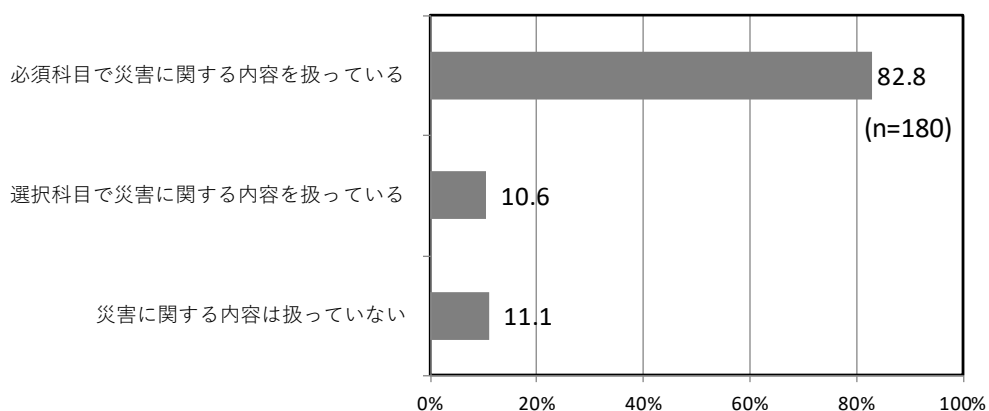
問5. 貴校の介護福祉士養成課程では、2019年のカリキュラム改正以前に、災害に関する内容を扱っていましたか。(MA)

2019年のカリキュラム改正前から災害に関する内容を扱っていた介護福祉士養成施設等は約半数であった。



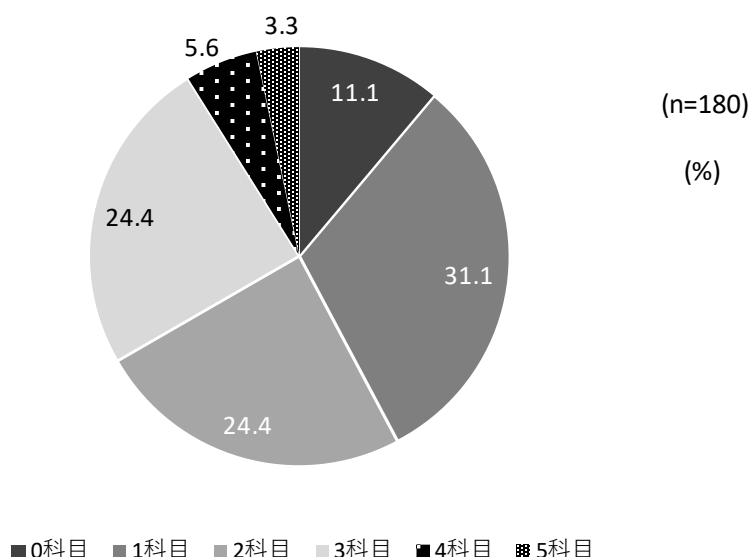
問6. 貴校の介護福祉士養成課程では、2019年のカリキュラム改正後、災害に関する内容を扱っていますか。(MA)

2019年のカリキュラム改正後では、約90%の介護福祉士養成施設等で災害に関する内容を扱っていた一方で、災害に関する内容を扱っていない介護福祉士養成施設等は11.1%であった。



問7. 貴校の介護福祉士養成課程において、災害に関する内容を取り上げている科目数を  
記入ください。(ない場合は0)(数値記入)

介護福祉士養成課程において災害に関する内容を取り上げている科目数は、1科目が31.1%で最も多く、次いで2科目と3科目が多くなっていた。



【クロス集計】

学校種別では、4年制大学と専門学校は1科目が最も多い一方で、短期大学は2科目、福祉系高等学校は3科目が最も多くなっていた。ただし、各科目の災害を扱う授業時間数は不明であり、科目数が多いことが災害を多く扱っていることは意味しない。

■学校種別

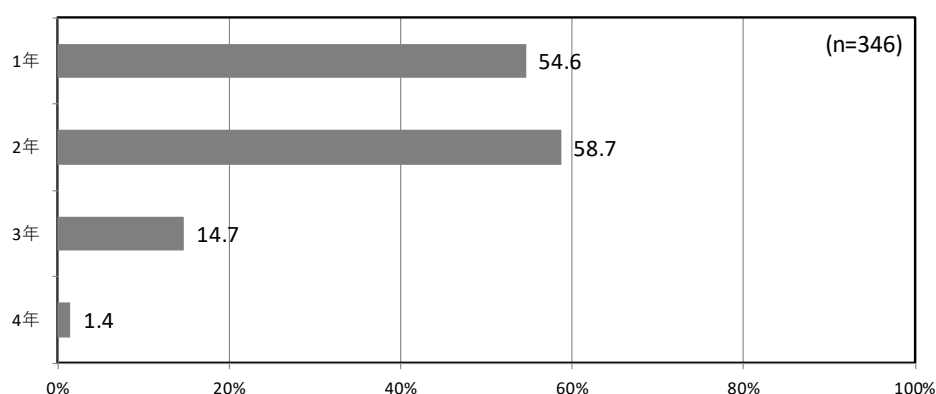
(単位：%)

		n	0科目	1科目	2科目	3科目	4科目	5科目
全体		180	11.1	31.1	24.4	24.4	5.6	3.3
Q2. 貴校の 学校種別を、 以下よりお選 びください。 (1つ選択)	4年制大学	21	4.8	42.9	19.0	19.0	14.3	-
	短期大学	16	6.3	12.5	43.8	18.8	6.3	12.5
	専門学校	81	17.3	33.3	22.2	21.0	4.9	1.2
	福祉系高等学校	60	6.7	28.3	25.0	31.7	3.3	5.0
	その他	2	-	50.0	-	50.0	-	-

問8. 貴校の介護福祉士養成課程において、災害に関する内容を取り上げている科目について、①科目名、②配当学年、③養成課程のカリキュラム名、④実施方法を教えてください。災害に関する内容を取り上げているすべての科目についてご回答ください。(それぞれあてはまるものをすべて選択)

②配当学年

災害に関する内容を取り上げる科目の配当学年は、1、2年生が主であった。



**【クロス集計】**

学校種別では、4年制大学、専門学校、福祉系高等学校では2年生が受ける科目が最も多くなっていた。4年制大学および福祉系高等学校の3年生以上が受ける科目は、それぞれの約30%となっていた。

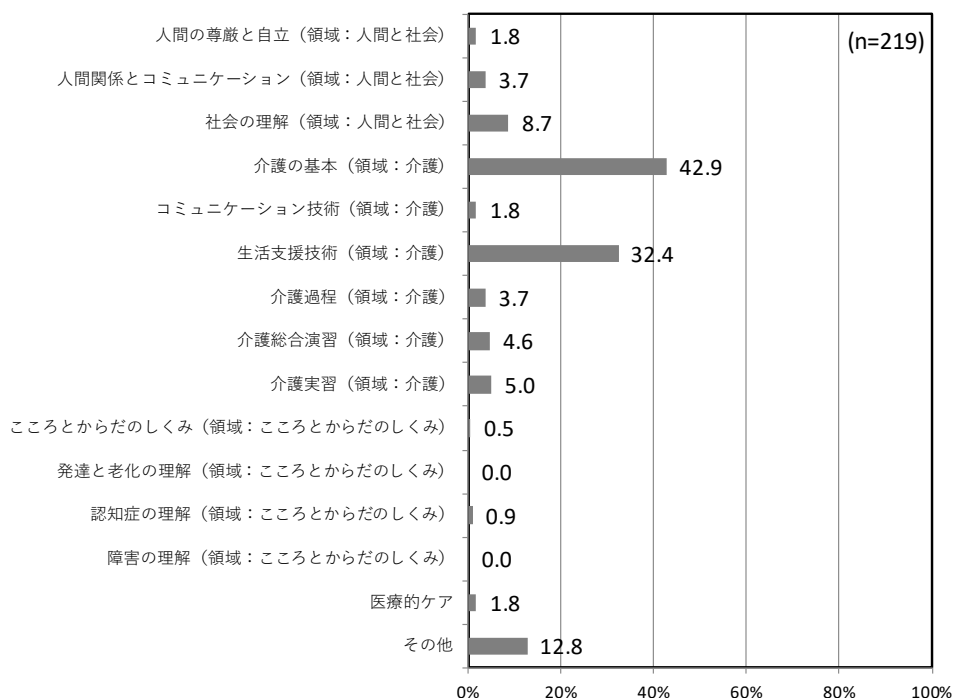
■学校種別

(単位：%)

		n	1年	2年	3年	4年
全体		346	54.6	58.7	14.7	1.4
Q2. 貴校の学校種別を、以下よりお選びください。(1つ選択)	4年制大学	41	43.9	58.5	26.8	9.8
	短期大学	39	71.8	33.3	-	-
	専門学校	135	60.7	61.5	-	-
	福祉系高等学校	127	47.2	63.0	31.5	0.8
	その他	4	25.0	75.0	-	-

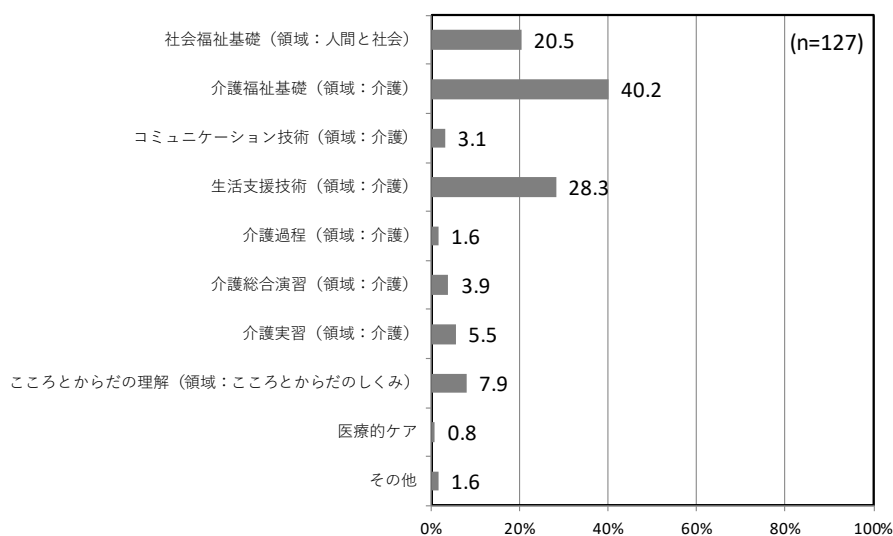
### ③カリキュラム(福祉系高等学校以外)

福祉系高等学校以外の介護福祉士養成施設等において、災害に関する内容を取り上げるカリキュラムは、「介護の基本」と「生活支援技術」が多くなっていた。



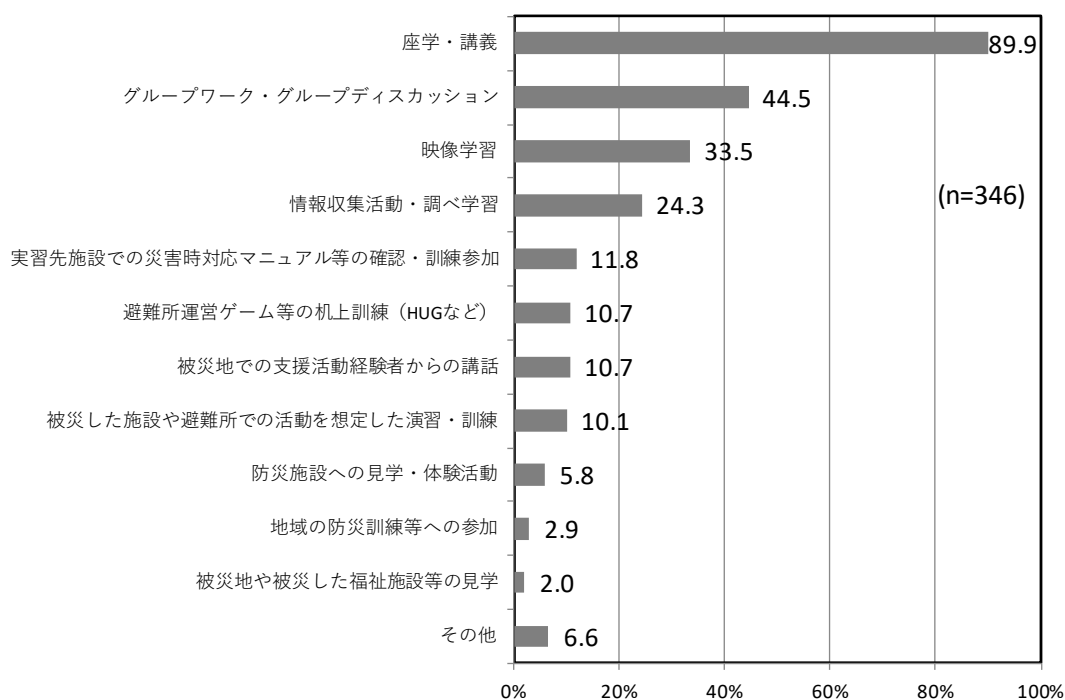
### ③カリキュラム(福祉系高等学校)

福祉系高等学校において、災害に関する内容を取り上げるカリキュラムは、「介護福祉基礎」が 40.2%で最も多く、次いで「生活支援技術」、「社会福祉基礎」が多くなっていた。



#### ④実施方法

災害に関する内容を取り上げる授業の実施方法は、「座学・講義」が約 90%で最も多かった。実践的な取組は、「グループワーク・グループディスカッション」が約 45%だった一方で、HUG や被災を想定した演習は 10%程度だった。



#### その他(自由記述)

防災士の資格取得に向けた講義	搬送方法演習
実習先での対応	防災食の試食
講義・訓練	ボランティア活動経験
簡易トイレの作成演習	避難用具の活用
非常時食の試食	災害ボランティアセンター設置訓練
身近な道具で避難所等での生活用品を作成。例えば、新聞紙でスリッパ作成。	発災時の避難誘導方法(演習)
個別避難計画の作成、災害ボランティアセンター設置運営訓練	救命士による救急蘇生の演習
プラス講座	防災士を招いた講義
当事者視点ゲーム	本校独自課目での講義・演習
防災館に見学	救急法
防災士を招いた講義	救命士による救急蘇生の演習
学内で訓練を行う	

## 【クロス集計】

いずれの学校種別も「座学・講義」が中心だが、4年制大学は他の学校種別に比べて演習・訓練が多くなっていた。また、福祉系高等学校は調べ学習が多くなっていた。

また、生徒・学生数が多いほどグループワークおよび映像学習を実施する割合が高い傾向にあった。

くわえて、教員の派遣経験がある場合、映像学習、調べ学習、経験者の講話、被災地を想定した演習訓練がとくに派遣経験がない場合よりも実施されていた。他方で、グループワークは派遣経験がない場合の方が多く実施されていた

## ■学校種別

(単位：%)

		n	座学・講義	グループワーク・グループディスカッション	映像学習	情報収集活動・調べ学習	実習先施設での災害時対応マニュアル等の確認・訓練参加	避難所運営ゲーム等の机上訓練(HUGなど)	被災地での支援活動経験者からの講話	被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練	防災施設への見学・体験活動	地域の防災訓練等への参加	被災地や被災した福祉施設等の見学	その他
全体		346	89.9	44.5	33.5	24.3	11.8	10.7	10.7	10.1	5.8	2.9	2.0	6.6
Q2. 貴校の学校種別を、以下よりお選びください。(1つ選択)	4年制大学	41	82.9	43.9	34.1	26.8	17.1	17.1	19.5	17.1	7.3	4.9	2.4	7.3
	短期大学	39	89.7	41.0	25.6	7.7	5.1	10.3	15.4	15.4	2.6	2.6	-	15.4
	専門学校	135	91.1	45.9	37.0	18.5	13.3	10.4	14.8	9.6	8.9	3.0	3.0	6.7
	福祉系高等学校	127	90.6	45.7	32.3	35.4	11.0	9.4	2.4	7.1	3.1	2.4	1.6	3.9
	その他	4	100.0	-	25.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-

## ■生徒・学生数別

(単位：%)

		n	座学・講義	グループワーク・グループディスカッション	映像学習	情報収集活動・調べ学習	実習先施設での災害時対応マニュアル等の確認・訓練参加	避難所運営ゲーム等の机上訓練(HUGなど)	被災地での支援活動経験者からの講話	被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練	防災施設への見学・体験活動	地域の防災訓練等への参加	被災地や被災した福祉施設等の見学	その他
全体		346	89.9	44.5	33.5	24.3	11.8	10.7	10.7	10.1	5.8	2.9	2.0	6.6
Q4. 1学年あたりの平均生徒・学生数(数値記入)	10人未満	63	93.7	34.9	28.6	22.2	15.9	6.3	17.5	11.1	6.3	3.2	3.2	7.9
	10～19人	120	85.0	35.8	29.2	14.2	5.8	14.2	5.0	10.8	5.0	1.7	0.8	5.8
	20～29人	67	91.0	58.2	32.8	44.8	16.4	7.5	13.4	4.5	3.0	6.0	1.5	6.0
	30～39人	45	91.1	60.0	40.0	28.9	13.3	8.9	6.7	13.3	2.2	2.2	-	6.7
	40人以上	51	94.1	45.1	45.1	19.6	13.7	13.7	15.7	11.8	13.7	2.0	5.9	7.8

## ■教員の災害現場への派遣経験有無別

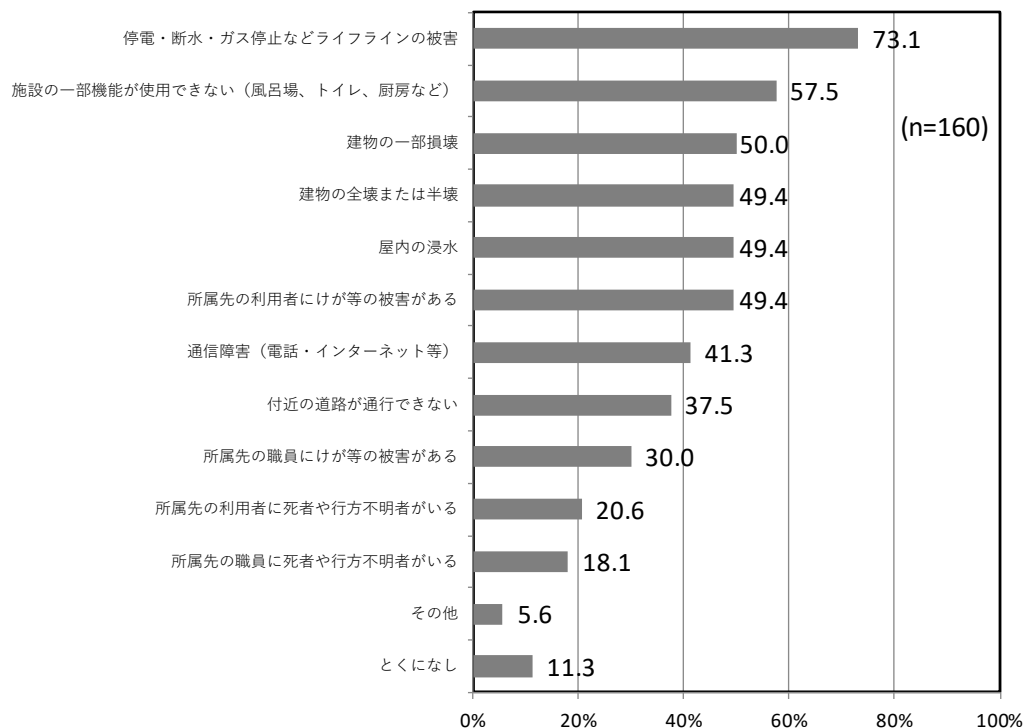
(単位：%)

		n	座学・講義	グループワーク・グループディスカッション	映像学習	情報収集活動・調べ学習	実習先施設での災害時対応マニュアル等の確認・訓練参加	避難所運営ゲーム等の机上訓練(HUGなど)	被災地での支援活動経験者からの講話	被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練	防災施設への見学・体験活動	地域の防災訓練等への参加	被災地や被災した福祉施設等の見学	その他
全体		346	89.9	44.5	33.5	24.3	11.8	10.7	10.7	10.1	5.8	2.9	2.0	6.6
Q18. 担当教員の被災地への派遣経験(1つ選択)	教員の派遣経験あり	68	88.2	36.8	41.2	29.4	11.8	13.2	20.6	16.2	4.4	5.9	2.9	11.8
	教員の派遣経験なし	278	90.3	46.4	31.7	23.0	11.9	10.1	8.3	8.6	6.1	2.2	1.8	5.4

問9. 災害に関する内容を扱う授業で想定している「被災状況」として、該当するものをすべてお選びください。(MA)

※ここでの「所属先」とは生徒・学生が将来所属する福祉施設・事業所を指します。

災害に関する内容を取り上げる授業で想定している被災状況としては、ライフラインの被害が73.1%で最も多くなっていた。



その他(自由記述)

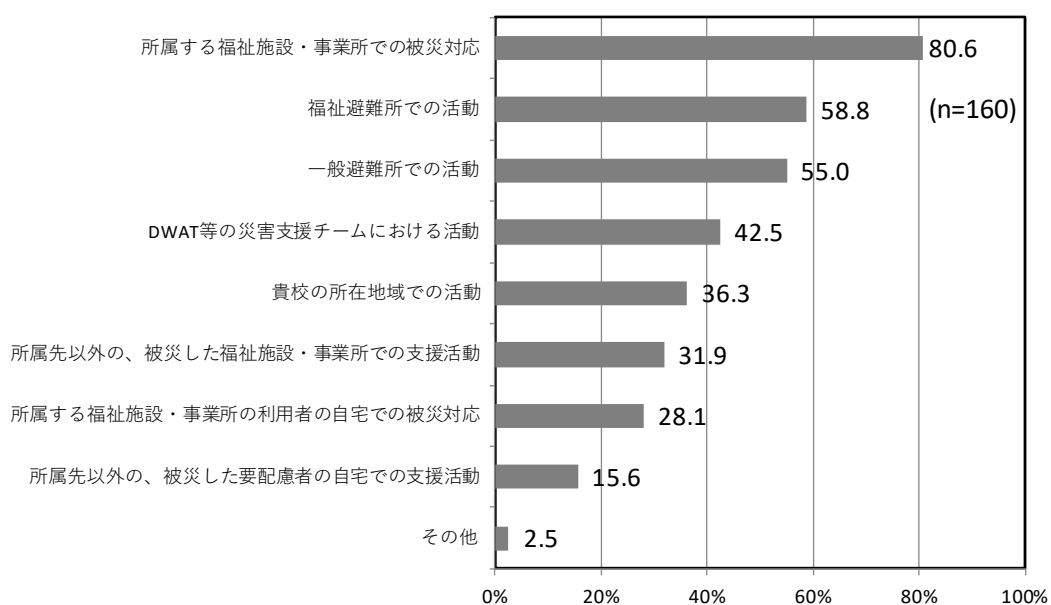
地域や実習先の災害福祉の現状
火災
噴火災害
実習生の被害
避難所生活(高齢者等への支援など)
夜勤時の少ない人数での初期対応
救命処置
所属先が避難所となる
被災場所での避難

問10. 災害に関する内容を扱う授業で想定している「活動場面」として、該当するものをすべてお選びください。(MA)

※ここでの「活動場面」とは、災害時に介護福祉士が支援に入ることが想定される対象や場所を指します。

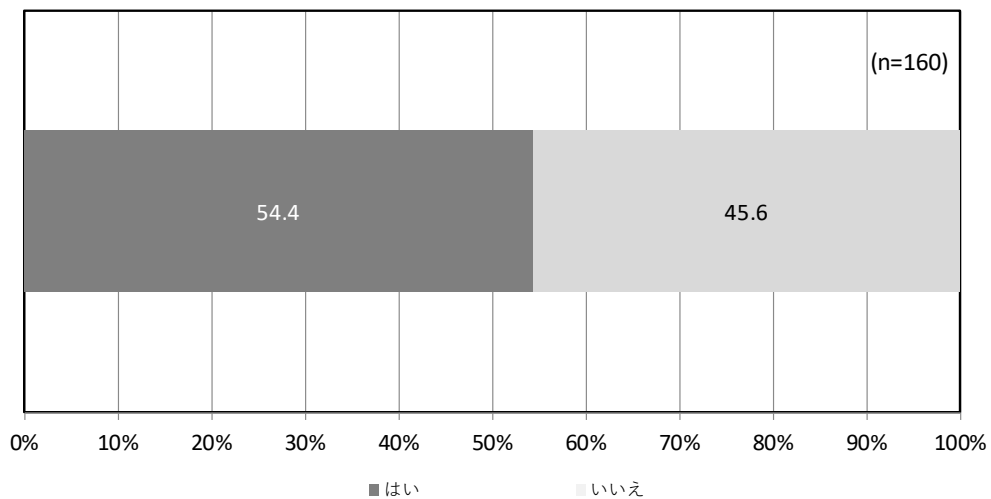
※ここでの「所属先」とは生徒・学生が将来所属する福祉施設・事業所を指します。

災害に関する内容を取り上げる授業で想定している活動場面は、所属先での被災対応が約 80%で最も多くなっており、次いで福祉避難所、一般避難所での活動が多くなっていった。



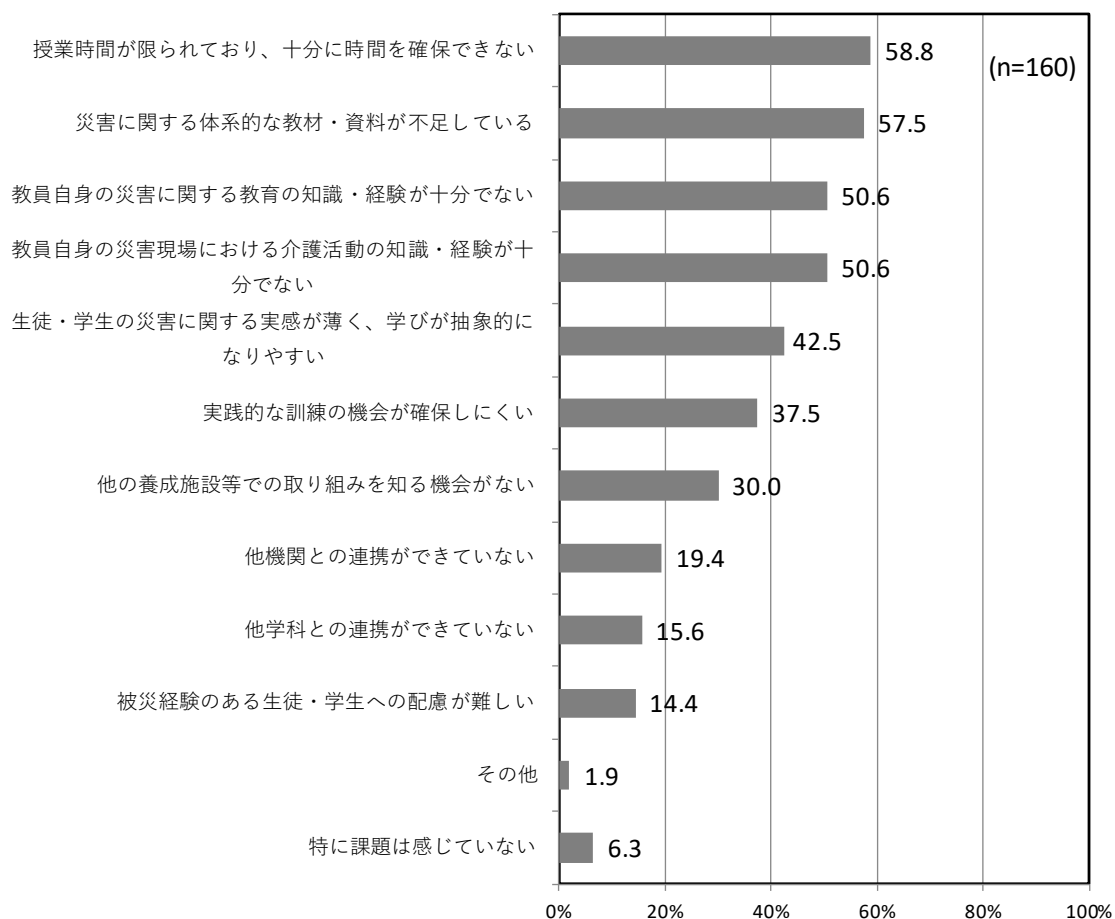
問11. 災害に関する内容を扱う授業のなかで、貴校の所在地の災害リスクを踏まえた授業のテーマを設定していますか。(SA)

半数以上の介護福祉士養成施設等が、所在地の災害リスクを踏まえた授業を実施していた。



問12. 災害に関する内容を扱う授業を実施する際に感じている課題として、該当するものをすべてお選びください。(MA)

授業実施上の課題は、時間の制約が約 60%で最も多く、次いで教材の不足や教員自身の知識や経験の不足が多くなっていた。



その他(自由記述)

テキストに情報が少ない(中央法規)
学校行事としての防災教育との関係
行政の危機管理専門家による机上訓練

## 【クロス集計】

4年制大学は他の学校種別と比較して全体的に課題を感じる割合が低くなっていた。福祉系高等学校は、他の種別に比べて教員の知識や経験の不足を課題に挙げる割合が多かった。

他方で、生徒・学生数の多寡による課題の傾向の違いは見られなかった。

また、教員の派遣経験がある介護福祉士養成施設等の方が、授業時間の制約や実践的な取組に課題を感じている傾向が見られた。

## ■学校種別

(単位：%)

		n	授業時間が限られており、十分に時間を確保できない	災害に関する体系的な教材・資料が不足している	教員自身の災害に関する知識・経験が十分でない	教員自身の災害現場における介護活動の知識・経験が十分でない	生徒・学生の災害に関する実感が薄く、学びが抽象的になりやすい	実践的な訓練の機会が確保しにくい	他の養成施設等での取り組みを知る機会がない	他機関との連携ができていない	他学科との連携ができていない	被災経験のある生徒・学生への配慮が難しい	その他	特に課題は感じていない
全体		160	58.8	57.5	50.6	50.6	42.5	37.5	30.0	19.4	15.6	14.4	1.9	6.3
Q2. 貴校の学校種別を、以下よりお選びください。(1つ選択)	4年制大学	20	35.0	50.0	40.0	30.0	20.0	30.0	20.0	25.0	15.0	25.0	-	15.0
	短期大学	15	66.7	80.0	60.0	53.3	33.3	53.3	26.7	13.3	6.7	-	-	-
	専門学校	67	61.2	56.7	43.3	46.3	50.7	40.3	34.3	17.9	16.4	14.9	3.0	7.5
	福祉系高等学校	56	62.5	55.4	60.7	62.5	42.9	32.1	28.6	21.4	17.9	14.3	1.8	3.6
	その他	2	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	-	-	-	-	-

## ■生徒・学生数別

(単位：%)

		n	授業時間が限られており、十分に時間を確保できない	災害に関する体系的な教材・資料が不足している	教員自身の災害に関する知識・経験が十分でない	教員自身の災害現場における介護活動の知識・経験が十分でない	生徒・学生の災害に関する実感が薄く、学びが抽象的になりやすい	実践的な訓練の機会が確保しにくい	他の養成施設等での取り組みを知る機会がない	他機関との連携ができていない	他学科との連携ができていない	被災経験のある生徒・学生への配慮が難しい	その他	特に課題は感じていない
全体		160	58.8	57.5	50.6	50.6	42.5	37.5	30.0	19.4	15.6	14.4	1.9	6.3
Q4. 1学年あたりの平均生徒・学生数(数値記入)	10人未満	28	60.7	50.0	50.0	50.0	46.4	35.7	25.0	21.4	10.7	17.9	-	3.6
	10～19人	54	53.7	63.0	50.0	48.1	42.6	44.4	35.2	13.0	13.0	14.8	1.9	5.6
	20～29人	33	63.6	48.5	51.5	54.5	33.3	24.2	24.2	27.3	21.2	12.1	3.0	12.1
	30～39人	22	54.5	59.1	45.5	50.0	45.5	36.4	22.7	22.7	13.6	4.5	4.5	9.1
	40人以上	23	65.2	65.2	56.5	52.2	47.8	43.5	39.1	17.4	21.7	21.7	-	-

## ■教員の災害現場への派遣経験有無別

(単位：%)

		n	授業時間が限られており、十分に時間を確保できない	災害に関する体系的な教材・資料が不足している	教員自身の災害に関する知識・経験が十分でない	教員自身の災害現場における介護活動の知識・経験が十分でない	生徒・学生の災害に関する実感が薄く、学びが抽象的になりやすい	実践的な訓練の機会が確保しにくい	他の養成施設等での取り組みを知る機会がない	他機関との連携ができていない	他学科との連携ができていない	被災経験のある生徒・学生への配慮が難しい	その他	特に課題は感じていない
全体		160	58.8	57.5	50.6	50.6	42.5	37.5	30.0	19.4	15.6	14.4	1.9	6.3
Q18. 担当教員の被災地への派遣経験(1つ選択)	教員の派遣経験あり	30	66.7	56.7	53.3	43.3	46.7	50.0	30.0	20.0	13.3	20.0	-	6.7
	教員の派遣経験なし	130	56.9	57.7	50.0	52.3	41.5	34.6	30.0	19.2	16.2	13.1	2.3	6.2

問13. 災害に関する内容を扱う授業によって、下記の資質・能力をどの程度教育できていると感じますか。(それぞれ1つずつ選択)

「チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力」は、「伝えられている」「十分に伝えられている」「ある程度伝えられている」の合計が70%を超えて最も高かった。一方で、「被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力」は、「伝えられている」が50%を下回り最も低かった。

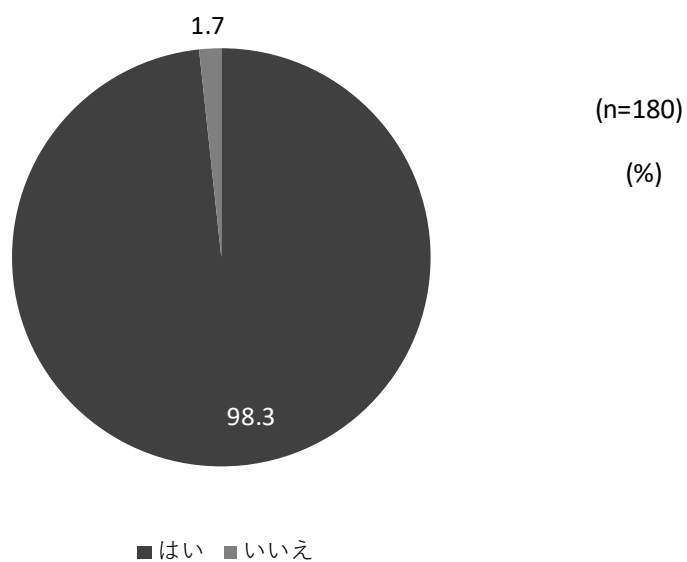
なお、学校種別や授業実施方法、教員の派遣経験等による有意な傾向の差は見られなかった。

(単位：%)

	n	十分に伝えられている	ある程度伝えられている	あまり伝えられていない	伝えられていない
災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	160	6.9	61.3	28.8	3.1
支援に必要な情報を見極め、収集する力	160	3.1	54.4	36.3	6.3
チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力	160	11.3	58.8	24.4	5.6
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	160	3.1	46.3	44.4	6.3
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	160	5.0	46.3	45.0	3.8
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	160	5.0	52.5	36.9	5.6

問14. 貴校では、災害に関する取組(授業、訓練、イベント等)を実施していますか。(SA)

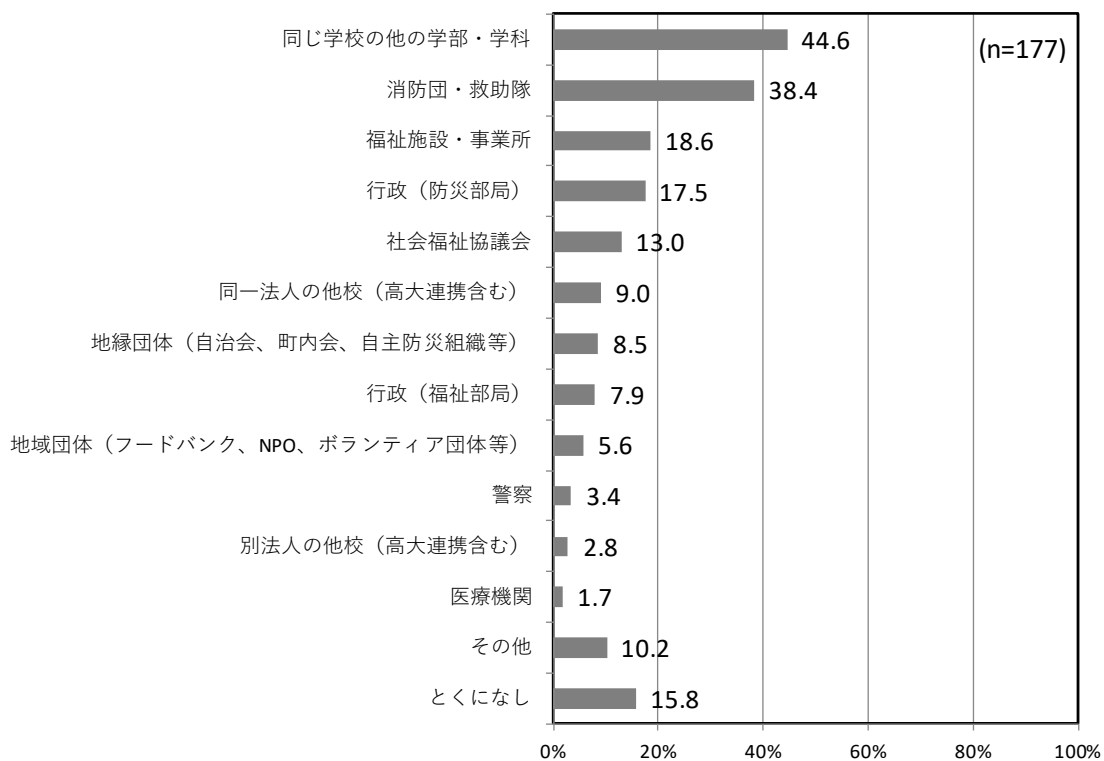
介護福祉士養成課程以外も含めた災害に関する取組は、ほぼすべての介護福祉士養成施設等が実施していた。



問15.【問14で「はい」を選択した方に伺います】貴校の災害に関する取組(授業、訓練、イベント等)のなかで連携している機関として、該当するものをすべてお選びください。

(MA)

災害に関する取組で連携している機関は、同じ学校の他学部・他学科が 44.6%と最も多く、約半数の養成施設等が学内で連携した取組をしていた。他方で、社会福祉協議会や地域団体等との連携は約 10%となっていた。



その他(自由記述)

DWAT	市民交流センターと一緒に実施
職員、教員、当日に授業中の学生	同地区の小中学校
大学内でボランティアサークル	自衛隊
日本赤十字社	日本赤十字社
防災訓練	消防署
消防署	近隣の商業施設への津波を想定した避難訓練
企業(報知器)	防災関係業者
県 DWAT	高校・NPO 法人防災したっけ
同一法人の関連事業所	

### 【クロス集計】

学校種別では、4年制大学は社会福祉協議会や地縁団体などの、地域との連携が他の学校種別よりも多くなっていた。また、短期大学の約70%は学内で連携していた。他方で、福祉系高等学校は全体的に連携している割合が低くなっていた。

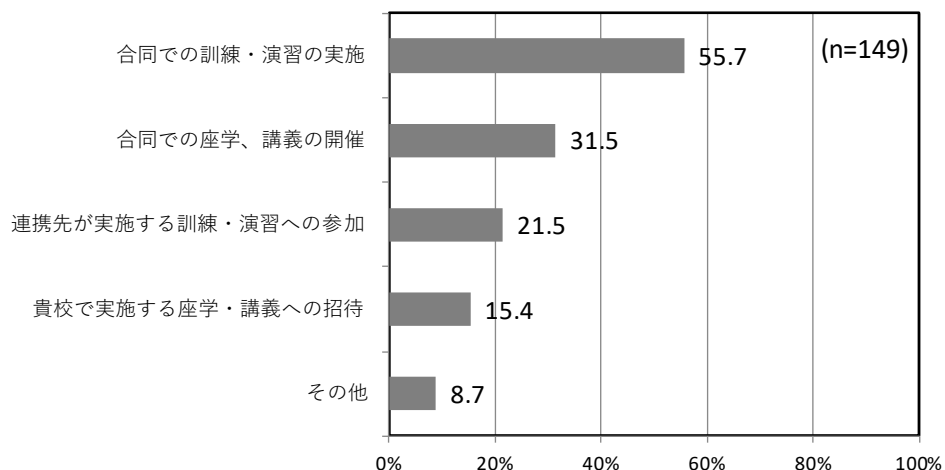
### ■学校種別

(単位：%)

		n	同じ学校の他の学部・学科	消防団・救助隊	福祉施設・事業所	行政（防災部局）	社会福祉協議会	同一法人の他校（高大連携含む）	地縁団体（自治会、町内会、自主防災組織等）	行政（福祉部局）	地域団体（フードバンク、NPO、ボランティア団体等）	警察	別法人の他校（高大連携含む）	医療機関	その他	とくになし
全体		177	44.6	38.4	18.6	17.5	13.0	9.0	8.5	7.9	5.6	3.4	2.8	1.7	10.2	15.8
Q2. 貴校の学校種別を、以下よりお選びください。（1つ選択）	4年制大学	21	38.1	38.1	28.6	19.0	38.1	19.0	23.8	19.0	9.5	-	9.5	9.5	9.5	14.3
	短期大学	16	68.8	37.5	6.3	25.0	18.8	-	6.3	12.5	6.3	6.3	-	-	12.5	6.3
	専門学校	78	46.2	39.7	23.1	12.8	5.1	12.8	5.1	6.4	5.1	1.3	-	1.3	7.7	15.4
	福祉系高等学校	60	38.3	38.3	13.3	21.7	13.3	3.3	8.3	5.0	5.0	6.7	5.0	-	13.3	18.3
	その他	2	50.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問16.【問15で「とくになし」以外を選択した方に伺います】貴校の災害に関する取組(授業、訓練、イベント等)のなかで、他機関と連携して実施している内容として、該当するものをすべてお選びください。(MA)

他機関と連携して実施している災害に関する取組としては、合同での訓練・演習が55.7%で最も多くなっていた。



その他(自由記述)

災害ボランティアサークルでの活動等の参加・共有
消防署・警察からの情報提供
実習先での演習等
避難訓練
被災地支援ボランティア
社会福祉法人の危機管理室職員の派遣
消防署
行政の危機管理専門職が机上訓練を本校でおこなう
被災地での講義や演習
災害ボランティアへの参加
県 DWAT の後方支援をおこなう学生チームの育成
新学期時オリエンテーションで周知・説明
災害ボランティアサークルでの活動等の参加・共有
消防署・警察からの情報提供
実習先での演習等

問17. 貴校の災害に関する取組(授業、訓練、イベント等)について、①介護福祉士養成課程での特徴的な取組、②介護福祉士養成課程以外での特徴的な取組、をそれぞれ1つ教えてください。(自由記述)

① 介護福祉士養成課程での特徴的な取組

座学・講義
災害支援に対しての啓発等
授業で最低限の内容に触れる程度しかできていない
東北大震災での孤立した施設の事例紹介
介護施設の施設長からの講義
救急救命に携わる看護師による講義、演習
災害における介護福祉士の役割について 避難行動要支援者について 災害福祉支援チーム(DAWT)について 災害時に求められる介護福祉士の技術について
講義内で
座学
災害時避難に関する授業
被災地での介護における取組を授業に取り組む
座学を中心として、担当教員によって行う。
介護福祉士の立場で考えることを伝えているが、特に特徴的な取り組みはしていない。
BCP などがあることを伝える講義
所在地域における事例の紹介
災害時の対応
介護福祉士としての役割
福祉施設等で実施される災害時の対応や専門職の役割についての授業
授業内でお知らせする(およそ 30 分程度)
基本的な内容を現状伝えることを主としている。今後の工夫が必要である。
介護福祉士の役割についての講義
選択科目のオンライン授業
簡単に伝えるのみ
授業内での講義
避難所での生活支援に関する授業
災害に関するマーク
グループワーク・グループディスカッション
示されている教育内容(シラバス)に基づき教授している。内容によってはグループディスカッションを取り入れている。
教科書とグループワークなど
映像学習
動画を積極的に使用している。
YouTube 等の視聴、ヘルプマン(震災編)など
情報収集・調べ学習
学校(大学)のバリアフリーマップをつくる災害時について学習
授業にて、学校所在地域の災害時の対応に関する調べ学習、日赤の出前講座

地域にある災害マークや避難所を確認するフィールドワーク
ハザードマップを活用した学習
地域の防災状況をまとめて発表する
災害ポスターの作成, 避難所などの記号の確認, 学校所在地の防災対策についての調べ学習等を行う。
<b>実習先施設での災害対応マニュアル等の確認・訓練参加</b>
介護福祉施設での実際の取り組みを聞く
地域における生活支援として実習先の災害対策等を質問すること
同一施設の職員と避難訓練を実施
実習施設での避難訓練のボランティア活動
実習先等の施設の被災支援を想定
実習先施設と連携し、防災訓練などのボランティア支援をすること
実習施設での避難訓練参加
介護実習中に実習先の避難訓練に参加させてもらっている
実習施設での災害時訓練への参加
実習施設での福祉避難所役割体験、社会福祉協議会の災害ボランティア活動等
施設実習期間中に実習先での訓練に参加する
委託実習先での防災避難訓練への参加
<b>避難所運営ゲーム等の机上訓練(HUG など)</b>
HUG を使用した福祉避難所について
テキストや避難所運営ゲーム、体験談等を活用する
地震災害による机上訓練
避難所運営 HUG 、災害研修用カードゲームなど ゲーム感覚でグループワークを取り入れている
避難所運営ゲーム HUG の活用
<b>被災地での支援活動経験者からの講話</b>
被災経験のある福祉施設の方をゲスト講師としてお迎えする
DWAT で学んだ教員からの講話
座学で教員の体験(被災、災害ボランティアの経験)を話す他、知り合いの聴覚障がいをお持ちしている方から聞いた被災時の困難なことについての話をする。被災先や自宅で使える新聞紙スリッパ作り。
被災地支援(避難所運営)経験のある職員からの講義を設定している
教員が被災地で取り組んできた内容の講話
災害ボランティア経験教員からの講義・グループワーク
DWAT で支援した介護職員の講義
教員が実際に、災害ボランティアに参加した講義を行う。
教員が震災時にボランティアに行った時の様子や体験を直接伝えている
<b>被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練</b>
ハザードマップの活用・避難場所へ実際に車椅子で移動して行く
福祉避難所の事例演習
災害時の不足物品が出た時の対応。例:紙おむつ→布おむつ 食事、口腔ケアなどの対応など
生活支援技術(介護技術)と関連させた移送(搬送)支援技術
DWAT 活動の演習
合同避難訓練時の演習や講習会で縦割り班を作り、班のリーダーをうちの生徒がつとめ

ることで災害時のチームリーダーの役割を担う。
避難所運営訓練 避難所等での具体的な生活支援技術(対応方法)
視覚障害者との避難行動体験
避難所としての役割を踏まえた避難所設営
福祉避難所の設営シミュレーション
<b>防災施設への見学・体験活動</b>
防災センター見学
防災センターの見学
防災センターの見学
防災公園、消防署の見学、防災士からの特別講義
防災センターへのフィールドワーク
今後防災センターへの見学や自衛隊や社協と連携できないか検討しています
防災センターへの見学体験
地震体験車を呼び、車いすに座り体験
<b>地域の防災訓練等への参加</b>
介護福祉施設での災害研修に参加
福祉施設と連携したイベントに参加
施設との連携における防災訓練
地域事業者と連携した訓練参加
NPO 法人との合同避難訓練を実施
消防を交えた避難訓練
避難訓練・保存食の調理、実食など
地域の防災訓練や同法人事業所との連携を通して災害時の支援体制を学ぶ
<b>被災地や被災した福祉施設等への見学</b>
被災特養との交流会、避難所での弱者支援
被災地への訪問
<b>その他</b>
地域福祉論の中で防災士取得するためのプログラムを実施
多職種連携(看護科との合同授業)
学校全体として行っている。
高齢者災害時生活支援講習を実施
災害時に備えた自主活動
災害時の支援・災害時の介護
避難訓練
10体のモデル人形を使った心肺蘇生術
近くに火山があるため、大規模噴火が起こった際の対応等について
利用者の避難を想定した授業
生活支援技術の科目の内容に入れている
救急員養成講習
市の防災マップや市役所から被災地の写真をお借りして授業で活用
日本赤十字社主催講習「避難生活での自助・共助」、救急員養成講習
科目内で取り扱うべき項目として扱っている
国際福祉機器展
避難訓練
救命救急講習

救急蘇生の講義・救急救命処置の演習(救急救命士を迎えて)
強化するために準備中
できるだけ災害の情景が浮かぶように
避難訓練 シェイクアウト
社協、消防と協力し、学生が講師となり地域住民を対象にスマホ教室を開催し、災害時の活用方法を伝えている
高大連携による当事者視点ゲームの実施
福祉施設事業所における利用者支援の方法
救急法講習
避難所で介護福祉士としてどのように動くかを考えさせる
普通救命講習Ⅱの終了(介護福祉科2年)
社会福祉協議会の協力のもと災害ボランティア講座を実施。災害ボランティアセンター設置訓練を毎年実施している。
医療的ケアの中の救急蘇生で災害についても触れる
施設入所者に対する災害時の対応
自助(マイタイムライン、災害情報、備蓄)、共助(地域防災)、災害支援(福祉施設における災害対策、HUGの演習)の3つの視点からの授業展開
身の周りにあるもので避難を行う方法について
災害時における介護福祉士の役割
消防士を講師として招き、災害時の対応を学ぶ
外部講師招へい授業
地元の高校生も参加して合同で行う
選択科目「災害介護」の開講

② 介護福祉士養成課程外での特徴的な取組

<b>座学・講義</b>
座学
DWAT の活躍状況
自衛隊による講義
DWAT メンバーによる講義と演習(過去にあり)
D-wat の講義および救急救命の講義を同校の看護科・歯科等のコースと連携して行った。
留学生が多いため防災メールなど特に本人たちの安全を守るための情報を伝える
一般教養科目の中で、地域を知ることが目的とした科目を開講している。テーマを防災とし、様々な内容を取り入れている。(災害時の対応や心のケア、食など)
オンライン授業
浸水災害について、実態調査を行った結果について講義を行う
能登半島沖地震での DWAT での活動の実際についての授業
防災に関する特別講義
行政の防災講座を 1 年次に実施
<b>実習先施設での災害対応マニュアル等の確認・訓練参加</b>
現場の災害対応など実際のマニュアル等教えていただく 実習時避難訓練参加
実習施設にて
実習
<b>避難所運営ゲーム等の机上訓練(HUG など)</b>
HUG
今年初めて(1 回のみであるが)避難所運営ゲームをゼミの合同の取組として実施を行った。
<b>被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練</b>
災害時の炊き出し体験
消防本部を招いて災害シミュレーション
<b>防災施設への見学・体験活動</b>
防災センターなどで災害体験
防災センターで体験
<b>地域の防災訓練等への参加</b>
同敷地内の福祉施設と合同で防災訓練を実施
介護施設職員との合同訓練
行政や地域住民と一緒に訓練実施
同一敷地内にある特別支援学校との合同避難訓練
地域の防災訓練で子どもを対象にした防災ブースの実施を企画している
地域住民の方への防災に関する講演
学校全体での防災訓練、地域防災訓練への参加の促進
大学周辺の自治会との合同開催による防災訓練(DWAT による移送(搬送)支援訓練も実施)
周辺の施設・事業所と協働で利用者の避難支援を訓練している
同一施設内事業所と避難訓練等を実施している。(消防署員派遣有)
学校のある地区内の小中学校や地域の団体と協力して合同避難訓練を実施している。

全学で学生、住民を対象に災害対策講座を開催
同一敷地内の支援学校との合同避難訓練
青年会議所、社協、地域との合同の防災訓練企画の実施・運営
地域に向けた防災イベント
津波を想定した近隣の商業施設の屋上への避難訓練
高校がある地域の防災のつどいに参加
連携施設の災害訓練に参加
地域で行われる防災訓練、防災教育の積極的な案内や参加の推奨
同法人内の事業所現場職員と合同での避難訓練を計画し、介護現場における災害時の動きについて学ぶ機会を検討
<b>被災地や被災した福祉施設等の見学</b>
被災地へのスタディツアー、被災地支援のボランティア活動
<b>校内の避難訓練等</b>
職員と教員と授業中の学生と一緒に避難訓練を実施すること
シェイクアウトの参加
避難訓練・消防訓練
避難訓練
校内で行われる防災訓練
避難訓練(地震、水害を一年に一回ずつ)
災害対策訓練(地震・火災)を年2回実施している
地震・火災を想定した避難
防災訓練、避難訓練、防災講話
避難訓練を実施する予定
災害や地震を想定した命を守る訓練の実施
防災訓練
原子力発電所の臨界を想定した訓練を行っている。
避難訓練、看護科:日赤の出前講座
火災等の避難訓練
学内全体での防災訓練
避難訓練(避難所の設営)
<b>その他</b>
上級救命技能講習受講
ハザードマップを活用する取り組みを事例研究
災害ボランティアサークルの活動紹介・ボランティア活動が行える為の配慮や協力体制
DWAT 後方支援員(学生ボランティア)の養成
毎年避難場所を実際に確認している。
消防職員による普通救命講習を実施
災害時のボランティア活動
救命救急対応・AED使用方法
消防計画の立案
近隣の障害者施設と連携して、災害時にも対応できるカフェを定期的に行っている
年に1回、学校全体で学ぶ機会を設けている
被災地でのボランティア活動
西淀川区役所が中心となって、同じ市内の鶴見区の高校と一緒に、津波防災タッグという取り組みを行っている。

留学生が多い事もあり、近隣の避難場所の確認などを行なっている
地域の防災備蓄品の保管(学校所在地が高台のため)
学校が地域の緊急避難先としての対応が求められることがあること
法人の活動として実施している被災地支援のボランティアの機会を提供できる
社会福祉士養成課程の中にある災害教育の中で、行政、消防、社協と協力し、地域の災害について一緒に考える機会を設けている。
社会福祉法人 危機管理室からの派遣による訓練、講話
小学校への出前授業で防災教室を実施している
地域との連携
救急救命処置の演習(救急救命士を迎えて)
自衛隊との合同学習会(福祉科以外の生徒も)
救命救急法の資格取得
教員に阪神大震災の体験者がおり1月もしくは3月に体験談
救命講習
熊本地震震災ミュージアム KIOKU と連携した取組
大学全体での防災意識を高める合同行事(演習含む)の実施
実践社会学(避難時の非常食体験)
防災士資格取得
災害ボランティアコーディネーター養成講座受講
認知症カフェで保健師さんによる防災についての講話, 防災食の試食を行う。
ボランティア演習
台湾での防災訓練館とうの研修
全学部と他大学や高校生との合同の災害支援の授業
災害等への外部講演等への参加
災害地域へのボランティアの派遣
自治体によるイベントへの参加促し
災害時の福祉避難所の実態、被災者としての介護福祉士は何かできるのか
災害時に簡単に作れる料理(ビニール袋を利用したカレー)
小中学生に対しての福祉講座
過去には被災地支援を行った
防災士の資格取得
県 DWAT の後方支援をおこなう学生チームの編成
簡単にできる非常食に関する授業
総合的な学習の時間における「防災ゼミ」の開講

問17-1. 貴校の災害に関する取組(授業、訓練、イベント等)として、介護福祉士養成課程内  
外問わず、実施したいができていない取組を1つ教えてください。(自由記述)

<b>グループワーク・グループワークディスカッション</b>
防災についてのグループディスカッション
市販されているカード型ゲーム形式のグループ学習
<b>映像学習</b>
映像学習
現地における活動状況の映像学習
映像を活用した授業
視聴覚教材を使用した授業
<b>実習先施設での災害対応マニュアル等の確認・訓練参加</b>
施設等との模擬訓練等
介護実習施設と連携した訓練
福祉施設の避難訓練の見学や災害時対応マニュアルの閲覧
実習先で実際介護施設での避難訓練への参加できたという学生はいるが全学生ではないので介護施設での実際を知ってもらいたい。介護福祉士として災害時にどう動く事が必要なのかを災害を経験した介護福祉士に講話などを検討したい。
施設との連携
施設職員と合同による、想定訓練(事例)の実施
福祉施設での災害に関する取り組みへの見学
法人内事業所と合同で訓練を実施することで、高齢者の動き、誘導、声かけの仕方等を学ぶ機会を得たい。
<b>避難所運営ゲーム等の机上訓練(HUG など)</b>
避難所運営ゲーム実施
地域の福祉施設も参加する机上訓練があるとよい。まだ、施設では机上訓練はされていないので。
防災訓練、避難所運営ゲームなど、身近に考えられる演習時間を取りたいが、時間的に難しい
防災ゲーム等のワークショップ
<b>被災地での支援活動経験者からの講話</b>
被災当事者による講話等ができればと思います
実際に災害活動を行った専門職による講演
卒業生などの実際の福祉避難所での活動などの実体験を話す機会
一般避難所や福祉避難所での介護福祉士としての視点を体験談をふまえて知ること
施設内における、災害時のゲストスピーカーによるエピソード
福祉避難所での動きについて外部から人を呼んで説明をしていただくこと
災害に関する基調講演
<b>被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練</b>
被災に関連する疑似体験学習
実際に災害にあった際の具体的な対処法(特に留学生)
災害体験訓練
キャンパス内での被災を想定した避難訓練
実際の災害を想定した訓練

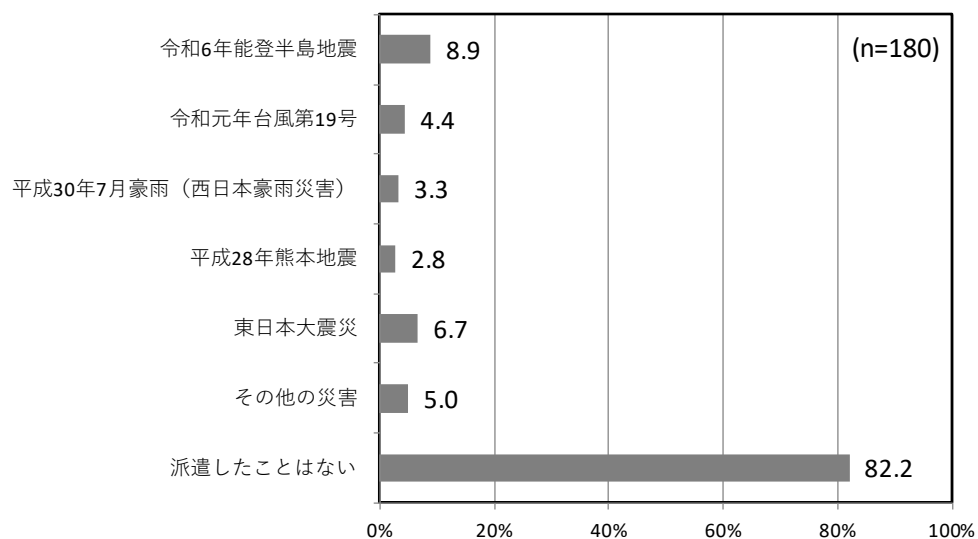
災害が起きた時を想定した誘導や対応の訓練。避難所生活を想定した訓練など
車椅子等の道具を用いた避難訓練
浸水時の訓練を実施できていない。
施設での災害訓練
対象者を想定した避難訓練
緊急時に食べる食事の調理方法
学校が避難所になった場合の高校生の活動の訓練
・防災無線の利用体験(学校と実習施設とをつなぐ等)・避難所での生活を想定した支援体制の整備に関する取り組み
校内にて、地震・竜巻時にインフラが破壊されたときの具体的な対応
福祉施設での訓練や学習への参加
実際の災害を想定した訓練などへの参加
災害発生を想定した学内での訓練
災害時を想定した具体的な活動・訓練
障害者や高齢者に特化した災害に関する支援などまでは対応していない(一般的対応のみ:車椅子使用まで)
災害時の対応を具体的に実践していくこと
福祉避難所開設する演習を学生と行う取り組み
災害時における訓練。例えば、段ボールベッドの組み立てや、簡易トイレなどの作り方をやっておきたいと思う。
福祉避難所で介護福祉職がどのように行動するか、具体的かつ現実的な対応を学ぶ
地域災害を想定した演習
災害時を想定した具体的支援方法の授業
津波想定の実践的訓練
リアルな避難所設置や防災訓練
避難所運営デモンストレーション
避難所開設訓練
防災施設への見学・体験活動
起震車、煙幕トンネルなどの体験
地域の防災訓練等への参加
地域の防災訓練への参加
地域と一緒にまでは行えていない
地域との連携イベントへの参加
地域の防災職員、消防団、救助者などとの訓練の実施
地域住民と連携した避難場の設営体験
近隣住民と合同避難訓練や HUG を使用した災害訓練
福祉避難所についての学習 施設の避難訓練への参加
施設との避難訓練の実施 自治体と連携した炊き出し体験
多くの施設・住民の方との防災訓練
地域住民と合同の訓練等
地域施設事業所での取り組みについて
避難所体験を地域活動の一環として実施したい
地域の防災への取り組みへの参加
地域の防災訓練への参加
地域との避難演出

合同避難訓練時に地域の団体や町の災害担当者の協力も得ているが、住民も一体になって、もう少し参加規模の大きい避難訓練や避難所演習
地域での避難訓練
地域との連携
小学校や中学校等金連の施設と共同の避難訓練等
施設と地域の避難訓練
地域や施設で実施している災害訓練への参加 実際に避難所運営や施設での災害支援を体験したい。
地域全体での避難訓練 地域(学校近隣)の要援護者の実態把握と想定される取り組み
大学としての避難訓練の実施。大学近隣の住民や学校を含めた避難訓練の実施。
被災地や被災した福祉施設等の見学
実際の被災者の講話
災害の体験談
災害地域への復興ボランティア
被災地での現地学習
被災地の訪問
実際に学生を同行し被災地へ支援へ行くこと。
被災地への視察、見学等
被災地の見学や被災した方から直接お話を聞くこと(伊津部の学生対象となったり、全学的に行うことが難しい)
災害場所への見学やボランティアなど
被災地の状況や避難生活の現状をリアルに感じられるような、当事者の方たちの経験を聴くことができる学び
その他
災害時の帰宅訓練など
実際のイベントの参加
多職種連携教育における災害福祉の取り組み。避難所運営ゲーム(HUG)などを他学部や実習先、地域住民と実施するなど。
留学生が多いため、グループワークでは過去の写真を使って行っているが、災害のイメージつきにくいので、理解出来ているのか不安であるため、地域でのハザードマップ作成などしたいが、時間が限られています。
外部の業者や資源の活用
自然災害時の対応
学生が主体となる災害支援活動などを実施したい
避難所でのボランティア活動について
災害に関する授業
科目として設定することは、現時点で難しい
海外での災害支援、交通費や滞在費などが確保できない。言語力の限界
避難訓練(基本的には行っているが、すべての学科が一同に介して、また、学校を上げて)避難訓練は出来ていない。
高校内で、車いすやアイマスクを用いての避難訓練
独立科目としての専門教育。科目・学部横断的な連携教育。
(例)「災害福祉」として科目としての取り組み
本校は市民交流センターの3階にあり、常に「消防訓練等」は センター内の事業所と一緒に年数回実施しているが、学校単独の 訓練は行っていない。

避難場所の確認、避難経路
他学科との連携
1つの科目としての確立
教員の人員不足
現在強化し準備中 授業だけではない形にしたいと検討中
水害、津波
洪水避難訓練
災害マニュアルの作成
地域での合同訓練に参加することがあるものの、学校が指定避難所になっているにも関わらず、その避難所運営について教職員の訓練・練習がされていない。
地震・水害時の訓練
介護福祉士養成課程の学びとしての基礎的な知識としては習得できているが、どのレベルまで学生に伝えていく必要があるのかの判断が難しい。4年制大学の為、教育カリキュラム上の体系的な学びの位置づけとして考えていく必要がある。また、カリキュラムツリーなども作成しており、DPにあわせた内容として組み込んでいく必要もある。
災害体験
カリキュラムが多すぎる。昔みたいに、減らすべきである。
被災地でのボランティア活動 DMAT や DCAT に関する経験者による講話
避難訓練
地域や関係団体との合同実施等はここ数年進んできているが、学園内(中・高・大)の連携の取り組みは、教育課程の組み立ての違い等もあり、合同開催が難しい。
福祉避難所の支援訓練
本校は避難所として指定されていないが、福祉科があるということ、近隣の学校や公的機関より4階建ての高い建物が無いことから、避難所として使用されることが考えられる。そのため、地域の福祉避難所として想定した避難訓練や一般避難所としての避難訓練を行う必要性を感じるが、実際、実施できてない。
緊急時にオンラインを使用した正課授業の運営
多職種との連携などは、医療チームの連携を見るが 福祉職との連携までは取り組めていない。 実際の現場での福祉避難所としての運営や、事業所での対応などを知る機会は少ない。
災害ボランティアの単位化
体育館で避難所体験
立地条件(土地が低い浸水しやすい)を考慮した防災教育
リスクコミュニケーションの授業
大規模訓練
防災キャンプ 避難所運営訓練 地域と連携した防災訓練
訓練
水害対応
他学科と一緒に避難所運営の授業を実施し、それぞれの学科の生徒ができることを考える取組
他の機関との連携
防災士の資格取得
消防署との連携
「福祉避難所」の取り組みを学びたい

問18. 貴校では、学校の業務の一環として、災害時の支援活動において介護福祉士養成課程の担当教員を被災地に派遣したことはありますか。派遣したことがある場合は、派遣した災害として該当するものをすべてお選びください。(MA)

80%以上の介護福祉士養成施設等は、介護福祉士養成課程の教員を被災地に派遣したことがなかった。

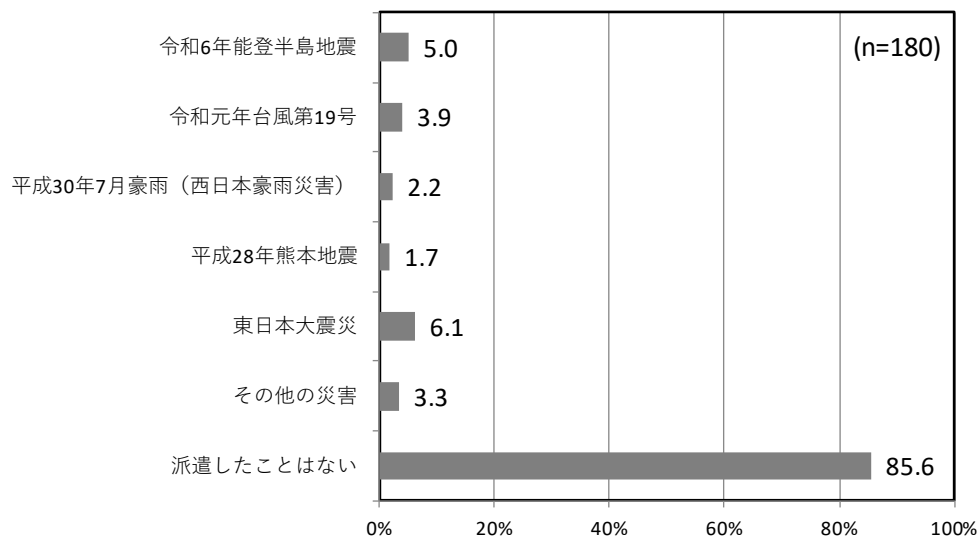


その他の災害(自由記述)

キャンパス近隣の豪雨水害
福井豪雨
令和元年9月台風15号(房総半島台風)
長野県岡谷市土石流災害
阪神淡路大震災
熱海の水害
県内災害対応
今年度の台風被害における地域のボランティア
北海道胆振東部地震

問19. 貴校では、学校の教育の一環として、災害時の支援活動において介護福祉士養成課程に所属する生徒・学生を被災地に派遣したことはありますか。派遣したことがある場合は、派遣した災害として該当するものをすべてお選びください。(MA)

80%以上の介護福祉士養成施設等は、介護福祉士養成課程の生徒・学生を被災地に派遣したことがなかった。



その他の災害(自由記述)

キャンパス近隣での豪雨水害
阪神淡路大震災
福井豪雨
長野県岡谷市土石流災害
今年度の台風被害における地域のボランティア
北海道胆振東部地震(学生も被災者だった)

## 2. 介護福祉士アンケート調査

### (1) 用語の定義

本調査では、下記の通り用語を定義した。

「被災側」: 発災当時の勤務先が自然災害により被災し、平時からかかわりのある要配慮者の支援を継続した方

「応援側」: 自然災害により被災した地域において、平時からのかかわりがない要配慮者の支援をおこなった方

「勤務先」: 平時の勤務場所

「緊急期」: 生命・安全の確保をおこなう時期

「応急期」: ライフラインや公共交通機関が復旧し始め、生活の安定を目指す時期

「復旧期」: ライフラインがほぼ復旧し、生活・地域の再建を目指す時期

「復興期」: 生活・地域の再構築を目指す時期

### (2) 調査結果の概要

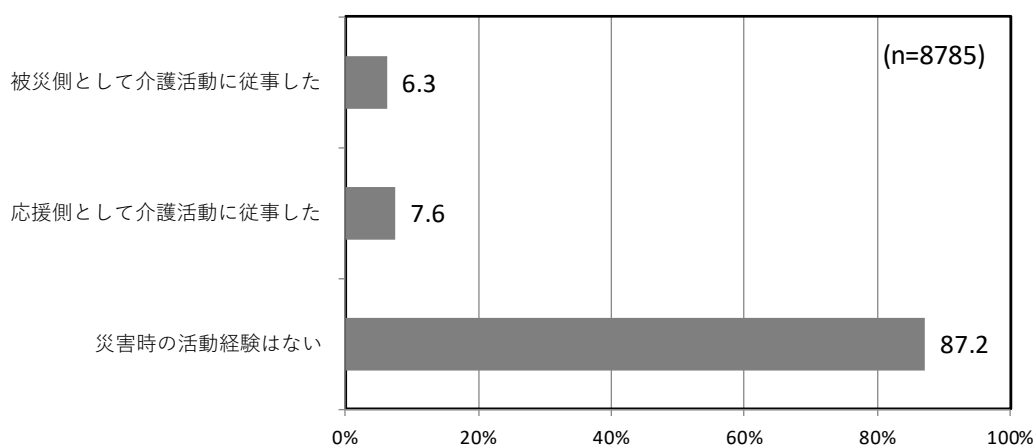
- ✓ 被災側の介護福祉士において、60%以上が3日以内に食料品や生活物資の応援を受けていたが、不足感は発災から4日～7日後が最も多くなっていた。
- ✓ 緊急期において、被災側の介護福祉士の約3割が泊まり込みの勤務を経験していた。
- ✓ 被災側の介護福祉士は、利用者の自立支援については4割以上が、日々の生活支援については約3割が、復興期までは平時と同様に考えられる余裕を持てていなかった。
- ✓ 被災側の介護福祉士は、入浴に関すること、認知機能の低下、自傷・他害のリスクについて、対応した人の7割以上が解決が難しかったと感じていた。
- ✓ とくに入浴に関することは、種別や活動場所、支援対象者別に見ても主要な課題となっていた。他方で、認知機能の低下や孤立・孤独は活動場所、支援対象者によって課題感に差があった。
- ✓ 応援側の介護福祉士の半数以上は、活動場所や支援対象、被災地の被害状況以外の情報がない状態で活動を開始していた。また、応援活動の課題として、多職種での連携が最も多くなっていた。
- ✓ 応援側の介護福祉士は、フェーズによって解決が難しい課題に違いが見られたが、いずれのフェーズでも不安定な精神状態が課題として挙げられる割合が最も高かった。
- ✓ 応援活動においては、一般避難所で活動した介護福祉士と現在相談業務に従事する介護福祉士がとくに要配慮者の課題の解決が難しかったと回答する割合が高くなっていた。

- ✓ 6つの資質・能力の発揮状況では、「自らの役割を見出し、主体的に行動する力」が、「発揮できた」（「十分に発揮できた」と「ある程度発揮できた」の合計）の割合が最も高く、「チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力」の「発揮できた」割合が最も低かったものの、全体として大きな差は見られなかった。
- ✓ 6つの資質・能力を身に着けるために効果的な、介護福祉士養成課程での取組については、被災環境を想定した演習・訓練が約70%で最も多く、次いで被災地での支援活動経験者からの講話が多く挙げられた。
- ✓ 被災側の発災前の備え、応援側の平時の備えともに、避難訓練・安否確認訓練の実施は8割程度だった。また、応援側の平時の備えのうち、他機関や地域の団体と連携した取組は40%以下となっていた。

(3) 一次調査結果の詳細

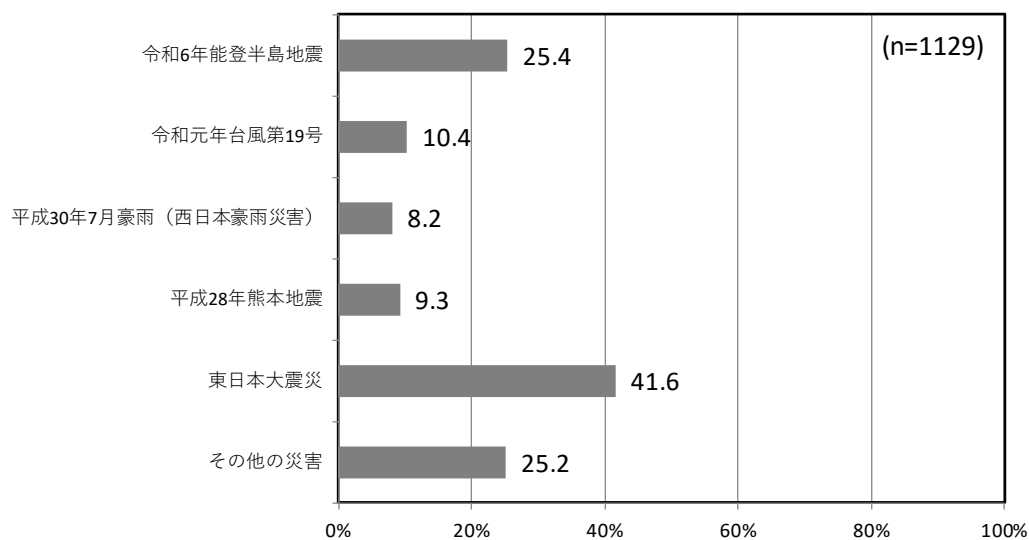
問1. 災害時に、被災した要配慮者への介護活動に従事した経験はありますか。介護福祉士の資格を取得した後のご経験について、該当するものをすべてお選びください。(MA)

回答者のうち、被災側としての活動経験がある介護福祉士は約6%、応援側としての活動経験がある介護福祉士は約8%だった。



問2. 【問1で「被災側として介護活動に従事した」または「応援側として介護活動に従事した」と回答した方に伺います】あなたが介護活動に従事した災害を以下からすべてお選びください。(MA)

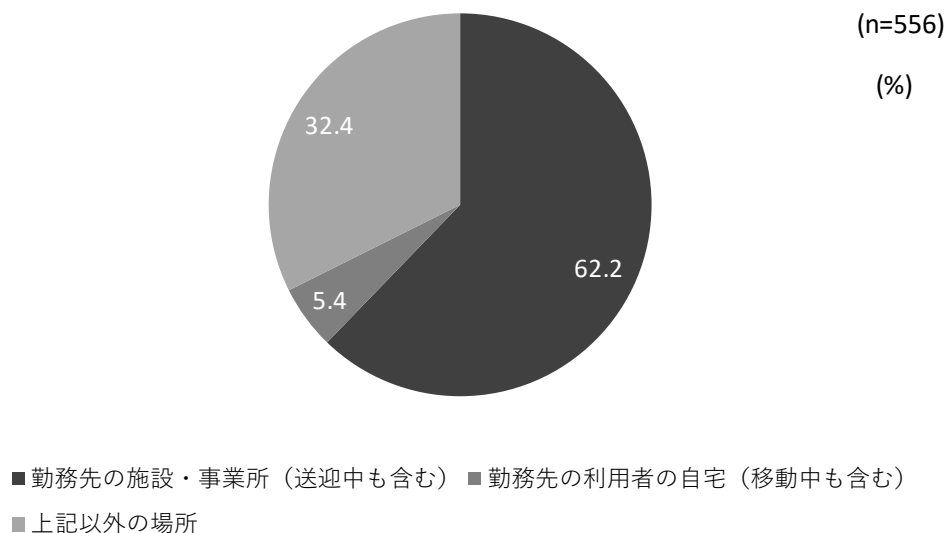
介護活動に従事した災害は、東日本大震災が約40%で最も多く、次いで能登半島地震が多くなっていた。



問3.【問1で「被災側として介護活動に従事した」と回答した方に伺います。】発災時にあなたがいた場所を以下よりお選びください。(SA)

※複数の災害において被災経験がある場合は、直近の災害についてお答えください。

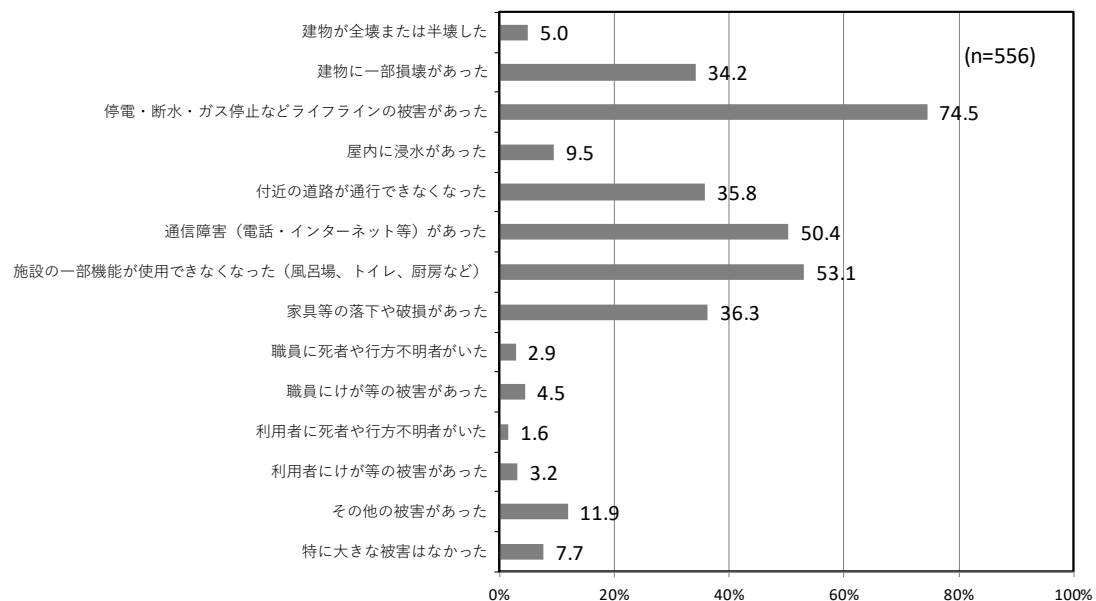
被災側として活動した介護福祉士が発災時にいた場所は、勤務先の施設・事業が60%以上で最も多くなっていた。



**問4.【問1で「被災側として介護活動に従事した」と回答した方に伺います。】発災直後における、あなたの勤務先の被災状況について、該当するものをすべてお選びください。**

(MA)

被災側として活動した介護福祉士の勤務先の被害状況は、ライフラインの被害が 70%以上で最も多く、次いで施設の一部が使用できないが多くなっていました。



### 一次調査結果のとりまとめ

一次調査の結果は下記の通りであった。

問1で災害時の活動経験がありと回答し、二次調査の協力許可を得られた 686 件のうち、重複および問4で「特に大きな被害はなかった」と回答した 27 件を除いた 659 件を二次調査の対象とした。ただし、659 件のうち 10 件は連絡先の不備があったため、二次調査の対象は 649 件となった。

			(件)	
回答者数			8785	
		災害時の活動経験あり	1129	
		二次調査協力可	686	
			重複	10
			被災側 & 大きな被害なし	17
			二次調査配布数	659
			被災側	221
			応援側	372
			被災側かつ応援側	66

### 一次調査と二次調査の紐づけ

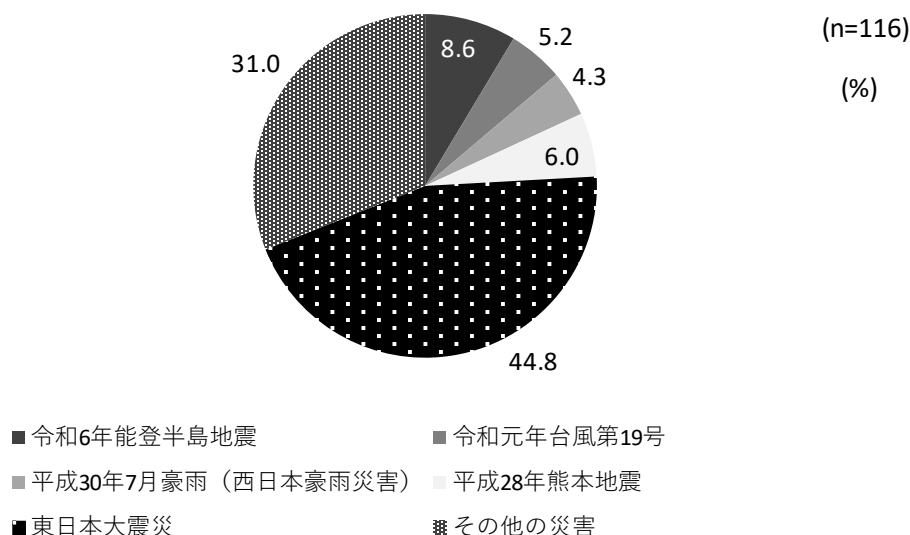
一次調査問1の回答により、二次調査の回答対象設問を振り分けた。

区分	一次調査問1の回答	二次調査の回答対象設問
被災側	「被災側として介護活動に従事した」	問1～23、問 40～42
応援側	「応援側として介護活動に従事した」	問 24～42
被災側かつ 応援側	「被災側として介護活動に従事した」かつ 「応援側として介護活動に従事した」	問1～42

(4) 二次調査結果の詳細

問1. あなたが「被災側」として介護活動に従事した災害を以下からお選びください。(SA)【被災側】

被災側として活動した災害は、東日本大震災が 44.8%で最も多くなっていた。



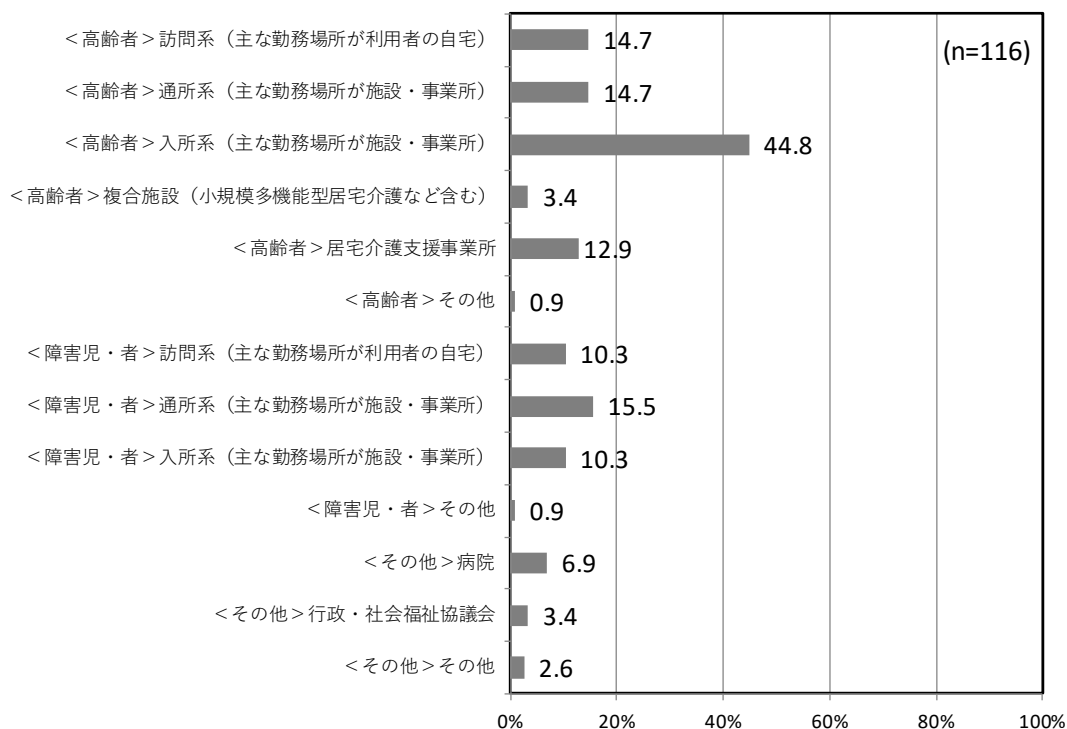
その他の災害(自由記述)

2022年9月下旬の台風	大雨災害、道路冠水
北海道胆振東部地震	京都嵐山水害
中越沖地震	平成25年 山口島根豪雨災害
中越地震、中越沖地震	厚真地震
平成30年9月 台風21号	2023.7 大雨
阪神・淡路大震災	令和5年西日本豪雨
2021年 停電	平成26年豪雪
北海道胆振東部地震	秋田県令和5年大雨災害
5~6年前の大雨災害	平成16年中越地震
胆振東部地震	今治西条山林火災
大阪北部地震	平成16年中越地震
令和元年台風15号	令和7年8月霧島豪雨災害
2018年大阪北部地震	平成30年北海道胆振東部地震によるブラックアウト
胆振東部地震	奄美集中豪雨
大阪府北部地震	大阪北
2021.2022 福島県沖地震	阪神大震災
大阪震災	H30 胆振東部地震
令和元年房総半島台風	胆振東部地震

**問2. 被災当時の所属施設・事業所の種別として、該当するものをすべてお選びください。**

**(MA)【被災側】**

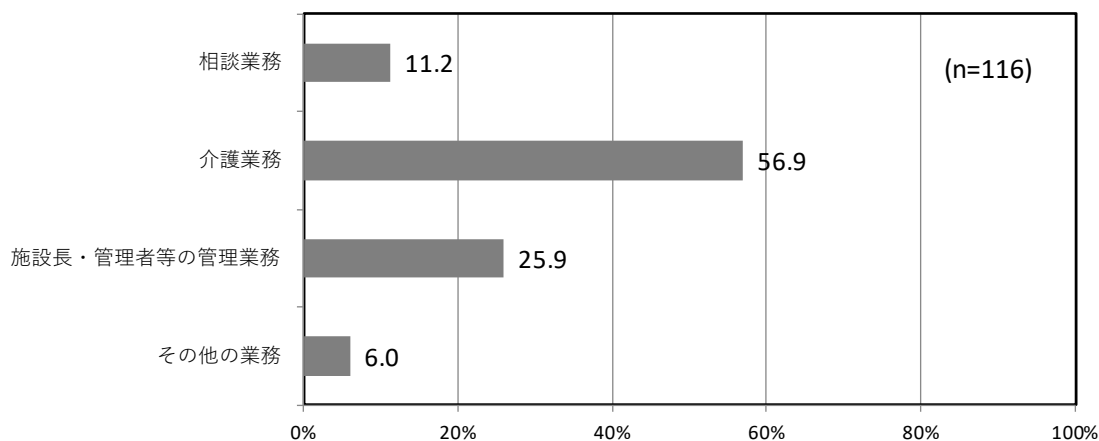
被災当時の種別は、「高齢入所系」が 44.8%で最も多く、半数以上が高齢者施設・事業所に所属していた。



**問3. 被災当時の所属における、被災前のあなたの主な業務を以下よりお選びください。**

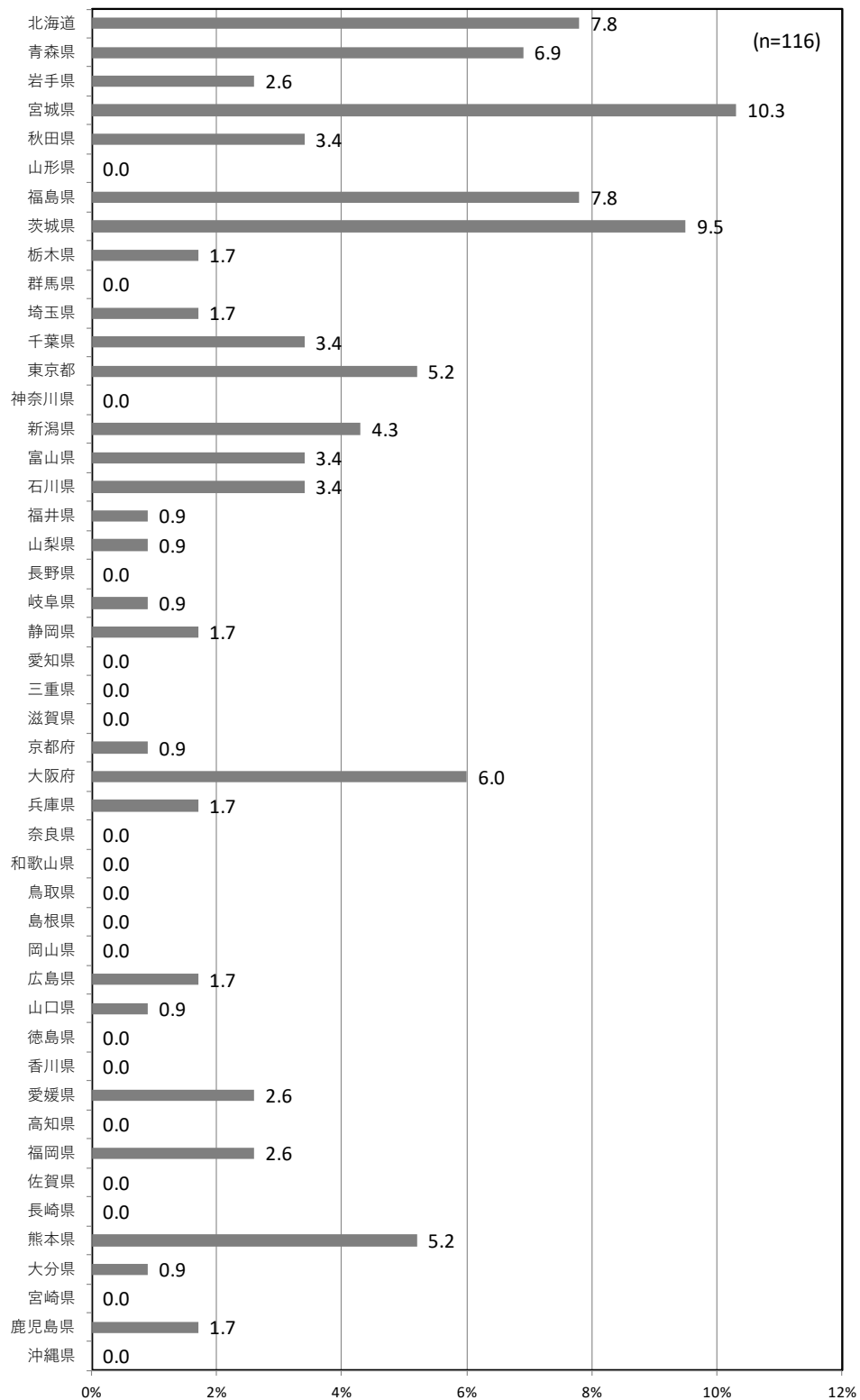
**(SA)【被災側】**

被災当時の主な業務は、介護業務が 56.9%で最も多くなっていた。



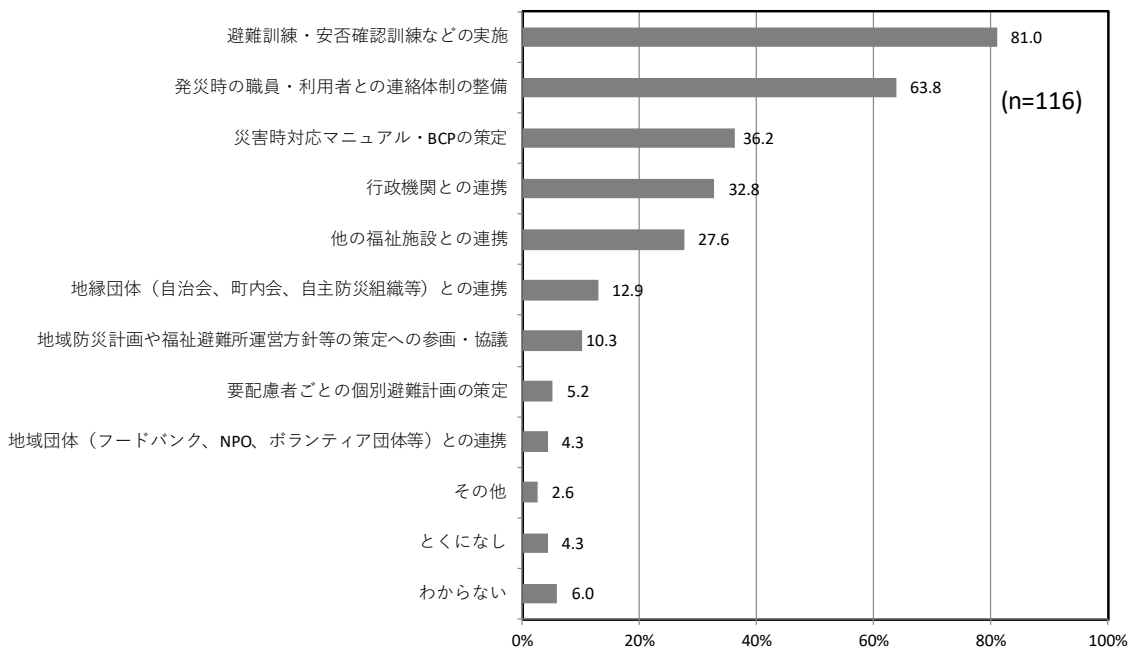
**問4. 被災当時の所属施設・事業所の所在地を教えてください。(SA)【被災側】**

被災当時の所属の所在地は、北海道・東北地域が多くなっていた。



**問5. 発災前に、被災当時の所属施設・事業所が災害に備えて実施していたこととして、該当するものをすべてお選びください。(MA)【被災側】**

発災前の備えとして、避難訓練・安否確認訓練を実施していたのは約 80%、職員・利用者との連絡体制の整備は約 60%だった。そのほかの備えについては、6割以上が実施していなかった。

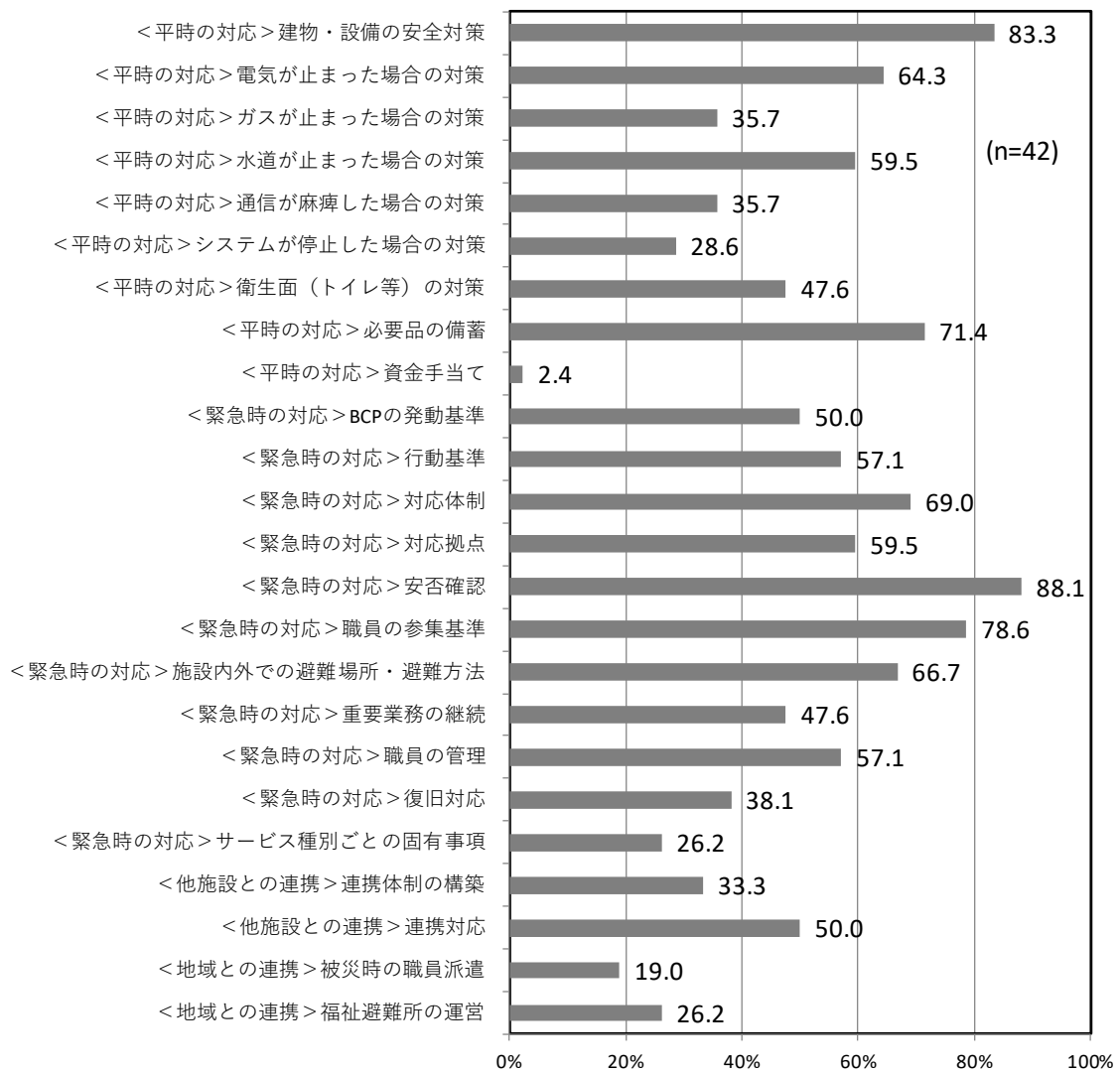


その他(自由記述)

連絡体制はあるものの、曖昧に整備されていた
非常食などの備蓄
緊急時連絡表、職員災害時 LINE

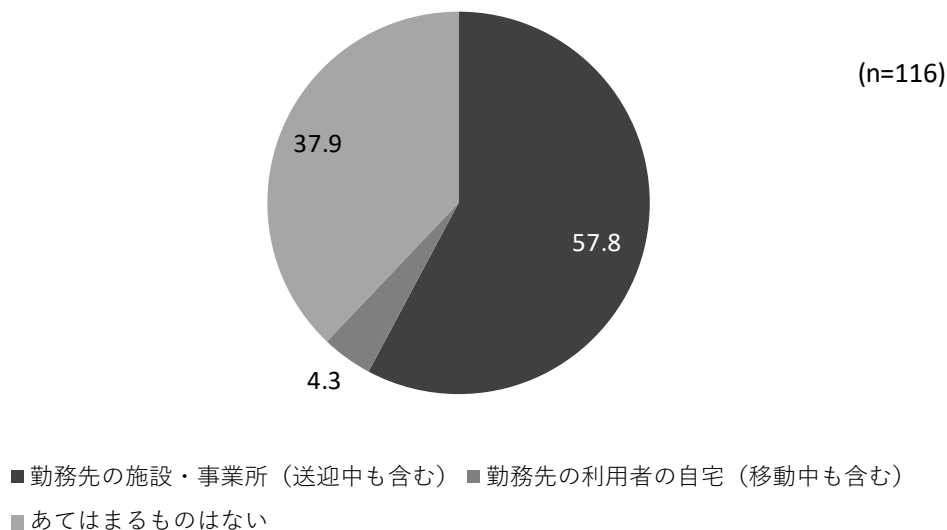
**問6.【問5で「災害時対応マニュアル・BCPの策定」を選択した方に伺います】発災前に、災害時対応マニュアルやBCPで決めていた事項として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【被災側】**

発災ときにBCPで決めていた事項として、平時の建物・設備の安全対策と緊急時の安否確認が80%以上となっていた。他方で、資金手当ておよび被災時の職員派遣は20%以下となっていた。



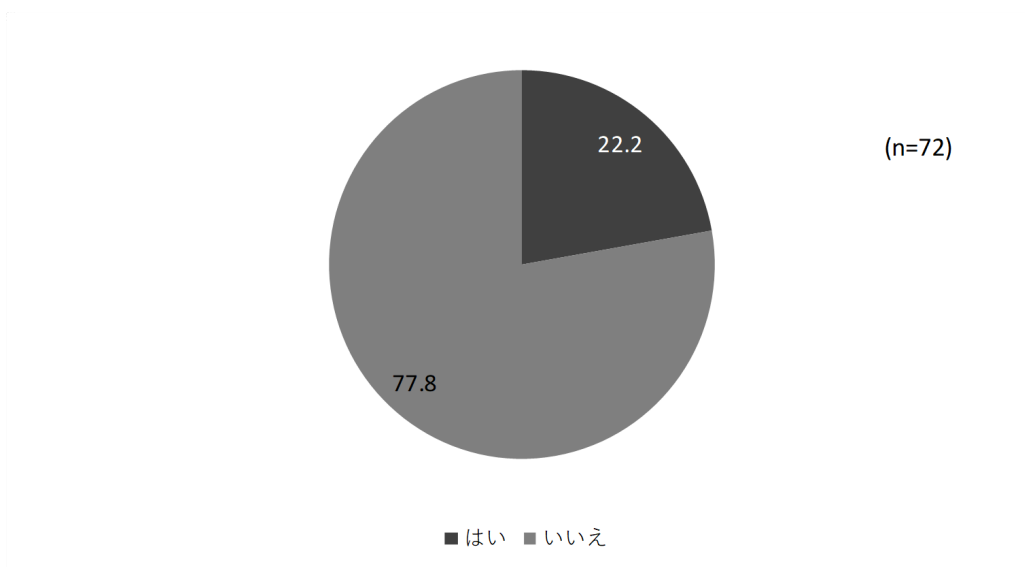
**問7. 発災時にあなたがいた場所を以下よりお選びください。(SA)【被災側】**

発災時にいた場所は、勤務先が 57.8%で最も多くなっていた。



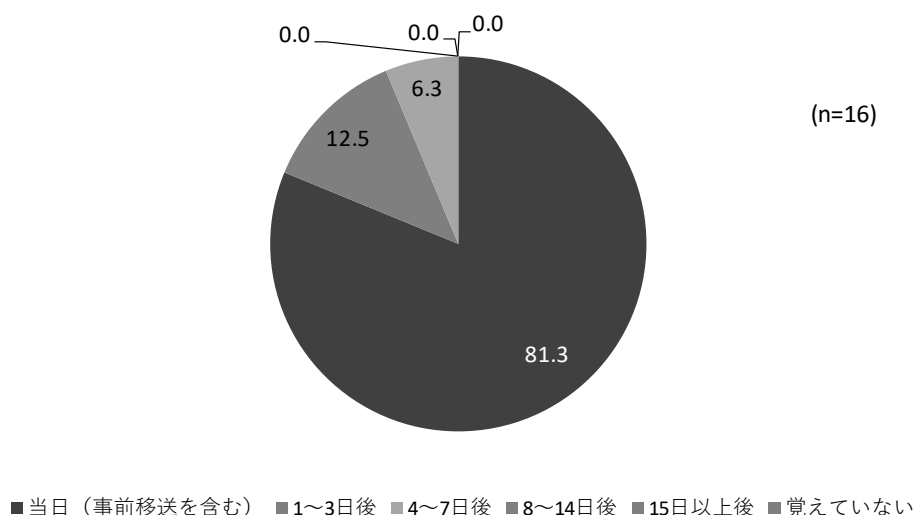
**問8. 【問7で「勤務先の施設・事業所(送迎中も含む)」「勤務先の利用者の自宅(移動中も含む)」を選択した方に伺います】発災後、勤務先の利用者を避難所等へ移送しましたか。(SA)【被災側】**

発災時に利用者の自宅にいた介護福祉士のうち、利用者を避難所等へ移送したのは約 20%だった。



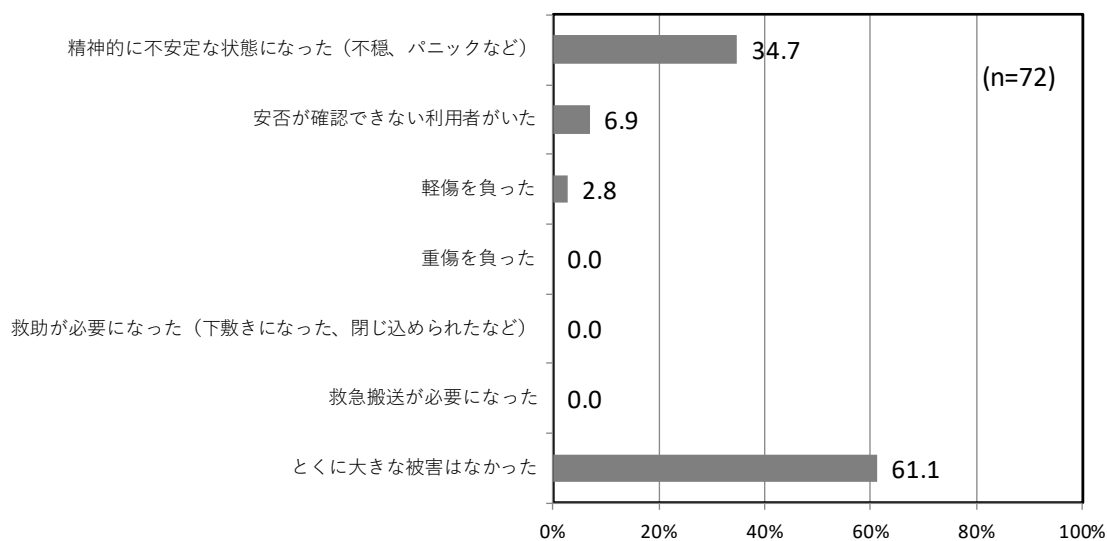
**問9.【問8で「はい」を選択した方に伺います】勤務先の利用者を最初に避難所等へ移送したのは、発災から何日後でしたか。(SA)**

自宅にいる利用者を避難所等へ移送した介護福祉士のうち、80%以上は事前もしくは当日の移送だったが、翌日以降に移送したケースもあった。



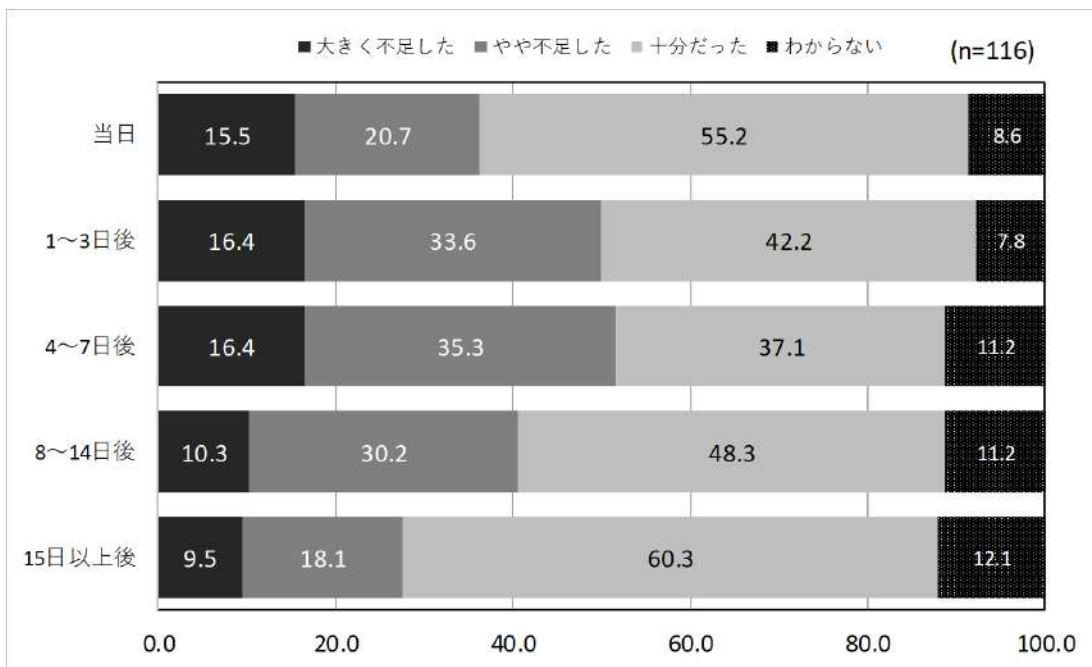
**問10.【問7で「勤務先の施設・事業所(送迎中も含む)」「勤務先の利用者の自宅(移動中も含む)」を選択した方に伺います】発災直後における、勤務先の利用者の被災状況として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【被災側】**

発災直後の利用者の被害は、精神的な被害が最も多くなっていた。一方で約 60%はとくに大きな被害がなかった。



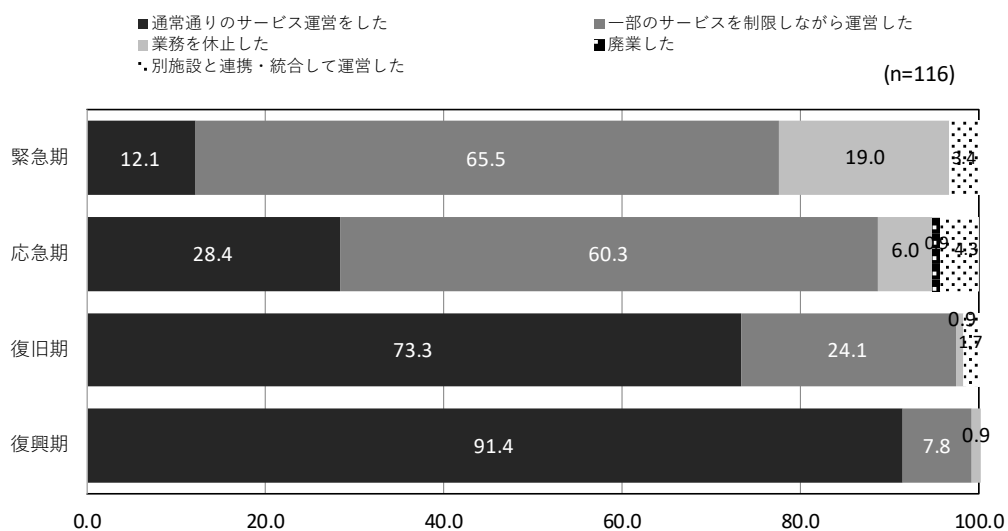
**問11. 発災後のそれぞれの時期における、勤務先での食料品や生活物資の不足状況を以下よりお選びください。(それぞれ1つずつ選択)【被災側】**

勤務先における食料品や生活物資の不足感は、4～7日後が最も多くなっていた。



**問12. 被災当時の所属施設・事業所の、発災後の時期別の運営状況を、以下よりお選びください。(それぞれ1つずつ選択)【被災側】**

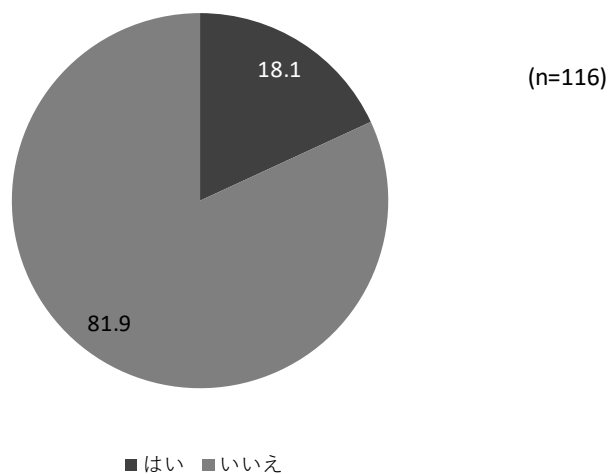
緊急期において、約 80%の介護福祉士の所属施設・事業所は運営を継続した。



問13. 被災当時の所属施設・事業所で、次の①～③に該当することはありましたか。また、それぞれの項目で「はい」と回答した場合、最初に応援を受けた、もしくは完全に復旧したのは発災から何日後でしたか。(それぞれ1つ選択)【被災側】

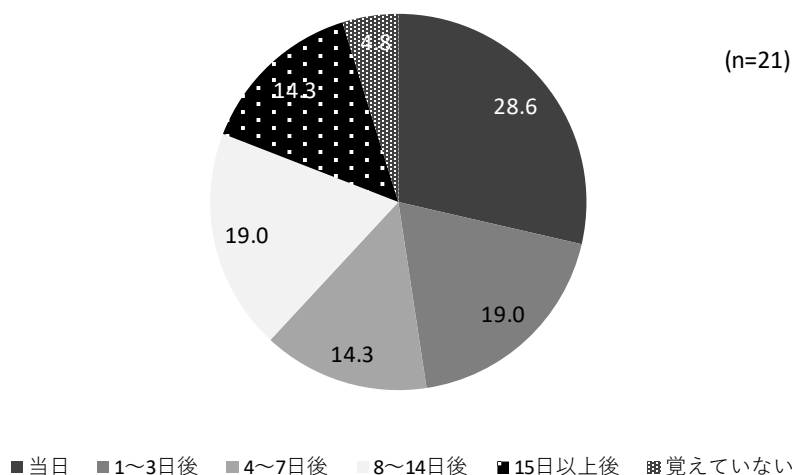
①-1 応援職員の受入有無

応援職員を受け入れた介護福祉士は約 20%だった。



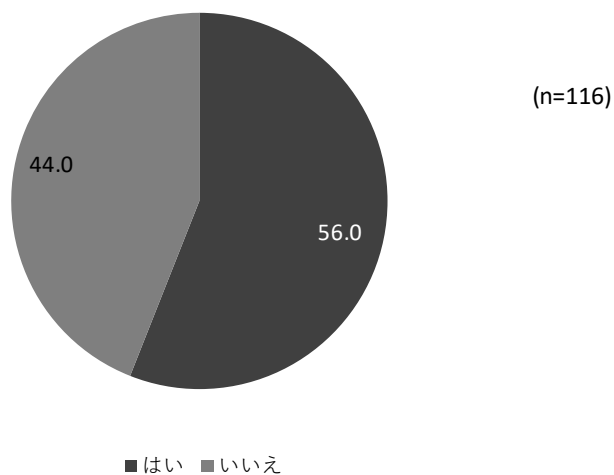
①-2 応援職員の受入時期

応援職員の受入は当日が 28.6%で最も多く、次いで1～3日後と8～14 日後が多くなっていた。



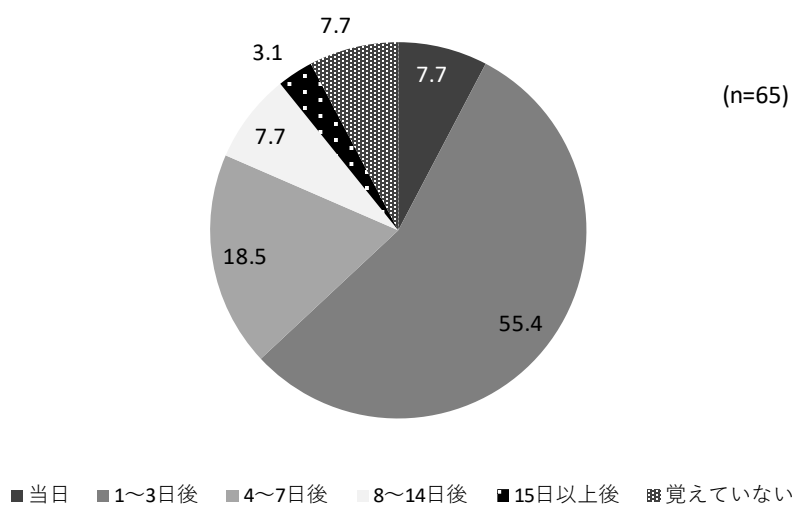
## ②-1 食料品や生活物資の受入有無

半数以上の介護福祉士は食料品や生活物資の応援を受けていた。



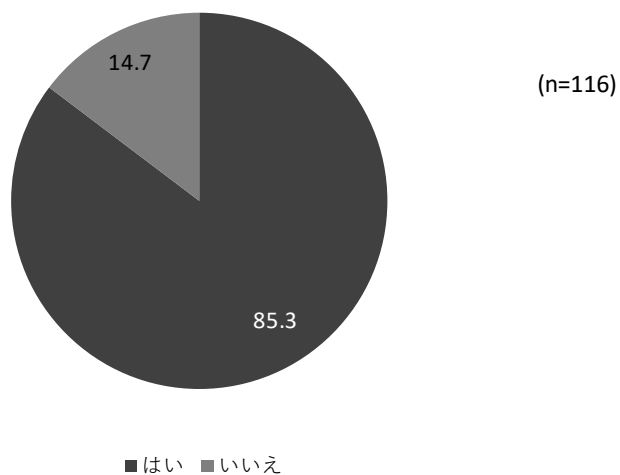
## ②-2 食料品や生活物資の受入時期

食料品や生活物資の応援を受けたのは当日含む3日以内が60%以上だった。



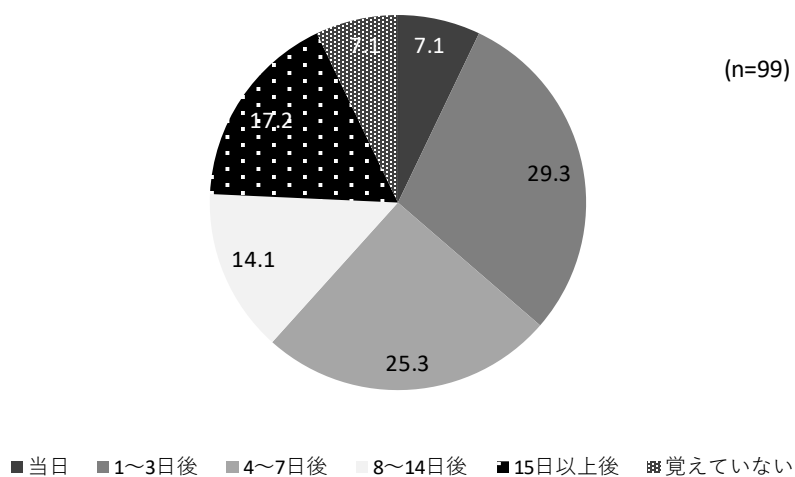
### ③-1 ライフライン(電気・ガス・水)の被害有無

80%以上の介護福祉士がライフラインの被害を受けていた。



### ③-2 ライフライン(電気・ガス・水)の復旧時期

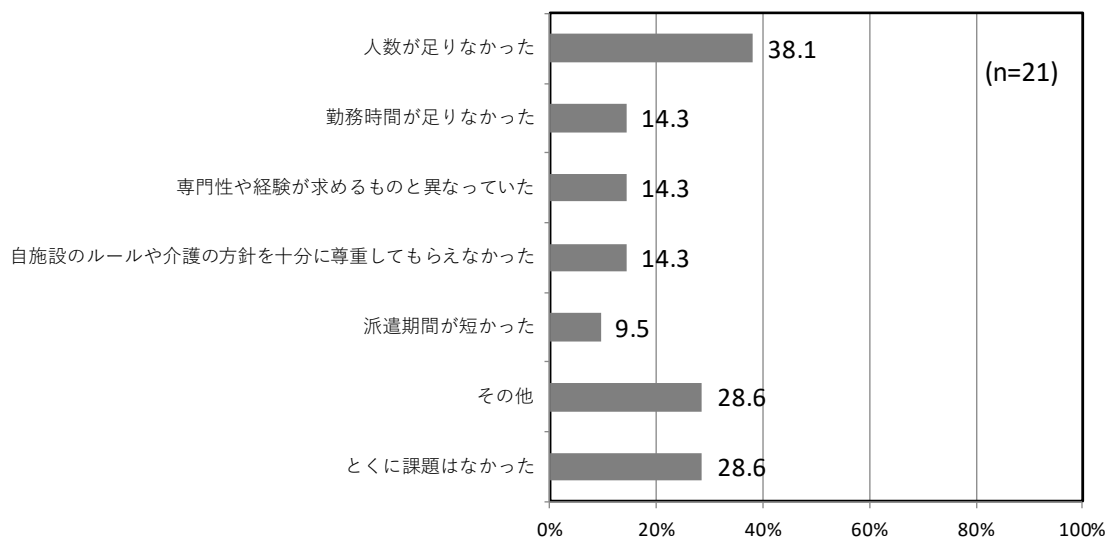
ライフラインの復旧時期は1～3日後が約30%で最も多かった。一方で、15日以上後も約20%であった。



**問14.【問13「①自施設以外の応援職員を受け入れた」で「はい」を選択した方に伺います】**

**自施設以外から応援職員を受け入れるにあたって生じた課題として、該当するものすべてをお選びください。(MA)【被災側】**

応援職員を受け入れる際の課題は、人数不足が最も多くなっていた。一方で約30%は課題を感じていなかった。

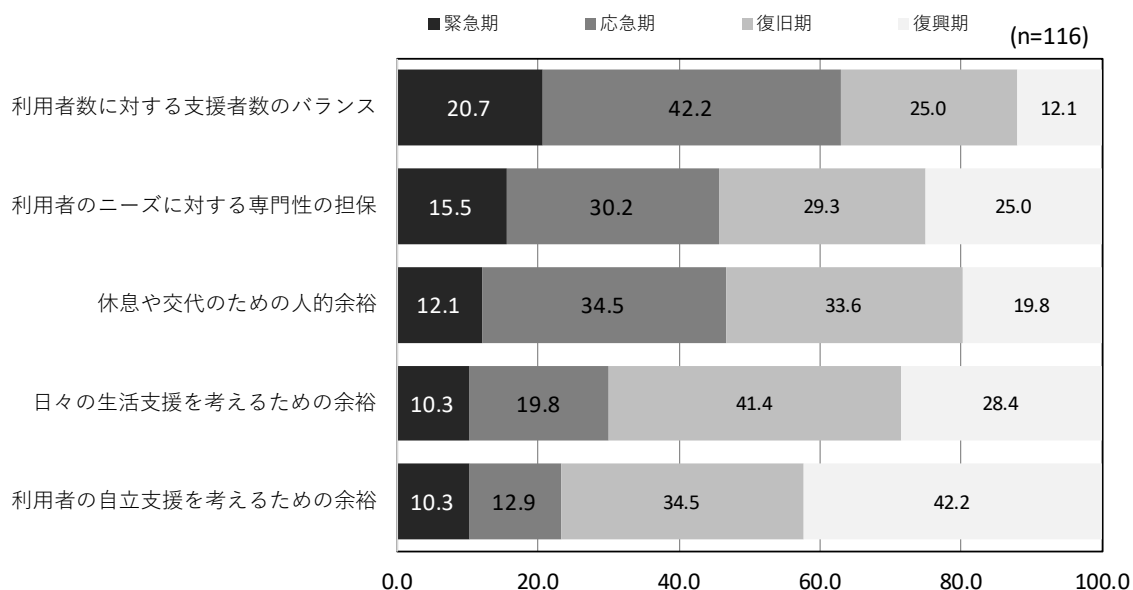


**その他(自由記述)**

介護計画の共有
瓦礫等の片付けの為に、当日のみで済んだ
引継ぎや伝達する負担が大きかった
応援職員が派遣される頃には、落ち着いていた。
応援に来た方の目的が、復旧や利用者支援の手助けではなく「被災時の対応ノウハウを得たい」だったことから、当方の被害の程度、手伝いの依頼内容に不満を言われ困惑した。
地理が分からず物資の調達も頼めず、利用者情報を伝達するツールの準備なく、介護業務にも手間取って、応援が負担に感じた。

**問15. 被災当時の所属施設・事業所では、発災後のどの時期から平時に近い状態に戻りましたか。下記の項目について、あなたの実感にあてはまるものを以下よりお選びください。(それぞれ1つずつ選択)【被災側】**

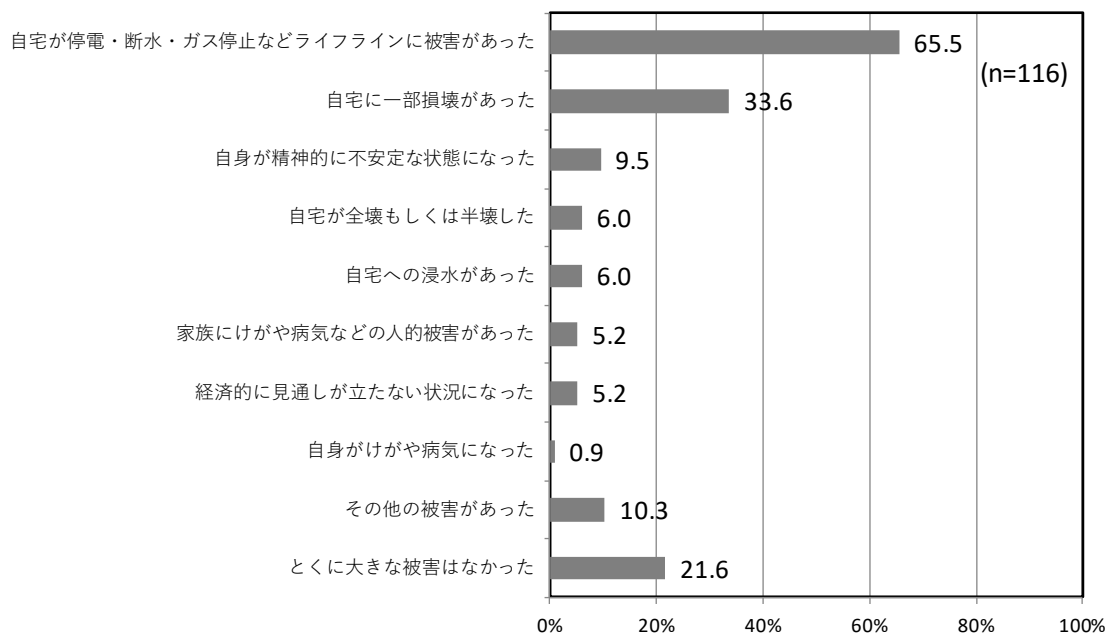
利用者の自立支援については 40%以上が、日々の生活支援については約 30%が、復興期までは平時と同様に考えられる余裕を持てていなかった。



問16. 発災直後のあなたの被害状況として、該当するものをすべてお選びください。(MA)

【被災側】

介護福祉士個人の被害としては、ライフラインの被害が 65.5%で最も多くなっていた。



問17. 発災後の時期別のあなたの勤務体制や勤務時間を以下よりお選びください。(それぞれあてはまるものをすべて選択)【被災側】

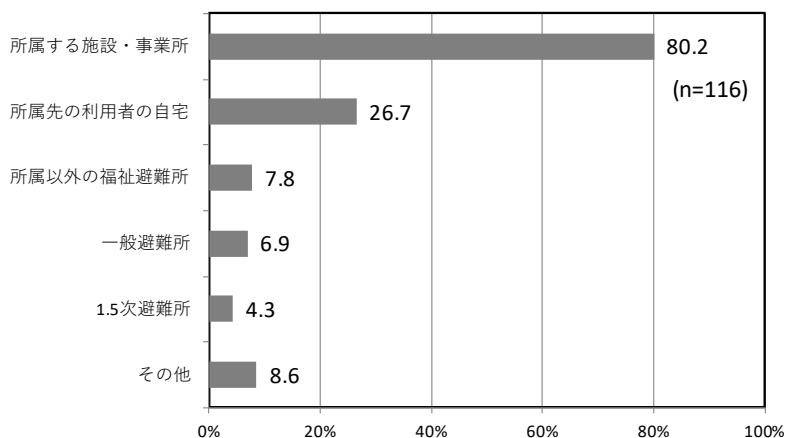
緊急期には 30%以上が泊まり込みの勤務をしていた。また、緊急期および応急期では 40%以上が通常よりも長時間の勤務をしていた。

(単位：%)

	n	通常通りのシフトで勤務した	泊まり込みで勤務した (連続勤務)	通常より長時間の勤務となった	勤務を中断・制限した	あてはまるものはない
緊急期	116	17.2	33.6	40.5	15.5	2.6
応急期	116	36.2	13.8	42.2	4.3	6.0
復旧期	116	69.0	0.9	20.7	4.3	5.2
復興期	116	81.0	-	9.5	1.7	7.8

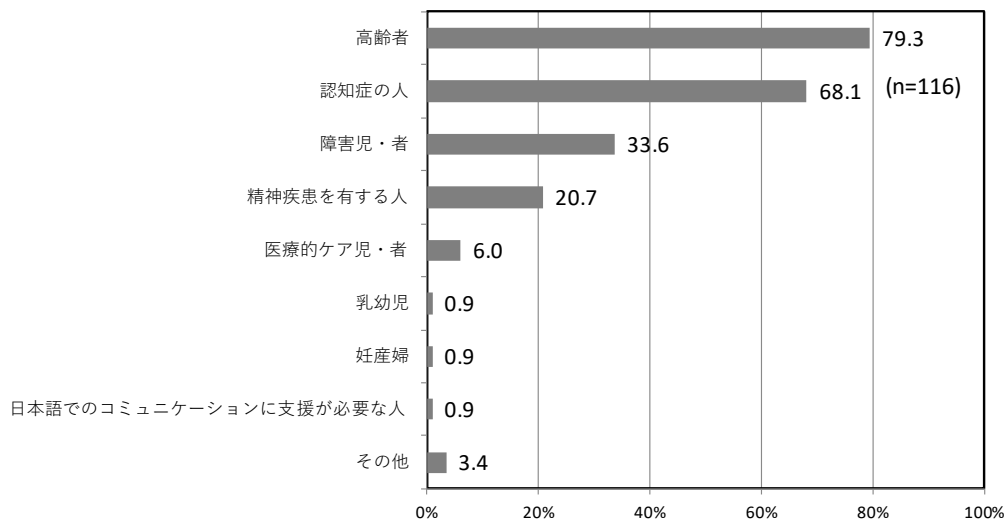
**問18. 発災から1カ月間で、あなたが要配慮者を支援した場所として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【被災側】**

要配慮者を支援した場所は、所属する施設・事業所が 80.2%で最も多く、次いで利用者の自宅が 26.7%で多くなっていた。



**問19. 発災から1カ月間で、あなたが支援した要配慮者を以下よりお選びください。(MA)【被災側】**

支援した要配慮者は、高齢者が 79.3%で最も多く、次いで認知症の人が多くなっていた。



その他(自由記述)

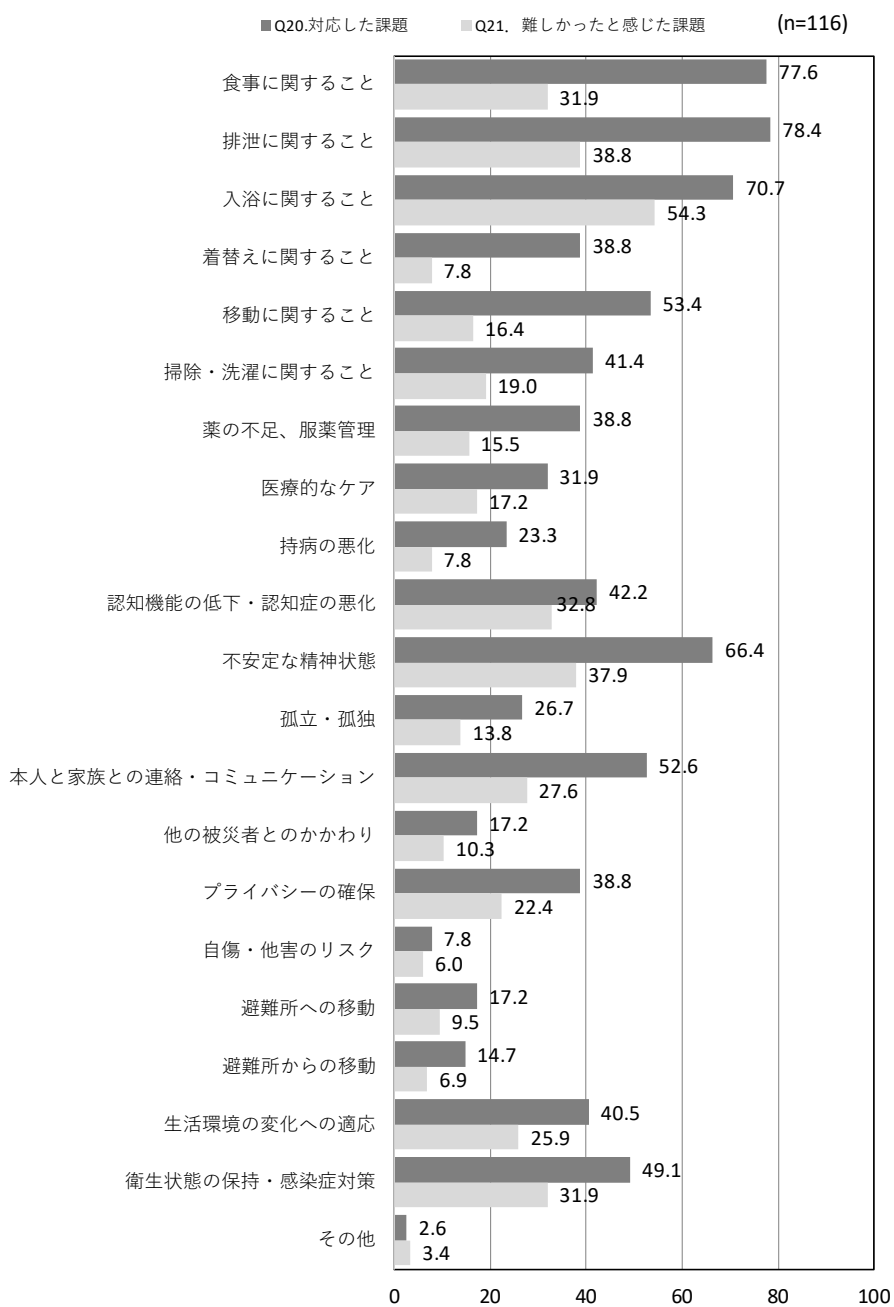
地域の高齢者宅	児童養護施設入所児童
透析者	

問20. 発災後、対応した要配慮者の課題として、該当するものをすべてお選びください。

(MA)【被災側】

問21. 発災後、解決が難しかったと感じた要配慮者の課題として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【被災側】

対応した課題は、食事・入浴・排泄が多く、次いで不安定な精神状態への対応が多くなっていた。入浴、認知機能の低下、自傷・他害のリスクは、対応した人の7割以上が、解決が難しかったと感じていた。



その他対応した要配慮者の課題(自由記述)

暖房器具の確保
水があったのだが、雑貨室の奥にしまっていたこと。

その他対応が難しかった要配慮者の課題(自由記述)

暖房器具の確保、燃料の確保
飲料水の確保や利用者宅へ1軒ずつ届けること

【クロス集計】

解決が難しかった課題のうち、種別ごとに大きな差が見られたのは食事や入浴、認知機能の低下、感染症対策、業務ごとに大きな差が見られたのは移動、認知機能の低下、孤独・孤立、本人や家族との連絡、活動場所ごとに大きな差が見られたのは排泄、孤立・孤独、対象者ごとに大きな差が見られたのは認知機能の低下や不安定な精神状態だった。

■所属種別

(単位：%)

		n	食事に関する こと	排泄に関する こと	入浴に関する こと	着替えに関する こと	移動に関する こと	掃除・洗濯 に関するこ と	薬の不足、 服薬管理	医療的なケ ア	持病の悪 化	認知機能 の低下・認 知症の悪 化	
全体		116	31.9	38.8	54.3	7.8	16.4	19.0	15.5	17.2	7.8	32.8	
Q2.被災当 時の所属施 設・事業所の 種別として、 該当するもの をすべてお選 びください。	高齢者	88	34.1	39.8	55.7	8.0	17.0	20.5	12.5	17.0	6.8	38.6	
	障害者	34	35.3	44.1	44.1	2.9	14.7	17.6	23.5	17.6	5.9	14.7	
	その他(病院/行政・社会福祉協議会/その他)	15	26.7	46.7	40.0	20.0	6.7	20.0	20.0	20.0	13.3	46.7	
	訪問系	22	45.5	31.8	40.9	4.5	13.6	9.1	22.7	13.6	9.1	22.7	
	通所系	33	21.2	36.4	42.4	6.1	24.2	15.2	21.2	24.2	12.1	18.2	
	入所系	63	36.5	42.9	57.1	11.1	9.5	22.2	15.9	17.5	9.5	34.9	
	その他(訪問系/通所系/入所系以外)	34	38.2	44.1	61.8	17.6	26.5	23.5	20.6	20.6	11.8	47.1	
			n	不安定な 精神状態	孤立・孤独	本人と家族 との連絡・ コミュニケー ション	他の被災 者とのわか わり	プライバシー の確保	自傷・他害 のリスク	避難所への 移動	避難所から の移動	生活環境 の変化への 適応	衛生状態 の保持・感 染症対策
全体		116	37.9	13.8	27.6	10.3	22.4	6.0	9.5	6.9	25.9	31.9	3.4
Q2.被災当 時の所属施 設・事業所の 種別として、 該当するもの をすべてお選 びください。	高齢者	88	30.7	13.6	31.8	9.1	23.9	2.3	12.5	9.1	29.5	31.8	3.4
	障害者	34	52.9	11.8	5.9	14.7	14.7	14.7	8.8	5.9	20.6	26.5	2.9
	その他(病院/行政・社会福祉協議会/その他)	15	40.0	13.3	40.0	13.3	33.3	0.0	13.3	13.3	20.0	46.7	0.0
	訪問系	22	31.8	22.7	18.2	9.1	22.7	0.0	13.6	9.1	22.7	13.6	0.0
	通所系	33	36.4	18.2	12.1	18.2	24.2	12.1	3.0	3.0	24.2	27.3	9.1
	入所系	63	38.1	7.9	27.0	12.7	30.2	7.9	6.3	4.8	23.8	38.1	0.0
	その他(訪問系/通所系/入所系以外)	34	35.3	20.6	35.3	11.8	23.5	0.0	23.5	20.6	32.4	41.2	2.9

## ■業務別

(単位：%)

		n	食事に関すること	排泄に関すること	入浴に関すること	着替えに関すること	移動に関すること	掃除・洗濯に関すること	薬の不足・服薬管理	医療的なケア	持病の悪化	認知機能の低下・認知症の悪化	
全体		116	31.9	38.8	54.3	7.8	16.4	19.0	15.5	17.2	7.8	32.8	
Q3. 被災当時の所属における、被災前のあなたの主な業務を以下よりお選びください。(1つ選択)	相談業務	13	23.1	23.1	53.8	7.7	38.5	15.4	15.4	23.1	15.4	46.2	
	介護業務	66	31.8	40.9	56.1	6.1	12.1	19.7	12.1	13.6	7.6	25.8	
	施設長・管理者等の管理業務	30	40.0	43.3	50.0	10.0	16.7	16.7	26.7	26.7	6.7	43.3	
	その他の業務	7	14.3	28.6	57.1	14.3	14.3	28.6	0.0	0.0	0.0	28.6	
		n	不安定な精神状態	孤立・孤独	本人と家族との連絡・コミュニケーション	他の被災者とのかわり	プライバシーの確保	自傷・他害のリスク	避難所への移動	避難所からの移動	生活環境の変化への適応	衛生状態の保持・感染症対策	その他
全体		116	37.9	13.8	27.6	10.3	22.4	6.0	9.5	6.9	25.9	31.9	3.4
Q3. 被災当時の所属における、被災前のあなたの主な業務を以下よりお選びください。(1つ選択)	相談業務	13	38.5	38.5	46.2	15.4	15.4	0.0	23.1	23.1	23.1	30.8	7.7
	介護業務	66	37.9	9.1	22.7	6.1	25.8	7.6	6.1	3.0	24.2	30.3	0.0
	施設長・管理者等の管理業務	30	36.7	16.7	26.7	20.0	16.7	3.3	13.3	10.0	33.3	33.3	10.0
	その他の業務	7	42.9	0.0	42.9	0.0	28.6	14.3	0.0	0.0	14.3	42.9	0.0

## ■活動場所別

(単位：%)

		n	食事に関すること	排泄に関すること	入浴に関すること	着替えに関すること	移動に関すること	掃除・洗濯に関すること	薬の不足・服薬管理	医療的なケア	持病の悪化	認知機能の低下・認知症の悪化	
全体		116	31.9	38.8	54.3	7.8	16.4	19.0	15.5	17.2	7.8	32.8	
Q18. 発災から1か月間で、あなたが要配慮者を支援した場所として、該当するものをすべてお選びください。(あてはまるものをすべて選択)	所属する施設・事業所	93	32.3	43.0	57.0	9.7	16.1	19.4	16.1	18.3	7.5	33.3	
	所属先の利用者の自宅	31	32.3	22.6	54.8	3.2	25.8	16.1	19.4	16.1	12.9	32.3	
	一般避難所	8	25.0	12.5	50.0	0.0	25.0	12.5	12.5	12.5	0.0	62.5	
	所属以外の福祉避難所	9	22.2	33.3	33.3	11.1	22.2	22.2	22.2	33.3	22.2	55.6	
	1.5次避難所	5	20.0	60.0	20.0	0.0	0.0	40.0	20.0	40.0	20.0	100.0	
	その他	10	40.0	40.0	70.0	0.0	30.0	30.0	10.0	20.0	0.0	50.0	
	その他	10	40.0	40.0	70.0	0.0	30.0	30.0	10.0	20.0	0.0	50.0	
		n	不安定な精神状態	孤立・孤独	本人と家族との連絡・コミュニケーション	他の被災者とのかわり	プライバシーの確保	自傷・他害のリスク	避難所への移動	避難所からの移動	生活環境の変化への適応	衛生状態の保持・感染症対策	その他
全体		116	37.9	13.8	27.6	10.3	22.4	6.0	9.5	6.9	25.9	31.9	3.4
Q18. 発災から1か月間で、あなたが要配慮者を支援した場所として、該当するものをすべてお選びください。(あてはまるものをすべて選択)	所属する施設・事業所	93	40.9	10.8	29.0	10.8	24.7	7.5	7.5	5.4	23.7	36.6	4.3
	所属先の利用者の自宅	31	35.5	29.0	22.6	12.9	16.1	6.5	19.4	12.9	29.0	22.6	9.7
	一般避難所	8	50.0	0.0	37.5	25.0	37.5	12.5	37.5	25.0	37.5	37.5	12.5
	所属以外の福祉避難所	9	66.7	22.2	33.3	66.7	77.8	22.2	22.2	22.2	66.7	44.4	0.0
	1.5次避難所	5	80.0	20.0	40.0	60.0	60.0	20.0	0.0	20.0	40.0	80.0	0.0
	その他	10	50.0	30.0	30.0	10.0	10.0	10.0	20.0	10.0	30.0	40.0	10.0
	その他	10	50.0	30.0	30.0	10.0	10.0	10.0	20.0	10.0	30.0	40.0	10.0

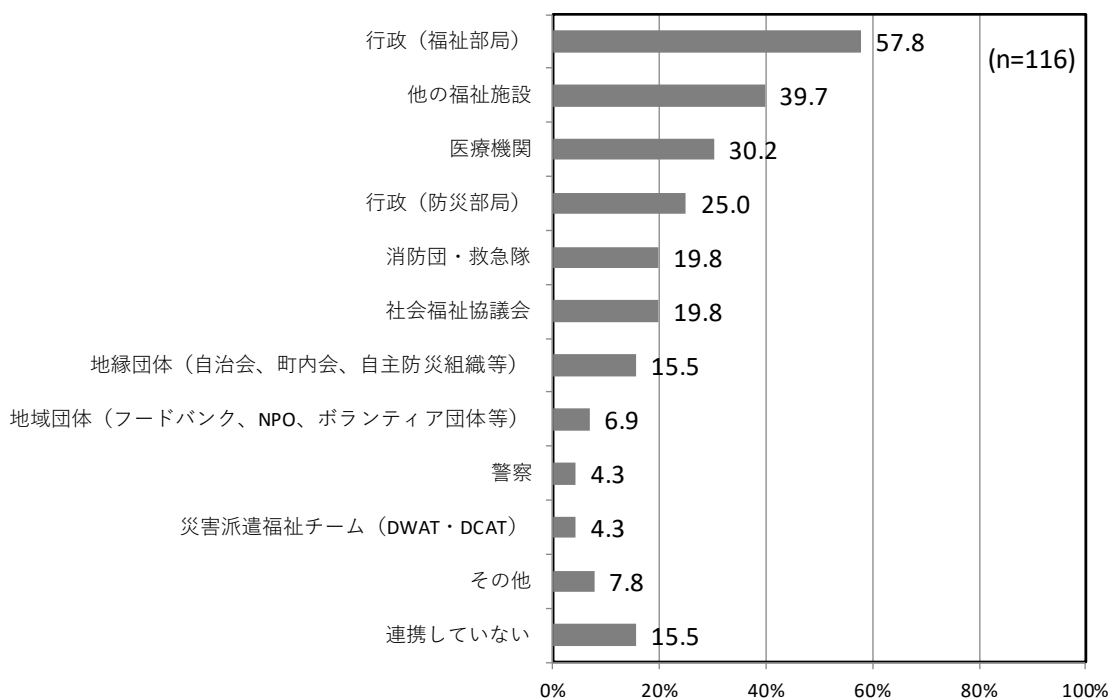
## ■支援対象種別

(単位：%)

		n	食事に関すること	排泄に関すること	入浴に関すること	着替えに関すること	移動に関すること	掃除・洗濯に関すること	薬の不足・服薬管理	医療的なケア	持病の悪化	認知機能の低下・認知症の悪化	
全体		116	31.9	38.8	54.3	7.8	16.4	19.0	15.5	17.2	7.8	32.8	
Q19. 発災から1カ月間で、あなたが支援した要配慮者を以下よりお選びください。(あてはまるものをすべて選択)	高齢者	92	31.5	37.0	55.4	7.6	16.3	18.5	13.0	18.5	7.6	38.0	
	認知症の人	79	31.6	39.2	54.4	7.6	13.9	19.0	12.7	17.7	7.6	44.3	
	障害児・者	39	30.8	41.0	51.3	7.7	23.1	17.9	28.2	15.4	7.7	15.4	
	医療的ケア児・者	7	14.3	57.1	42.9	0.0	14.3	42.9	14.3	14.3	0.0	57.1	
	精神疾患を有する人	24	20.8	37.5	41.7	4.2	25.0	12.5	25.0	20.8	8.3	37.5	
	乳幼児	1	0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	妊産婦	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	日本語でのコミュニケーションに支援が必要な人	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	その他	4	50.0	50.0	100.0	0.0	25.0	50.0	0.0	25.0	0.0	0.0	50.0
		n	不安定な精神状態	孤立・孤独	本人と家族との連絡・コミュニケーション	他の被災者とのかわり	プライバシーの確保	自傷・他害のリスク	避難所への移動	避難所からの移動	生活環境の変化への適応	衛生状態の保持・感染症対策	その他
全体		116	37.9	13.8	27.6	10.3	22.4	6.0	9.5	6.9	25.9	31.9	3.4
Q19. 発災から1カ月間で、あなたが支援した要配慮者を以下よりお選びください。(あてはまるものをすべて選択)	高齢者	92	30.4	14.1	31.5	8.7	23.9	0.0	12.0	8.7	28.3	32.6	3.3
	認知症の人	79	30.4	13.9	32.9	11.4	26.6	1.3	12.7	10.1	31.6	31.6	3.8
	障害児・者	39	51.3	17.9	15.4	17.9	15.4	15.4	5.1	5.1	28.2	28.2	2.6
	医療的ケア児・者	7	42.9	0.0	42.9	14.3	14.3	0.0	0.0	14.3	28.6	71.4	0.0
	精神疾患を有する人	24	50.0	29.2	33.3	16.7	8.3	16.7	16.7	12.5	25.0	33.3	4.2
	乳幼児	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	妊産婦	1	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	日本語でのコミュニケーションに支援が必要な人	1	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	その他	4	50.0	0.0	50.0	25.0	25.0	0.0	25.0	25.0	25.0	75.0	25.0

問22. 発災後、活動のなかで連携した外部機関として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【被災側】

行政(福祉部局)との連携は 57.8%で最も多くなっていた一方で、行政(防災部局)との連携は 25.0%だった。また、社会福祉協議会、地域団体、地縁団体など地域との連携は 20%以下となっていた。



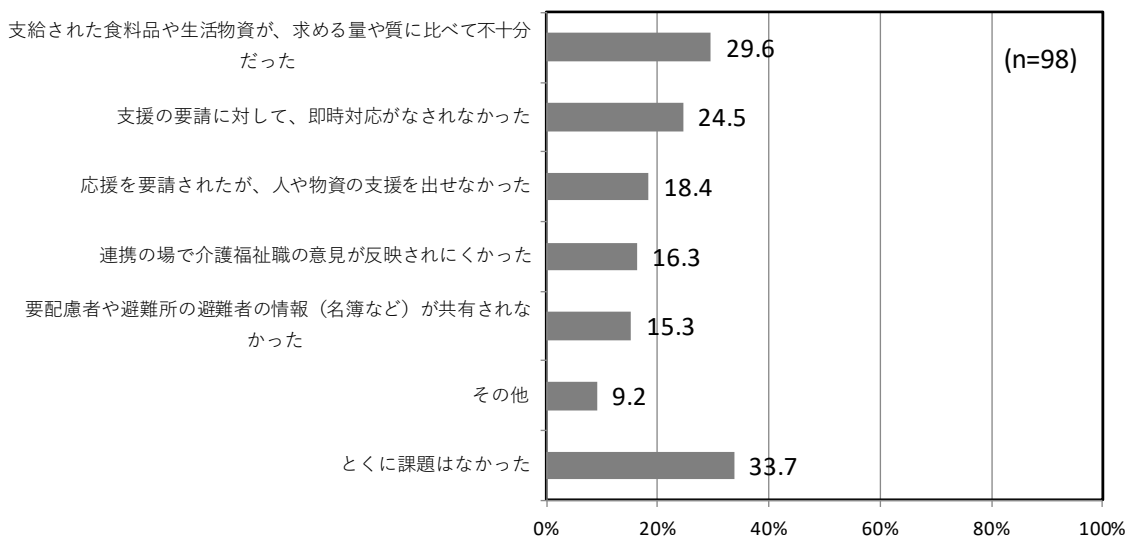
その他(自由記述)

ケアマネ等
個人のボランティア
法人本部のみ
地域住民の方々
介護老人保健施設協会
災害ボランティアは受け入れたが、どの団体から受け入れたかは忘れました。
自衛隊
担当ケアマネージャー

**問23.【問22で「連携していない」以外を選択した方に伺います】発災後の活動において、外部機関との連携のなかで生じた課題として、該当するものをすべてお選びください。**

**(MA)【被災側】**

外部機関との連携における課題は、物資の量や質が不十分であることが29.6%で最も多かった。



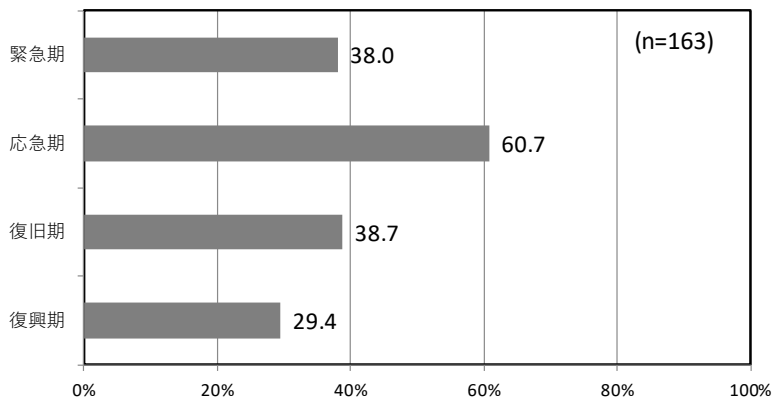
**その他(自由記述)**

自衛隊からの水の配給がなかった
情報把握に必要な書類のフォーマットが不十分
食品類物資の遅さ
当時は一般職でよく解らない
職員個震災直後は個人個人の繋がりを頼るのが殆どだった
それどころでなく覚えていない
土日は担当ケアマネージャーと連絡がとれず、事業所判断で無償で給水対策や臨時訪問など訪問予定日以外の利用者自宅にも電話かけや臨時訪問などして活動した。家族もいない、給水へ行けないなどの利用者は、ヘルパーが行ってなければ誰もいかないことが予測された。多くの課題を感じる。

問24. あなたが応援活動に従事した時期として、該当するものをすべてお選びください。

(MA)【応援側】

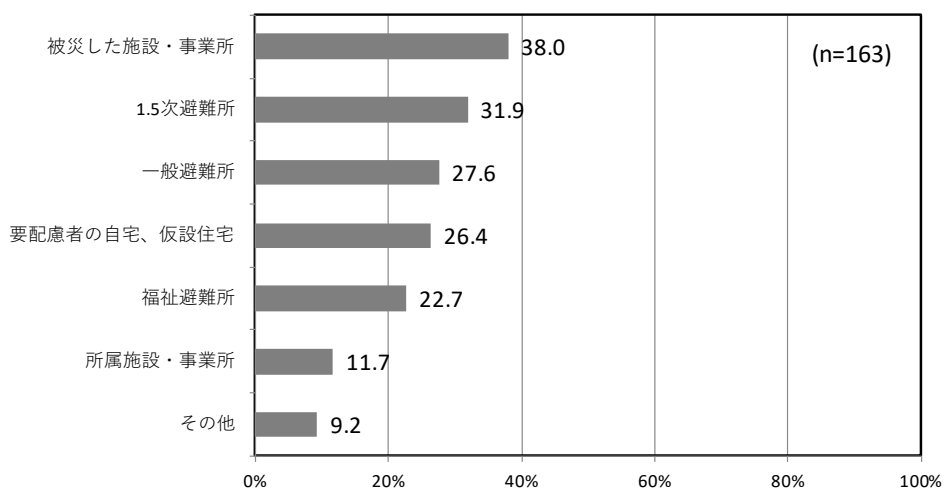
応援活動に従事した時期は、応急期が 60.7%で最も多くなっていたが、緊急期から復興期まで幅広く回答を得られた。



問25. あなたが応援活動に従事した場所として、該当するものをすべてお選びください。

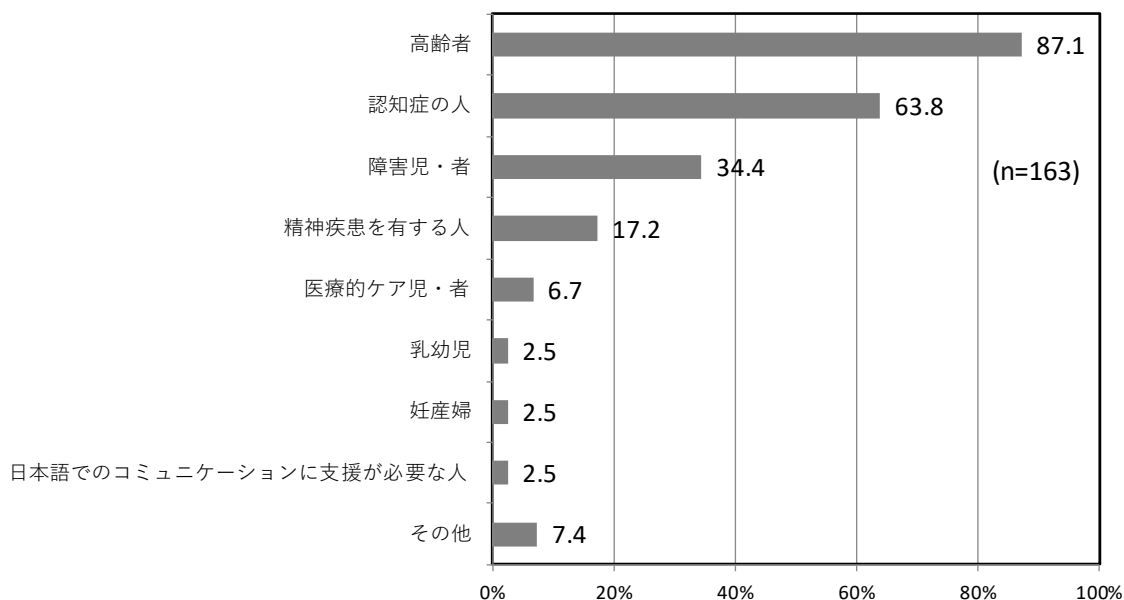
(MA)【応援側】

活動場所は、被災した施設・事業所が 38.0%で最も多く、次いで 1.5 次避難所が多くなっていた。



**問26. あなたが応援活動で支援した要配慮者を以下よりすべてお選びください。(MA)【応援側】**

支援した要配慮者は、高齢者が 87.1%で最も多く、次いで認知症の人が多くなっていた。

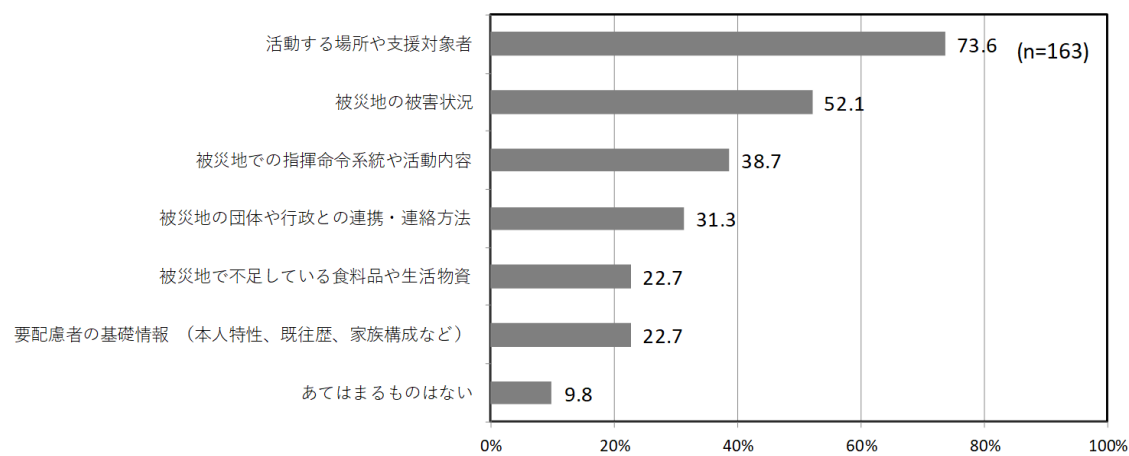


**その他(自由記述)**

患者家族	一般の民間人
介護施設に避難された一般の方々	生活保護受給者
三重県 DWAT 研修受講のみ	被災者
要配慮者	友人
地域の高齢者	小学生
障害等が無い方	一般の被災者

問27. これまでの応援活動において、活動開始時点で明確だったものとして、該当するものをすべてお選びください。(MA)【応援側】

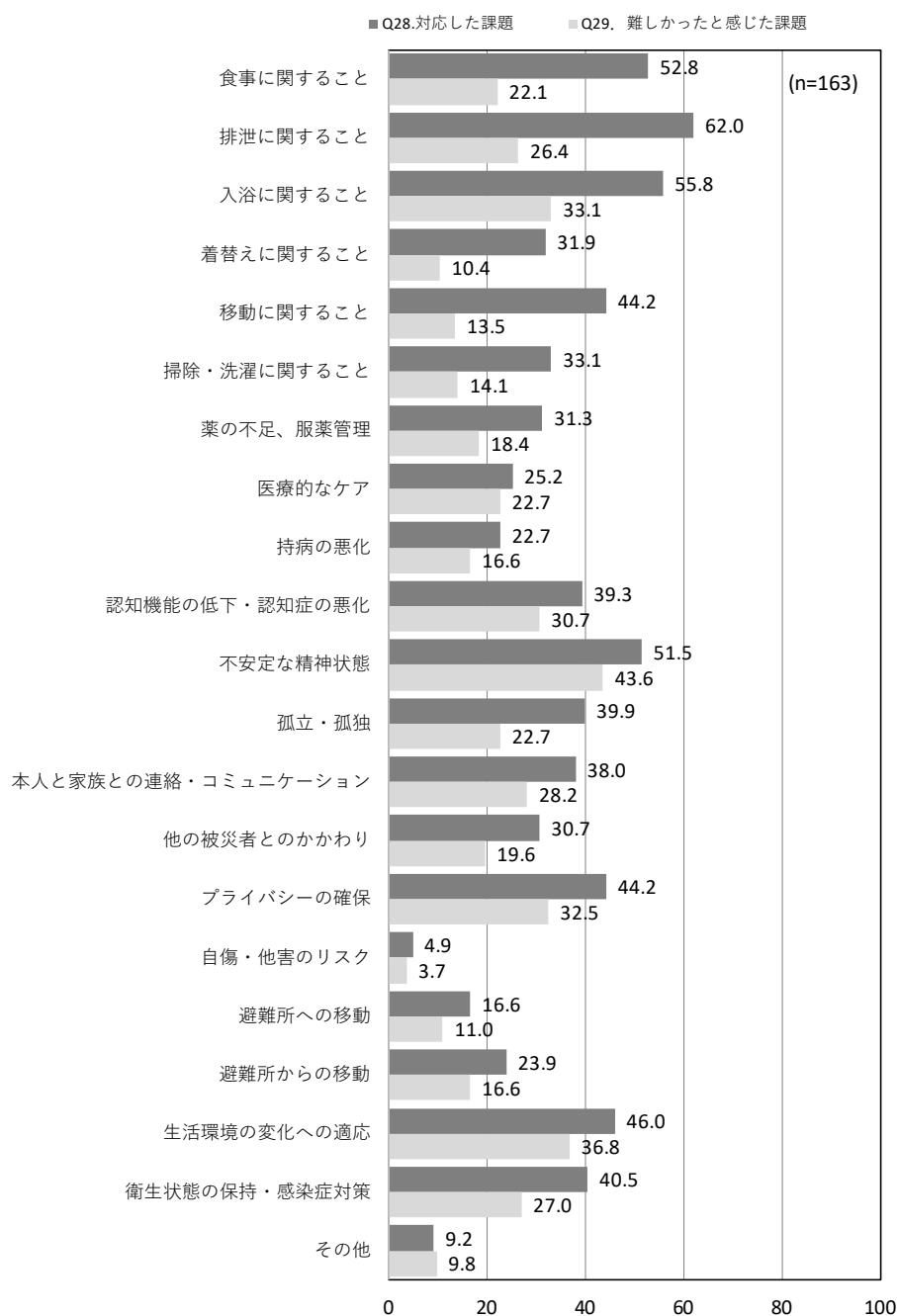
50%以上は、活動場所や支援対象、被災地の被害状況以外の情報がない状態で活動を開始していた。



問28. 応援活動のなかで対応した要配慮者の課題として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【応援側】

問29. 応援活動のなかで解決が難しかったと感じた要配慮者の課題として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【応援側】

対応した課題は、被災側と同様に排泄が最も多く、次いで入浴、食事、不安定な精神状態への対応が多くなっていった。医療的ケア、不安定な精神状態、自傷・他害、環境変化への適応は、対応した人の7割以上が解決が難しかったと感じていた。



その他対応した要配慮者の課題(自由記述)

経済不安の解消
介護職員の人手不足
避難所の確保
患者の家族の帰宅困難
研修では KJ カードにて課題討議を行いました。
整容に関すること
自宅、室内の清掃及び消毒
金銭管理
情報共有の範囲
倒壊の危険性のある家屋からの荷物の撤去
支援者が被災者でもある為、支援者が不足してしまう事
全て聞き取り調査のみで直接支援はしていません
人員不足
寒さ対策
医療チームとの連携

その他対応が難しかった要配慮者の課題(自由記述)

最終的には何とかなるという感覚でした
経済不安の解消
高学年女兒と大人の関係性
避難所の確保
交通手段
見守りでの対応だったため該当なし
DWAT 研修では避難所生活の討議でした。
整容について
活動量の低下
私が応援に入ったのは復興期であり、かつ施設内であったため、要配慮者の課題はある程度改善されていたように思います。この時期になると支援者の課題が浮き彫りになってくるのではないのでしょうか。
金銭管理
時間が足りなかった
施設職員が不足しており、応援活動で入ったスタッフで支援をしなくてはいけないことがあった
解決策提案の決裁権限者がいない、アウトリーチ先が不明、状況を報告するのみの支援だったので、直接解決には至っていないが、それ自体が課題。
対象者の心身状況、既往歴の把握

## 【クロス集計】

解決が難しかった課題のうち、食事、排泄、入浴などは時間がたつと課題として挙げられる割合が低くなる一方で、移動、不安定な精神状態、環境変化への適応は復旧期や復興期で課題として挙げられる割合が高くなっていった。

一般避難所は他の活動場所よりも、多くの要配慮者の課題で解決が難しかった割合が高く、他方で福祉避難所は割合が低かった。被災した施設・事業では環境変化への適応が約50%、要配慮者の自宅、仮設住宅では不安定な精神状態が50%以上で最も多くなっていった。

支援対象者によって、解決が難しい課題の傾向に違いは見られなかった。ただ、高齢者や認知症の人に比べて、障害児・者に対応した人は、多くの要配慮者の課題で解決が難しかった割合が高かった。

種別では訪問系が、業務では相談業務が、他よりも多くの要配慮者の課題で解決が難しかった割合が高くなっていった。

## ■活動時期別

(単位：%)

		n	食事に関する こと	排泄に関する こと	入浴に関する こと	着替えに関する こと	移動に関する こと	掃除・洗濯 に関するこ と	薬の不足、 服薬管理	医療的なケ ア	持病の悪 化	認知機能 の低下・認 知症の悪 化	
全体		163	22.1	26.4	33.1	10.4	13.5	14.1	18.4	22.7	16.6	30.7	
Q24. あなたが応援活動に 従事した時期として、該当す るものをすべてお選びください。 (あてはまるものをすべて選 択)	緊急期	62	22.6	30.6	38.7	9.7	17.7	17.7	22.6	29.0	22.6	35.5	
	応急期	99	26.3	29.3	37.4	12.1	17.2	15.2	21.2	25.3	18.2	30.3	
	復旧期	63	22.2	20.6	33.3	11.1	19.0	14.3	19.0	27.0	17.5	30.2	
	復興期	48	20.8	22.9	25.0	12.5	20.8	14.6	14.6	25.0	10.4	35.4	
		n	不安定な 精神状態	孤立・孤独	本人と家族 との連絡・ コミュニケーション	他の被災 者とのかが わり	プライバシー の確保	自傷・他害 のリスク	避難所への 移動	避難所から の移動	生活環境 の変化への 適応	衛生状態 の保持・感 染症対策	その他
全体		163	43.6	22.7	28.2	19.6	32.5	3.7	11.0	16.6	36.8	27.0	9.8
Q24. あなたが応援活動に 従事した時期として、該当す るものをすべてお選びください。 (あてはまるものをすべて選 択)	緊急期	62	43.5	24.2	33.9	16.1	32.3	4.8	17.7	24.2	37.1	33.9	6.5
	応急期	99	44.4	22.2	30.3	21.2	36.4	4.0	12.1	16.2	33.3	25.3	10.1
	復旧期	63	49.2	23.8	34.9	20.6	36.5	6.3	15.9	17.5	47.6	30.2	11.1
	復興期	48	47.9	22.9	31.3	25.0	29.2	4.2	14.6	20.8	37.5	20.8	14.6

## ■活動場所別

(単位：%)

		n	食事に関する こと	排泄に関する こと	入浴に関する こと	着替えに関する こと	移動に関する こと	掃除・洗濯 に関するこ と	薬の不足、 服薬管理	医療的なケ ア	持病の悪 化	認知機能 の低下・認 知症の悪 化	
全体		163	22.1	26.4	33.1	10.4	13.5	14.1	18.4	22.7	16.6	30.7	
Q25. あなたが応援活動に 従事した場所として、該当す るものをすべてお選びください。 (あてはまるものをすべて選 択)	被災した施設・事業所	62	25.8	27.4	38.7	14.5	24.2	17.7	21.0	27.4	19.4	32.3	
	要配慮者の自宅、仮設住宅	43	25.6	23.3	37.2	9.3	23.3	16.3	20.9	30.2	16.3	39.5	
	一般避難所	45	26.7	26.7	37.8	17.8	17.8	22.2	28.9	33.3	35.6	35.6	
	福祉避難所	37	16.2	18.9	21.6	8.1	10.8	8.1	21.6	24.3	13.5	21.6	
	所属施設・事業所	19	21.1	31.6	26.3	10.5	31.6	15.8	42.1	52.6	15.8	31.6	
	1.5次避難所	52	19.2	21.2	28.8	9.6	7.7	7.7	17.3	21.2	25.0	40.4	
	その他	15	40.0	33.3	46.7	20.0	13.3	20.0	20.0	26.7	6.7	13.3	
		n	不安定な 精神状態	孤立・孤独	本人と家族 との連絡・ コミュニケー ション	他の被災 者とのわか り	プライバシー の確保	自傷・他害 のリスク	避難所への 移動	避難所から の移動	生活環境 の変化への 適応	衛生状態 の保持・感 染症対策	その他
全体		163	43.6	22.7	28.2	19.6	32.5	3.7	11.0	16.6	36.8	27.0	9.8
Q25. あなたが応援活動に 従事した場所として、該当す るものをすべてお選びください。 (あてはまるものをすべて選 択)	被災した施設・事業所	62	41.9	16.1	30.6	24.2	33.9	6.5	16.1	21.0	45.2	29.0	8.1
	要配慮者の自宅、仮設住宅	43	51.2	34.9	27.9	20.9	37.2	7.0	18.6	25.6	41.9	27.9	4.7
	一般避難所	45	48.9	33.3	42.2	28.9	57.8	4.4	20.0	26.7	42.2	40.0	8.9
	福祉避難所	37	37.8	13.5	27.0	24.3	40.5	8.1	16.2	24.3	45.9	21.6	5.4
	所属施設・事業所	19	47.4	36.8	31.6	31.6	68.4	15.8	26.3	26.3	31.6	26.3	15.8
	1.5次避難所	52	51.9	23.1	26.9	7.7	28.8	1.9	11.5	21.2	38.5	30.8	5.8
	その他	15	40.0	26.7	26.7	13.3	13.3	6.7	13.3	6.7	20.0	33.3	20.0

## ■支援対象別

(単位：%)

		n	食事に関する こと	排泄に関する こと	入浴に関する こと	着替えに関する こと	移動に関する こと	掃除・洗濯 に関するこ と	薬の不足、 服薬管理	医療的なケ ア	持病の悪 化	認知機能 の低下・認 知症の悪 化	
全体		163	22.1	26.4	33.1	10.4	13.5	14.1	18.4	22.7	16.6	30.7	
Q26. あなたが応援活動で 支援した要配慮者を以下より すべてお選びください。(あて はまるものをすべて選択)	高齢者	142	22.5	26.8	31.7	11.3	12.0	13.4	17.6	22.5	19.0	33.8	
	認知症の人	104	24.0	27.9	34.6	12.5	11.5	15.4	16.3	20.2	21.2	38.5	
	障害児・者	56	19.6	23.2	39.3	10.7	19.6	14.3	25.0	28.6	21.4	26.8	
	医療的ケア児・者	11	18.2	45.5	36.4	27.3	27.3	27.3	54.5	63.6	54.5	54.5	
	精神疾患を有する人	28	25.0	35.7	32.1	14.3	21.4	21.4	35.7	39.3	21.4	32.1	
	乳幼児	4	50.0	50.0	25.0	25.0	25.0	25.0	50.0	50.0	50.0	50.0	
	妊産婦	4	50.0	50.0	25.0	50.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	50.0	
	日本語でのコミュニケーションに支援が必要 な人	4	50.0	25.0	50.0	25.0	25.0	25.0	50.0	50.0	25.0	100.0	
	その他	12	25.0	25.0	33.3	8.3	8.3	25.0	0.0	16.7	0.0	8.3	
		n	不安定な 精神状態	孤立・孤独	本人と家族 との連絡・ コミュニケー ション	他の被災 者とのわか り	プライバシー の確保	自傷・他害 のリスク	避難所への 移動	避難所から の移動	生活環境 の変化への 適応	衛生状態 の保持・感 染症対策	その他
全体		163	43.6	22.7	28.2	19.6	32.5	3.7	11.0	16.6	36.8	27.0	9.8
Q26. あなたが応援活動で 支援した要配慮者を以下より すべてお選びください。(あて はまるものをすべて選択)	高齢者	142	45.8	23.9	28.9	19.0	33.8	2.1	11.3	17.6	35.9	28.2	9.9
	認知症の人	104	46.2	18.3	28.8	17.3	29.8	1.9	10.6	16.3	37.5	26.9	10.6
	障害児・者	56	48.2	17.9	21.4	21.4	35.7	10.7	16.1	17.9	46.4	33.9	7.1
	医療的ケア児・者	11	45.5	27.3	45.5	18.2	27.3	9.1	27.3	36.4	54.5	81.8	9.1
	精神疾患を有する人	28	42.9	21.4	42.9	25.0	35.7	10.7	21.4	21.4	28.6	32.1	14.3
	乳幼児	4	75.0	75.0	75.0	50.0	50.0	50.0	75.0	75.0	50.0	50.0	50.0
	妊産婦	4	75.0	50.0	100.0	25.0	50.0	25.0	50.0	50.0	25.0	50.0	50.0
	日本語でのコミュニケーションに支援が必要 な人	4	50.0	50.0	100.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	50.0	25.0
	その他	12	25.0	16.7	16.7	16.7	25.0	0.0	8.3	16.7	25.0	33.3	25.0

## ■活動種別

(単位：%)

		n	食事に関する こと	排泄に関する こと	入浴に関する こと	着替えに関 すること	移動に関す ること	掃除・洗濯 に関するこ と	薬の不足、 服薬管理	医療的なケ ア	持病の悪 化	認知機能 の低下・認 知症の悪 化	その他
全体		163	22.1	26.4	33.1	10.4	13.5	14.1	18.4	22.7	16.6	30.7	
Q31. 現在 所属している 施設・事業所 の種別として、 該当するもの をすべてお選び ください。	高齢者	113	23.0	27.4	35.4	14.2	14.2	12.4	19.5	25.7	20.4	37.2	
	障害者	55	21.8	21.8	36.4	9.1	18.2	12.7	18.2	20.0	12.7	20.0	
	その他（病院／行政・社会福祉協議会／その他）	26	23.1	19.2	19.2	7.7	15.4	15.4	11.5	11.5	19.2	23.1	
	訪問系	29	37.9	41.4	51.7	20.7	27.6	20.7	24.1	41.4	17.2	41.4	
	通所系	38	15.8	26.3	39.5	7.9	10.5	13.2	18.4	31.6	15.8	26.3	
	入所系	87	21.8	33.3	34.5	11.5	12.6	13.8	17.2	24.1	13.8	25.3	
	その他（訪問系／通所系／入所系以外）	66	27.3	24.2	28.8	12.1	16.7	16.7	21.2	25.8	19.7	33.3	
		n	不安定な 精神状態	孤立・孤独	本人と家族 との連絡・ コミュニケー ション	他の被災 者とのかか わり	プライバシー の確保	自傷・他害 のリスク	避難所への 移動	避難所から の移動	生活環境 の変化への 適応	衛生状態 の保持・感 染症対策	その他
全体		163	43.6	22.7	28.2	19.6	32.5	3.7	11.0	16.6	36.8	27.0	9.8
Q31. 現在 所属している 施設・事業所 の種別として、 該当するもの をすべてお選び ください。	高齢者	113	46.0	23.9	29.2	21.2	30.1	1.8	13.3	18.6	33.6	25.7	9.7
	障害者	55	34.5	23.6	23.6	20.0	32.7	9.1	18.2	20.0	41.8	32.7	9.1
	その他（病院／行政・社会福祉協議会／その他）	26	46.2	26.9	34.6	15.4	42.3	0.0	7.7	11.5	34.6	15.4	26.9
	訪問系	29	41.4	27.6	27.6	20.7	34.5	3.4	37.9	34.5	34.5	31.0	6.9
	通所系	38	44.7	21.1	39.5	26.3	42.1	5.3	15.8	18.4	39.5	23.7	7.9
	入所系	87	37.9	23.0	26.4	21.8	27.6	3.4	8.0	13.8	33.3	33.3	9.2
	その他（訪問系／通所系／入所系以外）	66	47.0	21.2	34.8	21.2	33.3	0.0	13.6	21.2	39.4	25.8	13.6

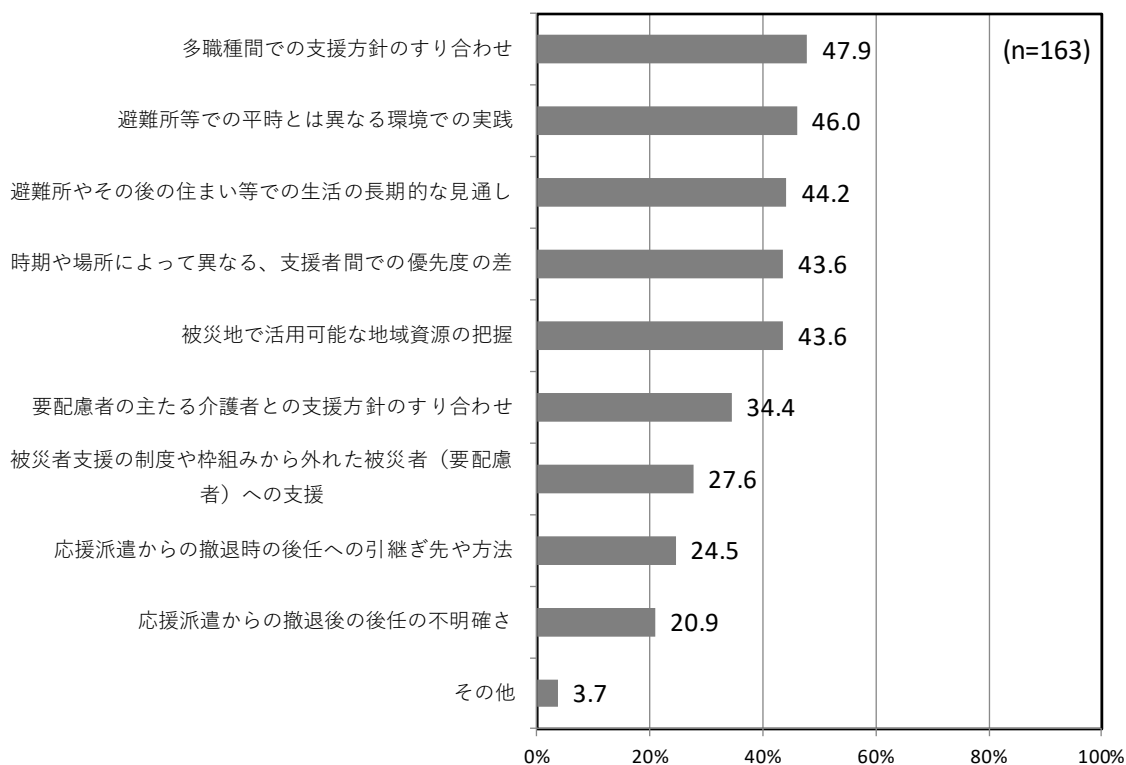
## ■業務別

(単位：%)

		n	食事に関する こと	排泄に関する こと	入浴に関する こと	着替えに関 すること	移動に関す ること	掃除・洗濯 に関するこ と	薬の不足、 服薬管理	医療的なケ ア	持病の悪 化	認知機能 の低下・認 知症の悪 化	その他
全体		163	22.1	26.4	33.1	10.4	13.5	14.1	18.4	22.7	16.6	30.7	
Q32. 現在所属している施 設・事業所における、あなたの 主な業務を以下よりお選びく ださい。（1つ選択）	相談業務	32	18.8	34.4	34.4	15.6	28.1	15.6	31.3	34.4	18.8	46.9	
	介護業務	39	30.8	25.6	30.8	12.8	7.7	10.3	10.3	17.9	12.8	23.1	
	施設長・管理者等の管理業務	67	19.4	28.4	40.3	10.4	10.4	16.4	19.4	23.9	16.4	29.9	
	その他の業務	25	20.0	12.0	16.0	0.0	12.0	12.0	12.0	12.0	20.0	24.0	
		n	不安定な 精神状態	孤立・孤独	本人と家族 との連絡・ コミュニケー ション	他の被災 者とのかか わり	プライバシー の確保	自傷・他害 のリスク	避難所への 移動	避難所から の移動	生活環境 の変化への 適応	衛生状態 の保持・感 染症対策	その他
全体		163	43.6	22.7	28.2	19.6	32.5	3.7	11.0	16.6	36.8	27.0	9.8
Q32. 現在所属している施 設・事業所における、あなたの 主な業務を以下よりお選びく ださい。（1つ選択）	相談業務	32	50.0	21.9	34.4	28.1	25.0	3.1	25.0	28.1	37.5	25.0	6.3
	介護業務	39	33.3	17.9	17.9	15.4	25.6	2.6	7.7	12.8	25.6	25.6	10.3
	施設長・管理者等の管理業務	67	43.3	26.9	31.3	17.9	32.8	4.5	9.0	14.9	40.3	28.4	9.0
	その他の業務	25	52.0	20.0	28.0	20.0	52.0	4.0	4.0	12.0	44.0	28.0	16.0

問30. 応援活動のなかで、要配慮者の自立支援にむけた活動において課題となったこととして、該当するものをすべてお選びください。(MA)【応援側】

応援活動における課題は、多職種間での支援方針のすり合わせが 47.9%で最も多く、平時とは異なる環境での実践や長期的な生活見通し等も同程度に多くなっていた。



その他(自由記述)

災害前後の経済負担の解消
連絡ツールの確立
避難所から住まいに戻るための制度。ご自宅に戻られてから、テレビ、洗濯機、炊飯器が配給されましたが、高齢で認知症状のある方は、流動性知能が低下しているため新しい家電の使い方に慣れるまで支援(訪問介護で上乘せできれば良かったかなと思いました。
DWAT ではこれは研修しませんでした。
避難者ごとの情報の「蓄積」がなかったため、何が課題か？が分からず一から聞き取りしていたが、その事自体が課題。

## 【クロス集計】

緊急期・応急期は、平時とは異なる環境での実践や支援者間の優先度の違いが課題になるが、復旧期・復興期は生活の長期的な見通しや制度や枠組みから外れた人の支援が課題となる傾向にあった。

また、活動場所によって課題として最も多くが挙がる事項は異なっていた。

さらに、高齢者、認知症の人に比べて、障害児・者に対応した人の方が活動における課題を感じる割合が高い傾向にあった。

## ■活動時期別

(単位：%)

n	多職種間での支援方針のすり合わせ	避難所等での平時とは異なる環境での実践	避難所やその他の住まい等での生活の長期的な見直し	時期や場所によって異なる、支援者間での優先度の差	被災地で活用可能な地域資源の把握	要配慮者の主たる介護者との支援方針のすり合わせ	被災者支援の制度や枠組みから外れた被災者(要配慮者)への支援	応援派遣からの撤退時の後任への引継ぎ先や方法	応援派遣からの撤退後の後任の不明確さ	その他		
全体	163	47.9	46.0	44.2	43.6	43.6	34.4	27.6	24.5	20.9	3.7	
Q24. あなたが応援活動に従事した時期として、該当するものをすべてお選びください。(あてはまるものをすべて選択)	緊急期	62	50.0	58.1	46.8	53.2	43.5	30.6	25.8	22.6	3.2	
	応急期	99	52.5	50.5	45.5	52.5	44.4	32.3	20.2	20.2	3.0	
	復旧期	63	44.4	49.2	49.2	44.4	49.2	38.1	30.2	28.6	20.6	7.9
	復興期	48	52.1	45.8	47.9	37.5	39.6	39.6	39.6	25.0	20.8	8.3

## ■活動場所別

(単位：%)

n	多職種間での支援方針のすり合わせ	避難所等での平時とは異なる環境での実践	避難所やその他の住まい等での生活の長期的な見直し	時期や場所によって異なる、支援者間での優先度の差	被災地で活用可能な地域資源の把握	要配慮者の主たる介護者との支援方針のすり合わせ	被災者支援の制度や枠組みから外れた被災者(要配慮者)への支援	応援派遣からの撤退時の後任への引継ぎ先や方法	応援派遣からの撤退後の後任の不明確さ	その他		
全体	163	47.9	46.0	44.2	43.6	43.6	34.4	27.6	24.5	20.9	3.7	
Q25. あなたが応援活動に従事した場所として、該当するものをすべてお選びください。(あてはまるものをすべて選択)	被災した施設・事業所	62	50.0	46.8	40.3	51.6	46.8	41.9	37.1	24.2	17.7	3.2
	要配慮者の自宅、仮設住宅	43	39.5	46.5	53.5	51.2	58.1	37.2	41.9	20.9	18.6	4.7
	一般避難所	45	48.9	48.9	62.2	51.1	53.3	44.4	37.8	35.6	28.9	6.7
	福祉避難所	37	54.1	67.6	51.4	43.2	54.1	29.7	40.5	32.4	29.7	2.7
	所属施設・事業所	19	52.6	52.6	31.6	42.1	52.6	42.1	21.1	10.5	10.5	10.5
	1.5次避難所	52	51.9	50.0	69.2	50.0	40.4	36.5	30.8	40.4	34.6	3.8
	その他	15	46.7	40.0	33.3	26.7	40.0	53.3	40.0	13.3	20.0	13.3

## ■支援対象別

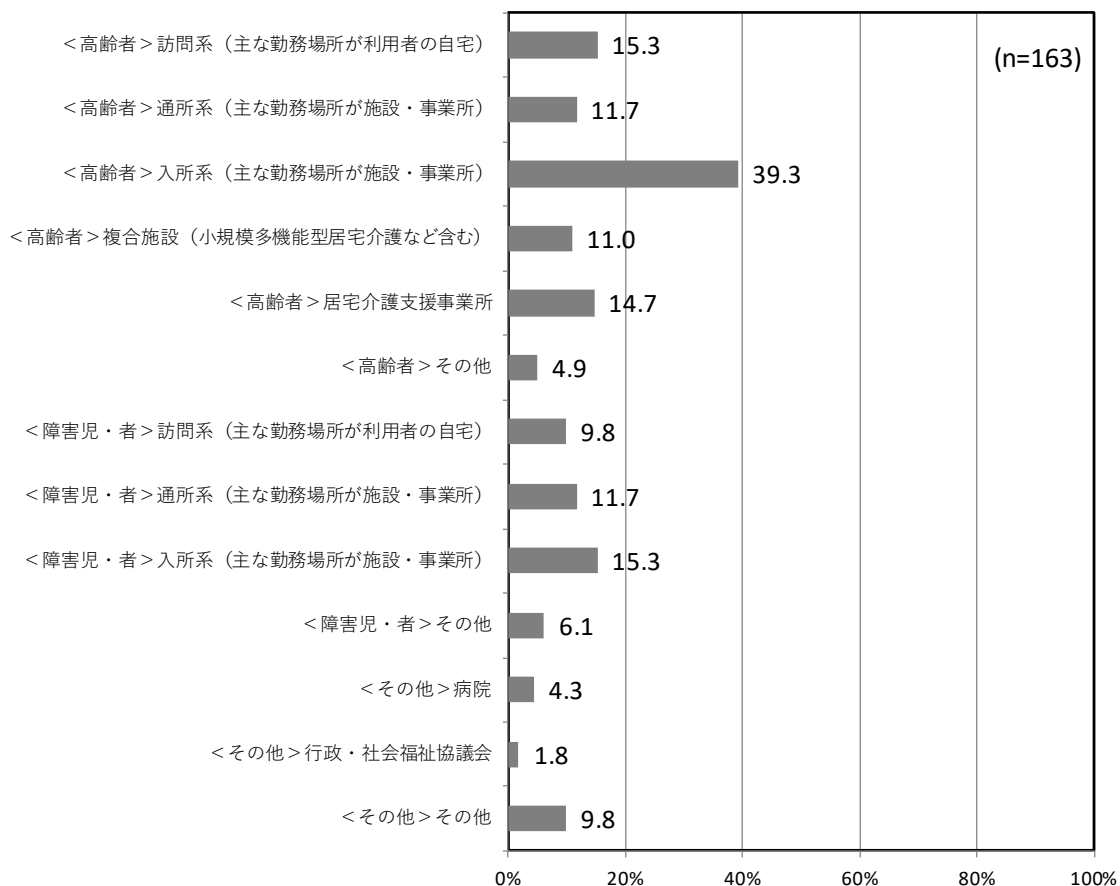
(単位：%)

n	多職種間での支援方針のすり合わせ	避難所等での平時とは異なる環境での実践	避難所やその他の住まい等での生活の長期的な見直し	時期や場所によって異なる、支援者間での優先度の差	被災地で活用可能な地域資源の把握	要配慮者の主たる介護者との支援方針のすり合わせ	被災者支援の制度や枠組みから外れた被災者(要配慮者)への支援	応援派遣からの撤退時の後任への引継ぎ先や方法	応援派遣からの撤退後の後任の不明確さ	その他		
全体	163	47.9	46.0	44.2	43.6	43.6	34.4	27.6	24.5	20.9	3.7	
Q26. あなたが応援活動で支援した要配慮者を以下よりすべてお選びください。(あてはまるものをすべて選択)	高齢者	142	50.0	43.7	45.8	47.2	43.0	35.2	28.2	26.8	22.5	3.5
	認知症の人	104	51.0	46.2	46.2	51.0	42.3	40.4	30.8	31.7	25.0	3.8
	障害児・者	56	53.6	60.7	53.6	46.4	51.8	32.1	35.7	30.4	25.0	1.8
	医療的ケア児・者	11	45.5	72.7	72.7	72.7	81.8	54.5	72.7	36.4	27.3	9.1
	精神疾患を有する人	28	71.4	57.1	53.6	60.7	60.7	42.9	46.4	25.0	35.7	3.6
	乳幼児	4	75.0	50.0	50.0	100.0	100.0	50.0	75.0	50.0	50.0	25.0
	妊産婦	4	75.0	50.0	75.0	50.0	75.0	100.0	75.0	50.0	75.0	25.0
	日本語でのコミュニケーションに支援が必要な人	4	50.0	50.0	50.0	25.0	50.0	100.0	25.0	25.0	25.0	25.0
	その他	12	50.0	33.3	41.7	16.7	33.3	16.7	16.7	8.3	8.3	8.3

問31. 現在所属している施設・事業所の種別として、該当するものをすべてお選びください。

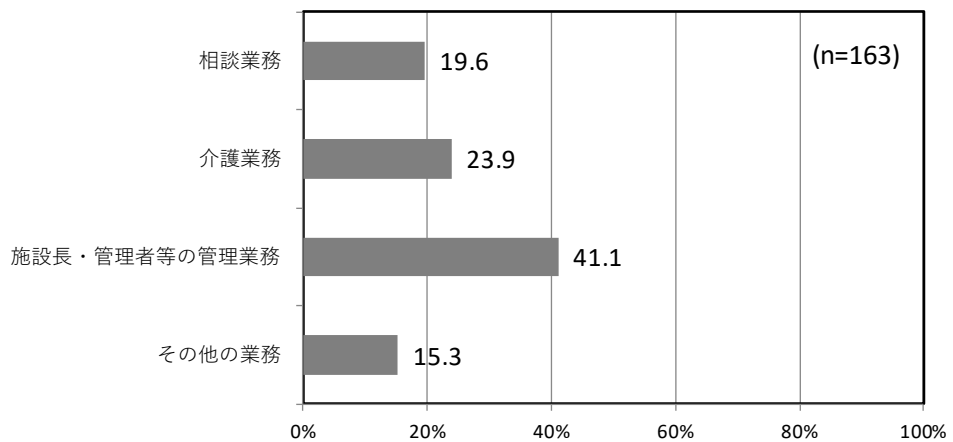
(MA)【応援側】

現在の所属の種別は、「高齢入所系」が 39.3%で最も多く、半数以上が高齢者施設・事業所に所属していた。



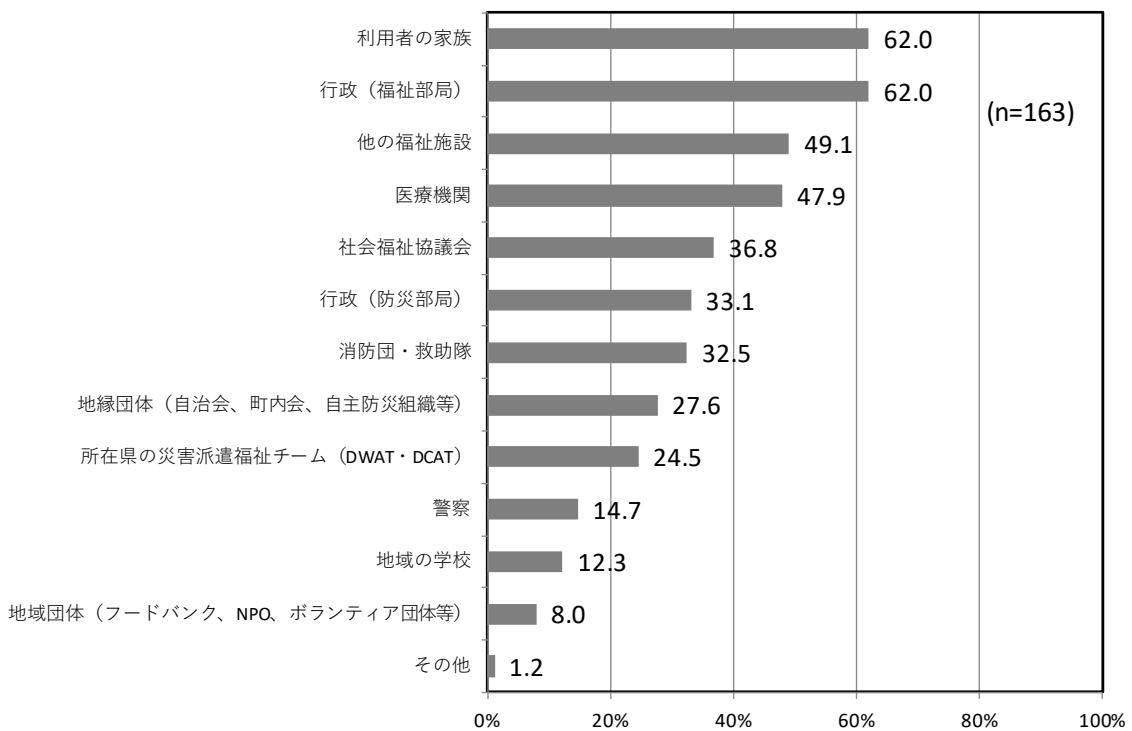
**問32. 現在所属している施設・事業所における、あなたの主な業務を以下よりお選びください。(SA)【応援側】**

現在の主な業務は、管理業務が 41.1%で最も多くなっていた



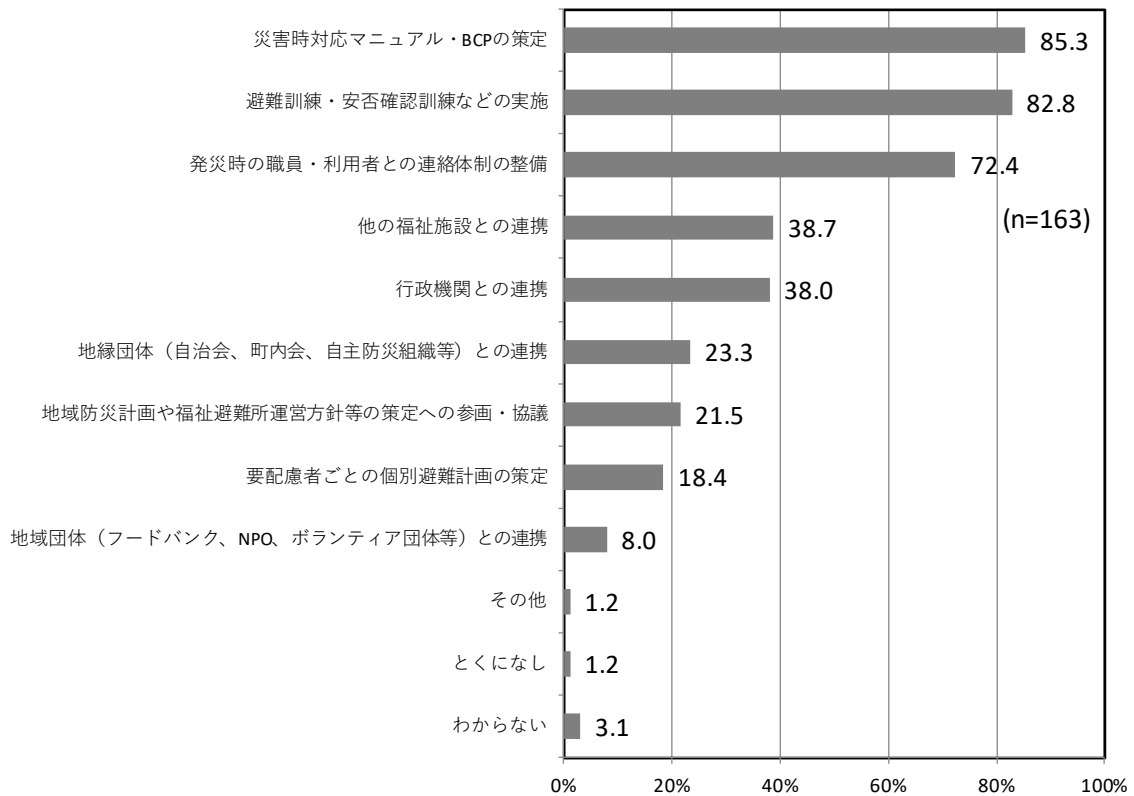
**問33. 現在所属している施設・事業所が災害に備えて連携している機関や人として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【応援側】**

災害に備えた連携先は、利用者家族と行政(福祉部局)が 62.0%で最も多くなっていた。一方で、その他との連携は 50%以下であった。



**問34. 現在所属している施設・事業所において、災害にむけて実施している取組として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【応援側】**

災害の備えとして、災害対応マニュアルや BCP の策定、避難訓練・安否確認訓練を実施していない介護福祉士も確認できた。他機関や地域と連携した取組は 40%以下となっていた。

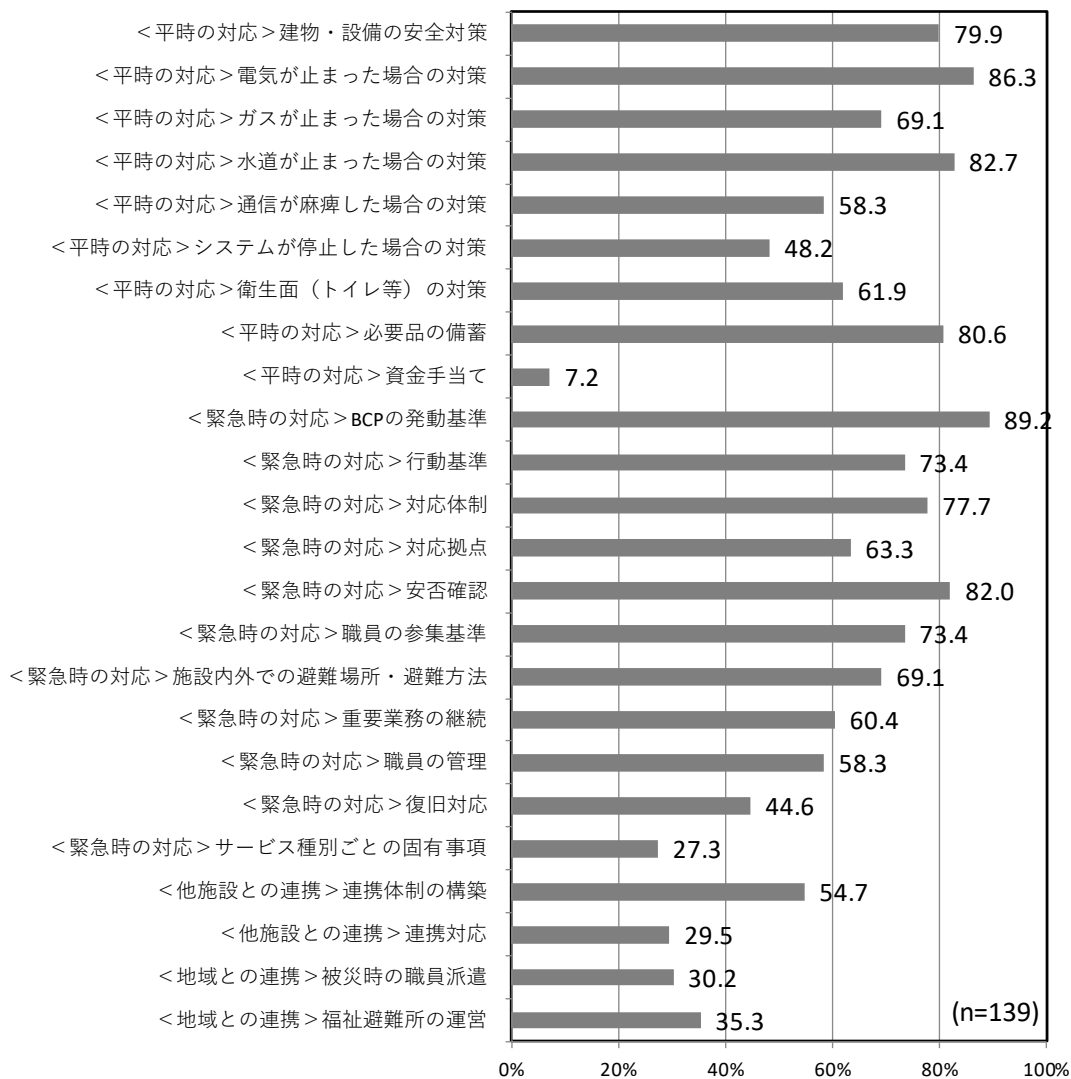


その他(自由記述)

所持資格の全国会との連絡
救急救命講習

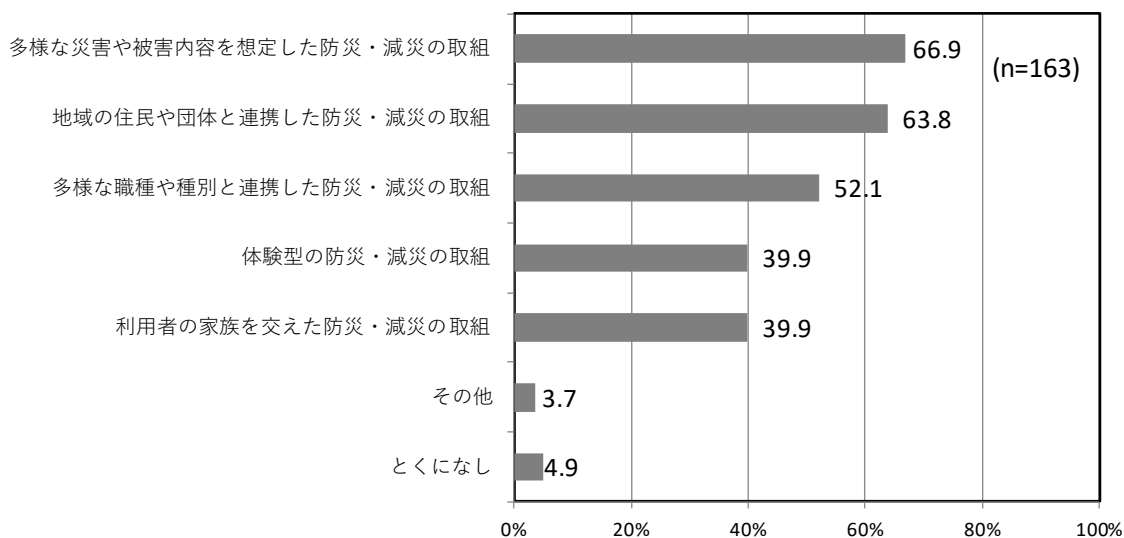
**問35.【問34で「災害時対応マニュアル・BCPの策定」を選択した方に伺います】現在、災害時対応マニュアルやBCPで定めている事項として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【応援側】**

BCPで定めている事項は、電気・水道が止まった場合の対応、必要品の備蓄、発動基準。安否確認が80%以上となっていた。他方で、資金手当ては20%以下となっていた。



**問36. 現在所属している施設・事業所において、災害時に備えて強化すべき取組として、該当するものをすべてお選びください。(MA)【応援側】**

災害の備えとして強化すべき取組は、多様な災害や被害を想定した取組が 66.9%で最も多く、次いで地域と連携した取組が多くなっていた。

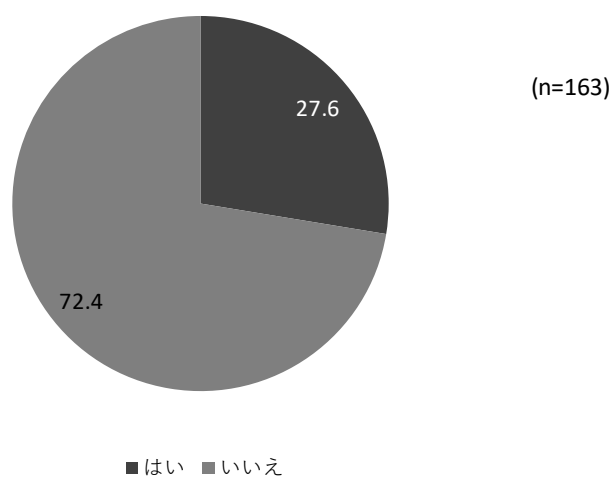


その他(自由記述)

災害時利用者の生活不安等の解消
罹災職員の把握応援
資金、休暇、休養の整備
個別避難計画の策定
学生の帰宅困難時の取組
応援職員を招いた場合の受け入れ対策

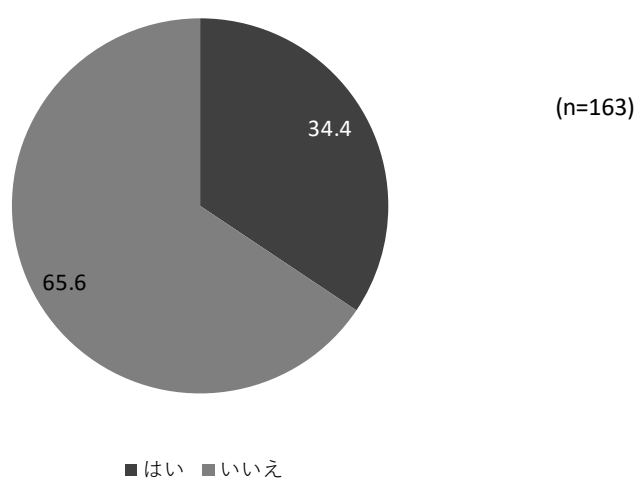
問37. あなたは災害派遣福祉チーム(DWAT・DCAT)として、被災地に派遣された経験はありますか。(SA)【応援側】

DWAT・DCATとしての活動経験がある介護福祉士は約30%だった。



問38. 現在、あなたは災害派遣福祉チーム(DWAT・DCAT)に登録していますか。(SA)【応援側】

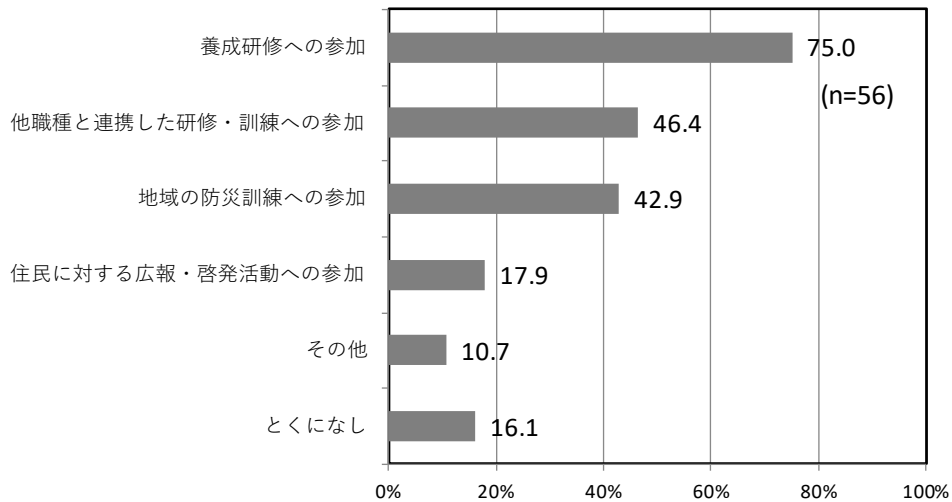
DWAT・DCATに登録している介護福祉士は約30%だった。



問39.【問38で「はい」を選択した方に伺います】災害派遣福祉チーム(DWAT・DCAT)のチーム員として実施している平時の取組として、該当するものをすべてお選びください。

(MA)【応援側】

DWAT・DCAT としての平時の取組は、養成研修への参加以外は 50%以下となっていました。



その他(自由記述)

携帯、必要品の準備と確認
地域緑化ボランティア活動
研修参加後に活動記録の作成
BCP の検討
地域や他職種に対する研修の展開(講師側)
介護職の災害ボランティア研修講師

**問40. 被災した環境での活動のなかで、下記の資質・能力をどの程度発揮できたと感じますか。(それぞれ1つずつ選択)【共通】**

被災地での発揮状況について、6つの資質・能力で大きな差は見られなかった。また、所属種別や支援対象者、活動場所等による有意な傾向の差も見られなかった。

(単位：%)

	n	十分に発揮できた	ある程度発揮できた	あまり発揮できなかった	発揮できなかった
災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	254	11.8	46.5	34.6	7.1
支援に必要な情報を見極め、収集する力	254	8.7	47.6	36.6	7.1
チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力	254	12.6	40.2	40.2	7.1
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	254	12.2	44.1	37.4	6.3
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	254	15.7	43.7	34.6	5.9
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	254	13.8	40.2	39.8	6.3

問41.【問40で「十分に発揮できた」「ある程度発揮できた」と回答した項目について伺います】災害時の活動において、選択した資質・能力を発揮できたと感じる場面や状況を、それぞれ1つ教えてください。(自由記述)【共通】

災害時でも一貫して要配慮中心の視点を維持する力

コミュニケーション・寄り添い
断水で不安を訴える入居者に書面で状況を掲示するほか、声かけして回った
障害者の生活をサポートする上で、心身ともに不安状況下、利用者を中心に寄り添い、生活の安定を図るように努めた
利用者には日常を過ごして頂く為の声掛けや関わりを意識出来た
特に認知症高齢者が入所する施設だったので、暗がりや、食事内容が違ふとかいつもと違ふ事が多かったが、不安感を少なくするためのアセスメントを職員一丸となってできた。
災害のひどさや流れに流されることも在るが、要配慮者がいちばん必要としている事や、精神的な配慮が必要と感じた。避難所の閉鎖の時点で、要配慮者が不安となっていたが、情報が十分なく、伝えることが難しかった。ボランティアや避難所の運営に溺れることなく、要配慮者を一番大切にすること、本人たちの意見を聴くことが必要と感じた。
常に不安を感じていることを理解し、避難者の思いを傾聴する
要配慮者の言葉に耳を傾け
本人が不安なとき、一緒にいることを最優先にした。本人の生活歴を聞き、ストレングス初めて何か、エンパワーメントは何かを考えて支援した。ある人は営業職だったので散歩の支援を、主婦生活が長かった方には食後のテーブル拭き等の役割を担って頂いた。
1.5 次避難所で困っている事が無いか聞いて回った。
要配慮者及び家族の憔悴、不安に寄り添い傾聴の姿勢をもつ事が出来た。
外部と連絡も取れず物資も無い中で不安を感じている独居の方に、可能な限りの情報提供を行い安心できるよう心掛けた。
利用者が安心して普段通りの生活をできるよう声掛けや寄り添う時間を意図的に多くするよう心掛けた。
アセスメントする中で要配慮者との関わりの中で、何度も同じ話をしに来る、1.5 次避難所の為、追い焚き役割と認識される存在であると聞いていたが、接する中では積極的に話を伺うことができた。
話を聞き、求められている支援をできる範囲で迅速に行い、できないことは説明を行い同意を得た
当事者の話を聴くこと
定期的に巡回、訪問し顔を覚えて頂き、情報収集のため傾聴に勤めた。
支援対象者に声かけを行い、何気ない会話の中から、いろんな話を聞くことができた。
要配慮者が望んでおられることを聞き取ることを重視した。
利用者に寄り添い安心感を持てる声かけ(職員のチーム力)
環境に慣れない中での要配慮者とのコミュニケーション、消毒が完了するまでの間の受け入れ先の確認指揮
対応時、対象者に踏み込みすぎないように心掛けた

利用者の不安な気持ちを少しでも払拭できるよう前向きな言葉を掛け、不便な状況が少なくなるように配慮した。
要配慮者を中心に声掛けや、傾聴に時間をかけて取り組む事。
要配慮者の思いを感じ取り寄り添うこと
<b>見守り・アセスメント</b>
ご高齢の被災者の方で、ある程度ご自身のことは自分でできる方であったため、プライバシーを守りながら見守りを行った。
要配慮者の情報収集を怠らず常に周辺で見守り対応する。
さりげない巡回や会話から状況の見守りを継続
一時避難所においての要配慮者の継続的なラウンドや、要配慮者になる可能性の方への継続的な訪問や観察、情報共有と行う事が出来た
通所が困難な利用者宅を回り、安否確認と一人ひとりのペースに合わせた通所に向けた働きかけを行った。
現職(認知症高齢者グループホームでの介護経験あり)の経験を活かし、まずは要配慮者の心身状態をアセスメントし、できる限り尊厳が保たれるよう心掛けた。
一般避難所で被災者の話を聞き、体調や身体状況から必要なことを考える事が出来た。
周りや要配慮者をよく見ていた、2日目で要配慮者の名前をほぼ程度覚え、一人一人の行動や状態を把握した。
ご利用者様の様子観察をこまめに行ない、健康維持の為、避難所周辺の歩行など実施できた
<b>生活環境の整備</b>
仕切り板を使用するなどしてプライバシーの保護
介護事業所におけるユニットの配置を見直し、レベル毎に対応したこと
4日間の停電の中、ご利用者の不安を取り除くためのラジオや音楽をかけて雰囲気をつまやかにしていた。
1フロアー(50名入居)が使えなくなった時、速やかな移動が出来た
生活環境の調整には本職として提案する事ができました。
利用者さん宅の破損した食器棚やタンスの復旧のお手伝いができた
障害特性に応じて、避難スペースの確保や生活リズムを崩さないための声掛けを行った。
施設内の安全な場所で、入居者の安全を確保した。
<b>安否確認・避難誘導</b>
特に独居の利用者に対し、すぐに連絡を取り、被災状況を確認した。
利用者の安否確認と生活の維持を優先に行動した
リスク評価に応じた優先判断をもって安否確認を全利用者にたいして行うことができた。
虚弱・独居・老老世帯を中心に安否確認に回った。不安感強く声掛けが必要であった全利用者に連絡を取り安否確認、連絡が取れなかった利用者には直接向かい安否確認混乱する方などなく避難誘導できた。
<b>平時の業務・スキルの継続</b>
常日頃的意思決定支援に関する視点がそのまま発揮できた。
入浴業務を継続した。
事業休止中も利用者の自宅を訪問し安否確認等行った
ヘルパー派遣の継続
サービスをできるだけ継続した

普段の相談業務のスキルを活用して関わることができた。
ケアマネの経験から、現在の何が問題なのかの視点があった。
専門性を活かし、要配慮者との対話、関わりを大切にすること。
日々の利用者支援で、さまざまな障害の方の支援をしていくことで、利用者の不安に寄り添い、内面理解を第一に考えられたのではないかと。
<b>意識・心がけ</b>
チーム全体に「対象者支援」の意識が根付いていた
憶測な発言は行わず、まずは相手から情報を多く集め、勝手な解釈をしないように話し合っていた。
支援者である自分たちも被災者であり、利用者の困りごとについては自分たちも共有できたと感じる
こちらの都合ではなく、あくまでも本人視点「分からない」「知らない」者ではなく、即答できなくても、必ず伝える事
被災事業所の現場支援員からの情報を収集し、基本的には現場支援員の指示により被災利用者の支援を行った。日常から行っている支援が被災状況によってできていない状況ではあったが、被災利用者と身体を動かすことや会話を行うことでストレスの軽減に努めた。
長期断水で水に困っただけなので、基本の視点は変わらない。
何が必要かを見極めた上で、専門職の視点からメンタルも含めた支援を行う。我が事と捉えて行動した。常に自身がリラックスした笑顔で接するように心がけた。
意思決定支援を心がけた
困っている人に手を差し伸べる事が会社理念
安全第一に移動や声掛けができた。
平時と変わらない様、要配慮者中心の視点で、接することができた。
要配慮者と関わる際に、その方の思いを一番に考える支援を行った。
要配慮者の支援自体は通常の中での支援と同じようにできたか近づけたと思います。
被災された方に対する無意味な励ましをせず、今の状況を受け止められるように配慮すること。
災害発生時業務中だったため、ただ利用者の安全と安心を確保することを第一に行動していた。周りの職員も同様の考えで行動していて、チームワークを感じられた
避難所での被災者視点で支援すること
避難できなかった利用者が何を求めているのかを常に考えて行動した
自分も不安だが、利用者も不安を抱えているのは同じであると考え、支援した。
つねに配慮者の意志確認をして行動したこと
被災者の置かれた状況から、最善を見つけようとする姿勢を中心に据え、知人の自衛隊職員からの助言を参考に、食事に楽しみが持てるように工夫を行った。
利用者のために思い、支援、連携をつづけた
介護が必要な人が、どんな環境においても、中心に考えなければいけないという高い倫理観
要配慮者本位でつらい思いを多少なりとも理解するように努めたこと。
災害時でも、通常のケアと同じ視点で行動できた
相手の気持ちに寄り添えるように気を配った
今、有事の際に自分ができる(気づいたことは情報共有、安全確認、尊厳を守る)ことを行った。

被災者の気持ちを考えると… 自分たちなんて、どうにでもなる。でも被災者たちは今、ここで、しかないんだからと常に思っていた
<b>その他</b>
バタバタしていても絶えず、要配慮者に何が必要かを感じて動くこと
利用者からの要望を受け止めることができた。
避難者受け入れ時のトラブルなし。
要配慮者との関わり
支援が来るまでにその支援者に最低必要な物品の洗い出し
日頃からの備えで当面の維持はできた
柔軟に動くことができた
特定の方を相手にしていたため、ある程度の情報により、寄り添えたと思っている
避難場所が混雑していた為、避難せずに、自施設にて待機する事で混乱なく、普段と変わらない配慮ができた。
利用者に負担や不安を感じさせないような、関わり、食事の提供
休日の職員も連絡を取り合い、集まった。
患者だけでなく、家族や職員の安全配慮が必要となった時
本当は話をする事が出来るが、あえて身振り手振りでのコミュニケーションを図る障がいを持った要配慮者。それでも困ると言葉を発する事も。そんな時でも、そこに合わせて支援を行った。
利用者中心の支援を行った。
要介護者が困らないように、対応した
同じ空間で生活していた
きちんと利用者への介護ができました。
とにかく配慮者中心で活動した
地域的に 2 日程で停電は解消され、ガソリン供給不足の影響は受けたが、建物や周辺道路等に被害が無かったことで、支援自体は変わらず提供できた。
食事形態などに対する配慮
救援物資を避難所まで取りに行けない高齢者に食料や水を届ける活動を地域全域に対して行った。
日常生活動作において、利用者の残存機能を活用した支援に努めた。
事業所では復旧を中心にしているが 職員の分散で被災利用者の手厚い救済活動も行った
災害時においても利用者の想いを実現するために行動ができた。立位困難な方がトイレに座りたいと。二人がかりで対応できた。
様々な情報を一元管理しマニュアル化していた。その為に迅速かつ適切な対応を行うことが出来た
利用者の生活を維持できる工夫などを行った
支援を通常にちかい形で継続したところ
他の現場職員との協力動作が必要
建物損壊状況の的確な判断が出来たこと
認知症の方がトイレに自分で行かれていた時やゆっくり休まれている時
トイレに行きたい、認知症高齢者の介護の時、
通所される利用者だったので特性や生活状況が把握でき視点を維持できた
応援から帰る時の、要配慮者の反応から、かなり良い関係が築けていたと考える。

DWAT では3つの原則があり、一貫して要配慮者を中心に、立て直していってもらう事を大切にしている。
被災した住宅の状況を把握し、改善策を立案実行した。
第一に利用者の安全の確保が行えた。
個々での活動準備や役割が理解していました。
排泄誘導や入浴誘導の際、安全第一だけでなく要配慮者の立場に立って無理強いせず対応できた。
日頃からの情報収集力の必要性和職員間での共有
地震後、微弱な地震も続いたこと、水道が止まったことで、トイレを使用することに制限がかかった。排泄についてはトイレ利用の方は、居室(Pトイレ)に誘導。オムツ交換の方はパーテーションで仕切り対応。とし、安全に配慮した対応を行った。またご利用者も職員もテレビ情報が入らないことに不安を感じていたことで、ラジオから情報を取った。
平時から支援やADLを把握
優先順位を決める
要介護度が高い利用者、重度の持病がある利用者を優先したこと。ご家族との連携を重視したこと。
利用者に対し、普段の生活で、できることは提供する為に入浴支援を行ったり、できる限り慣れない環境で慣れないスタッフ同士でも対応した。
避難所に行く時に持ち物を一緒に用意した。時間はかかったが、必要な物を準備できた。
土地勘
支援側のリソースと要配慮者中心視点のバランスが必要。
多職種との連携
要支援者に不安・不便がないように、関わった。
日常生活が困難でも代替案でなんとか対応できた。
いろいろな考えの支援者がいるが、物資が足りない、人がいないなどどうしても支援者中心のケアになりがちになるため。
災害時における、各介助業務遂行の場面
勤務外の職員が参集してくれたため、最低限必要な支援を提供できた。
トイレ使用できなくポータブルトイレの設置を行い対応することができた
所見の方に対する柔軟な対応
基本的に決められた場所の掻きだしを行った
入所施設へ応援に行ったので、利用者中心の視点は維持できていた。
災害直後はできなかった
排泄や食事のことなど
不安をとりのぞくために、平時からかかわりのある職員がいる避難所へ行った
支援は災害後の事で、生活不活発病の回避を中心に対応を行った
ライフラインが止まった環境下で、利用者の不安軽減を最優先とした
食事面で自施設がIHと炊飯器使用してたのでブラックアウト時、困り、ガスコンロを使い調理しました。

## 支援に必要な情報を見極め・収集する力

<b>チーム内・多職種と連携した情報収集・共有</b>
同じ支援をするチームでの情報共有をして収集発信をしていた。
隣接事業所と協力しながら対応についてすぐに協議できた。
自治体からの情報を収集し、支援物資の情報をキャッチしたり、生活用水の確保のため、本部と連携しながら井戸水情報の収集を行った
社会福祉士会のメンバーから広域の情報を得ることができた。
被災事業所の支援員から被災後の利用者支援状況、管理者から事業所の被災状況、物資の補充状況、被災直後からの経過など聞き取ることができた。
チームとして共通理解と共有、Wi-Fiもあり、状況によっては、県社協を通して判断を仰ぐこともありました 相談内容も持ち帰り検討して伝える為に、単独判断なく、チームや県としての行動が出来た
周囲の関係機関と連携を密にして、必要な場所に必要な支援が届くよう意識した。
職員間の知人や親戚により、情報が入り、支援に必要な事に対して行動できた。
申し送り事項や口頭での情報収集以外に、直接関わったり他支援者の支援から情報を得た。
各関係機関との情報共有
事業所の代表が情報収集に注力し、管理者は現場に注力する役割分担をした
他職種や他の方との情報交換
リーダーを中心とした状況確認ができていた。
所内での連携・協力
他事業所のケアマネと連携
職種別に情報を集め収集することが出来ていた。
医療チームと仲良くなり、積極的に要配慮者の情報収集をした
他施設や市役所、病院などと連携を図り情報収集に努めた
各部署長とのミーティング(施設現状の把握と各所情報収集実施の場面)
多職種と連携し情報収集を行うことができた
<b>情報の記録、整理、共有</b>
情報が整理しきれない印象を受けた。随時記録を更新し、閲覧できるようになっていった。
事務所前に掲示板、相談員、施設長などが巡回
情報シート等の活用
正確な情報のみをお伝えするようにした
ADLに関する情報収集を記録した
医療機関の診察開始時期を市の防災無線を活用して地域に伝達することや被害状況を行政に報告するなどの活動を行った。
未体験の部員に要配慮者の場所、かかり方方を示すことができた
申し送り内容の整理し、チーム内で共有した。
一般避難所に十分な情報なく入り、避難所内のどの位置にどのような方が居られるか、どのような支援が必要かを声かけしマップ化して、後任へと引き継ぐことができた。
利用者個人の情報を一元管理し対応をマニュアル化していた スムーズに対応できた
各利用者宅の状況を写真などで共有した。
引き継いだアセスメント、不足な情報収集を行うよう努めた
毎日の朝礼で人員・物資に関する情報を収集し、LINE を通して皆へ周知した。

グループ LINE で随時区内の被害情報を共有
行動や身体状況の変化について、まず集まっている情報を把握した
受け取った情報に自分が得た情報を加え、次につなげた。
内服の服用状況や介助方法については、利用者が負担にならない方法を引き継ぎしあえ。
前任者からの引継ぎ事項をベースに、新たな情報を引継ぎノートに残した。
グループラインが役に立った。
勤務状況・引継ぎ事項等について、パソコン等に入力して確実に引き継ぎ、職員間で共有することができた
行政が UP する最新情報を収集⇒伝達し、対応策を講じた。
現状の把握、写真及び情報記録
<b>アセスメント・コミュニケーション</b>
入浴を断られる方がいたが、最初は言われなかったが、最終的にはコインランドリーが近くないため洗濯ができずタオルがないという理由だった。持っていった余分のタオルをお貸した。
利用者本人とのコミュニケーションの中での気づきがあった。
精神疾患持ちで他者と交われない方と毎日の会話を通し信頼関係を築き、必要な物資の希望の収集
福祉避難所へ入所する方の情報が入らない状況であったが、とりあえず困っていることを中心に判断し、動いた。
ケアマネとしてのアセスメント能力
高齢の方が食べにくいのか、食べやすい状態を確認しながら提供すること
要配慮者に積極的に関わりを持ち、情報を見極め、対応することができた。
支援する方の情報がほとんどない状況でした。かわりの中で情報収集してアセスメントするということの繰り返しで支援につなげていくことができた
利用者の些細な変化を見逃さないよう観察した。
情報が断続的に入るので、本人の能力などは、見極める力が必要だった。
話しの中からニーズを探す事が出来た。
平時同様、利用者との対話や聞き取りで不安な点や必要な物品などの情報収集を行った。
会話の中から既往歴などの情報を要配慮者から聞いた。
避難者と連絡を取り、必要物資の確認と提供
本人は普通に家に戻る話をしていましたが、ゆっくり聞き取ると矛盾等が出てきた為、地域の包括に確認をとったところ、介護保険申請にはなっていなかったが、いろいろと問題があった方と分かった。
引き継いだ情報及び現場で直接得た情報を把握。実際の関わりから状況を把握
ご自分でできると情報を得ていたが、対話や動作から入浴準備が難しい様子をキャッチした
口頭で訴えることの難しい利用者に関しては、本当に必要な情報を選びながら支援を行った。
入居者様が不便に感じないように、コミュニケーションをとりながら横になるかなど気を配り、停電した為すべてペーパーに記録を行った。
<b>主体的な情報収集</b>
指示待ちでなく、自ら情報収集すること
必要な情報を調べて優先順位の高い利用者へ安否確認の連絡、訪問対応をおこなった

事前に地域性や地理的な情報を自分で行う
ニュース等情報収集に努め、変化があれば職員間で連絡を取る。
調整役も担っていたので、各部署を回りながら情報の収集をしていました。
自らそういった行動を自主的にとらないと避難所では役に立たないので、率先して情報を収集したりした。
食事が施設にどれだけあって、どこから片づけるとかを自ら情報収集しに行く、施設全体で町内や行政に問い合わせるなど行った。給油所が閉鎖となり出勤困難者も出てくる中で、どこの場所が優先的に社用車を給油してくれるか等情報収集行った。
なにが必要か情報をみずからとりにいった
自らの足で被災した方々の話を聞きにいったこと。
情報については、様々な憶測も飛び交い、不安が大きかったのが現実。水の供給については、地域の情報を集め、必要な量を確保することができた。
ケアする上で必要な情報は自ら収集すればそろっていた。
<b>臨機応変な判断</b>
被災地は、日々状況が変わる為、その都度情報も変わり、必要な物を見極める事は常に行わなければならないから。
マニュアルを基本に状況に応じた対応を行った
<b>情報の取捨選択</b>
東北の時に、それぞれの団体で言われることが異なっていて、全体会議を開いて聞いていたが、取捨選択や、必要なことをその場でしっかりと聴くことが必要だと感じていた。また、ボランティアの人が自分個人の活動を実施するときもあり、その場合、誰に調整をお願いするのかの情報を知ることが必要だと感じた。
様々な情報が飛び交う中、必要情報のみ 整理、収集出来た
収集した情報の中から、支援に必要な情報を抜き取ること。
<b>その他</b>
普段の実践が大切
限られた情報であったが、そこから日々の申し送りから状況をキャッチし支援につなげた。
テレビを中心に被災状況の情報収集を行った。
応援した際に何が必要か今は何をすべきかを考えながら対応出来た
停電初日から大型バッテリーのレンタルについて動き、2日目から設置することができた。
地域性に悩むことはあったが、柔軟に対応できた
コミュニケーション能力。
事務局的なものの近くで活動していたため、情報は集めやすかった
ライフラインが止まっている状況では難しいところがあった
直接的な被害が少なかったため、一職員が情報の見極めや収集する事はない。
マニュアルを元に要配慮者の ADL を見極めることができた。
活動可能な職員数の把握、配置
ある程度の情報があるが、最低限の介護支援しかできない
特に水が不足していないか利用者に確認し、物資を届けた。
給水車はどこにあるか？支援物資はどうなっているか？食料は足りているか？等の情報を集めた
引き継ぎ内容の把握や、フェイスシートを確認した上での状況対応

災害地域は水とガスが止まり、水は高齢者施設という事で自衛隊からの配給がなかった。老健だったため、病院で使用する目的という形で運んで頂いた。また、SNS を活用し、テレビ局への依頼で全国ネットで情報を流して頂いた。
交通状態、避難予定を把握できた。
提供された情報を把握することで精一杯だった。
対象者の ADL を含め、支援時のリスクを排除できるような情報収集に努めた。
自身の事業所が罹災されてない所がありそちらで日々の活動を行えた
情報があることを当たり前せず、状況に応じた情報収集能力が発揮出来ること
要配慮者に必要な情報(生活習慣や性格、自立度等)を現地スタッフから収集してから支援するように努めた。
勤務シフトをつくる立場にいたので、どの職員に何をしてもらうか利用者の状態や物資の状況について、情報収集しながら、指示出しを行った。
事業所内で各ケアマネが担当利用者のトリアージをしていたため比較的容易に優先順位が分かった
必要な情報を得て対処することで、困難を極める状況に陥ることがなく済んだところ
現場のリーダーとして、3 グループホームの利用者の状況を把握し、本体施設への避難が必要と判断しスタッフと協力して素早く避難させることができた。
多くの利用者が被災し、限られた時間と人員の中で、不足する物資を届けることの難しさを痛感した。
避難所から 1.5 次避難所への移送、1.5 次避難所での支援を担当した。基本的には向かう避難所と 1.5 次避難所の場所以外には何の情報もない中支援活動をした。
主軸となる職員の指導が必要
避難所が出来たばかりでマニュアルが無い状態での支援が多く、現場の状況を見ながら常に何が必要か考える必要があった。
防災ラジオや町内会の方が情報を伝えにきてくれた時
必要な情報を見極めていても、周囲にほとんど人がいない中、情報を収集することは困難
上記の事により収集が容易にできたが、地域の情報の見極めが難航した
何が必要で、どのような支援をしたらいいのか現場をみて判断しながら動いていた。
全利用者に連絡、
支援可能な事業所を選定し、可能な範囲で対応を依頼した。
日頃からの収集力
こういう時こそ、周囲とのコミュニケーションを図り、情報共有したこと。
施設や周辺地域の状況を確認できたこと
私が情報収集していないが、必要な情報を提案できた
避難所に移動ができるか、ショートステイにお願いするか、即時に判断して空室を探すことができた。
今何が必要なのか、何を優先するべきかを考えるちからがついた。
ある程度情報得て情報収集はできた
普段からのアセスメント力
申し送りも十分ではなく、情報も多かたり古かたりするものがそのまま残っていることもあり、現状はどのような状況かを理解する力がいると感じた。
目の前の非日常に対する判断をするための情報収集や共有はしていた
普段からのアセスメント力、出きることは少ない環境だが、常に工夫は考えるべきと行動できた。

ラジオ等で状況のある程度把握できた。また、近隣では通電している地域もあり、テレビでも情報を入手することができた。
災害や急変時にも冷静に情報を整理・収集する力が活かされた
平時における連携方法の構築
すでに情報収集されていた
情報収集し、避難基準を明確にし避難開始できた。
週末で一時帰宅中の利用者の、自宅における被災状況の情報収集(職員のチーム力)
災害直後はできなかった
初めての人が入ってきたとき
支援が必要と思われる利用者に連絡を取ったり、自宅に訪問したりした。
現場で具体的な情報収集を行った
事前に情報を収集する事が出来たので、被災の環境を鑑みて(派遣事業所などで)行動できた
感情や思いの情報まで聞いてしまい見極めが難しい
水の確保が出来ず、職員が給水場をピストン輸送した。発電機が足りず、個人の繋がり で貸し出しを受けた(行政や事業者団体等の支援が不可だったため)
ブラックアウトになり、電話もテレビも見れずラジオで情報を収集しました。

## チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力

チームでの連携
チームとして動くことを意識していた
グループメールを行い、出来る限り新しい情報を送り、自身の安全を伝えると共に次の災害派遣者に情報を伝え続けた。
勤務表の調整、入浴の調整
利用者の情報をスタッフ同士でお互いに共有するよう努める事ができた
施設長を中心に連携していた。
先のチームから情報共有を行い、次のチームへ情報を送る
上記と同じ解答になりますが DWAT はチームで構成 リーダー、ロジ、現場に入るアセスメント員となります 時にはインターネットが使える環境であればオンラインをつうじて、本部と課題協議して行う事もあります 外部や各市町村や県、国との会議にはオンライン会議で実施、チームへの共有と次のチームへの引き継ぎと必要になります。ラインや Google 共有を通じて全体での共有、次のチームも情報共有しながら、避難所支援での仕事も想定イメージしながら行う事が出来たと思います
家族優先で仕事をしていただいた。
被災したことでチームとしての絆が強くなった
チームリーダーとなって動き、わからない所は率先して連絡し連携を図った
事業所と連絡を取りながら、他の職員が出勤しなくてもいい状況を作り出した
チーム内のコミュニケーションや協調性
限られた人員と少ない物資の中で、勤務のやりくりやおむつ交換や清拭の時間調整。精神的不安定な方への関わり方について。
リーダーを中心とした連携ができていた。
チームとして情報を共有するように努め、実行できた。
事業所全体で分担して安否確認を行えた。
1 時間ほどで通信手段がなくなったが、それまでの間に本体施設との連携、利用者が日中通う施設や職場との連携によりスムーズに支援できた。
他の現場職員との協力動作が必要
職員間で対応できる範囲の仕事や移動範囲を共有し、フォローし合いながらケアにあたった。
電話担当、連絡が取れない利用者宅へ向かわせた
活動はクールごとの交代で行なう為、前クールの情報はしっかりと引き継ぎを受けないと、適切な活動が出来ない。また、自分も退散する前には、次のクールへ現状を引き継いでいかないと、状況に合わない活動へと繋がってしまう為、情報を繋ぐことは要配慮者中心を推していくには必要不可欠である。
チーム間の共有ができ、グループ LINE 等で共有を実践しています。
気になることは即座に組織の長にたいして報告した
連絡が取れる状態のスタッフと連絡を取りながらサービス提供をした。連絡が取れない場合、一軒一軒足で回って情報を集めて共有した。
生活保護や精神は苦手な分野だったが、同じチームに得意な方がおり、繋ぎ方を経験した。
紙ベースの日課表や、利用者のケースファイルなどはあったが、初見で対応するのは難しい中、一から十迄逐一教えてもらうこともなかったなので、派遣職員同士で注意点や業務の確認をし合った事。

寄せ集めの応援者のため、役割分担が重要だった。歯磨き等、やらずに部屋に戻ってしまつたため、応援者同士での連携は特に重要だった。
初対面の支援者とチームを組むため、それぞれの得意な事、出来ることを把握し、シフトなどの配分を行った。
利用者の状態をチーム全体で把握でき、ケアが一貫して実施された
職員全員でチームとなり、情報共有行い、今何が優先か話し合いができた。
情報をつなぎ、日々のチームで要配慮者を支援。
訪問・送迎などで外出中の職員へ連絡がとれた
職員間での情報共有を密にし、通常と違う環境での利用者様の変化等を共有し支援へ繋げた。
積極的にチームの人とコミュニケーションを図るようにした。一人で抱え込まない、一人でできると思わない、でも丸投げしないという考えを持ち取り組んだ。
同じ状況下で同じ目的で、チームとして動き、報告し、時に指示を出し、わからない時は聞きながら…うまく連携できていたと思います
<b>多職種での連携</b>
必要とされているケアを自ら他職種に積極的に聴きとること
会話を通し杖が雨により流された情報を得て、PTへ連絡し杖をご本人に渡すことが出来た。軽度の認知症があり自ら訴えることが出来なかった。
保健師の指示のもと動くことはできた
他施設との情報共有にて職員の派遣
東北の時に、A団体と一緒に活動を行ったが、DMATとの共同での活動となったときに、A団体は、自分の仕事のみでいっぱいと言われたため、その活動を行いつつ、DWATとの連携調整を行った。DWATから尋ねられた時に、A団体の方へ「どのようにしますか」と聴いたときに、精神的にきつかったようで、無理と怒鳴られたが、その時に、役割を分担して、実施することを提案し、その場を切り抜けられたと思う。能登の時は、システムが出来上がってからの活動だったので、チームや多職種の役割が確立していた。その点では、10年間で深化しているのだと感じて、能力発揮がしやすいと感じている。
被災翌日に要配慮者家族と連絡を取り、昼までには社会福祉協議会に状況を報告した。
各関係機関と連絡を密にとった
排泄、水分、皮膚トラブルに異常がある時、医療職に連携した。
医師、看護師やリハ職など様々な職種の方と一緒に情報共有しながら対応することができた。
他事業所のケアマネと連携
看護師・介護職員・事務職・また調理を担当している委託会社の社員から得た情報や意見は、「業務連絡」として各部署で共有した
異なる職業の方たちと情報を提供し合いながら、後任者に繋げていく必要があった。
利用者の状況や状態を普段以上に詳細に記録し、上司や多職種に報告、連絡をした。
行政や関係機関と情報を共有や提供する中で比較的スムーズに対応出来た
各自で収集した情報を共有し必要な職種に繋ぐ事が出来た。
薬の面、環境面についてなど、多職種の連携はスムーズに行え、協力して対応できた
職種関係なく、情報共有できた。
リハ職、事務職に依頼できることを整理した。
1.5次避難所内で発生した感染症や精神疾患のある要配慮者に対しDMAT、DPATと連携し情報の伝達を行い、次につなげた。

支援に参加した他職種と一緒に連携できた
介護力が不足している状況(寝たきり、排泄時など)時にリハビリセラピストなどの協力を得る事ができた
施設 NS や介護士、相談員機能訓練士等すべての職員において普段の業務と関係ない事も協力しあった
看護師、管理職、ケアマネとともにその場での判断や役割分担を展開できた
DMAT 中心に、寄せ集めながら、近い距離で連携できていた。
児童指導員、保育士、調理員、医療機関、行政、保護者と連絡を取り合うことができた。
記録を参考に多職種へ伝達することができた
日頃から意識している多職種連携を、災害時の活動でも意識できたこと。
発熱、体調の変化など気づきを他職種に伝えて早期対応ができた
情報を共有し、他職種の方に異なる視点での支援に役立てる。
水虫など皮膚疾患の情報を対応から得て、医療関係者につなげた
入居者様の状況を社会福祉士や事務職員に連絡・相談することで迅速な個別対応・サポートが出来た。
多職種で連携しないと情報の見落としや心身の状態は日々変化するため、ホワイトボードに情報共有を行った。
看護師チームなど協力できた
事業所内のみでなく他の関係機関とも確実に情報共有を行った
エレベーターが停止していたので、どの職種も協力し安全に階段で居室へ戻ることや、食事の配膳を行ったり、チームで対応した。
<b>情報共有方法の工夫</b>
パソコンでの記録ができなかったため、紙面と口頭でのやり取りで引継ぎを実施し、大きなトラブルが無かった。
同時期に派遣された派遣職員がグループLINEを作成し、派遣される方々との情報共有に活用することができた。その後も被災事業所の状況を共有することができている。
ホワイトボードを利用した情報集約、随時更新をするなど集約と正しい情報の伝達をチームでの支援に生かすことができました。
申し送りが徹底されていた
LINE 等を駆使し地域の被害状況や支援物資を必要とする住民の情報を共有し速やかに対応できるよう連携した。
グループ LINE で効率的に業務振分共有
個別にメモを取り、生の声を伝達した。
法人内は情報共有を Teams で行い、リアルタイムでの情報共有を行うことができた。
グループラインを使い情報の共有ができた。
毎日、支援後にミーティングが行われ、今日の活動や引き継ぎたいこと、対応したいことなどを、報告する時間があった。
パソコンを持参してご利用者様の様子をケース入力し、職員間で情報を共有することができた
情報の一元化
記録や毎日の申し送りでの現状確認、共有 必要なものの依頼
被災者・要援護者の情報は少なかったが、伝達ノート等を駆使して連携を図れた
<b>法人内の連携</b>
同法人のネットワークで必要なサービスや場所等を活用していた

<p>停電していたので、直接利用者宅を訪問し安否確認をした。断水した自社の特養に自宅から水をもって出勤した</p>
<p>グループ内の他事業所シャワールームを使用して利用者の洗体をする事ができた</p>
<p>確認した情報をもとに本部と連携を取って、部署間に連絡できたこと</p>
<p>法人全体で各所の状況を報告し合い、必要に応じて人的支援を事業所を超えて行った。隣接の母体病院への連携はなっていたが、ブラックアウトで連絡取れず、何かあったら歩いて向かっていました。</p>
<p style="text-align: center;"><b>近隣施設等との連携</b></p>
<p>他事業所とひと続きの建物だったので、他の事業所の職員とも情報共有しやすく、食事や、物資の確保がスムーズだった。</p>
<p>電話・ネットも繋がらない状態で、外部との連絡が途絶えた状態。土砂災害で陸の孤島となり交通機関も麻痺した状態で、近隣の事業所と情報共有し安否確認など協力できるところは足を運んで情報共有した。</p>
<p style="text-align: center;"><b>地域住民・現地スタッフとの連携</b></p>
<p>分からないことがあったら自己判断することなくできる限り現地スタッフに聞いてから支援するようにした。</p>
<p>今日動く場所、支援内容などをその地域の方と話をしながら、動く事ができた</p>
<p>地域の連携(互助)から、他事業所の被害状況を知り、復旧した事業所の浴室を営業時間外に使用させてもらった</p>
<p style="text-align: center;"><b>その他</b></p>
<p>チームごとの情報の引継ぎはあるものの、行政や他機関との情報共有がお粗末だった。</p>
<p>無線機の利用でタイムリーな情報キャッチ</p>
<p>わずかな時間ではあったが、行った活動、被災者の方の様子などを情報提供した。</p>
<p>避難者受け入れ時のトラブルなし。</p>
<p>自治体の道路の被害状況などをスタッフに周知した</p>
<p>意見交換会議等</p>
<p>特に情報に変更があった時配置で変更を確認する。</p>
<p>今から30年以上前の為介護保険施行前で福祉施設の数も今ほどもなく大震災の経験や情報もなかった為自施設内の職種間併設施設の稼働できる人員で力合わせるすべしかなかったのが協力体制や連携は強かったと思う</p>
<p>ケアマネ、社会福祉士としての知識と経験を活用できた。</p>
<p>限られた派遣期間の中で特に必要を感じ、自身として力となったことはコミュニケーション能力。</p>
<p>事務局的なものの近くだったから、協力が求めやすかった</p>
<p>ナースステーションを一か所に集中し情報の伝達に努めた</p>
<p>自分たちのチーム内での連携はある程度できていたが、チーム外となると全く連携ができていないと感じた。チーム外にも積極的に情報提供を行ったが、被災者も様々なチームから同じことを聞かれてアセスメント疲れ等あったと感じた。</p>
<p>同じ志を持った方々の集まりなので、連携はスムーズにできたと思う</p>
<p>災害本部立ち上げ時</p>
<p>普段からのネットワークを発揮することができた。</p>
<p>避難所の支援者は2日間ごとの交代制で支援を行っていたので、他の支援者との情報交換を行いながら支援が継続できていた。</p>

看護現場は、久々ではあったが、特養であり、入居者様とは、寄り添う事くらいであったが、被災されながらも職員として頑張っている方とのコミュニケーションを取りながら、できる事をさせていただいた。
チームミーティングを行い支援に当たったが、職種間での意見のずれが生じ足り、介護まで伝わって来ない場合があった。
引き継ぎ事項を確認し、情報を共有できたこと。
専門職であることの自覚をし、共通言語での情報共有ができるようにすること。
配食弁当のスタッフが非常に強力的であった、他事業所は連絡がつかない状態であったため、自法人の事業所との連携にとどまった
指示系統が機能していなかったが、安全最優先で判断して行動した。
日頃からコミュニケーションを大事にしていたため、同じ方向性を向いて支援に当たれていた。
摂取量から、褥瘡のリスクの軽減の為、クッションを希望すると事務局より早急に手配があった。
当時は自施設にて介護現場で働いていたため、それを基に支援にいった施設の職員さんに情報提供できた。
必要な所へは連絡を行ったが、不十分な所もあった。
その日のリーダーによって、重要とする情報が異なった。
コミュニケーション力
申し送りを抜けなく行った。
情報は入ってこなかった
利用者の情報を共有して、利用者の安否確認を分担することができた。
ミーティングを通して全体としてなにを優先させるかを考える
情報共有を行い、要支援者に混乱が生じないように努めた
情報交換等をコマメに行えた
平時における連携方法の構築
とにかくどのように介護するかをいう思いでいたので、コミュニケーションが活発で連携できた。
災害直後はできなかった

被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力

<b>ライフラインの制限への対応</b>
断水で入浴ができないため、清拭をしたり、水道が復旧している地区の事業所に入浴させてもらいに入居者をお連れした
自事業所は訪問介護事業所であるが、利用者宅が断水でも使用できる市内のコインランドリーを探し、洗濯の対応をしたりと自分たちで出来る事をみんなで検討や工夫できたと感じる
エレベーターを使用できず入居者の移動が困難となったが、車椅子の入居者など、他職員と連携して対応した。
長期断水の状況の中で、非常用のタンクの水を効率よく運んだり使用したりする工夫を行った。
食料の確保や燃料の確保、電源の確保など知人などの活用
オール電化の施設であったため、電気が全てとまり機能しなかったが、ご飯を炊いたり温める際に家庭用1台分のガスコンロを使用して米を炊いたり食事を提供する事が出来た。懐中電灯も個数の確保がなかったのでろうそく等で工夫してしのいだ。
東北の時、足浴が必要であったが、電気が来ておらず、薪で沸かした湯をポットに入れ、流されてきた発泡スチロールの箱で行った。また、電気髭剃りがなく、剃刀で切ったりしたが、なんでも活用できることが出来るのが必要だと感じた。
インフラ、情報のない中でも、代替手段を見出した
生活水(トイレ等)は川から水を汲んだり、井戸水が出るところまで出向き確保した。
地域的に2日程で停電は解消されたが、暖を取る為にテーブルに毛布を掛けて、みんなで足を入れて温まる等の対応ができた。
通信が途絶えた中での伝言板の利用(個人情報に注意も行えた)
電話やメールが使えなかったが法人内の事業所との連絡が取りやすく連携できた
水道がなかなか復旧しなかった所は、水を持参した
自動車用のガソリンの確保、計画停電への対応など
停電への対応(発電機を自宅から持ち寄り)、照明の確保(キャンプ用品の活用)、寝具の確保(17名分を車両1台とスタッフ2名で)、食料備蓄品の活用と近所の商店からの確保
水を確保し、持ち部署と階下の部署に提供した。
何のライフラインが停止しているのかを見極め不足している部分を職員間で埋めれた事
停電していたので、直接利用者宅を訪問し安否確認をした
停電や電話が繋がらない時間帯あり 強風が収まってから関係機関手分けして安否確認訪問
エレベーターが水没し全入居者様が居室対応になったが、柔軟に対応した
<b>食料・物資の不足への対応</b>
2次避難所での活動の中、限られた資源を様々な経験の中から、できる事できる方法を考え、被災した利用者や職員と共に活動や、生活の工夫に取り組んだ
給食等が提供できず、お弁当を持参していただいた。
通常的环境下でも代用できるものは代用して対応した
その場にあるものが何か? 創意工夫の中で支援に当たる事を気をつけていた
近隣、遠方のスタッフとの情報共有し物資等の供給ができた。
事業所に支援物資を集め、ケアマネや民生委員、区長にその情報を流し、物資を必要とする方に配布を依頼した。

ある物を活かして代替できる方法を考えた。
必要物品がなくても他で代替して対応した。
施設内にあった食材や道具を工夫して食事提供や日中活動の提供を行った。
被災地への支援物資や物が無い中での支援の為、職員のスキルが重要
排泄介助に必要な備品等を工夫して作ったり、プライバシー保護の為に工夫を行った。
物資が少ない中でいかに無駄を減らし、代用品を考えるか
身近にあるものを活用した寒さ対策。
尿量を計るよう医療チームから言われ、スケールや空きペットボトルなど使いトレパンの重さを計った。
限りある資源での対応
余震に備え、1回フロアのみでの介助となり、マットレスのみでの就寝となり、個室ではなくなったが、限られたスペースで個人ごとに合わせた対応を行った。
大変な物資不足や想像をはるかに超えた困難な状況でも、現状ある物資等で、チーム内でアイデアを出し合いやり方を変えて対応。
不足しているものを他の物で代替する。
あるものでの食事作り 地域の方への井戸水の使用依頼
オムツの種類など、限られた物で対応する事。
いすや膝掛け、スリッパが足りず寒い環境だったが、物を集めて乗り越えた
物資の不足は、待ってられないので代用した。オムツや食器、掃除用具など
<b>環境整備の工夫</b>
プライバシーの確保について、物が無い状態で工夫できた。
廊下や食堂などにベッドマットだけを使用して臥床スペースを確保、昼はマットをよけ、生活スペースとした
入浴に関して、介護が必要な方に対して1.5次避難所の既存の環境を使いながら工夫して入浴しやすいように環境調整を行った。
寝る場所の確保
被災翌日に、施設建物の浸水箇所の清掃、道路の清掃、保険会社への連絡、福祉車両の手配等、被災していないスタッフと分担して、再開に向けての作業を行った。
浴室内での子どもの一時預かり。自衛隊のお風呂は浴槽が深く床が滑りやすいため親がゆっくり入浴できない状況があったため、親の見える場所で子どもを預かった。
移動、食事摂取も自立している方がベッド上で個食されていたので、部屋の一角でみんなテーブルを囲み会話をしながら食事が出来るように対応が出来た。
居住者から対応に困っている事を整理し環境を整える事が出来た。
ご利用者が不安に感じないよう常に目の届く範囲に職員を配置し、すぐに声をかけられる環境を維持した。
配慮者の自宅でガラスの破片等散らかっていたため片付けたがまだまだ危険なため靴を履いてもらい安全をかくほしたなど
<b>要配慮者の状況や心情に応じた工夫</b>
要配慮者に聴きながら教えてもらいながら行う。パターンリズムや支援者のエゴに留意する。
自衛隊のお風呂への入浴支援を行った際、入浴を断られた被災者の方に足浴を勧めた。自衛隊の方に聞くとベビーバスがあったのでそれを借りて足浴を行った。
要配慮者が必要とするものを事前にお聞きし、必要とすれば届ける(食料に限らない。本など)。空いている時間話し相手になり傾聴する。

丁寧な話を聴きできる事、あるもので創作を一緒に行ったり、ニーズを明確にし対応した
義歯の保管 衛生の工夫
褥瘡リスクの高齢者にポジショニンググローブを使う。業務を効率的にする提案をする。
要支援者の状況に合わせて、臨機応変に対応した
ご利用者様の気分転換を目的としてグループに分かれてドライブを実施する計画を立て、提案・実施することができた
階段を登れない方など、2人での対応など実行できた
体育館での食事がままならない対象者に対し、食事台を作成した
<b>支援者間のコミュニケーション</b>
何が出来るか出来ないか、その出来る事は行うべきか事業所内で話し合い対応した
行政職員と相談しながらある者、物をうまく活用した。
リーダーへの報告にて調整していただけるように報連相を取り合えるように修正した
基本的には被災事業所の職員の指示で業務を行った。
避難所支援で出来ない事でも、全体で課題を共有して、次に繋げる事が大切かと思えます 先発隊の時には、輪島市大屋小学校(一時避難所)で両親が外部への所要の為に、子供(障害の方)預かる事は出来ないかと話があり、状況を鑑みて対応に至ったケースもありました。事前に要配慮が必要な方と情報共有、状況によってのトリアージ対応となりました
職員間で協力し合い、意見や情報を出し合い柔軟に行動ができた。
情報収集してアセスメントした内容を引き継げるようにボードに記載した。また、排泄介助を分担したがパッと見てわかるようなチェック表を作成したりした。
平時とは違う状況と割り切って、今出来る事は何かを話し合いながらケア内容を考えた。
幸い大きな被害がなかったため、災害発生から状況が落ち着くまで、利用者のケアはほぼ通常に近い状態に対応できた。電気が使えず不便もあったが、ユニットリーダーを中心に現場の判断で対応した
同法人のネットワークで必要なサービスや場所等を活用していた
管理者だったので直接処遇の職員と連携し対応できた
場所が違うので、危険が伴うことはなるべく指示をもらい、その中でも考えながらできた
上層階への避難の際に、スムーズな避難が行えるように即座に移動者リストを作成し、共有できたこと 移動後のフロアの荷物を浸水被害に備えて対応できていたこと わからないことをわからないままにせず、しっかり確認し、また報告した。
住環境に不安があったため、法人内他施設を間借りできるよう調整を行った。
今何が必要かを考え、他者とコミュニケーション図ることができていた。
その場で出来ることを話し合いながら対応した。
経験のないことで正解がない中で何を今すべきか、何が自分たちにできるか、現場をよく知るスタッフに相談しながら、協力体制のもと給水支援や臨時訪問等をした。
<b>臨機応変な判断・対応</b>
その場での状況判断
何事にも臨機応変、応用力が必要。
その場で必要なことを実行
現場現場の状況や個人の状況を把握しながらの対応、その場にあるものでの状況対応能力

柔軟に対応することができた
レクリエーションなど、臨機応変に対応することができた。
状況を把握し、必要な事柄を聴き取りながらの介護 自宅にある物を活用
日々、状況が変わる為同じ事を繰り返していられるほど安定はしていない。状況を良くするため、無駄をなくしていくため、適応していかななくてはならない。
あるもので柔軟に対応することができた
その時に限られた中で工夫して対応すること
職場の同僚と連携し、業務にあたっていました
<b>その他</b>
マニュアルではなく人としての行動に焦点を当てて支援をしていた
普段の実践が大切
体操をしたり、飽きない工夫
避難者受け入れ時のトラブルなし。
利用者を自宅で見ることが出来る方は自宅介護をお願いした。原発爆発により避難したくても車が不足。
現在ある資源をどう活用するか
求めたり新たに揃えるのではなく、その場にある物や時に人を利用する そのきっかけや発信を行う
夜間の暗い中での食事に危険があったため、食事時間を前倒しにして対応していた。
阪神淡路大震災は災害地区や市町村の範囲が狭く、全国や海外など広範囲での対応がなされ自衛隊や医療体制や物資、ライフラインの復旧も早かったのもあり柔軟には活動できたのもあり業務継続には不安はなかった
社会人としての経験から得られた知識や等の活用。
地域の方たちへの声掛けはできていた
活動場所が被災したことによってグループごとに別々の場所を間借りして活動することとなったが、送迎の手配など含め工夫して対応した。
あるものいる人で対応する習慣があるので即応できるのは強みになりました。
生命を第一優先に考え、できることで工夫する力がついた
自施設で提供できることは何かを考え行動した(避難所には野菜の持ち込みができなかったため、自宅避難の家に配り歩いた)
熊本県での震災時に大阪府社協からの募集があり、参加しました。周囲の各ボランティアの方々と協力しあいながら対応しました。
危険度を自身で判断しながら行動することができた。
与えられた情報をもとに、もちうる知識を駆使して、安全を第一に行いました
指示する方がいる場合になかなか柔軟に対応することが難しかった。
できたとは言い難い
食事入浴排泄など関わっていた職員だからこそその理解などで安定した対応がなかった
個別マニュアルの中で 些細な行動パターンや、癖等平時より 個別に取りまとめ、いつでもスムーズな対応に繋がるよう心掛けていた
土砂災害で事業所に駆け付けられない職員には、最寄の法人事業所での一時的な就労や支援協力
東日本大震災、被災地経験 災害状況の把握 被害分析ができた
必要な支援に対して、自ら率先して意見を伝えることはできていたと思う。
事業所のできる範囲の情報提供や物品支援等の支援を行った。

再び地震が起こることを想定しつつ、すぐ避難できるように一人暮らしの方などには積極的に利用してもらった
2次避難所生活についても考慮しながら、案内を心掛けた
以前まで利用していたサービスが使用できなくなった場合は、代替となる事業所やサービスを利用した。
出来る事を優先に工夫できた。
様々な想定でのシミュレーション実施
「今あるもの」で行える介護の方法を学んだ内容を実践できた
環境の変化があったが、生きる為にはどうにかしないと考えた。
訪問介護のため、一軒一軒回りながらスタッフと利用者の安否を確認してサービス提供の状況を確認しながら指示をしていった。
被災が通所時間内に起きたので、いかに利用者を不安にさせないか、安全を確保するかが職員全体で暗黙の中優先させる事が出来ていた
1.5次避難所の為、避難者に対しては専門団体に繋いだので、特になし。
自分の考え方・価値観にこだわらずに関わることができた
何を外してはいけないかをという視点が大事
柔軟に様々な可能性を模索しながら支援を行った
刻々と変化する情報に振り回されることなく、とにかく前を向いて進んだ
キャンプや自衛隊での訓練体験など、野外活動は役に立った
できることが少なく、選択肢は少ないなかで、その人が安心して過ごせる環境づくりをあきらめない高い倫理観。
特に医療分野、給食関連の場面
災害支援の経験値
あるもので、工夫し対応した。
完璧を求めないで、最低限のことをチームで協力し合って行動する。
出来なかった
できないと言っては利用者さんが困るので何とか対応した。
指示されたこと以外は、安全を図ることに重視し、対応と伺いを行った

## 自らの役割を見出し、主体的に行動する力

<b>チーム・法人内の連携</b>
意外と支援者がなにをしていいかわからず困ることがある。支援者支援は、一緒にお願いできますか、の一言が支援者を救う。
リーダーに確認しながら主体的に活動ができた。
2次避難所での受け入れ態勢から、他の法人職員よりも長期に応援に入ったこともあり、派遣職員の引継ぎや様々な情報共有を自らの役割として、主体的に行動した
勤務シフトについて、自発的にフォロー調整を行った。
情報を事務所前のホワイトボードで確認できるようにして、それを見ながら各自が主体的に役割を捉え行動していた。
役割りがある場合は、それを行い。役割がない時は、自分から何が必要かを、それぞれの所属場所においてチームで確認し、おこなった。
新しくボランティアにこられる方への初期説明。荷物の置場所、トイレの場所の案内。
チームの中で、どの部分に自分のスキルを活かせるかを考え、実行することができた。
お互いの担当している人を分担し合って行動できた。
情報をまとめ後任の方に引継ぎができた。日常の勤務先での管理業務が役立ったと思っている。
他の職員も被災していた状況で出勤できない職員も多くいた。私は出勤できる状況だったので、自ら長時間の勤務を行っていた。
各ケアマネが担当利用者対応をした。当時私の子供がまだ保育園で迎えも行かなくてはならず、他ケアマネがカバーしてくれた。家庭環境でケアマネも大変。
同法人のネットワークで必要なサービスや場所等を活用していた
関連施設の応援に行った際に施設職員と役割分担をし、業務に当たった。
母体施設と共同で、それぞれができる役割・情報提供・情報共有をおこなった
認知症高齢者に関わる事や移乗介助に多少自信があり、介助方法に困る。支援者にアドバイスをできた。
チームでの活動の中で自分の役割を考え連携を取る事が出来た。
上記の事により、自身で判断した。また法人内の管理者同士で情報共有をし、上長に相談し行動できた。
安全に生活してもらうために、うまくいった支援方法を率先して引き継ぎを行った
他の職員の動きを見ながら不足している箇所に入るように努めた
各部署長とのミーティング時
本社と連携し率先して行動することができた
正職員だけでなく条件付き職員も自ら状況を判断して自分の意思で残業を申し出てくれた
チームリーダーと連携した行動ができた
進捗状況やその後のスケジュールなどを逐一伝達⇒共有できるよう努めた。
本部とのやり取り、関係企業とのやり取り
<b>チーム内のとりまとめ・指示</b>
後輩職員に対しての動きの指示
組織の全体に指示する立場にあるため、常に最新の情報をキャッチしながらスタッフに伝えていた
長として、利用者主体にしつつ、職員へのケアを行う
部署間の連携が上手くいかないこともありましたが、支援側の調整

管理者として落ち着いた行動を取ることができた時
チームリーダーとなり、指示、情報収集した
判断を仰がれることが多かった。
リーダー業務としての采配、チーム連携
震災発生直後は職員もパニック状態で冷静な判断ができずに利用者の元を離れてしまっていた。高齢者の命を優先した判断を行い職員への周知を行った。
ヘルパーの調整
事業所の管理者として部下に指示をしながら、自身の業務を遂行できたところ
上司が不在で連絡も取れなかったため、代行者として対応を進めた。
当時は、管理的部門に配属されている一人であったため業務継続のための課題や実行する上での具体的な方法等を提案できた。
被災後の避難者(一般の方含む)と法人、行政、福祉避難所等との全般的なとりまとめを担うことができた。
管理者として職員の管理、利用者への対応を行い、他社等に対応できない部分のケアなどのフォローや提案を行い実施した。
指示
部署長として職員の安否確認、家の損壊状況、出勤への影響を確認し、上層へ報告と職員へ周知。
指示を出し、みんなと一丸となって、介助にあたる。
チームリーダーとして活動したが、チームの意向をまとめ、他の支援団体に意見を伝えることが出来た。
管理者として指示することができた
余震のリスクもあり入浴は中断の判断し、食堂での排泄介助でもプライバシーを守ることや、居室に帰ってからも不安を感じないよう職員を配置し巡回を行うよう動きの指示をした。
非常時における人員配置、役割分担を具現化した
<b>要配慮者への対応</b>
被災者の精神的不安の聞き取りを行うなどしていた
災害時の食事・排泄など終了した後要配慮者様に必ず感想をお聞きする。要配慮者の視点を怠らない。
要配慮者の一般入浴から介助用入浴へ繋ぐ(介助されることに抵抗がある方へのアプローチ)
出勤日でなくても顔を出すなど、少しでも認知症利用者様の不安が少なくなるようそばに寄り添った。情報集めをなるべく行い業務が早く通常に戻るように尽力した。
被災者への声掛け
在宅障害者(聴覚障害者)への関わり。行政手続きを SNS で行うのを支援した。
ボランティアでの利用者宅訪問
出来るだけ多い要配慮者の方と接するよう心掛けた
停電していたので直接利用者宅を訪問し安否確認した
当事者のニーズを適時共有を行った。
3 か月間居室対応になったが、それぞれが何をすべきか日々の中で役割を見出し指示なく行動できた
話の中から、避難所から壊れている自宅に帰った人の情報をもらい、訪問することが出来た。その後も継続してもらうように引き継いだ。

介護職員として、利用者様の心のケアや食料不足に自分ができることを模索し、上司と相談して支援した。
避難先でも他の住民に声掛けできた
手が空いているときには、スタッフで雑談をせず、支援対象者と話すよう心掛けた
<b>環境整備</b>
被災施設の物資保管場所の把握を行い、水やトイレトペーパーなどの生活必需品の補充を積極的に行うことができた。
少しでも衛生的な環境で過ごしてもらえるよう 必ずトイレをきれいに保つことを自身の目標の一つにして対応しました。
整容・保清面で不十分と判断し、自分にできることを考え、自ら進んで行動した。
今、何をやる必要があるかを考えながら行動した。手が空いた時には整理整頓を行って使いやすいようにしたりすることができた
被災時 3 月で寒い時期で、施設がオール電化のため全般が大変だったが、職員が自主的に自宅から卓上コンロやペットボルの水、ポット式ストーブを持ち寄り対応した
マニュアルの無かった中、避難場所への誘導、家族連絡、防寒、トイレ確保、飲食と、自発的に動けた
仮設のトイレはよく見回りし、要配慮者の方たちが、いつでも気持ちよく用を足せる環境作りは、特に気を配った。
<b>多職種での連携</b>
介護、看護、医師、栄養課、その他のスタッフが各々の専門分野以外でも柔軟に対応できた。
避難者にとって必要な多職種につなげる
介護職として出来る事、できない事を明確にして、他職種と連携した。
各窓口との連絡調整
部署の垣根を越えて指示連絡を行っていたこと
サービス事業所との連携、情報収集
社協が中心となってその指示のもと活動を行った。
<b>与えられた役割の実践</b>
避難所支援でのそれぞれの役割が明確な分、徹する事が求められると思います。チームの役割を果たす分、どんな状況でも、それぞれの役割をこなすことが出来る力も要すると思います。自分の足で歩いて、課題をどんどん主体的に見つけていく、拾い上げていくスキルもあれば尚良いと思います
指示系統が復旧してからは、その指示にしたがった。
私は応援派遣で要請されている為、役割は主体的に行動するのではなく、現地職員への後方支援が役割であり、現地職員も被災者の一人として、被災者主体を貫くことが役割であった。
決められた役割以外を遂行することを良しとしない雰囲気があったように感じた。気持ちよくチームで動くことを優先した。
その時の必要な指示のもと、考えながら行った
上職と相談しながら、役割分担を決めて動くことができた。
<b>優先順位の判断</b>
身体的な介護が必要な利用者に優先的に連絡をとり、安全確保の確認をする事が出来た
足りない事、足りている事、必要な事必要で無い事を個別にサルベージを行いながら対応した。

皆、走り回っていて指示出す人もいない、聞く人もいない、自分で考えて動くしかなかった。とりあえず記録を見て、排せ介助の間隔の長い人から行った
<b>事業の継続・再開</b>
被災状況を判断し、ライフラインが復旧するとともに事業も再開した
1日でも早く再開に向けて行動した。
災害翌日からサービスに入った
<b>その他</b>
チームの役割が明確になっており、対象者の支援として各々が役割を果たしていた。
普段の実践が大切
自分で今出来ることを把握し自ら動くこと
避難者受け入れ時のトラブルなし。
被災者の受入れ調整
自分自身の役割の理解
コミュニティーの活用
出すぎず、指示をもらうばかりでなく、周囲の状況を見て自ら行動する
積極性でなければ、次になにをすればいいかと受け身では当てならないに
被災している職員が多く人員は少なかったが、私自身は被災地の中心地在住であった為反対に施設に宿泊しながら生活に安心も出来ながら働ける体制が有難いと思い、身体・精神的にも安定して行動出来ていたと思います
先走り過ぎた面もあった。
柔軟に動くとしかない。
経験・年長者としての自覚。
本来の業務とはかけ離れた内容でも、自身にできることを探してまずは動くことを意識して日々を過ごした。
情報収集、指示、行動、反省、改善の順番でそれぞれが行動できた。
コミュニケーション能力が大切。
1.5次避難所では日常的な業務もあるが、基本的に主体的に行動しないと役に立たないので自ら困っている事やニーズを広いに行っていた。
新しくカリキュラムを作った
指示待ちではなく、緊急時だからこそ何かできることはないかと考えることがみついた
被災者でありながらも支援者としても動くことができた。
セルフケアが不足してしまい、帰宅後に疲労感が高くなる事があった。
自分が必要とされていることが何かを考え行動した。
できる事とできない事を明確化した
できることをした
個々の現場における対応ができていた。
停電のためパソコンも使用できない中、使用できるネットワークを駆使し情報を収集するとともに住民にその情報を伝えるなどの活動を行った。
出来る事を自己で探し、積極的に取り組んだ。
分散化し復旧 罹災者対応にできた
何をしているかを回りに周知できるようにすること。
地震の影響で地割れ土砂崩れなどがあり通行可能なのか判断どうかは地図アプリも機能しない状況で行ってからの現場判断であった。1.5次避難所では被災した職員も一緒に移送したので、生活支援としては特に役に立たなかったと思う。

情報を待つより、収集へ働いた
応援者がいなくなった後のことも考えなければならなかったが、自らの役割は見出すことができなかった。
自分が出来る事を進んで出来た。
自主的な次の行動や発言があります。
BCP の活用、計画、見直し
普段関わらない分野でも自分が出来る事をした。
自転車移動不可の為、サービス移動を車で送迎
自分で行うことはないかを見極め、手が空いた時は積極的に動いた
ボランティアが入りにくい箇所を調べて、活動を自主的に行った
自分が今出来ること、しなければならぬことを考えて職員と協力して実施する
自分が何をすべきか判断できたと思う。支援先の考え方を尊重し、その中で行うことができた
連携は必要だが単なる指示待ちではいけない
主体的に行動する事。
自分で出来る範囲内で行う
情報も十分でない中で、的確な指示などもないため、自分自身で何を行うべきかを判断して行動する力が必要だと感じた。
自ら動かざるをえなかった
自身の専門領域を理解し、できることを考え、行動できていました。沙矢の
自らの役割を明確に意識し、積極的に行動することでチームや利用者に貢献できた
災害支援の経験値
今自分が何をすべきか考え、行動できた。
どのようにふるまったらよいのかは状況から理解できていた。
その場で必要なことを見極めながら出来ることを行った。
今自分に何が出来るかを考え、状況に応じて自発できに対応。
避難所での積極的な情報収集に努める。
指示を出す人はいなかった。事務局も追いついてない状況でみんなが初めてという環境で、考えて行動するしかない状況であった。
自分自身の得意分野を活かすことができる場面では積極的に行動できた。
災害直後はできなかった
指示がなくても自分から動くことができた
自ら考え動き、必要なことは関係者につなげた
暗い中でも少しでも明るく振る舞う様努力しました

自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力

体調管理・感染症対策
自身の体調管理や自分が二次災害に合わないためにリスクを侵さないようにしていた 体調や休暇の取り方、ストレスの軽減などできる限りのことはしていた。
限られた環境下での食事・衛生面をしっかりと行い、体調管理を行った。
災害はじめ感染症においても、まずは自分自身が健康で会って安全を確保すること。 感染に気を付けながら活動ができた。
石川県へ派遣時期が3月と寒い時期に、体調管理の徹底(食事・睡眠・適度な運動、風邪、感染症等対策)、2週間ほどの滞在であったため、メンタル面の安定に努める(派遣先職員から話される被災状況(家屋倒壊、親族ご逝去などたくさんの被災情報によるメンタル面の影響、ホテル生活)
自分の体力精神面でのケア
自身の健康管理及び自律、生活再建という方向性を持ち過剰な支援にならないよう努めた
栄養と睡眠
提供していただいた風呂など使わせてもらい、自身の健康を守るよう心掛けた。 自身が倒れて人の手を煩わせてはいけないと思い、健康管理をいつも以上に留意した。
感染対応
仮眠で眠れず困ったのでいつも着ているパジャマを持参した。水分は1.5Lポカ리를毎回持参して飲みきるようにしていた。
特に、感染症対策に注視し、感染予防に努める事ができた。
感染に留意し、標準予防策が実施できた。
自身の体調管理を怠らないこと
できる限りの感染対策を徹底しウィルス感染することなく活動を終えることができた エプロン・マスクなどしっかりと衛生用品を使用した点。被災施設での宿泊においてしっかりと休息(しようとした)できた点。
標準予防策に照らし合わせる事。腰痛予防に配慮した介助方法を実践する事。支援を継続できる意見を伝える事ができた。
食事内容、睡眠時間、感染防止対策に留意しながら実践できた。
健康管理
風邪を引かないようにした
避難所でコロナウィルスが発生したが、感染することなく支援を継続した。
関東から輪島市へ応援に行ったが、天候や気温に対応できるよう、衣類など持ち込み、体調管理に留意した。
体が資本だったため、ストレッチや運動、湿布持って行ったり、愛用している枕は特に必須でした。
長時間の勤務だったり、多くの方がストレスを抱えているような状況の中での活動では、自分自身の健康やメンタルを守る力が必要になると感じた。
食事、睡眠の確保。
自身の体調や精神状態を把握し、適切に休息やリフレッシュを取り入れながら支援を継続できた
自身も持病を抱えているので支援先で体調が悪化しないよう考えられる事は全て準備して臨んだ。
自らの健康維持に努める。

支援期間中は、観光や飲み会などに参加せず、体力維持回復に努めた
<b>メンタルケア</b>
現在も継続して支援をしているが、メンタルを壊すシーンは今もある。中々難しい。
東日本の時に、鴨川自然の家へ避難所の方々(障害施設の職員、利用者)派遣にいきましたが、利用者の方々へメンタルが近すぎた分、派遣後しばらくして、無気力感とバーンアウトの事もあり、奥能登半島への支援の時には、東日本の経験もあり、楽しむ時間を意識して発信したりとより良い雰囲気、避難方々に入り込みすぎる時のメンタルリスクも共有しながら行っていました。派遣期間が1週間とあったので、適度な派遣期間だったと思います。避難所の方々の感情を受け止めて支援を行う事、自身のセルフケアは大切になります。仕事するときにはする、遊ぶ時には遊ぶ、休む時にはしっかりと休む等、災害派遣の時だけでなく、平時の仕事の中でも当たり前な事を発揮することが大切だと思います。
通常とは異なる状況・時間軸の中で、自身がつぶれたらみんなが困ることを自覚し、メンタルを保ちながら業務にあたるよう意識した。
自分を落ち着かせることが第一
自分の心身の安定を図るため、飲食や睡眠・一人の時間を大切にしました。
チーフ職だったこともあり、自分が悲観的ではいけないと思っていた。なんとかなると周りに言っていたら、自分でも前向きに考えられるようになった。
メンタル面、体調面に気を付けた
安定した精神状態を維持できたところ
自身の目標達成を掲げ、それに向けてモチベーションアップすることができた
<b>休息の確保</b>
長期支援に入ると体調を崩すこともありましたが、休息やチームでの支援でのりこえました。
自分自身が無理をしないことも意識した
無理することなく、休憩時間にはしっかりと休むことができた
当時は年齢も若く、フットワークが軽かった事もあるが、地域に温泉が豊富で、リフレッシュできた。
長時間労働になる中で、こまめに休憩をはさむことで疲労が蓄積しないようにした。
しっかりと休息をとり、活動後の食事等でチームでの息抜きを行った。
自身や部下の管理をしながら、自身の時間や感情の健康の管理を行った
息抜きする時間を作り、職員と色々な話をして溜め込まない
休める時には休んだ
休憩やお休みはきちんととった
<b>シフト調整や声かけ等のチーム連携</b>
スタッフ同士で「意識して休む」ことを取り組んだ
自分の子供がまだ小さかったのにそばにいてあげる事が出来ず葛藤したが、家族みんなが助け合い、職員同士でもお互いさまでかわるがわる勤務時間を制限することなく臨機応変に支援をした。
限られた状況で支援を継続するために、お互いに体調管理、交代等を行った。
無理のない勤務
出勤できない状況のスタッフもいたため、臨時のシフトを作成しつつ、無理のない勤務状況を作った。
不規則な勤務体制となったがシフトを乱すことなく、体調管理も行いながら勤務を全うした事。

自分も他職員も無理をしないよう随時声かけあう
シフト調整を行い体調面の管理をした。過密な労働にならないために職員にも配慮した
お互いの状況の確認、共有 ストレスの吐露
利用者の前で不安感に繋がる言動をしないためにも、スタッフ同士で前向きになれるように情報をこまめに共有しあったり普段通りのコミュニケーションを心がけた。
自職場ではなくとも、同法人内の自宅から近い事業所への応援、報連相を行うことでの連携
<b>勤務時間とそれ以外の切り替え</b>
時間内での効率的な業務の遂行。
自宅が被災していた職員もいる中で、業務中はご利用者の支援に徹し、勤務外の時間で自宅のことについては取り組んでいた。
ストレスを溜めない。ON OFF の切り替えを上手に行う。
少しのことでイライラすることはあったが、仕事と家庭は切り離し考えるようにした。
<b>事前の準備・情報収集</b>
事前に被災地に状況を被災施設にメールで確認するなどして、水や食料、寝袋、エアマットなどの準備を行って、現地に入ることができた。
必要な物品を活動に赴く前に、指示されたものでなく、自身の身体の変化に対応できるものをそろえた(風邪薬・コロナ時の必要物品)
十分に情報を得てから行動計画を練った
災害時にはヘルメットや軍手、防塵マスクなど必要な物は準備して参加した。
1.5 避難所の環境の情報が少なかったが、可能な限りの情報収集に努め、無理なく行えた
<b>安全確保・リスク管理</b>
発生当日、帰宅も考慮したが、移動動線など考慮し、勤務施設で対応を決めた。
震災直後は自宅が被災した為また一人暮らしで当時は携帯電話もなかった為まず施設に向かうことしか選択肢がなかった。住まいの神戸市兵庫区は被災がひどく勤務地である明石市へすぐに向かおうとした判断は正しかったと今でも思います
安全を最優先に考えた
停電のため陽が沈んでからの活動は二次災害の恐れがあるため明るいうちに活動し、帰宅後は自宅の水の確保などにあたった。
自身の家族の安全をまず優先し、その安全を確保してから、一人暮らし高齢者を優先して安否確認を行うことができた。
避難場所に緊急待避の指示が出た時に、どこに向かうかの情報が錯綜した。明確な支持を得るために指示出しをしている警察に確認を行い、その上で行動を行った。
安否確認の移動の際の安全確保、携帯が繋がらないため公衆電話を利用して定時連絡を入れるようにした。
リスク管理はできていた
防災グッズなどを持ち歩いた
まずは、自身の安全確保を行なった
頑張りすぎないように自分を客観的に振り返る時を設けた。
危険だと思うところには行かない。支援時も梅雨の時期だったこともあり、川が氾濫していた。体調に気を付けて、睡眠をとるようにしていた。
被災環境に適応する努力を続け、自身の安全を守る。また、心身のコンディションの維持にも努めた。
<b>その他</b>

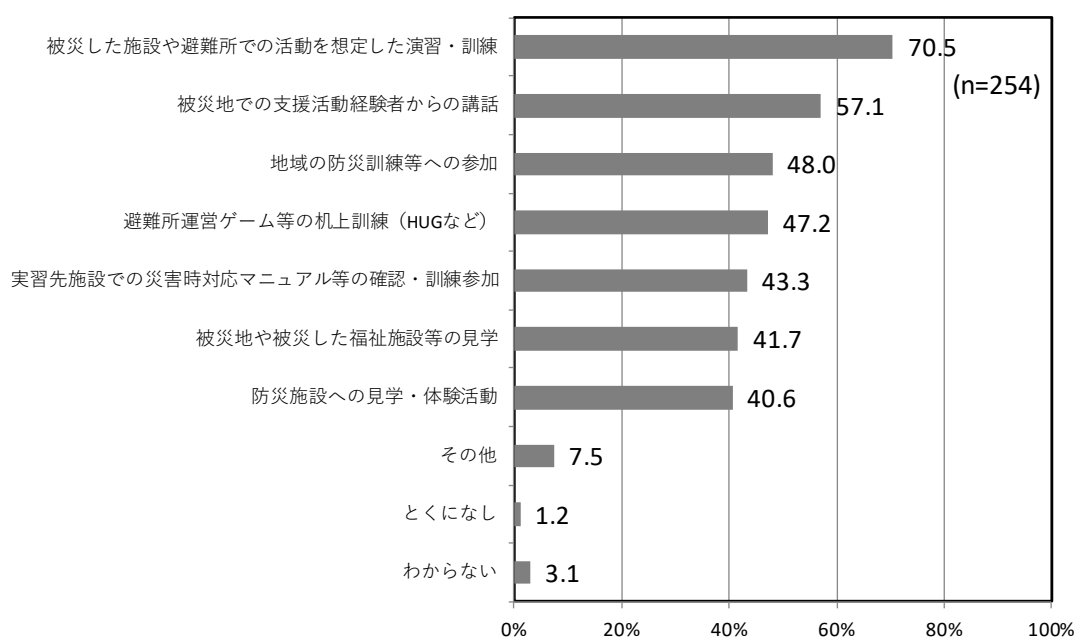
普段の実践が大切
できないことはできない、やれることをやると割り切る
被災者の方々の心情に寄り添うことをこころがけた
特に避難の必要性は無かったので、情報を得ながら行動した
避難者受け入れ時のトラブルなし。
現状をありのまま受入れ、できる事をおこなうのみ
施設の建物自体には被害がなく、自宅も被害がなかったため、精神的には安定して業務に従事できた
1つ1つの行動に注意した
趣味のアウトドア活動や、スポーツの経験から得られた対応力。
自分自身よりも利用者の安全を優先してしまった
個々それぞれの職員自身も被災する中ではあったが、安全に行動ができた。また、それぞれが早急に駆けつけ支援に移る事ができた。
情報が明確に伝わらない。常に自身で行動が必要となる
自分自身是最優先になってしまうが、いつ自分も逆の立場になったり、大きく被災することもあるので、余裕のある方が困っている人を助けるなどといったマインドがみについた。
東日本の時は、他ボランティア団体がやり過ぎでつぶれたりしていく中で、支援を続けるための通常の活動を行う事、行き過ぎない行動をとることを行った。また、他のボランティアから、陰口等や八つ当たりをされたときに冷静に、対応し、所属団体の若手のボランティアの方たちと乗り切った。
自分は2の次にしてしまう動きだった
仕事に対するやりがい
自分を振り返る時間を持つ
ある程度の段階での見極めや割り切り
ライフラインが整っている環境下で寄宿したので発揮できたとは言い難い
身体的精神的ダメージを追わないように100%の力を使わずコントロールしながら作業が出来た
虚弱・独居・老老の利用者安否確認が精いっぱいであった。自分の事よりも利用者や子供の事を考えた
グループホーム利用者を入所施設へ避難させ、夜勤スタッフを配置、安定したところで帰宅、自宅でも冬季停電状態での安全確保。家族の理解により業務を中心に対応できた。
自身も家が半壊し帰宅困難となったが、家族や他の職員と共有しながら乗り越えた。
自身も被災し未就学児など家族がいる中で、事業所運営と、家族を守る・家庭に必要な物資を確保することの難しさを感じている
避難しない利用者がいたから、支援を継続した 何があっても、覚悟を決めていた
ライフラインはしばらく回復しなかったが、できる部分やあるもので生活はできた。
安否確認をしつつ来所可能か聞き取り、可能な利用者には別のスタッフが迎えに
セルフマネジメントはチーム員としては当たり前前能力であると認識している。
各種職、助け合い、お互いを気遣う事が出来た。
多くで停電していたが、より安全に過ごせる実家に家族は避難させた
常時からのシミュレーション力
自宅は食器棚の損壊、ライフラインは水道が止まるのみ。として、会社に集中することができた。

水戸市の被害が想定より少なかった事から、生命を脅かすような状況ではなかった為、ある程度の余裕がある状況であった。
自分がつぶれては、みんながダメになると考えた。
俯瞰的な観点をもって、行動することができた。
皆が家族より目の前の利用者支援を優先したことは、誇りにも思うが、家族が先々でも支援が受けられていると信じられる国であったら、マネジメント力を思う存分発揮できるのと思いながらの支援でした
べき論を捨てる
勤務延長が必要時に自分の体力、家族の事を考え行動することができた
目の前の命に向き合うしかなかった
支援が必要な人の立場に立って、行動することが使命だと奮い立たせ、行動していました。
各部署長とのミーティング時
災害支援の経験値
利用者支援に必死で自分自身を守るという視点が当時はやや欠けていた。
被災時でも家族との連絡も取れ、職場に残れた
自宅は施設より長い期間停電していたが、家族と協力し、体調不良にならずに勤務を継続することが出来た。
自分自身が生きてこそ、利用者への支援が行えること。
自分だけではなく、皆も被災をしている中、勤務しているという視点を常に持って生活するようにした。
倒壊などの危険はなかった為、入居者様の安全と出来るだけ安心いただけるよう配慮した。職員へは自身の家族への連絡を行い、先に先に何をしないといけなくなるのか想像し早めに手を打つようにした。
並行して専門職が出来る支援と導入の道筋を支援ニーズにどのように重ねるべきか、職能団体としての活動も行った。
自分の身を守りつつ、入居者を安全に管理してました

問42. 介護福祉士養成課程において、前問で挙げた6つの資質・能力を身に着けるために、どのような方法が効果的だとお考えですか。該当するものをすべてお選びください。

(MA)【共通】

介護福祉士養成課程において、とくに被災を想定した演習・訓練が資質・能力を身に着けるために有効だと考えられていた。また、支援活動経験者からの講話が次いで有効だと考えられていた。



その他(自由記述)

養成の段階は、災害時想定よりも普段の実践の大切さを伝え、磨くべき
夜間訓練など時間帯を変えた訓練
被災に対する知識と最低を想定した準備
南海トラフ地震を想定し施設ごと法人ごとで生き残っていく力をつけることが必要
自分たちが派遣されたチーム員は自ら志願して避難所に行っているので資質、能力はある程度備わった状態であったと思う
何に対しても対応できるように日頃から全ての支援を断らず行っておくこと。自分自身の支援技術を常に向上させておくこと。経験を積んでおくこと。
災害時に関わらず日常的な支援を通じた学びや経験
エレベーターが使えないなど非常時に、寝たきりの方や歩けない方を少人数のスタッフで移動させる方法など、避難方法の演習など
被災地でのボランティア活動
机上訓練は役に立たない
倫理的研修、介護技術の研修等、基本的な事を当たり前になる様になる事。
消防団の加入の促進により、実際の災害現場で活動する機会を少しでも増やす
地域によつての被災リスクはそれぞれ変わるので難しいが、地域ごとのリスクを共有で

きる場面があると良い。地域のコミュニティとの意見交換会等。
実際に経験するのが一番
実際に被災地域の活動に参加する
KAIGO Camp への参加
災害ボランティアで実際の支援を経験すること
日常業務のレベルアップと(寝たきり・要支援者・認知症を有する方 等)多様なクライアントへの対応
ボランティア活動



## 第4章 ヒアリング調査の結果

---

## 1. 介護福祉士養成施設等ヒアリング調査

### (1) 実施対象の一覧

アンケート調査で積極的な取組を確認できた介護福祉士養成施設等を対象とし、ヒアリング7件、追加アンケート 13 件を実施し、災害時の介護に係る教育の具体的な内容や教育実施上の工夫、課題を把握した。

	学校名	所在地	種別	実施方法	実施日
1	白梅学園大学	東京都	4年制大学	ヒアリング	12/6
2	東洋大学	東京都	4年制大学	追加アンケート	—
3	聖隷クリストファー大学	静岡県	4年制大学	追加アンケート	—
4	大阪人間科学大学	大阪府	4年制大学	追加アンケート	—
5	日本赤十字東北看護大学 介護福祉短期大学部	秋田県	短期大学	ヒアリング	1/16
6	静岡県立大学短期大学部	静岡県	短期大学	ヒアリング	12/10
7	中部学院大学短期大学部	岐阜県	短期大学	ヒアリング	1/22
8	富山短期大学	富山県	短期大学	追加アンケート	—
9	佐久大学信州短期大学部	長野県	短期大学	追加アンケート	—
10	名古屋経営短期大学	愛知県	短期大学	追加アンケート	—
11	湘南医療大学 介護福祉別科	神奈川県	短期大学	追加アンケート	—
12	佐賀女子短期大学	佐賀県	短期大学	追加アンケート	—
13	早稲田速記医療福祉専門学校	東京都	専門学校	ヒアリング	12/25
14	東北保健医療専門学校	宮城県	専門学校	追加アンケート	—
15	アール医療福祉専門学校	茨城県	専門学校	追加アンケート	—
16	A 校	徳島県	専門学校	追加アンケート	—
17	平岡介護福祉専門学校	福岡県	専門学校	追加アンケート	—
18	石川県立田鶴浜高校	石川県	福祉系高等学校	ヒアリング	12/9
19	宮城県立迫桜高等学校	宮城県	福祉系高等学校	追加アンケート	—
20	栃木県立真岡北陵高等学校	栃木県	福祉系高等学校	追加アンケート	—

### (2) 実施結果

巻末「介護福祉士養成施設等における災害時の介護に係る教育事例集」第3章を参照。

## 2. 介護福祉士ヒアリング調査

### (1) 実施対象の一覧

アンケート調査で把握した災害時に困難な環境で活動をした介護福祉士5名にヒアリング調査を実施し、災害時の介護福祉士の活動の実態や直面した課題等を把握した。

		経験	勤務地	種別	実施日
1	A氏	能登半島地震(被災)	石川県能登町	高齢入所	12/19
2	B氏	東日本大震災(被災)	福島県南相馬市	高齢訪問	2/12
3	C氏	西日本豪雨(被災)	広島県呉市	居宅介護支援事業所	1/9
4	D氏	西日本豪雨(被災)	愛媛県西予市	障害者支援施設 (訪問・入所・通所)	1/23
5	E氏	能登半島地震(応援) 台風19号(応援) 熊本地震(応援) 東日本大震災(応援)	静岡県	その他 (静岡県介護福祉士会)	12/19

### (2) 実施結果

巻末「介護福祉士養成施設等における災害時の介護に係る教育事例集」第2章を参照。



第5章 介護福祉士養成施設等における  
災害時の介護に係る教育事例集

---

巻末「介護福祉士養成施設等における災害時の介護に係る教育事例集」を参照。

## 第6章 本事業の結果と今後の課題・展望

---

## 1. 本事業の結果

本事業では、介護福祉士養成課程における災害時の介護に係る教育のあり方を検討するため、グループインタビュー、養成施設等アンケート調査、介護福祉士アンケート調査、養成施設等ヒアリング調査、介護福祉士ヒアリング調査を実施し、それらの結果を踏まえて教育事例集を作成した。調査を通じて、災害時の介護に係る教育について、現場実践と養成教育の双方から実態と課題を把握し、今後の教育内容を検討するための基礎資料を得ることができた。

本事業の成果として、第一に、災害時に介護福祉士に求められる力を、「6つの資質・能力」として整理し提示できた点が挙げられる。具体的には、「災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力」「支援に必要な情報を見極め、収集する力」「チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力」「被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力」「自らの役割を見出し、主体的に行動する力」「自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力」の6点である。これは、災害時の活動経験を有する介護福祉士へのグループインタビューをもとに抽出したものであり、災害時の介護に係る教育の狙いや到達目標を考える際の共通の視点を示したものである。

第二に、介護福祉士へのアンケート調査およびヒアリング調査を通じて、災害時の介護福祉士の活動実態を具体的な場面に即して明らかにできた。被災地における介護福祉士の活動は、単に生活支援技術を提供するだけでなく、限られた情報の中で利用者の状態を見極め、他職種や関係機関と連携しながら、継続的に生活を支える営みであった。また、利用者の安全確保、物資不足への対応、プライバシーへの配慮、避難先での受入れ、多職種との連携など、多面的な課題に直面していたことも確認された。こうした実態を把握できたことで、災害時の介護に必要な学びを、抽象論ではなく具体的な実践場面と結び付けて捉えることが可能になったと考えられる。

第三に、介護福祉士養成施設等へのアンケート調査およびヒアリング調査によって、災害時の介護に係る教育の現状と課題が明らかにできた。アンケート調査では、2019年のカリキュラム改正後、約9割の養成施設等が災害に関する内容を扱っている一方で、その実施方法は座学・講義が約9割を占め、被災を想定した演習・訓練は約1割にとどまっていた。また、授業実施上の課題としては、時間の制約、教材の不足、教員自身の知識や経験の不足が多く挙げられた。さらに、「実施したいができていない取組」として「特になし」という回答も少なくなく、何をどの程度まで教育内容として位置づけるべきかについて、なお整理が十分でない養成施設等も存在すると考えられる。

あわせて、本事業では、養成施設等における積極的かつ多様な取組を収集・整理し、教育事例集として取りまとめた点にも意義があると考えられる。介護福祉士養成施設等へのヒアリング調査や追加アンケート調査を通じて、4年制大学、短期大学、専門学校、福祉系高等学校の各学校種別から、講義、グループワーク、事例検討、被災経験者による講話、実習先との連携、HUG等の机上訓練、ハザードマップを用いた学習など、さまざまな教育実践

を把握することができた。これらを教育事例集として整理したことにより、災害時の介護に係る教育は一つの方法に限定されるものではなく、各校の教育課程、地域特性、教員体制等に応じて多様に工夫し得ることを示すとともに、教員には授業実践の参考資料として、生徒・学生には災害時に求められる介護福祉士の役割や実践を具体的に理解するための学習素材として活用できる成果物を提示することができた。

さらに、本事業では、災害時の介護に係る教育を「特別な教育」として切り離すのではなく、平時の学びを災害時の文脈に接続して捉える視点を提示できたことも重要である。教育事例集は、この考え方にに基づき、各校の教育事例を整理しており、養成施設等の教員が授業を検討する際の材料として活用できる実践的成果物となったといえる。

## 2. 今後の課題・展望

今後の課題として第一に挙げられるのは、災害時の介護に係る教育内容を、介護福祉士養成課程全体の中でどのように体系化していくかという点である。本事業では、災害時に介護福祉士に求められる資質・能力や介護福祉士の実践事例、各校の取組を整理し、教育内容を検討するための材料を提示した。一方で、それらをどの科目にどのように埋め込み、どの学年で、どの順序で学ぶことが望ましいのかといった、より具体的な教育体系の提示には至っていない。今後は、既存カリキュラムとの接続関係を踏まえながら、学習内容の構成やシラバス例等を示していくことが求められる。

第二に、現場で発揮できる力につながる教育方法の検討である。教育事例集でも示したとおり、養成施設等で「伝えられている」と認識されている資質・能力と、実際の災害現場で介護福祉士が「発揮できた」と感じる資質・能力の間には一定のギャップが見られた。今後は、知識の伝達にとどまらず、事例検討、演習、地域資源との連携、被災経験者の語りの活用等を通じて、生徒・学生が災害時の状況を自分事として捉え、判断し、行動する力を育む教育のあり方をさらに検討していく必要があるといえる。

第三に、教育を担う教員への支援である。介護福祉士養成施設等へのアンケート調査では、教員自身の知識や経験の不足、教材の不足が課題として挙げられていた。今後は、本事業で作成した事例集の活用に加えて、教材や授業展開例の蓄積などを通じ、各養成施設等が災害時の介護に係る教育を実施・発展できる環境整備が求められると考えられる。

本事業で得られた知見と作成した教育事例集は、介護福祉士養成課程における災害時の介護教育の出発点となりうるものだといえる。今後、各養成施設等における実践の蓄積と共有を通じて、教育内容の具体化と体系化を進め、災害時においても要配慮者の生活と尊厳を支えることのできる介護福祉士の養成につなげていくことが期待される。



## 参考資料

---

# 1. 介護福祉士養成施設等アンケート調査票

S :

災害時の介護教育に関する実態調査

開始

BANK : UA

災害時の介護教育に関する実態調査

はじめにお読みください。

- アンケートの回答には、ブラウザのJavaScriptの設定を有効にする必要があります。
- 【詳細環境 (OS・ブラウザ)】
- Microsoft Windows 10以降
  - Microsoft Edge 最新版
  - Firefox 最新版
  - Google Chrome 最新版
- Macintosh OS X以降
  - Safari 最新版
- iOS 最新版
  - Safari 最新版
- Android 最新版
  - Google Chrome 最新版

※ 上記以外の (OS・ブラウザ) では、正常に動作しない場合がございます。あらかじめご了承ください。

下記のみ手書きのラインの中に「開始」ボタンが表示されない場合は、JavaScriptがOFFになっているか、携帯端末ブラウザではありません。

※ 手書きですが、JavaScriptを無効化後ブラウザタイプを確認後に、ページの更新(F5キー)をお試しください。

本調査は、株式会社日本総研協会総合研究所が、厚生労働省令和7年度社会福祉推進事業の採択を受けて実施する調査研究事業の一環として実施するものです。

<<< 設問の一覧 >>>  
 ご回答いただく設問は、下記より一覧をご確認ください。

<設問一覧>

<<< 回答にあたっての留意事項 >>>

- ・ 回答を途中で中断した場合でも、再度同じID・パスワードでログインすれば、入力を再開することができます。
- ・ 戻るボタンを押すと、その設問の回答内容が破棄されてしまいますので、ご注意ください。(例: Q3を回答後にQ2に戻ると、Q3の回答内容が破棄されます)

<<< お問い合わせ先 >>>

株式会社 日本総研協会総合研究所 福祉・医療・労働政策研究部  
 〒105-0011 東京都港区芝公園2-1-22  
 Tel: 0120-344-343 (何合、番本) ※平日10時~17時(12時~13時を除く)  
 e-mail: k.policy@jmar.co.jp

戻る 開始

0\_10000 <UP> : [TOP画面] TOP画面

災害時の介護教育に関する実態調査

【 2/8 / 100% 】

- ・ 本調査は、介護福祉士養成課程のある学校・施設等を対象に、介護福祉士養成課程の取組について伺うものです。介護福祉士養成課程のない学校・施設等は対象に含まれません。
- ・ ご記入いただきました回答内容は、本事業における施策検討の基礎資料としてのみ利用するものであり、調査目的以外には使用致しません。
- また、本調査の回答内容は統計的に処理を行うため、個人が特定できるような情報を公表することはありません。

戻る 次へ

BANK : Q1

災害時の介護教育に関する実態調査 【 4 問 / 100 問 】

I. 基本情報

**必須** Q1.  
貴校の所在地を教えてください。(1つ選択)

▼▼▼選択して下さい▼▼▼

戻る 次へ

Q.16209 ◀ : [02] Q2

災害時の介護教育に関する実態調査 【 5 問 / 100 問 】

**必須** Q2.  
貴校の学校種別を、以下よりお選びください。(1つ選択)

4年制大学  
 短期大学  
 専門学校  
 福祉系専門学校  
 その他

戻る 次へ

Q.16300 ◀ : [03] Q3

災害時の介護教育に関する実態調査 【 6 問 / 100 問 】

**必須** Q3.  
貴校の介護福祉士養成課程の修業年数を、以下よりお選びください。(1つ選択)

1年  
 2年  
 3年  
 4年  
 その他

戻る 次へ

Q.1040 [04] Q4

災害時の介護教育に関する実感調査

【 8 % / 100 % 】

**必須** Q4.  
貴校の介護福祉士養成課程における、2025年4月現時点の1学年あたりの平均生徒・学生数を教えてください。なお、小数点以下は四捨五入して整数でお答えください。（数値記入）  
※半角数字でご記入ください。

人

戻る 次へ

BANK : Q.1050 Q5 / Q.1060 Q6

災害時の介護教育に関する実感調査

【 8 % / 100 % 】

**II. 介護福祉士養成課程における取組について**  
ここからは、貴校の介護福祉士養成課程における取組について伺います。

<用語について>  
「必須科目」：介護福祉士養成課程のなかで、受講が修了要件になっている科目  
「選択科目」：介護福祉士養成課程のなかで、受講が修了要件になっていない科目（選択必修科目を含む）

<2019年のカリキュラム改正について>  
2019年の介護福祉士養成課程のカリキュラム改正では、『介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き（日本介護福祉士養成施設協会,2019）』において、災害に関する事項が盛り込まれました。  
具体的には、「社会の理解」「介護の基本」「生活支援技術」の「想定される教育内容の例」のなかに、災害に関する事項が記載されています。

**必須** Q5.  
貴校の介護福祉士養成課程では、2019年のカリキュラム改正以前に、災害に関する内容を取っていましたか。（あてはまるものをすべて選択）

必須科目で災害に関する内容を取っていた  
 選択科目で災害に関する内容を取っていた  
 災害に関する内容を取っていません

**必須** Q6.  
貴校の介護福祉士養成課程では、2019年のカリキュラム改正後、災害に関する内容を取っていますか。（あてはまるものをすべて選択）

必須科目で災害に関する内容を取っている  
 選択科目で災害に関する内容を取っている  
 災害に関する内容を取っていません

戻る 次へ

災害時の介護教育に関する実感調査

**必須 Q7.**  
貴校の介護福祉士養成課程において、災害に関する内容を取り上げている科目名をご記入ください。（ない場合は0）（数値記入）  
※半角数字でご記入ください。

科目

戻る 次へ

災害時の介護教育に関する実感調査

**必須 Q8.**  
貴校の介護福祉士養成課程において、災害に関する内容を取り上げている科目について、①科目名、②配当学年、③養成課程のカリキュラム名、④実施方法を教えてください。  
災害に関する内容を取り上げている**すべての科目**についてご回答ください。（それぞれあてはまるものをすべて選択）

前問までの回答はこちら

<例>

①科目名	②配当学年	③養成課程のカリキュラム名		④実施方法
		大学・短期大学・専門学校	高等学校	
例 災害と福祉	<input checked="" type="checkbox"/> 2年 <input checked="" type="checkbox"/> 3年	<input checked="" type="checkbox"/> コミュニケーション技術（領域：介護） <input checked="" type="checkbox"/> 生活支援技術（領域：介護）		<input checked="" type="checkbox"/> 座学・講義 <input checked="" type="checkbox"/> 避難所運営ゲーム等の机上訓練（Hugなど） <input checked="" type="checkbox"/> 被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練
例 介護の基本	<input checked="" type="checkbox"/> 1年	<input checked="" type="checkbox"/> 介護の基本（領域：介護）		<input checked="" type="checkbox"/> 座学・講義 <input checked="" type="checkbox"/> 情報伝達活動・調べ学習 <input checked="" type="checkbox"/> 被災地での支援活動経験者からの講話

①科目名	②配当学年	③養成課程のカリキュラム名		④実施方法
		大学・短期大学・専門学校	高等学校	
<input type="text"/>	<input type="checkbox"/> 1年 <input type="checkbox"/> 2年 <input type="checkbox"/> 3年 <input type="checkbox"/> 4年	<input type="checkbox"/> 人間の尊厳と自立（領域：人間と社会） <input type="checkbox"/> 人間関係とコミュニケーション（領域：人間と社会） <input type="checkbox"/> 社会の理解（領域：人間と社会） <input type="checkbox"/> 介護の基本（領域：介護） <input type="checkbox"/> コミュニケーション技術（領域：介護） <input type="checkbox"/> 生活支援技術（領域：介護） <input type="checkbox"/> 介護過程（領域：介護） <input type="checkbox"/> 介護総合演習（領域：介護） <input type="checkbox"/> 介護実習（領域：介護） <input type="checkbox"/> こころとからだのしくみ（領域：こころとからだのしくみ） <input type="checkbox"/> 発達と老化の理解（領域：こころとからだのしくみ） <input type="checkbox"/> 認知症の理解（領域：こころとからだのしくみ） <input type="checkbox"/> 障害の理解（領域：こころとからだのしくみ） <input type="checkbox"/> 医療的ケア <input type="checkbox"/> その他	<input type="checkbox"/> 社会福祉基礎（領域：人間と社会） <input type="checkbox"/> 介護福祉基礎（領域：介護） <input type="checkbox"/> コミュニケーション技術（領域：介護） <input type="checkbox"/> 生活支援技術（領域：介護） <input type="checkbox"/> 介護過程（領域：介護） <input type="checkbox"/> 介護総合演習（領域：介護） <input type="checkbox"/> 介護実習（領域：介護） <input type="checkbox"/> こころとからだの理解（領域：こころとからだのしくみ） <input type="checkbox"/> 医療的ケア <input type="checkbox"/> その他	<input type="checkbox"/> 座学・講義 <input type="checkbox"/> 映像学習 <input type="checkbox"/> 情報伝達活動・調べ学習 <input type="checkbox"/> グループワーク・グループディスカッション <input type="checkbox"/> 避難所運営ゲーム等の机上訓練（HUGなど） <input type="checkbox"/> 実習先施設での災害時対応マニュアル等の確認・訓練参加 <input type="checkbox"/> 被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練 <input type="checkbox"/> 防災施設への見学・体験活動 <input type="checkbox"/> 地域の防災訓練等への参加 <input type="checkbox"/> 被災地での支援活動経験者からの講話 <input type="checkbox"/> 被災地や被災した福祉施設等の見学 <input type="checkbox"/> その他 <input type="text"/>

## 災害時の介護教育に関する実証調査

【 79 % / 100 % 】

## 必須 Q9.

災害に関する内容を扱う授業で想定している「被災状況」として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）  
 ※ここでの「所属先」とは生徒・学生が将来所属する福祉施設・事業所を指します。

- 建物の全壊または半壊
- 建物の一部損壊
- 停電・断水・ガス停止などライフラインの被害
- 屋内の浸水
- 付近の道路が通行できない
- 通信障害（電話・インターネット等）
- 施設の一部機能が使用できない（風呂場、トイレ、厨房など）
- 所属先の職員に死者や行方不明者がいる
- 所属先の職員にけが等の被害がある
- 所属先の利用者に死者や行方不明者がいる
- 所属先の利用者にけが等の被害がある
- その他
- とくになし

戻る

次へ

## 災害時の介護教育に関する実証調査

【 81 % / 100 % 】

## 必須 Q10.

災害に関する内容を扱う授業で想定している「活動場圃」として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）  
 ※ここでの「活動場圃」とは、災害時に介護福祉士が支援に入ることが想定される対象や場所を指します。  
 ※ここでの「所属先」とは生徒・学生が将来所属する福祉施設・事業所を指します。

- 所属する福祉施設・事業所での被災対応
- 所属する福祉施設・事業所の利用者の自宅での被災対応
- 所属先以外の、被災した福祉施設・事業所での支援活動
- 所属先以外の、被災した要配慮者の自宅での支援活動
- 一般避難所での活動
- 福祉避難所での活動
- DWAT等の災害支援チームにおける活動
- 高校の所在地域での活動
- その他

戻る

次へ

災害時の介護教育に関する実証調査

[ 82 % / 100 % ]

**必須** Q11.

災害に関する内容を扱う授業のなかで、貴校の所在地域の災害リスクを踏まえた授業のテーマを設定していますが。(1つ選択)

- はい
- いいえ

戻る

次へ

災害時の介護教育に関する実証調査

[ 83 % / 100 % ]

**必須** Q12.

災害に関する内容を扱う授業を実施する際に感じている課題として、該当するものをお選びください。(あてはまるものをすべて選択)

- 授業時間が限られており、十分に時間を確保できない
- 災害に関する体系的な教材・資料が不足している
- 教員自身の災害に関する教育の知識・経験が十分でない
- 教員自身の災害現場における介護活動の知識・経験が十分でない
- 他学科との連携ができていない
- 他機関との連携ができていない
- 生徒・学生の災害に関する実感が薄く、学びが抽象的になりやすい
- 実践的な訓練の機会が確保しにくい
- 他の養成施設等での取り組みを知る機会がない
- 被災経験のある生徒・学生への配慮が難しい
- その他
- 特に課題は感じていない

戻る

次へ

## 災害時の介護教育に関する実証調査

【 82 / 100 問 】

## 必読 Q13.

災害に関する内容を扱う授業によって、下記の資質・能力をどの程度教育できていると感じますが。（それぞれ1つずつ選択）

お示しした3つの資質・能力は、本事業において実施した災害時の活動経験のある介護福祉士へのグループインタビューから抽出したものです。それぞれの資質・能力は具体的に下記のような内容を想定しています。ご回答の際は、以下の内容を踏まえてご記入ください。

資質・能力	想定している内容
災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>災害時という非日常においても、要配慮者の自立に向けて、日常の最善以上に配慮を行うこと</li> <li>専門性を活かし、平時と同様に要配慮者との対応やかかわりを大切にする</li> <li>支援者の都合ではなく、要配慮者の自立を中心とした視点で、長期的な生活再建を見据えた実践を行うこと</li> </ul>
支援に必要な情報を見極め・収集する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援に必要な情報を考え、具体的な情報を収集すること</li> <li>マニュアルや書類に頼らず、実際の場から要配慮者の状況を読み取る</li> <li>引き継いだ情報や現場で直接得た情報を正確に把握すること</li> </ul>
チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力	<ul style="list-style-type: none"> <li>自身が持つ情報を、他職種や次の支援者へ継承につなぐこと</li> <li>記録や伝達を通じて、支援の連続性と多職種間の連携を支えること</li> <li>情報をつなげ、チームで要配慮者を支えること</li> </ul>
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	<ul style="list-style-type: none"> <li>想定外の状況や物資不足に直面しても、あるもので何が出来るかを考え、柔軟にやり方を考えて対応すること</li> <li>知識や技術だけでなく、現場の状況に応じて適切な選択や判断を行う「知恵」を発揮すること</li> <li>起こっている状況を冷静かつ柔軟に受け入れ、多様なアイデアで課題を乗り越えようとする姿勢を持つこと</li> </ul>
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>正解やマニュアルがない状況でも、自ら考え、状況に応じて必要な行動を判断・実行すること</li> <li>指示待ちではなく、自分でできることを見極め、役割を自発的に担おうとする姿勢を持つこと</li> </ul>
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	<ul style="list-style-type: none"> <li>被災地で、自分で自分の安全を守る</li> <li>被災環境に適応しながら、自分の心身の健康などのコンディションを整えること</li> </ul>

ここに回答→	十分に伝えられている	ある程度伝えられている	あまり伝えられていない	伝えられていない
災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
支援に必要な情報を見極め・収集する力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

戻る

次へ

BANK : Q14

災害時の介護教育に関する実態調査

【 86 % / 100 % 】

III.貴校の取組について  
ここからは、貴校の災害に関する授業や訓練、イベント等の取組について伺います。

**必須** Q14.  
貴校では、災害に関する取組（授業、訓練、イベント等）を実施していますが。（1つ選択）

はい

いいえ

戻る      次へ

BANK : Q15

災害時の介護教育に関する実態調査

【 87 % / 100 % 】

【Q14で「はい」を選択した方にのみ表示】

**必須** Q15.  
貴校の災害に関する取組（授業、訓練、イベント等）のなかで連携している機関として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

同じ学校の他の学部・学科

同一法人の他校（高大連携含む）

別法人の他校（高大連携含む）

福祉施設・事業所

消防団・救急隊

警察

医療機関

行政（福祉部局）

行政（防災部局）

社会福祉協議会

地域団体（自治会、町内会、自主防災組織等）

地域団体（フードバンク、NPO、ボランティア団体等）

その他

とくになし

戻る      次へ

BANK : Q16

災害時の介護教育に関する実態調査

【 88 % / 100 % 】

【問15で「とくになし」以外を選択した方にのみ表示】

**必須 Q16.**  
貴校の災害に関する取組（授業、訓練、イベント等）のなかで、他機関と連携して実施している内容として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

合同での学習、研修の開催  
 貴校で実施する座学・講義への招待  
 合同での訓練・演習の実施  
 連携先が実施する訓練・演習への参加  
 その他

戻る 次へ

BANK : Q.11710 <Q> Q17-1 / Q.11720 <Q> Q17-2

災害時の介護教育に関する実態調査

【 90 % / 100 % 】

**必須 Q17.**  
貴校の災害に関する取組（授業、訓練、イベント等）について、①介護福祉士養成課程での特徴的な取組、②介護福祉士養成課程以外での特徴的な取組、をそれぞれ1つ教えてください。（自由記述）

①介護福祉士養成課程での特徴的な取組

②介護福祉士養成課程以外での特徴的な取組

戻る 次へ

Q.11730 <Q> : [017-1] Q17-1-1

災害時の介護教育に関する実態調査

【 91 % / 100 % 】

**必須 Q17-1.**  
貴校の災害に関する取組（授業、訓練、イベント等）として、介護福祉士養成課程内外問わず、実施したいができていない取組を1つ教えてください。

戻る 次へ

BANK : Q18

災害時の介護教育に関する実証調査

【 93 問 / 100 問 】

ここからは貴校の教員や学生の災害時の支援活動の経験を伺います。差し支えない範囲で、ご回答ください。

**必須 Q18.**  
 貴校では、**学校の業務の一環として**、災害時の支援活動において介護福祉士養成課程の**担当教員**を被災地に派遣したことはありますか。派遣したことがある場合は、派遣した災害として該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

令和6年能登半島地震  
 令和元年台風第19号  
 平成30年7月豪雨（西日本豪雨災害）  
 平成28年熊本地震  
 東日本大震災  
 その他の災害   
 派遣したことはない

Q.1190 018 : [018] Q19

災害時の介護教育に関する実証調査

【 94 問 / 100 問 】

**必須 Q19.**  
 貴校では、**学校の教育の一環として**、災害時の支援活動において介護福祉士養成課程に**所属する生徒・学生**を被災地に派遣したことはありますか。派遣したことがある場合は、派遣した災害として該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

令和6年能登半島地震  
 令和元年台風第19号  
 平成30年7月豪雨（西日本豪雨災害）  
 平成28年熊本地震  
 東日本大震災  
 その他の災害   
 派遣したことはない

## 災害時の介護教育に関する実証調査

【 95 % / 100 % 】

## IV. ヒアリングご協力をお願い

このたび、介護福祉士養成課程における災害に関する取組事例を収集することを目的に、下記概要にて、ヒアリングを実施いたします。貴校の取組についてお聞かせいただくことにより、今後の介護福祉士養成課程における教育内容の検討に活用させていただきます。存じます。

所要時間：1時間程度

実施方法：ZOOM等を用いたオンライン上での実施

実施時期：2025年11月～12月

本調査への参加は任意であり、ご協力いただけない場合でも、今後の不利益等は一切ありません。インタビューの内容については、内容をご確認いただいた上で、報告書にて公表、また今後の資料として活用させていただきます。他の目的に利用することはありません。

必須 Q20.

今後実施する、災害に関する取組に関するヒアリングにご協力いただくことは可能ですか。（1つ選択）

- 協力してもよい
- 協力しない

戻る

次へ

## 災害時の介護教育に関する実証調査

【 97 % / 100 % 】

必須 Q21.

ご協力いただける場合は、ご連絡先等をご記入ください。

学校名	<input type="text"/>
ご担当者名	<input type="text"/>
電話番号	<input type="text"/>
メールアドレス	<input type="text"/>

戻る

次へ

## 災害時の介護教育に関する実証調査

【 98 % / 100 % 】

「回答送信」ボタンを押すと、回答内容が登録され、変更ができなくなります。  
回答内容を変更される場合は、「戻る」のボタンを押してください。  
このままでよろしければ、「回答送信」のボタンを押してください。

戻る

回答送信

## 2. 介護福祉士一次アンケート調査票

S :

災害時の介護活動経験に関する調査

開始

BANK : UA

災害時の介護活動経験に関する調査

はじめにお読みください。

- アンケートの回答には、ブラウザのJavaScriptの設定を有効にする必要があります。

【推奨環境 (OS・ブラウザ)】

- Microsoft Windows10以降
  - ・ Microsoft Edge 最新版
  - ・ Firefox 最新版
  - ・ Google Chrome 最新版
- Macintosh OS X以降
  - ・ Safari 最新版
- iOS 最新版
  - ・ Safari 最新版
- Android 最新版
  - ・ Google Chrome 最新版

※ 上記以外の (OS・ブラウザ) では、正常に動作しない場合がございます。あらかじめご了承ください。

下記のみず色のラインの中に「開始」ボタンが表示されない場合は、JavaScriptがOFFになっているか、推奨環境ブラウザではありません。

お手数ですが、JavaScriptを設定後/ブラウザタイプ確認後に、ページの更新 (**F5** キー) をお願ひ致します。

開始

## 災害時の介護活動経験に関する調査

【 22 % / 100% 】

本調査は、株式会社日本能率協会総合研究所が、厚生労働省令和7年度社会福祉推進事業の採択を受けて実施する調査研究事業の一環として実施するものです。

### <<< 注意事項 >>>

- ・回答の保存はできませんので、お時間のあるときに最後までご回答をお願いいたします。
- ・ご回答は、お一人につき1回とさせていただきます。仮に複数の団体等から本調査への回答依頼があった場合でも、重複してのご回答は不要です。

### <<< 問い合わせ先 >>>

株式会社 日本能率協会総合研究所 福祉・医療・労働政策研究部  
〒105-0011 東京都港区芝公園3-1-22  
Tel : 0120-344-343 (河合、富本)  
e-mail : k\_policy@jmar.co.jp

次 ^

## 災害時の介護活動経験に関する調査

【 33% / 100% 】

## 【本調査における用語の定義】

本調査では、以下のとおり用語を定義しています。ご回答の際は、これらの定義に基づいてお答えください。

- 「被災側」：発災当時の勤務先が自然災害により被災し、平時からかかわりのある要配慮者の支援を継続した方
- 「応援側」：自然災害により被災した地域において、平時からのかかわりがない要配慮者の支援をおこなった方
- 「勤務先」：平時における主な勤務場所

## &lt; 「勤務先」の考え方 &gt;

**必須** Q1.

災害時に、被災した要配慮者への介護活動に従事した経験はありますか。介護福祉士の資格を取得した後のご経験について、該当するものをすべてお選びください。（複数選択可）

- 被災側として介護活動に従事した
- 応援側として介護活動に従事した
- 災害時の活動経験はない

次へ

## 災害時の介護活動経験に関する調査

【 44 % / 100% 】

Q1で介護活動に従事したと回答した方に伺います。

**必須** Q2.

あなたが介護活動に従事した災害を以下からすべてお選びください。（複数選択可）

- 令和6年能登半島地震
- 令和元年台風第19号
- 平成30年7月豪雨（西日本豪雨災害）
- 平成28年熊本地震
- 東日本大震災
- その他の災害

次 へ

## 災害時の介護活動経験に関する調査

【 55 % / 100% 】

Q1で被災側として介護活動に従事したと回答した方に伺います。  
複数の災害において被災経験がある場合は、直近の災害についてお答えください。**必須** Q3.

発災時にあなたがいた場所を以下よりお選びください。（1つ選択）

- 勤務先の施設・事業所（送迎中も含む）
- 勤務先の利用者の自宅（移動中も含む）
- 上記以外の場所

次 へ

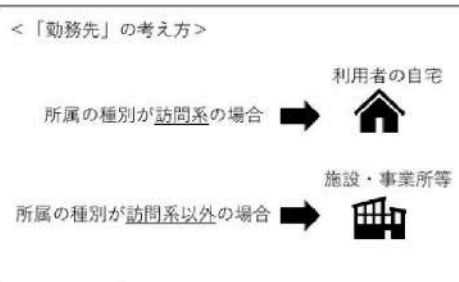
## 災害時の介護活動経験に関する調査

【 66 % / 100% 】

## 【本調査における用語の定義】

本調査では、以下のとおり用語を定義しています。ご回答の際は、これらの定義に基づいてお答えください。

- 「被災側」：発災当時の勤務先が自然災害により被災し、平時からかかわりのある要配慮者の支援を継続した方
- 「応援側」：自然災害により被災した地域において、平時からのかかわりがない要配慮者の支援をおこなった方
- 「勤務先」：平時における主な勤務場所



Q1で被災側として介護活動に従事したと回答した方に伺います。

**必須** Q4.

発災直後における、あなたの勤務先の被災状況について、該当するものをすべてお選びください。（複数選択可）

- 建物が全壊または半壊した
- 建物に一部損壊があった
- 停電・断水・ガス停止などライフラインの被害があった
- 屋内に浸水があった
- 付近の道路が通行できなくなった
- 通信障害（電話・インターネット等）があった
- 施設の一部機能が使用できなくなった（風呂場、トイレ、厨房など）
- 家具等の落下や破損があった
- 職員に死者や行方不明者がいた
- 職員にけが等の被害があった
- 利用者に死者や行方不明者がいた
- 利用者にけが等の被害があった
- その他の被害があった
- 特に大きな被害はなかった

次へ

## 災害時の介護活動経験に関する調査

【 77 % / 100% 】

二次調査（アンケート調査）ご協力をお願い

このたび、介護福祉士による災害時の介護活動の実態を明らかにすることを目的に、下記概要にて、二次調査（アンケート調査）を実施いたします。  
皆様のご経験やご意見をお聞かせいただくことにより、今後の災害支援体制の整備や介護福祉士の専門的役割の検討に活用させていただきます。

設問数：最大40問程度（被災側、応援側の場合は20問程度）  
所要時間目安：20分程度（被災側、応援側の場合は10分程度）  
回答方法：メールにてご案内するURLからWebサイト上でご回答  
実施時期：2025年9月上旬～9月下旬（予定）

本調査への参加は任意であり、ご協力いただけない場合でも、今後の不利益等は一切ありません。また、回答中に不快に感じるような項目があった場合には、途中で中止していただいても構いません。

ご回答いただいた内容は、個人が特定されない形で厳重に管理・分析し、調査結果は報告書や学術的な発表等において匿名化された形で使用いたします。得られた情報は、あくまで本研究の目的の範囲内に限って使用し、他の目的には一切使用いたしません。

**必須** Q5.

今後実施する二次調査にご協力いただけますか。（1つ選択）

- 協力してもよい
- 協力しない

次へ

## 災害時の介護活動経験に関する調査

【 88 % / 100% 】

**必須** Q6.

ご協力いただける方は、お名前とご連絡先をご記入ください。

お名前	<input type="text"/>
連絡先メールアドレス	<input type="text"/>

回答送信

### 3. 介護福祉士二次アンケート調査票



### 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 4% / 100% ]

本調査は、株式会社日本能率協会総合研究所が、厚生労働省令和7年度社会福祉推進事業の採択を受けて実施する調査研究事業の一環として実施するものです。

#### <<< 設問の一覧 >>>

ご回答いただく質問は、下記より一覧をご確認ください。

<一覧はこちら>

#### <<< 回答にあたっての留意事項 >>>

- ・回答を途中で中断した場合でも、再度同じID・パスワードでログインすれば、入力を再開することができます。
- ・戻るボタンを押すと、その設問の回答内容が破棄されてしまいますので、ご注意ください。（例：問3を回答後に問2に戻ると、問3の回答内容が破棄されます）

#### <<< 問い合わせ先 >>>

株式会社 日本能率協会総合研究所 福祉・医療・労働政策研究部  
〒105-0011 東京都港区芝公園3-1-22  
Tel : 0120-344-343 (河合、高木) ※平日10時～17時(12時～13時を除く)  
e-mail : k\_policy@jmar.co.jp

戻る

次へ

### 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 6% / 100% ]

#### <<< 注意事項 >>>

- ・本調査では、過去の災害時の体験についてお伺いする質問項目が含まれております。そのため、ご自身の記憶を思い起こす中で、精神的なご負担を感じられる可能性があることについて、あらかじめご理解いただきますようお願い申し上げます。
- ・調査へのご協力には完全に任意であり、途中で回答を中止しても一切の不利益はありません。ご自身の体調やお気持ちに無理のない範囲でご回答いただけますと幸いです。
- ・ご記入いただきました回答内容は、本事業における施策検討の基礎資料としてのみ利用するものであり、調査目的以外には使用致しません。また、本調査の回答内容は統計的に処理を行うため、個人が特定できるような情報を公表することはございません。

戻る

次へ

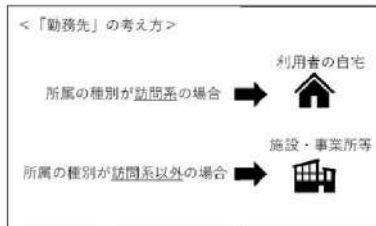
## 災害時の介護活動に関する実態調査

【 8% / 100% 】

## 【本調査における用語の定義】

本調査では、以下のとおり用語を定義しています。ご回答の際は、これらの定義に基づいてお答えください。

- 「被災側」：発災当時の勤務先が自然災害により被災し、平時からかかわりのある要配慮者の支援を継続した方
- 「応援側」：自然災害により被災した地域において、平時からのかかわりが無い要配慮者の支援をおこなった方
- 「勤務先」：平時における主な勤務場所



## I. 被災当時の所属の基本情報

ここからは、あなたが介護福祉士の資格を取得した後、「被災側」として介護活動に従事した災害についてお答えください。複数の災害において被災経験がある場合は、直近の災害についてお答えください。

## 必須 Q1.

あなたが「被災側」として介護活動に従事した災害を以下からお選びください。（1つ選択）

- 令和6年能登半島地震
- 令和元年台風第19号
- 平成30年7月豪雨（西日本豪雨災害）
- 平成28年熊本地震
- 東日本大震災
- その他の災害

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

10% / 100%

**必須** Q2.

被災当時の所属施設・事業所の種別として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

## 高齢者

- 訪問系（主な勤務場所が利用者の自宅）
- 通所系（主な勤務場所が施設・事業所）
- 入所系（主な勤務場所が施設・事業所）
- 複合施設（小規模多機能型居宅介護など含む）
- 居宅介護支援事業所
- その他

## 障害児・者

- 訪問系（主な勤務場所が利用者の自宅）
- 通所系（主な勤務場所が施設・事業所）
- 入所系（主な勤務場所が施設・事業所）
- その他

## その他

- 病院
- 行政・社会福祉協議会
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

12% / 100%

**必須** Q3.

被災当時の所属における、被災前のあなたの主な業務を以下よりお選びください。（1つ選択）

- 相談業務
- 介護業務
- 施設長・管理者等の管理業務
- その他の業務

戻る

次へ

災害時の介護活動に関する実態調査

[ 14% / 100% ]

**必須** Q4-1.

被災当時の所属施設・事業所の所在地を教えてください。(1つ選択)

▼▼▼選択して下さい▼▼▼

戻る

次へ

災害時の介護活動に関する実態調査

[ 16% / 100% ]

**必須** Q4-2.

被災当時の所属施設・事業所の所在地を教えてください。(1つ選択)

▼▼▼選択して下さい▼▼▼

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 18% / 100% ]

**必須** Q5.

発災前に、被災当時の所属施設・事業所が災害に備えて実施していたこととして、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 災害時対応マニュアル・BCPの策定
- 避難訓練・安否確認訓練などの実施
- 発災時の職員・利用者との連絡体制の整備
- 要配慮者ごとの個別避難計画の策定
- 地域防災計画や福祉避難所運営方針等の策定への参画・協議
- 行政機関との連携
- 他の福祉施設との連携
- 地縁団体（自治会、町内会、自主防災組織等）との連携
- 地域団体（フードバンク、NPO、ボランティア団体等）との連携
- その他
- とくになし
- わからない

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 20% / 100% I

Q5で「災害時対応マニュアル・BCPの策定」を選択した方に伺います

**必須** Q6.

発災前に、災害時対応マニュアルやBCPで定めていた事項として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

## 平時の対応

- 建物・設備の安全対策
- 電気が止まった場合の対策
- ガスが止まった場合の対策
- 水道が止まった場合の対策
- 通信が麻痺した場合の対策
- システムが停止した場合の対策
- 衛生面（トイレ等）の対策
- 必需品の備蓄
- 資金手当て

## 緊急時の対応

- BCPの発動基準
- 行動基準
- 対応体制
- 対応拠点
- 安否確認
- 職員の参集基準
- 施設内外での避難場所・避難方法
- 重要業務の継続
- 職員の管理
- 復旧対応
- サービス種別ごとの固有事項

## 他施設との連携

- 連携体制の構築
- 連携対応

## 地域との連携

- 被災時の職員派遣
- 福祉避難所の運営

戻る

次へ

BANK : 07

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 22% / 100% ]

### II. 所属施設・事業所等の被災状況

#### 必須 Q7.

発災時にあなたがいた場所を以下よりお選びください。(1つ選択)

- 勤務先の施設・事業所(送迎中も含む)
- 勤務先の利用者の自宅(移動中も含む)
- あてはまるものはない

戻る

次へ

BANK : 08

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 24% / 100% ]

Q7で「勤務先の施設・事業所(送迎中も含む)」「勤務先の利用者の自宅(移動中も含む)」を選択した方に伺います

#### 必須 Q8.

発災後、勤務先の利用者を避難所等へ移送しましたが。(1つ選択)

- はい
- いいえ

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

| 26% / 100% |

Q8で「はい」を選択した方に伺います

**必須** Q9.

勤務先の利用者を最初に避難所等へ移送したのは、発災から何日後でしたか。（1つ選択）

- 当日（事前移送を含む）
- 1～3日後
- 4～7日後
- 8～14日後
- 15日以上後
- 覚えていない

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

| 28% / 100% |

Q7で「勤務先の施設・事業所（送迎中も含む）」「勤務先の利用者の自宅（移動中も含む）」を選択した方に伺います

**必須** Q10.

発災直後における、勤務先の利用者の被災状況として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 軽傷を負った
- 重傷を負った
- 救助が必要になった（下敷きになった、閉じ込められたなど）
- 緊急搬送が必要になった
- 精神的に不安定な状態になった（不眠、パニックなど）
- 安否が確認できない利用者がいた
- とくに大きな被害はなかった

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 30% / 100% I

すべての方に伺います

**必須** Q11.

発災後のそれぞれの時期における、勤務先での食料品や生活物資の不足状況を以下よりお選びください。（それぞれ1つずつ選択）

ヨコに回答→	大きく不足した	やや不足した	十分だった	わからない
当日	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
1～3日後	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4～7日後	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
8～14日後	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
15日以上後	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 32% / 100% I

**必須** Q12.

被災当時の所属施設・事業所の、発災後の時期別の運営状況を、以下よりお選びください。（それぞれ1つずつ選択）

&lt;用語について&gt;

「緊急期」：生命・安全の確保をおこなう時期

「応急期」：ライフラインや公共交通機関が復旧し始め、生活の安定を目指す時期

「復旧期」：ライフラインがほぼ復旧し、生活・地域の再建を目指す時期

「復興期」：生活・地域の再構築を目指す時期

	通常通りのサービス運営をした	一部のサービスを制限しながら運営した	業務を休止した	廃業した	別施設と連携・統合して運営した
ここに回答→					
緊急期	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
応急期	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
復旧期	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
復興期	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 34% / 100% I

**必須 Q13.**

被災当時の所属施設・事業所で、次の①～③に該当することはありましたが、また、それぞれの項目で「はい」と回答した場合、最初に応援を受けた、もしくは完全に復旧したのは発災から何日後でしたか。（それぞれ1つ選択）

**① 自施設以外の応援職員を受け入れた**

- はい  
 いいえ

**最初に受け入れた時期**

※2回クリックすると、チェックを外すことができます。

- 当日  
 1～3日後  
 4～7日後  
 8～14日後  
 15日以上後  
 覚えていない

**② 食料品や生活物資の応援を受けた**

- はい  
 いいえ

**最初に受けた時期**

※2回クリックすると、チェックを外すことができます。

- 当日  
 1～3日後  
 4～7日後  
 8～14日後  
 15日以上後  
 覚えていない

**③ ライフライン（電気、ガス、水）が被害を受けた**

- はい  
 いいえ

**完全に復旧した時期**

※2回クリックすると、チェックを外すことができます。

- 当日  
 1～3日後  
 4～7日後  
 8～14日後  
 15日以上後  
 覚えていない

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 36% / 100% ]

Q13 「①自施設以外の応援職員を受け入れた」で「はい」を選択した方に伺います

**必須** Q14.

自施設以外から応援職員を受け入れるにあたって生じた課題として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 人数が足りなかった
- 勤務時間が足りなかった
- 派遣期間が短かった
- 専門性や経験が求めるものと異なっていた
- 自施設のルールや介護の方針を十分に尊重してもらえなかった
- その他
- とくに課題はなかった

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 38% / 100% ]

すべての方に伺います

**必須** Q15.

被災当時の所属施設・事業所では、発災後のどの時期から平時に近い状態に戻りましたか。下記の項目について、あなたの実感にあてはまるものを以下よりお選びください。（それぞれ1つずつ選択）

&lt;用語について&gt;

「緊急期」：生命・安全の確保をおこなう時期

「応急期」：ライフラインや公共交通機関が復旧し始め、生活の安定を目指す時期

「復旧期」：ライフラインがほぼ復旧し、生活・地域の再建を目指す時期

「復興期」：生活・地域の再構築を目指す時期

ここに回答→	緊急期	応急期	復旧期	復興期
利用者数に対する支援者数のバランス	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
利用者のニーズに対する専門性の担保	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
休息や交代のための人的余裕	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
日々の生活支援を考えるための余裕	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
利用者の自立支援を考えるための余裕	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 40% / 100% I

## III. あなた自身の被災状況

**必須** Q16.

発災直後のあなたの被害状況として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 自宅が全壊もしくは半壊した
- 自宅に一部損壊があった
- 自宅が停電・断水・ガス停止などライフラインに被害があった
- 自宅への浸水があった
- 自身がけがや病気になった
- 自身が精神的に不安定な状態になった
- 家族にけがや病気などの人的被害があった
- 経済的に見通しが立たない状況になった
- その他の被害があった
- とくに大きな被害はなかった

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 42% / 100% ]

**必須** Q17.

発災後の時期別のあなたの勤務体制や勤務時間を以下よりお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

<用語について>

「緊急期」：生命・安全の確保をおこなう時期

「応急期」：ライフラインや公共交通機関が復旧し始め、生活の安定を目指す時期

「復旧期」：ライフラインがほぼ復旧し、生活・地域の再建を目指す時期

「復興期」：生活・地域の再構築を目指す時期

ココに回答→	通常通りのシフトで勤務した	泊まり込みで勤務した（連続勤務）	通常より長時間の勤務となった	勤務を中断・制限した	あてはまるものはない
緊急期	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
応急期	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
復旧期	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
復興期	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 44% / 100% ]

## IV. 被災した環境での介護過程の展開

**必須** Q18.

発災から1カ月間で、あなたが要配慮者を支援した場所として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

<用語について>

「1.5次避難所」：被災地の避難所等から2次避難所に移るまでの一時的な滞在を想定した避難所（地域による運用差あり）

- 所属する施設・事業所
- 所属先の利用者の自宅
- 一般避難所
- 所属以外の福祉避難所
- 1.5次避難所
- その他

戻る

次へ

災害時の介護活動に関する実態調査

[ 45% / 100% ]

**必須** Q19.

発災から1カ月間で、あなたが支援した要配慮者を以下よりお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 高齢者
- 認知症の人
- 障害児・者
- 医療的ケア児・者
- 精神疾患を有する人
- 乳幼児
- 妊産婦
- 日本語でのコミュニケーションに支援が必要な人
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 48% / 100% ]

**必須** Q20.

発災後、対応した要配慮者の課題として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 食事に関すること
- 排泄に関すること
- 入浴に関すること
- 着替えに関すること
- 移動に関すること
- 押除・洗濯に関すること
- 薬の不足、服薬管理
- 医療的なケア
- 持病の悪化
- 認知機能の低下・認知症の悪化
- 不安定な精神状態
- 孤立・孤独
- 本人と家族との連絡・コミュニケーション
- 他の被災者とのかわり
- プライバシーの確保
- 自傷・他害のリスク
- 避難所への移動
- 避難所からの移動
- 生活環境の変化への適応
- 衛生状態の保持・感染症対策
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 50% / 100% I

**必須** Q21.

発災後、解決が難しくかったと感じた要配慮者の課題として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 食事に関すること
- 排泄に関すること
- 入浴に関すること
- 着替えに関すること
- 移動に関すること
- 押除・洗濯に関すること
- 薬の不足、服薬管理
- 医療的なケア
- 持病の悪化
- 認知機能の低下・認知症の悪化
- 不安定な精神状態
- 孤立・孤独
- 本人と家族との連絡・コミュニケーション
- 他の被災者とのかわり
- プライバシーの確保
- 自傷・他害のリスク
- 避難所への移動
- 避難所からの移動
- 生活環境の変化への適応
- 衛生状態の保持・感染症対策
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 52 % / 100% ]

**必須** Q22.

発災後、活動のなかで連携した外部機関として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 行政（福祉部局）
- 行政（防災部局）
- 他の福祉施設
- 消防団・救急隊
- 警察
- 医療機関
- 社会福祉協議会
- 地縁団体（自治会、町内会、自主防災組織等）
- 地域団体（フードバンク、NPO、ボランティア団体等）
- 災害派遣福祉チーム（DWAT・DCAT）
- その他
- 連携していない

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 54 % / 100% ]

Q22で「連携していない」以外を選択した方に伺います

**必須** Q23.

発災後の活動において、外部機関との連携のなかで生じた課題として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 支援の要請に対して、即時対応がなされなかった
- 要配慮者や避難所の避難者の情報（名簿など）が共有されなかった
- 支給された食料品や生活物資が、求める量や質に比べて不十分だった
- 応援を要請されたが、人や物資の支援を出せなかった
- 連携の場で介護福祉職の意見が反映されにくかった
- その他
- とくに課題はなかった

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 56% / 100% ]

## V. 応援活動における介護過程の展開

ここからは、あなたが介護福祉士の資格を取得した後、「応援側」として介護活動に従事した災害についてお答えください。複数の災害が該当する場合は、これまでの経験を総合してお答えください。

**必須** Q24.

あなたが応援活動に従事した時期として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

<用語について>

- 「緊急期」：生命・安全の確保をおこなう時期
- 「応急期」：ライフラインや公共交通機関が復旧し始め、生活の安定を目指す時期
- 「復旧期」：ライフラインがほぼ復旧し、生活・地域の再建を目指す時期
- 「復興期」：生活・地域の再構築を目指す時期

- 緊急期
- 応急期
- 復旧期
- 復興期

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 58% / 100% ]

**必須** Q25.

あなたが応援活動に従事した場所として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

<用語について>

「1.5次避難所」：被災地の避難所等から2次避難所に移るまでの一時的な滞在を想定した避難所（地域による運用差あり）

- 被災した施設・事業所
- 要配慮者の自宅、仮設住宅
- 一般避難所
- 福祉避難所
- 所属施設・事業所
- 1.5次避難所
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

【 60% / 100% 】

**必須** Q26.

あなたが応援活動で支援した要配慮者を以下よりすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 高齢者
- 認知症の人
- 障害児・者
- 医療的ケア児・者
- 精神疾患を有する人
- 乳幼児
- 妊産婦
- 日本語でのコミュニケーションに支援が必要な人
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

【 62% / 100% 】

**必須** Q27.

これまでの応援活動において、活動開始時点で明確だったものとして、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 被災地の被害状況
- 活動する場所や支援対象者
- 被災地で不足している食料品や生活物資
- 被災地での指揮命令系統や活動内容
- 要配慮者の基礎情報（本人特性、既往歴、家族構成など）
- 被災地の団体や行政との連携・連絡方法
- あてはまるものはない

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 64% / 100% I

**必須** Q28.

応援活動のなかで対応した要配慮者の課題として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 食事に関すること
- 排泄に関すること
- 入浴に関すること
- 着替えに関すること
- 移動に関すること
- 押除・洗濯に関すること
- 薬の不足、服薬管理
- 医療的なケア
- 持病の悪化
- 認知機能の低下・認知症の悪化
- 不安定な精神状態
- 孤立・孤独
- 本人と家族との連絡・コミュニケーション
- 他の被災者とのかわり
- プライバシーの確保
- 自傷・他害のリスク
- 避難所への移動
- 避難所からの移動
- 生活環境の変化への適応
- 衛生状態の保持・感染症対策
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 66% / 100% I

**必須** Q29.

応援活動のなかで解決が難しかったと感じた要配慮者の課題として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 食事に関すること
- 排泄に関すること
- 入浴に関すること
- 着替えに関すること
- 移動に関すること
- 押除・洗濯に関すること
- 薬の不足、服薬管理
- 医療的なケア
- 持病の悪化
- 認知機能の低下・認知症の悪化
- 不安定な精神状態
- 孤立・孤独
- 本人と家族との連絡・コミュニケーション
- 他の被災者とのかわり
- プライバシーの確保
- 自傷・他害のリスク
- 避難所への移動
- 避難所からの移動
- 生活環境の変化への適応
- 衛生状態の保持・感染症対策
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 68% / 100% I

**必須** Q30.

応援活動のなかで、要配慮者の自立支援にむけた活動において課題となったこととして、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 要配慮者の主たる介護者との支援方針のすり合わせ
- 多職種間での支援方針のすり合わせ
- 時期や場所によって異なる、支援者間での優先度の差
- 被災地で活用可能な地域資源の把握
- 避難所等での平時とは異なる環境での実践
- 避難所やその後の住まい等での生活の長期的な見通し
- 被災者支援の制度や枠組みから外れた被災者（要配慮者）への支援
- 応援派遣からの撤退後の後任の不明確さ
- 応援派遣からの撤退時の後任への引継ぎ先や方法
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 70% / 100% I

## VI. 平時の取組について

**必須** Q31.

現在所属している施設・事業所の種別として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

**高齢者**

- 訪問系（主な勤務場所が利用者の自宅）
- 通所系（主な勤務場所が施設・事業所）
- 入所系（主な勤務場所が施設・事業所）
- 複合施設（小規模多機能型居宅介護など含む）
- 居宅介護支援事業所
- その他

**障害児・若**

- 訪問系（主な勤務場所が利用者の自宅）
- 通所系（主な勤務場所が施設・事業所）
- 入所系（主な勤務場所が施設・事業所）
- その他

**その他**

- 病院
- 行政・社会福祉協議会
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 72% / 100% I

**必須** Q32.

現在所属している施設・事業所における、あなたの主な業務を以下よりお選びください。（1つ選択可）

- 相談業務
- 介護業務
- 施設長・管理者等の管理業務
- その他の業務

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 74% / 100% ]

**必須** Q33.

現在所属している施設・事業所が災害に備えて連携している機関や人として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 利用者の家族
- 地域の学校
- 行政（福祉部局）
- 行政（防災部局）
- 他の福祉施設
- 消防団・救助隊
- 警察
- 医療機関
- 社会福祉協議会
- 地縁団体（自治会、町内会、自主防災組織等）
- 地域団体（フードバンク、NPO、ボランティア団体等）
- 所在県の災害派遣福祉チーム（DWAT・DCAT）
- その他

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 76% / 100% ]

**必須** Q34.

現在所属している施設・事業所において、災害にむけて実施している取組として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 災害時対応マニュアル・BCPの策定
- 避難訓練・安否確認訓練などの実施
- 発災時の職員・利用者との連絡体制の整備
- 要配慮者ごとの個別避難計画の策定
- 地域防災計画や福祉避難所運営方針等の策定への参画・協議
- 行政機関との連携
- 他の福祉施設との連携
- 地縁団体（自治会、町内会、自主防災組織等）との連携
- 地域団体（フードバンク、NPO、ボランティア団体等）との連携
- その他
- とくになし
- わからない

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 78% / 100% I

Q34で「災害時対応マニュアル・BCPの策定」を選択した方に伺います

**必須** Q35.

現在、災害時対応マニュアルやBCPで定めている事項として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

## 平時の対応

- 建物・設備の安全対策
- 電気が止まった場合の対策
- ガスが止まった場合の対策
- 水道が止まった場合の対策
- 通信が麻痺した場合の対策
- システムが停止した場合の対策
- 衛生面（トイレ等）の対策
- 必要品の備蓄
- 資金手当て

## 緊急時の対応

- BCPの発動基準
- 行動基準
- 対応体制
- 対応拠点
- 安否確認
- 職員の参集基準
- 施設内外での避難場所・避難方法
- 重要業務の継続
- 職員の管理
- 復旧対応
- サービス種別ごとの固有事項

## 他施設との連携

- 連携体制の構築
- 連携対応

## 地域との連携

- 被災時の職員派遣
- 福祉避難所の運営

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 80% / 100% ]

すべての方に伺います

**必須** Q36.

現在所属している施設・事業所において、災害時に備えて強化すべき取組として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 多様な災害や被害内容を想定した防災・減災の取組
- 体験型の防災・減災の取組
- 多様な職種や種別と連携した防災・減災の取組
- 地域の住民や団体と連携した防災・減災の取組
- 利用者の家族を交えた防災・減災の取組
- その他
- とくになし

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

[ 82% / 100% ]

**必須** Q37.

あなたは災害派遣福祉チーム（DWAT・DCAT）として、被災地に派遣された経験はありますか。（1つ選択）

- はい
- いいえ

戻る

次へ

Q.13600 <> : [Q38] Q38

災害時の介護活動に関する実態調査

[ 84% / 100% ]

**必須** Q38.  
現在、あなたは災害派遣福祉チーム（DWAT・DCAT）に登録していますか。（1つ選択）

はい

いいえ

SANK : Q39

災害時の介護活動に関する実態調査

[ 86% / 100% ]

Q38で「はい」を選択した方に伺います

**必須** Q39.  
災害派遣福祉チーム（DWAT・DCAT）のチーム員として実施している平時の取組として、該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

養成研修への参加

他職種と連携した研修・訓練への参加

地域の防災訓練への参加

住民に対する広報・啓発活動への参加

その他

とくになし

## 災害時の介護活動に関する実態調査

| 88% / 100% |

## VII. 養成課程の学びについて

## 必須 Q40.

被災した環境での活動のなかで、下記の資質・能力をどの程度発揮できたと感じますか。（それぞれ1つずつ選択）

&lt;留意事項&gt;

お示しした6つの資質・能力は、本事業において実施した災害時の活動経験のある介護福祉士へのグループインタビューから抽出したものです。それぞれの資質・能力は具体的に下記のような内容を想定しています。ご回答の際は、以下の内容を踏まえてご記入ください。

資質・能力	想定している内容
災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>災害時という非日常においても、要配慮者の自立にむけて、日常の延長線上にある支援を行うこと</li> <li>専門性を活かし、平時と同様に要配慮者との対話やかかわりを大切にすること</li> <li>支援者の都合ではなく、要配慮者を中心とした視点で、長期的な生活再建を促した実践を行うこと</li> </ul>
支援に必要な情報を見極め・収集する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援に必要な情報を考え、具体的な情報を収集すること</li> <li>マニュアルや書類に頼らず、実際の開きから要配慮者の状況を読み取る</li> <li>引き継いだ情報や現場で直接得た情報を正確に把握すること</li> </ul>
チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力	<ul style="list-style-type: none"> <li>自身も持つ情報を他職種や次の支援者へ確実に伝えること</li> <li>記録や伝達を通じて、支援の継続性と多職種間の連携を支えること</li> <li>情報をつなぎ、チームで要配慮者を支えること</li> </ul>
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	<ul style="list-style-type: none"> <li>想定外の状況や物資不足に直面しても、あるもので何ができるかを考え、柔軟にやり方を変えて対応すること</li> <li>知識や技術だけでなく、現場の状況に応じて適切な選択や判断を行う「知恵」を発揮すること</li> <li>起こっている状況を冷静かつ柔軟に受け入れ、多様なアイデアで課題を乗り越えようとする姿勢を持つこと</li> </ul>
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>正解やマニュアルがない状況でも、自ら考え、状況に応じて必要な行動を判断・実行すること</li> <li>指示待ちではなく、自分にできることを見極め、役割を自発的に担おうとする姿勢を持つこと</li> </ul>
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	<ul style="list-style-type: none"> <li>被災地で、自分で自分の安全を守ること</li> <li>被災環境に適応しながら、自分の心身の健康などのコンディションを整えること</li> </ul>

ヨコへ回答→	十分に発揮できた	ある程度発揮できた	あまり発揮できなかった	発揮できなかった
災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
支援に必要な情報を見極め・収集する力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 90% / 100% I

Q40で「十分に発揮できた」「ある程度発揮できた」と回答した項目について伺います

**必須** Q41.

災害時の活動において、選択した資質・能力を発揮できたと感じる場面や状況を、それぞれ1つ教えてください。（自由記述）

災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	<input type="text"/>
支援に必要な情報を見極め・収集する力	<input type="text"/>
チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力	<input type="text"/>
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	<input type="text"/>
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	<input type="text"/>
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	<input type="text"/>

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

I 92% / 100% I

すべての方に伺います

**必須** Q42.

介護福祉士養成課程において、前問で挙げた6つの資質・能力を身に着けるために、どのような方法が効果的だとお考えですか。該当するものをすべてお選びください。（あてはまるものをすべて選択）

- 避難所運営ゲーム等の机上訓練（HUGなど）
- 被災した施設や避難所での活動を想定した演習・訓練
- 実習先施設での災害時対応マニュアル等の確認・訓練参加
- 防災施設への見学・体験活動
- 地域の防災訓練等への参加
- 被災地での支援活動経験者からの講話
- 被災地や被災した福祉施設等の見学
- その他
- とくになし
- わからない

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

【 94% / 100% 】

## VIII. ヒアリングご協力をお願い

このたび、災害時における介護活動の事例を収集することを目的に、下記概要にて、ヒアリングを実施いたします。  
災害時の介護活動のご経験についてお聞かせいただくことにより、今後の介護福祉士養成課程における教育内容の検討に活用させていただきますたく存じます。

所要時間：1時間程度

実施方法：お会いをして対面もしくはZOOM等を用いたオンラインにて実施

実施時期：2025年11月～12月

本調査では、過去の災害時の体験についてお伺いします。そのため、ご自身の記憶を思い起こす中で、精神的なご負担を感じられる可能性があることについて、あらかじめご理解いただきますようお願い申し上げます。

本調査への参加は任意であり、ご協力いただけない場合でも、今後の不利益等は一切ありません。また、体調や精神状態を踏まえて、ヒアリングを中止しても構いません。

ご回答いただいた内容は、個人が特定されない形で厳重に管理・分析し、調査結果は報告書や学術的な発表等において匿名化された形で使用いたします。得られた情報は、あくまで本研究の目的の範囲内に限って使用し、他の目的には一切使用いたしません。

**必須** Q43.

今後実施する、災害時における介護活動についてのヒアリングにご協力いただけますか。（1つ選択）

- 協力してもよい
- 協力しない

戻る

次へ

## 災害時の介護活動に関する実態調査

【 96% / 100% 】

**必須** Q44.

ご協力いただける方は、お名前とご連絡先をご記入ください。

お名前	<input type="text"/>
電話番号	<input type="text"/>
メールアドレス	<input type="text"/>

戻る

次へ



令和7年度社会福祉推進事業  
介護福祉士養成課程における災害時の介護に係る  
教育のあり方に関する調査研究事業

# 介護福祉士養成施設等における 災害時の介護に係る教育事例集

令和8（2026）年3月

株式会社 日本能率協会総合研究所



## 目次

はじめに 1	
1. 事例集の目的.....	2
2. 事例集の読み手.....	2
3. 事例集の構成.....	4
第1章 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力.....	5
第2章 災害時の介護福祉士の活動.....	11
1. 被災地での介護福祉士の活動の実態.....	12
2. 資質・能力が発揮された介護福祉士の活動.....	22
第3章 各校の災害時の介護に係る教育事例.....	27
協力校一覧.....	28
1. 4年制大学.....	29
2. 短期大学.....	41
3. 専門学校.....	66
4. 福祉系高等学校.....	75
第4章 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力を養う教育事例.....	83
0. 災害に関する基本知識・災害時における介護福祉士の役割と活動の理解.....	84
1. 災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力.....	85
2. 支援に必要な情報を見極め、収集する力.....	87
3. チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力.....	89
4. 被災した環境下でも、柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力.....	91
5. 自らの役割を見出し、主体的に行動する力.....	94
6. 自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力.....	96



はじめに

---

## 1. 事例集の目的

本事例集は、介護福祉士養成課程における災害に係る教育の具体的な実践事例を提示することを目的として作成したものである。

近年、地震や豪雨等の大規模災害が頻発する中で、生活を支援する介護福祉士には平時の支援に加え、災害時においても利用者の生命・生活・尊厳を守る専門職としての役割がある。また、2019年の介護福祉士養成課程のカリキュラム改正では、「介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き(日本介護福祉士養成施設協会, 2019)」において、災害に関する内容が盛り込まれた。しかしながら、災害に関する教育の具体的な内容や方法については共通理解が十分に形成されているとは言い難く、各養成施設において試行錯誤が続いているのが現状である。

とりわけ、実際の災害現場での活動経験を持たない教員にとっては、「何を、どの程度まで、どのように教えればよいのか」が分かりにくいという課題がある。また、限られた授業時間や既存の教材の中で、新たに災害に関する内容を組み込むことに負担を感じている教員も少なくない。

本事例集は、そのような状況を踏まえ、特別な設備や大規模な演習を前提とするものではなく、日常の授業内容を基礎とし、その延長線上で災害時にも生きる視点や実践力を育むことができるという考え方に立って構成している。すなわち、「災害時だけの特別な教育」を新たに付け加えるのではなく、介護の基本、生活支援技術、コミュニケーション、チームケア、多職種連携、倫理等、平時の学習内容を災害時の文脈に接続することで、より実践的な理解を促すことを目指している。

本事例集が、各養成施設等における教育実践のヒントとなり、教員が自らの授業を振り返りながら工夫・発展させていくための一助となることを期待するものである。

## 2. 事例集の読み手

本事例集は、介護福祉士養成施設等の教員、介護福祉士養成課程で学ぶ生徒・学生、現在介護現場で働かれている方の3つの立場を読み手として想定している。

### (1) 介護福祉士養成施設等の教員

介護福祉士養成施設等の教員においては、各科目の授業設計や教材検討の際の参考資料として活用いただきたい。本事例集に掲載した教育事例は、特定の授業形態を前提とするものではなく、講義、演習、グループワーク(以下、GW)、事例検討など、さまざまな形式に応用できる内容として整理している。例えば、

- 既存の授業の一部に事例を取り入れ、学生への問いかけの材料とする
  - 科目横断的な学習テーマとして位置づけ、複数科目で関連づける
  - 校内研修や教員間の意見交換の素材として活用する
- など、各養成施設の実情に応じた柔軟な活用が考えられる。

また、第3章では、実際に養成施設等において、災害に係る教育内容がどのカリキュラムで、どれくらいの時間で教えられているかも紹介している。これから災害に関する教育を強化しようと考えている養成施設等の教員が、どの授業で災害に係る内容を扱うかを検討する際の参考として、他校の事例も参照いただくことを想定している。

本事例集を通じて、災害に係る教育内容を特別なものとして切り離すのではなく、日常の教育実践の中に位置づけていくための工夫を検討いただきたい。

## (2) 介護福祉士養成課程で学ぶ生徒・学生

生徒・学生にとっては、将来の実践を具体的に想像しながら学びを深めるための資料として活用することができる。

本事例集に掲載している介護福祉士の活動事例は、正解を示すものではなく、被災した状況の中で何を優先し、どのように判断するかを考えるための素材である。授業内での討議や振り返りに加え、自主学習の資料として活用することで、平時に学んでいる内容が多様な状況においてどのように応用されるのかを整理することができる。

また、自らが専門職としてどのような役割を担うのかを考える契機とし、主体的な学習につなげることを期待している。

## (3) 現在介護現場で働かれている方

介護現場で働かれている方にとっては、介護福祉士養成課程における学習内容を理解する一助として、また現場での研修や人材育成の補助資料として活用することができる。例えば、

- ✓ 介護福祉士養成課程の生徒・学生を実習として受け入れた際の取組に反映する
  - ✓ 新任職員への指導の際の事例検討資料として活用する
  - ✓ 施設内の防災研修やミーティングでの討議素材とする
- といった活用が想定される。

### 3. 事例集の構成

本事例集の構成は下記の通り。「想定する活用場面(例)」をもとに関心がある部分を参照すると同時に、柔軟かつ幅広い方法で活用されることを期待したい。

目次	内容	想定する活用場面(例)
第1章(6頁～) 災害時に介護福祉士に 求められる資質・能力	本事例集で、災害時の介護に係る教育の狙いとして定めた、「6つの資質・能力」の説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 本事例集の前提を理解するために最初に読む</li> <li>✓ 災害時の介護に係る教育の狙いや目標を検討する</li> </ul>
第2章-1(11頁～) 被災した介護福祉士の 活動実態	実際に被災した環境で介護活動をした介護福祉士の活動事例を、時系列で掲載	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 災害時における介護福祉士の活動実態を知る</li> <li>✓ 実際の被災を想定した演習やワークの題材として活用する</li> </ul>
第2章-2(21頁～) 資質・能力が発揮され た介護福祉士の活動	災害時における介護福祉士の活動で、とくに資質・能力が発揮される場面を整理	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力の理解を深める</li> <li>✓ 資質・能力が発揮される具体的な場面や状況をイメージする</li> </ul>
第3章(26頁～) 各校の災害時の介護に 係る教育事例	具体的な取り組みを進めている教育事例を、養成施設等ごとに紹介	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 属性(学校種別、地域)等が近い他校の事例を知る</li> <li>✓ 学校ごとの取組の特徴を知る</li> </ul>
第4章(81頁～) 災害時に介護福祉士に 求められる資質・能力を 養う教育事例	資質・能力を養えると考えられる実際の教育事例と学びを促すポイント・工夫を紹介	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 資質・能力を養う教育を、他校の教育事例をもとに検討する</li> </ul>

## 第1章 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力

---

本事例集の作成にあたり、災害時の活動経験のある介護福祉士を対象にグループインタビューを実施した。グループインタビューでは、災害現場での活動や課題、課題への対応、介護福祉士養成課程で身に付けてほしい事項などについて聞き取りを行った。その内容を踏まえ、「災害時に介護福祉士に求められる資質・能力」として考えられる事項を、以下の6つに整理した。

■介護福祉士の発言と災害時に介護福祉士に求められる6つの資質・能力

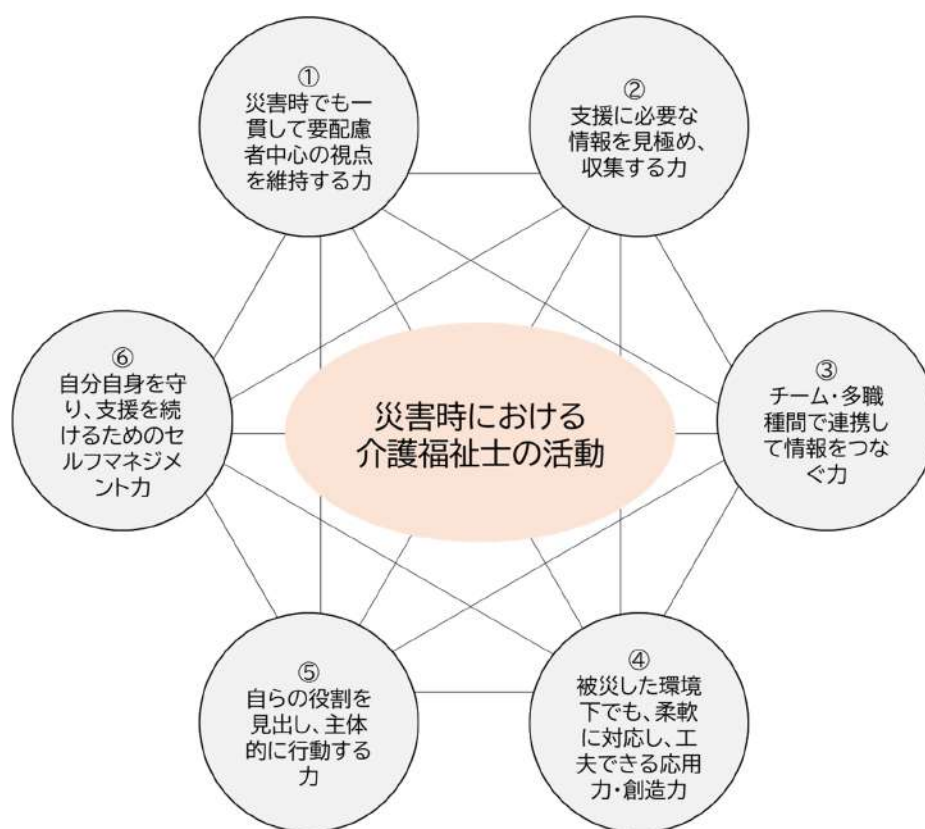
介護福祉士の発言(一部加工)	求められる資質・能力
<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 支援する側の思いというより、被災された方々を中心とした考え方で、伴走していく・支えるという視点は非常に大事</li> <li>✓ 災害時は、介助してあげようという意識になりがちだが、結果として自立支援を妨げることになるという視点は、特に大事にしないといけない考え方</li> <li>✓ 実践能力が高いというのはケースが変わっても対応できることであり、自立支援というのは外せないものになるため、日頃からそういったケアをできているのかは非常に大事</li> <li>✓ 避難所にいる利用者や施設が避難所となっている利用者は、日常を求めている</li> </ul>	<p>災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 今、現場で支援するにはどの情報が必要か、適切かつ具体的に収集できる能力は、通常の介護過程の展開とはまた違うだろう</li> <li>✓ 介護過程の展開を自力です。場面を見て、書類を見て考えるのではなく、その人を見てするということが必要</li> <li>✓ アセスメントシートを使ってアセスメントするわけではない。介助しながら、その人の情報を収集していく</li> </ul>	<p>支援に必要な情報を見極め・収集する力</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 受け取った情報や自分が収集できた情報を、必ず他の人たちにつなげていかなければいけない</li> <li>✓ ケアによって状態像を把握するだけでは</li> </ul>	<p>チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力</p>

<p>なく、他職種に展開をしていくという大事なつなぎの役割もある</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 単に要配慮者へのアセスメントのみならず、全体の把握、多職種連携のなかで誰がどんな役割を果たすのかが分かって、初めて連携ができる</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ うまくいかないことだらけ、だから工夫をする、だから考えるという力は絶対に必要</li> <li>✓ 知識・技術があっても、知恵がなければ災害時に対応できない。やり方が分かっていたり、知識があったとしても、その状況下で選択・実践するには、本当に知恵をどれだけ働かせるかだと思う</li> <li>✓ 色々なアイデアを持ちながら、状況を非審判的に受け入れるということは非常に重要</li> </ul>	<p>被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ テキストやマニュアルがあるわけでもないため、何が正解かが本当に分からない手探りの状態で活動した</li> <li>✓ 日頃から与えられた介護だけではなく、物の考え方や工夫を自ら考える基本的な姿勢が、準備として必要ではないか</li> </ul>	<p>自らの役割を見出し、主体的に行動する力</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 自分で自分の身を守ること・自分のコンディションを整えること・セルフケアも必要になる</li> </ul>	<p>自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力</p>

6つの資質・能力は、災害時の介護活動において、個別に発揮されるものではなく、下記のイメージのように複数の資質・能力が同時に発揮されると考えられる。

本事例集では、この6つの資質・能力を基本的な視点とし、災害時における介護福祉士の活動実態および、介護福祉士養成施設等における災害時の介護に係る教育事例を紹介する。

■6つの資質・能力を複合的に発揮する介護福祉士の活動のイメージ



## 参考:6つの資質・能力の教育状況と発揮状況

6つの資質・能力について、災害に係る教育を実施している養成施設等に対して教育状況を、災害時に活動経験のある介護福祉士に対して現場での発揮状況を聞いたところ、養成施設等で伝えられていると感じる資質・能力と実際に介護福祉士が災害現場で発揮できたと感じる資質・能力の間にギャップが見られた。

具体的には、「チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力」は、養成施設等では最も伝えられていた一方で、介護福祉士は最も発揮できていなかった。また、「自らの役割を見出し、主体的に行動する力」は養成施設等では2番目に伝えられていなかった一方で、介護福祉士は最も発揮できていた。

災害に係る教育においては、現場で発揮できる資質・能力につながっているか、という視点で教育内容を検討し、実際に生徒・学生に伝えていくことが重要になるといえる。

### ■養成施設等の教育状況

	n	十分に伝えられている	ある程度伝えられている	あまり伝えられていない	伝えられていない
災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	160	6.9	61.3	28.8	3.1
支援に必要な情報を見極め、収集する力	160	3.1	54.4	36.3	6.3
チーム・他職種間で連携して情報をつなぐ力	160	11.3	58.8	24.4	5.6
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	160	3.1	46.3	44.4	6.3
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	160	5.0	46.3	45.0	3.8
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	160	5.0	52.5	36.9	5.6

### ■介護福祉士の発揮状況

	n	十分に発揮できた	ある程度発揮できた	あまり発揮できなかった	発揮できなかった
災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力	254	11.8	46.5	34.6	7.1
支援に必要な情報を見極め、収集する力	254	8.7	47.6	36.6	7.1
チーム・他職種間で連携して情報をつなぐ力	254	12.6	40.2	40.2	7.1
被災した環境下でも柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力	254	12.2	44.1	37.4	6.3
自らの役割を見出し、主体的に行動する力	254	15.7	43.7	34.6	5.9
自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力	254	13.8	40.2	39.8	6.3

出典:本事業で実施したアンケート調査



## 第2章 災害時の介護福祉士の活動

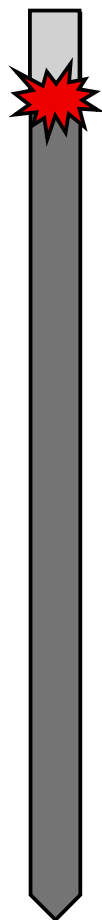
---

1. 被災地での介護福祉士の活動の実態

活動事例1:高齢者施設職員の被災

災害	令和6年度能登半島地震(2024年1月1日)
所属	認知症グループホーム 利用者は約20名で、2ユニットに分かれて生活
被害	震度6強の揺れ 2ユニットで建物被害、うち1ユニットは生活の継続困難 建物の窓ガラスが破損 電気、ガス、水道、通信の遮断
発災当時の 役職・勤務形態	役職なし 日勤

【発災直前からの活動の流れ】



災害による環境変化	対応
発災前	
夕食の準備を終えて、一部の利用者と食堂で団らん	
発災	
食堂にいた利用者が椅子から転落	食堂にいる利用者の安否を確認
一部の利用者が自室にいた	自室にいる利用者の安否を確認
2ユニットのうち1ユニットは壁が崩れて生活ができなくなった	被害が少ないユニットにすべての利用者を移動させた
施設内のものが散乱していた	当時いた職員6名で落ちているものを片付け、安全に過ごせる環境・通路を確保した
建物の窓ガラスが割れた	施設中の布団を持ち寄って、集まって寒さをしのいだ ゴミ袋やシーツで窓ガラスを覆った
用意していた夕食が散乱して食べられなくなった	施設内にあったお菓子とジュースで一晩をしのいだ
職員がホーム長に電話をかけたがつながらなかった	施設にいる職員同士で相談し、翌日にホーム長が来るまで職員全員が施設で待機した
認知症で状況を把握できていない利用者が不穏な状態になった	とにかく落ち着けるように繰り返し声をかけた
断水でトイレが使えなかった	利用者全員をおむつ着用にした
利用者全員分のベッドがなかった	4畳の和室や廊下に布団を敷いて雑魚寝してもらった
通勤経路の道路が陥没して封鎖された	無理に帰るのは危険と判断し、3日間は施設に宿泊して勤務した
自宅が海沿いにあった	津波が心配だったが、利用者を見なきゃいけないと自分に言い聞かせた

夜は利用者が不安で落ち着かなかつた	職員も同じ布団に入り一緒に寝た
発災翌日	
防災倉庫のドアが壊れて備蓄している非常食を取り出せなかった	ドアを壊して非常食を取り出した
非常食としてアルファ米があったが、お湯がないため戻せず、食料が限られた	職員が持つわずかな食料を全員で分けた
断水でトイレ、風呂が使えなかった	トイレが使えないため利用者にはおむつを着用してもらい、たまったごみは中庭に積んだ 鍋に雪を入れてIHで溶かし、タオルで体を拭いた
飲料水が不足していた	近くの同一法人の介護医療院に来た自衛隊の給水車から1日2回車で水を運んだ
DMATが応援に来たが、看取りの利用者の対応はしてもらえず、安否確認のみだった	平時の対応を続けた
発災3日目～緊急期・応急期	
食料が不足していた	近くの同一法人の介護医療院が自衛隊から受け取った支援物資(パンやパック牛乳、カップ麺)を分けてもらった
断水でトイレ、風呂、洗濯機が使えなかった	中庭の池の水を使ってトイレを流し、衣服を洗った 職員が自宅で沸かしたお湯でホットタオルを作り、顔と手を拭いた
1ユニットが使えず、居室が足りなかった	利用者の相性を考慮した2人1部屋にした
道路の封鎖や避難した職員もあり、出勤できる職員が限られていた	なるべく出勤して職員の抜けた穴を埋めるように努めた 自分が健康に仕事を続けることを意識し、休む時は休むと割り切った
物が散乱しているなかで、夜間にトイレに行く人や認知症で状況がわからない人もいた	空いた時間を見つけては通路を片付けて、安全な通路を作る努力をした
復旧期・復興期	
平時のルーティン通りの生活ができなくなった	発災1か月後から、食事の時間を戻すことや朝の体操を再開することに意識が向くようになった
3月に介護支援専門協会から、地域の独居高齢者の安否確認の協力の依頼があった	依頼を受け、地域のガイドと方言の通訳として同行した

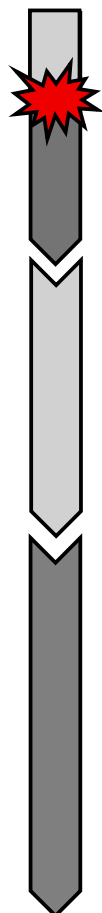
【被災を踏まえた平時の取組】

- 能登半島地震の経験を踏まえ、入居者の情報をタブレットで管理するようになった。  
有事にすぐ持ち出し、他の支援者に情報を引き継げるようにしている。

活動事例2:訪問介護事業所職員の被災

災害	東日本大震災(2011年3月11日)
所属	訪問介護事業所(ケアハウス併設) 事業所で50名程度の利用者を担当
被害	震度6弱の揺れ 事業所及び自宅は津波の被害なし 事業所から道路を1本挟んだエリアは、津波による壊滅的な被害 3月12日に原発事故が発生し、避難命令
発災当時の 役職・勤務形態	サービス提供責任者

【発災直前からの活動の流れ】



災害による環境変化	対応
発災前	
休日出勤をして事業所で事務作業	
発災	
固定電話が繋がらず、利用者や職員の安否が確認できなかった	公衆電話のみ使えたため、利用者宅や職員に電話をかけて、当日の訪問先のみ安否を確認した(20時まで)
発災翌日	
登録ヘルパーは出勤せず、正規職員3名のみが出勤した	単独行動は危険と判断し、2人1組で利用者宅を訪問した
約50名の利用者全員を訪問することは難しかった	事前に取り決めていた優先順位に基づき、約半数の利用者を訪問した
約20名の利用者の自宅に訪問した	安否確認と今後のサービスの継続意向を聞き取り、13名から継続の要望があった
発災3日目～緊急期・応急期	
前日回れなかった利用者を訪問しようとしたが、原発事故により屋内退避を命じられた	利用者宅の訪問を断念せざるを得なかった
発災直後に訪問しなかった利用者から、サービス継続の依頼があった	サービス継続が難しい状況を説明し、家族のもとへ避難してもらった
継続を約束した利用者への訪問は続けていたが、法人から止められた	利用者にサービス中止を伝えた。納得してもらえない場合は逃げるように帰ってきた
20時に利用者から、周囲が暗く人もおらず、食べるものもないと電話があった	すぐにおにぎりを作って持参した
多くの住民が避難する中で、避難せずに自宅にとどまる利用者がいた	自身も地域に残り、支援を継続することにした

法人の施設の職員と利用者が県外へ避難した	念のため利用者宅を巡回し、自宅に残っている利用者を複数発見した
地域包括支援センターの職員で、自身と同様に地域に残っている人がいた	包括の職員に協力して、包括が担当している要配慮者に食料や情報の提供をした
平時にはかかわっていない要配慮者への支援を求められた	その場でニーズを確認して、支援の方針を決めた
発災直後に避難した要配慮者が、認知症で避難所をおわれたり、生活環境に馴染めないことで自宅に帰ってきて、地元の行政に助けを求めた	行政からの紹介で要配慮者に助けを求められ、入浴や買い物等の支援をした
自宅に残って、家族と生活している利用者もいた	オムツ交換だけはお願ひされて継続した
外部から物資が入ってこず、薬や食料が不足した	物資がある隣町まで、買いに行ったり、連れて行ったりした
支援を継続することに申し訳なさを感じる利用者がいた	平時と異なる対応は逆に利用者の不安をあおると考え、平時と変わらぬかわりを意識した
精神疾患をもつ利用者が訪問時に暴言を吐くことがあった	気持ちに寄り添い、話を聞き続けた
復旧期・復興期	
発災1か月後時点でまだ安否のわからない利用者がいた	改めて利用者の自宅を訪問し、不在の場合は連絡先を書いた手紙を投函したところ、発災1か月半後にはほぼ全利用者の安否が確認できた
6月に法人が事業を再開したが、利用者が少なかった	仮設住宅にチラシを配布し、新たな依頼を受けた

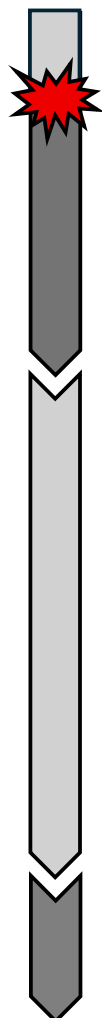
【被災を踏まえた平時の取組】

- 被災前からの有事の際に支援する優先順位(「1. 排泄、2. 入浴、3. 調理、4. 掃除・洗濯」)を決めており、被災時もそれが活かされた。被災後も、契約時や訪問時に「大きな災害が起こった際には、優先順位に基づいてサービスが提供できない場合がある」という方針を利用者や家族に繰り返し伝えるようにしている。
- 毎年、BCPの見直しや災害に関する事業所内での研修を実施し、有事の対応の準備や意識を忘れないようにしている。

活動事例3:ケアマネジャーの被災

災害	西日本豪雨(2018年7月7日)
所属	居宅介護支援事業所(老人保健施設内) 担当利用者は40名程度
被害	玄関先や軒下まで水が上がり、実家の前の道路は膝上まで冠水 断水が約2週間継続 冠水や土砂崩れにより交通が大幅に制限 子どもを通わせていた保育園が休園
発災当時の 役職・勤務形態	サービス管理責任者

【発災直前からの活動の流れ】



災害による環境変化	対応
発災前	
豪雨の危機感を持たずに退社	
発災	
娘と自宅にいる状況で、避難が必要な在宅の利用者がいると事業所の職員から連絡を受け、介護タクシーにも対応を断られた	自身の家族から離れないと判断し、事業所の他の職員と調整し、避難対応をもらった
深夜に雨が降り続いていた	24時過ぎまでは不安で雨雲レーダーを見続けた
発災翌日	
家が浸水し、家の前の窪地に膝まで水がたまっていた	家と娘を家族に任せ、出勤した
利用者の安否確認を試みたが、電波が繋がらず、水没している道も多かった	認知症で一人暮らしの利用者など自力での判断が難しい人に絞って直接家を訪問することを決めた
昼頃に水が止まるという情報を得た	訪問した利用者(3件)に備蓄していた水を配り、水が止まる情報を伝えた
利用者への電話が繋がらなかった	利用者を訪問するために移動する道中で、電話が繋がるエリアを見つけて連絡した
道路が冠水して出勤できない職員がいた	電波が通じるエリアで電話をして、気になる利用者を聴き取った
自宅も断水していた	ウェットシートで体を拭いて就寝した
発災3日目～緊急期・応急期	
市役所から水の供給があった	タンクで受け取った水を小分けにして、利用者の自宅へ配った(500ml×2本)

発災 4 日目までヘルパーが入れず、入浴、着替え、洗濯、排泄等ができていない利用者がいた	時間の制約の中で、物資の支給と安否確認、体調確認に徹した
事業所の近辺では食料の供給が途絶えた	職員が広島市で食料を確保し、食事がとれていない利用者に水と併せて食料を届けた
認知症の利用者に水が出ているか確認したところ、「出ている」と返事があった	実際に蛇口をひねったところ水は出なかったため、水や食べ物を毎日運んだ
電波がなく情報が寸断された状況で、通れる道路がわからなかった	各職員が実際に行って把握した交通状況をホワイトボードに記録して共有した
自宅におらず、避難先もわからない利用者がいた	発災数日後に娘から避難所に避難している報告を受けて安否確認ができた
災害時のヘルパーなどとの連絡・連携の方法は定まっていなかった	個人的につながりのあるヘルパーと、Wi-Fi が使える自宅等で利用者の状況を共有した
水道を利用できるまで2週間ほどかかった	休みを取らず、毎日、利用者宅へ水と食料を配布し続けた。
勤務が必要な状況で、子どもをあずける保育園が閉鎖していた	子どもを家族に預けて勤務を続けた
断水している状況で暑い日が続いた	訪問する利用者にエアコンや扇風機を使って熱中症対策をするように言い続けた
自宅も被災した中で、勤務を継続することにしんどさを感じた	家のことは家族に任せて支援を続けた
家に被害はなかったが、周囲が土砂に流され、物資が不足している利用者がいた	法人内の施設に情報を共有し、ショートステイとして受け入れてもらった

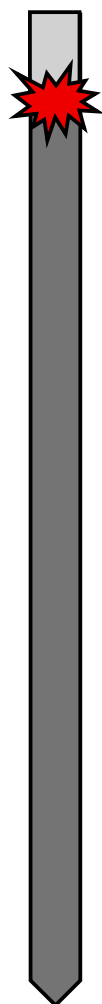
#### 【被災を踏まえた平時の取組】

- 全利用者の住所をハザードマップと照らし合わせ、災害の種類やリスクに応じた安否確認の順序をリスト化し、年1回必ず見直しを行っている。(最優先は、人工呼吸器などの電源が必要な人、胃ろうなどの医療的ケアが必要な人、認知症の独居者など自力での判断が難しい人)
- 有事の際は、まず自分の身を守る、という方針を同僚と確認している。職員が目の中の利用者を助けられなかった際に、「会社の方針に従った」という心理的な防波堤になり、過度な自責の念からメンタルを守ることができると考えている。
- 要介護3以上や土砂災害警戒区域の居住者を中心に、市の方針に沿って個別避難計画を作成している。ただ、実際に計画通りにはいかないことを前提に、有事の対応は日ごろから利用者や家族と話し合うように意識している。

活動事例4:障害者施設職員の被災

災害	西日本豪雨(2018年7月7日~8日)
所属	障害者支援施設
被害	ダム放流による土砂崩れ 施設への浸水 断水が約1週間継続 7日の朝から停電、通信障害
発災当時の 役職・勤務形態	施設長補佐

【発災直前からの活動の流れ】



災害による環境変化	対応
発災前	
豪雨に備えて出張から早めに帰宅	
発災	
朝5時に職員から、通勤路が土砂崩れで出社できないと連絡を受けた	職員の電話で起き、家で待機するように指示をした
朝5時 30分に施設から、施設内の廊下に山から水が流れ込んできたと報告を受けた	休日だったが、慌てて出勤準備。通勤路は滝のように雨が流れていたが、行くしかない決意
出勤後すぐに市役所に土のうを要請した	袋しかなく砂は自力で用意と言われたため、断って使っていない布団を使って堰き止めた
施設の本館と別棟をつなぐ渡り廊下に水が流れ込み、寸断された	別棟の利用者 20 名を、園内のホールへ車で移動させた(複数回往復)
強度行動障害の利用者で特定の職員がずっと付いている必要がある方がいた	該当の職員が避難する車を運転し、その利用者にはずっと助手席に座ってもらっていた
停電となりテレビが映らないことで、落ち着かない利用者がいた	繰り返し「部屋にいてね」と言って落ち着かせた
出勤できるか不明の職員が多かった	朝方は電話が通じたため、職員に電話かけて安否と出勤予定を確認し、当面の見通しをたてた
電気が止まり調理ができず、近隣のスーパーやドラッグストアの食料もなくなった	水とガスがまだ使えたため、その日の食事はレトルト食品を、大きな釜にはったお湯で温めて対応した
いつ断水するかわからない状況で、洗い物を少なくする必要があった	皿にラップを敷いて食事を提供したところ、利用者がラップも食べようとしたため、紙皿で対応することにした
渡り廊下が浸水しており、別棟に戻ることは危険だった	普段、別棟で生活している利用者に、ホールで雑魚寝をしてもらった

停電が夜間まで続く見通しだった	暗くなる前に廊下に懐中電灯を配置しておいた
停電の夜間に利用者がパニックになる可能性があった	宿直の職員を普段よりも1名多く配置した
停電の中で、電化住宅でお湯が出ず、火も使えない状態だった	水は出たため、タオルで体を拭き、カセットコンロでお湯を沸かした
発災翌日	
携帯電話は使えなかったが、近くの公衆電話のみ使えた	近隣の施設に電話をして、番号を伝えた
法人内のグループホームが、大きな被害はないが安全確保のために避難所に避難したところ、被害を受けた被災者との温度差で居心地が悪くなった	法人本部のホールに受け入れた
法人本部は避難所には指定されておらず、市から食料が届かなかった	保健師にかけあって、食料を確保した
食事、紙皿や紙コップ、発電機などが多く必要になった	通行止めが解除された道路を通って隣町に行き、食料や備品を大量に確保した
発災3日目～緊急期・応急期	
暑さのなかでエアコン、扇風機が使えず、大量に汗をかき、失禁等もあったが、断水で洗濯ができなかった	平時から付き合いのある隣町の施設(車で1時間程度)に依頼をして、車に洗濯物を積んで洗濯をさせてもらった
断水で水分が不足していた	近隣の施設からは軽トラやタンクに積んだ水分などの応援を受けた
断水でトイレや風呂が使えなかった	支援を受けた水や山水を活用して職員がトイレの水を流した 平時から付き合いのある隣町の施設(車で1時間程度)に依頼をして、利用者と職員は風呂を借りた
発災前にショートステイで受け入れていた利用者の家が全壊した	家族から依頼され、3か月間延長して施設で受け入れた。利用者は不安定で自傷行為を繰り返していた
電話が通じない状況が続いて、利用者の家族とも連絡が取りづらかった	入浴や洗濯等で、電波が通じる場所に出るタイミングで利用者の家族にはまとめて安否確認等の連絡をした
自宅や施設ではスマートフォンを充電できなかった	近隣施設で風呂や洗濯物を待つ間に充電させてもらった
病院が遠方で、薬のストックを補充できなかった	電話で依頼し、病院から施設の近くの薬局に処方箋を送ってもらった
社協からボランティア受入の後方支援の依頼を受けた	ボランティアの移動を支援した
非常食の食事は単調で栄養不足の懸念もあった	同一法人の就労支援 B 型事業所で作っていたトマトやスイカをおやつとして提供した

法人内のB型事業所で作っていた野菜が多く残っていた	ボランティアの移動支援の合間に自宅避難者に配り歩き、困りごとを聞きながら支援情報を提供した
制約された環境で、外出やレクリエーションをする余裕はなかった	毎日利用者と顔を合わせて、少しでも違和感があったら共有することを職員で徹底した
娘が精神障害をもつ家族が避難所や親せきの家にいられなくなり、市から受入の依頼を受けた	発災3週間後に福祉避難所として家族3名を受け入れた
福祉避難所の受入は当日に市から依頼があり、名前と年齢しか伝えられなかった	保健師からも情報を得られず、家族から得た情報を支援員に伝え、困ったら悩まずに相談するように言った。家族が落ち着いて過ごせる空間の確保を優先した
大量の食事のストックを用意するために、大鍋でカレーを作ろうとした	鍋を洗うのに大量の水が必要となるため、断水の環境下では望ましくないと止められた
発災から1週間継続して勤務した	翌週の土日は休む宣言をして休んだ

#### 【被災を踏まえた平時の取組】

- 毎月の防災委員会などで、発電機のエンジンのかけ方や実際にかかるかどうかを確認するようにしている。
- 被災時は近隣施設等との協定は結んでおらず、平時からの付き合いで支援を受けたが、被災後に正式に有事には支援しあう協定を結んだ。

## 活動事例5:被災地での応援活動

### 【主な応援活動】

1. 東日本大震災(2011年)  
発災翌年から有志で足湯ボランティアと傾聴活動を実施。仮設住宅を定期的に(年3回ほど)訪問し、被災者の心のケアに従事。
2. 西日本豪雨(2018年)  
岡山県真備市で現地の視察や支援状況の確認を実施。
3. 台風15号(2022年)  
所属する県介護福祉士会独自の活動として、支援が届きにくい小規模事業所(グループホーム、デイサービスなど)へ物資配布と困りごとの聞き取りを実施。
4. 熱海市伊豆山土石流災害(2023年)  
DWATからの依頼を受け、ホテル避難所でのアセスメントや傾聴を実施。
5. 能登半島地震(2024年)  
1.5次避難所にて、身体介護(排泄介助・オムツ交換等)や生活支援に従事。

### 【直面した主な課題と対応】

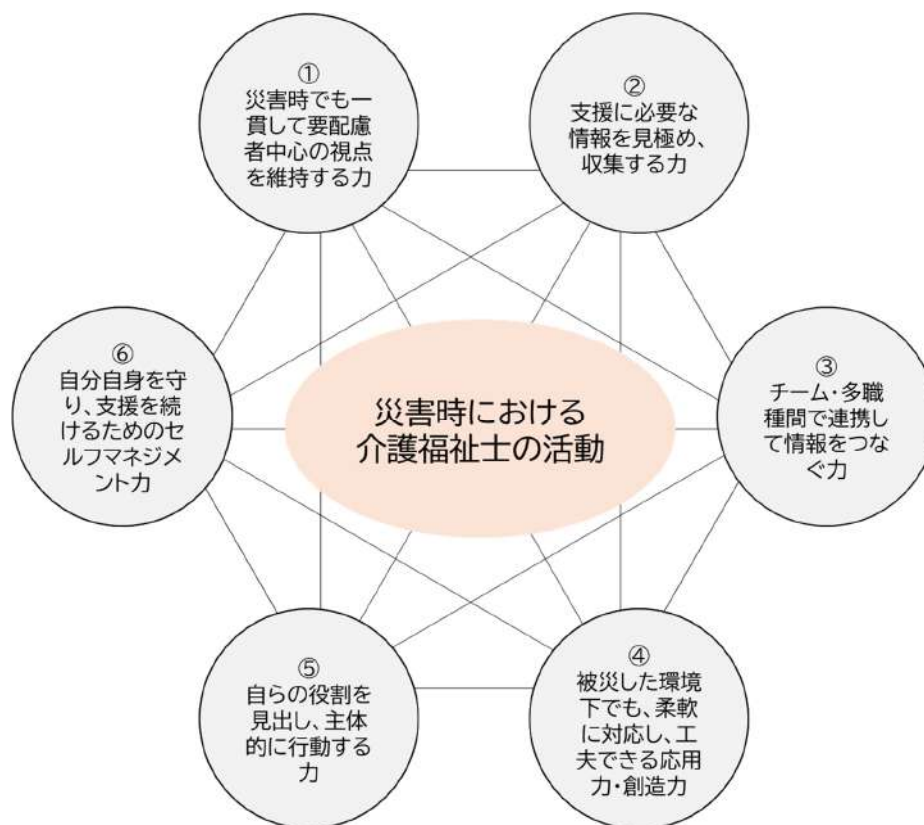
- ・ 避難所で情報がない人のオムツ交換を指示され、本人に話を聞いたり、様子や反応を見たりしながら介助をした。
- ・ 情報がないなかで、落ち着かずに歩き回る要配慮者への対応を指示され、2、3時間一緒について歩いて話を聞いた。
- ・ 避難所で大切にしていたものが捨てられたと嘆く要配慮者の愚痴をひたすら聞いた。
- ・ 発災10か月後に傾聴ボランティアに入った際は被災者が何も話してくれなかった。しかし、繰り返し訪問することで顔見知りになり、災害時の様子などを話してくれるようになった。
- ・ 避難所の窓口で被災者の相談を受けた介護福祉士が記録を残さずに席を離れたため、被災者に同じ相談をもう一度説明させてしまった。
- ・ 各所から応援職員が集まる中で、情報の共有や協力がなされず、自分でやることを見つけて活動するしかなかった。
- ・ 避難所で、被災者から「なぜ介護福祉士がもっと早く来ないのか、介護福祉士がいれば自分たちは避難所に要配慮者を残して行方不明者を探しに行けた」と訴えられた。

## 2. 資質・能力が発揮された介護福祉士の当時の活動

第2章-1で取り上げた5名の介護福祉士の活動をもとに、6つの資質・能力が特に発揮されたと考えられる災害による環境変化と、その際の介護福祉士の対応を以下に整理した。

なお、災害時の介護活動では、複数の資質・能力が相互に関連しながら発揮される場合があるため、以下に示す環境変化や活動は、必ずしも個別の資質・能力に一对一で対応するものではない。また、示した活動はヒアリングで把握した事例の一例であり、その妥当性や正当性を示すものではない。

### ■6つの資質・能力を複合的に発揮する介護福祉士の活動のイメージ



(1) 災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力

資質・能力が発揮された災害による環境変化

- ✓ 発災当日の夜は、施設内の環境や食事や入浴などの生活が平時から大きく変化し、利用者は不安で落ち着かなかった。
- ✓ 施設内の物が散乱しているなかで、夜間にトイレに行く利用者がいた。
- ✓ 自宅の建物に被害はなかったものの、周囲が土砂に流され、物資が不足したことで、自宅での生活を続けることが難しくなった利用者がいた。
- ✓ 周辺住民が遠方に避難するなかで、自宅に残り支援を受け続けることに申し訳なさを感じる利用者がいた。

資質・能力を発揮した介護福祉士の当時の活動

- ✓ 不安で落ち着かない利用者に対して、同じ布団に入り一緒に寝た。
- ✓ 施設内が散乱している状況で、まず通路を片付けて、安全に通れる場所を作る努力をした。
- ✓ 発災翌日、電話がつながらず利用者の安否を確認できなかったため、20名の利用者の自宅を訪問し、13名からサービス継続の要望を受けた。
- ✓ 平時と異なる態度や対応はかえって利用者の不安をあおると考え、平時と変わらぬ対応を意識した。

(2) 支援に必要な情報を見極め、収集する力

資質・能力が発揮された災害による環境変化

- ✓ 発災翌朝に利用者の安否確認を試みたが、携帯電話の電波がつかならず、水没している道も多いため自宅訪問にも限界があった。
- ✓ 発災直後、いつ断水するかわからない状況で、洗い物を少なくする食事の提供が必要になった。
- ✓ 電波が通じない状況が続き、入所施設の利用者の家族と連絡が取れなかった。
- ✓ 職員の避難などにより地域の介護サービスが停止するなかで、平時にはかかわっていない要配慮者の支援も求められた。
- ✓ 応援活動に行った避難所で、情報が十分でないなかでおむつ交換を指示された。

資質・能力を発揮した介護福祉士の当時の活動

- ✓ 安否確認の方法が制約されるなかで、認知症で一人暮らしの利用者など自力での判断が難しい人に絞って直接自宅を訪問した。
- ✓ 電波がなく情報が遮断され、水没している道路などの情報がない中で、職員同士で実際に行って把握した交通状況をホワイトボードに記録して共有した。
- ✓ すべての訪問介護利用者全員の安否確認をすることが難しく、事前に取り決めてい

た優先順位に基づき、約半数の利用者の自宅を訪問した。

(3) チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力

資質・能力が発揮された災害による環境変化

- ✓ 道路が封鎖されて出勤できない職員や遠方に避難した職員がおり、勤務できる職員に限られていた。
- ✓ 発災後の混乱した状況や制約された環境の中で、外出やレクリエーションをする人的な余裕も精神的な余裕がなかった。
- ✓ 発災直後、登録職員には出勤を要請せず、出勤したのは正規職員のみだった。

資質・能力を発揮した介護福祉士の活動例

- ✓ 施設の断水により入浴ができなかったため、平時から付き合いのある隣町の施設に依頼して、お風呂を借りた。
- ✓ 地域に残った包括の職員と協力して、包括が担当している要配慮者の自宅を訪問して食料や情報を提供した。

(4) 被災した環境下でも、柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力

資質・能力が発揮された災害による環境変化

- ✓ 発災直後、施設の窓ガラスが割れ、建物にひびが入って生活の継続が困難になったりした。
- ✓ 断水により、トイレ、入浴、洗濯ができなくなった。
- ✓ 発災翌朝、利用者やその家族の安否確認を試みたが電話が繋がらなかった。
- ✓ 暑さのなかでエアコン、扇風機が使えず、利用者は大量に汗をかき、失禁等もあった。一方で断水により洗濯ができなかった。

資質・能力を発揮した介護福祉士の活動例

- ✓ 洗い物を少なくするために皿にラップを敷いて食事を提供したところ、知的障害の利用者がラップも食べようとしたため、紙皿で対応することにした。
- ✓ 寒さをしのぐために、割れた窓ガラスをごみ袋やシーツで覆った。
- ✓ 雪を溶かしたり、施設の中庭の池の水を活用したりして、清拭や洗濯をし、トイレの水を流した。

(5) 自らの役割を見出し、主体的に行動する力

資質・能力が発揮された災害による環境変化

- ✓ 発災から約5日後の夜、自身も遠方に避難するか悩むなか、訪問介護の利用者から、周囲が暗く人もおらず、食べるものも無い、と電話を受けた。
- ✓ 発災直後、法人のホーム長に電話をかけたが、電波が通じずに連絡が取れなかつ

た。

資質・能力を発揮した介護福祉士の活動例

- ✓ 多くの地域住民が遠方に避難するなかで、避難せずに自宅に残る利用者や避難先の環境になじみずに自宅に戻る利用者がいたため、自身も地域に残り支援を継続することにした。

(6) 自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力

資質・能力が発揮された災害による環境変化

- ✓ 発災当日の夜、娘と自宅にいる状況で、避難させなければいけない在宅の利用者がいると事業所の職員から連絡を受け、介護タクシーにも対応を断られた。
- ✓ 発災後も利用者に物資を届ける支援が必要な状況で、子どもをあずける保育園が閉鎖していた。
- ✓ 発災後の安否確認のなかで訪問介護の継続を利用者と約束し、支援を続けていたが、法人からサービスを中止するように命じられた。

資質・能力を発揮した介護福祉士の活動例

- ✓ 家族と自宅で過ごしているなかで、事業所の職員から利用者の避難を要請されたが、家族から離れない判断をし、事業所の他の職員と調整して避難対応をもらった。
- ✓ 出勤した職員に限られたなかで、単独行動は危険と判断し、2人1組で利用者の自宅を訪問して安否確認をした。



### 第3章 各校の災害時の介護に係る教育事例

---

協力校一覧

種別	養成施設等名	該当ページ
4年制大学	白梅学園大学	p.27
	東洋大学	p.32
	聖隷クリストファー大学	p.35
	大阪人間科学大学	p.37
短期大学	日本赤十字東北看護大学 介護福祉短期大学部	p.39
	静岡県立大学短期大学部	p.43
	中部学院大学短期大学部	p.47
	富山短期大学	p.52
	佐久大学信州短期大学部	p.54
	湘南医療大学介護福祉別科	p.56
	名古屋経営短期大学	p.59
佐賀女子短期大学	p.62	
専門学校	早稲田速記医療福祉専門学校	p.64
	東北保健医療専門学校	p.67
	アール医療福祉専門学校	p.69
	平岡介護福祉専門学校	p.70
	A 校	p.72
福祉系 高等学校	石川県立田鶴浜高校	p.73
	宮城県立迫桜高等学校	p.76
	栃木県立真岡北陵高校	p.79

## 1. 4年制大学

### (1) 白梅学園大学

#### 1. 学校の概要

学校種別	4年制大学	所在地	東京都小平市
修業年限	4年	1学年の平均生徒・学生数	約10名

#### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の基本 I	1年	3コマ(全 15 回のうち5～7回目)	○
人間関係とコミュニケーション	1年	3コマ(全 15 回のうち11～13回)	○
生活支援技術 A・B	1年	移動、排泄、食事等の単元に必要なこと盛り込む	○
介護実習 I・II・III・IV	1年、2年、3年	実習先の状況による	○
ソーシャルワーク演習 II	2年	2コマ	
専門ゼミナール I B	3年	2コマ	

#### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

災害を扱う授業の狙いは、「有事(災害時)であろうと平時(日常)であろうと、介護福祉士の役割は一貫して『生活支援』である」という本質を理解させること。具体的には、下記を狙いと考えている。

##### 1. 平時と有事の「連続性」の理解

災害を特別なものとして切り離すのではなく、「非日常(災害時)も日常の延長線上にある」と捉えることを重視している。非常事態であっても、対象者の生活を支えるという介護福祉士の専門的な視点や役割自体は変わらないことを伝え、日常的に学んでいる「生活支援技術」が、災害時にもそのまま役立つことを伝えている。

##### 2. 非常事態における「暮らし」の構築と維持

「非常事態だから仕方ない」と諦めるのではなく、「どのような観点から何をすれば、非常事態の『暮らし』を作り、守り、過ごしていけるか」を考える力を伝えている。

##### 3. 多職種・地域連携の視点の養成

災害時の活動は介護福祉職だけで完結することはないため、「多職種連携」や「地域ネットワーク」の重要性を、実体験を通して学べるようにしている。

#### 4. 4年間の学びによる段階的な積み重ね

4年間のカリキュラムを通じて段階的に災害支援への意識を醸成することを目指している。1年生で基礎を学び、実習や演習、地域の活動を経て、最終的には卒業後に自分が働く現場や地域で何ができるかを「我がこと」として捉えられる視点を養っている。

#### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

##### 「介護の基本Ⅰ」

テキスト(中央法規)を使用し、その中の記載されている単元に沿って授業を進めている。

##### 第5回:介護福祉士の役割と機能②

基本的な知識に加え、YouTubeを用いたDWATの説明、湯たんぽなど身近にあるものの活用、教員の能登半島地震の体験談(1.5次避難所)などを写真や資料を用いて視覚的に伝える。

##### 第6回:介護福祉士の役割と機能③

改正カリキュラムと学校のカリキュラムの対比の説明

##### 第7回:介護福祉士の役割と機能④

日本介護福祉士会の活動紹介(YouTube、日本介護福祉士会のHP、ガイドブック、広報誌等の活用)

##### 「人間関係とコミュニケーション」

教員が作成した小平市版の避難所運営ゲーム(HUG)を用いた演習を実施する。

##### 「生活支援技術」

災害に特化しない形で、移動、排泄、食事などの各場面で、災害時にも応用可能な技術を伝える。(例:段ボールベッド、持ち運びやすいポータブルトイレ、褥法、床からの立ち上がり、代用品の活用等)

##### 「ソーシャルワーク演習」

「白梅防災プロジェクト」として実施する地域の防災イベントに、小平市社会福祉協議会や青年会議所と連携しながら運営側として参加する。地域での顔の見える関係作りが災害時に「情報をつなぐ力」として生きることを、実習や地域活動を通じて肌で感じることを促している。

また、保育士や教員養成課程の生徒もイベントの運営に参画していることで、子どもに

対する視点など、対象者を限定しない考え方を得ることにもつながっている。

#### 「専門ゼミナール」

「白梅防災プロジェクト」に所属する教員が合同の専門ゼミナールを実施している。教員が作成した小平市版の避難所運営ゲーム(HUG)を用いた演習と教員たちが被災地に訪れた際の実地報告等を行い、保育・教育・心理・福祉領域の学生が相互に学び合っている。

その他、他地域の DWAT の活動を学ぶための現地訪問や「福島の子どもをまねく小平の会」との協力した活動などを体験する。

また、介護実習の際は、実習先での防災委員会や避難訓練などに学生が参加できるよう、大学から実習先に依頼している。

くわえて、プレゼンや GW で発表・議論したり、地域のイベントで市民に発表したりするなど、アウトプットを通じて知識や思考の定着を促している。

#### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

- ・ 地域の防災イベントでは、学生たちは指示を待つだけでなく、自ら考えて行動する姿が見られた。たとえば、物が足りない時に代替品の活用を提案するなど、状況に合わせて自律的に動く習慣が身についていると感じる。
- ・ 介護福祉士を目指す学生は体を動かして学ぶことを好む傾向があり、段ボールベッドの組み立てや体験などの「手足を動かす活動」において、高い関心とインプットの効果が見られる。
- ・ 教員が実際に被災地で活動した際の写真や体験談を語る際は、学生は非常に集中し、真剣に話を聞いている。「実際の現場のイメージが湧くのでありがたい」という声もある。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ 災害時の映像や画像を使用する際、学生がショックを受けて気分が悪くなる可能性があるため、事前に「席を外してもよい」と伝えるようにしている。
- ・ 学生にとって、いざ自分が被災したり応援派遣に行ったりした際に「具体的にどう動くべきか」を自分事として想像することが非常に難しいという現状がある。

■授業で使用している資料(提供:白梅学園大学 教員)


<災害時に活用できる生活支援技術>  
 ・救急担架ベルカの担ぎ方 ベルカSB - Bing video

<ドライシャンプーの選び方>  
 ドライシャンプーには、

- ①まんべんなく噴射するだけで爽快感があるスプレー・ミストタイプ
- ②持ち運びが便利で皮脂をしっかりと拭きとるシートタイプ
- ③低刺激でさらっとした仕上がりになるパウダータイプ
- ④髪全体になじませて臭いやべたつきを押さえるフォームタイプ等がある

初心者にはスプレー・ミストタイプが使いやすく災害時などでも便利。

温かいペットボトル  
(85℃までOK)



ドライシャンプーの選び方 - Bing image

安全な床からの立ち上がり方  
 (身体椅子を倒す場合)



介護技術 転倒予防 安全な床からの立ち上がり方 - Bing video

■地域団体・住民との共同講座・GW の様子



■地域団体・住民との防災イベントの様子



## (2) 東洋大学

### 1. 学校の概要

学校種別	4年制大学	所在地	東京都北区
修業年限	4年	1学年の平均生徒・学生数	約40名

### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
生活支援技術Ⅶ	3年	15コマ	○

### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

災害を扱う授業の狙いは、災害時においても利用者の生活と安全を確保できる介護福祉士を育成することである。そのため、平時からの備えや判断力、限られた環境下での生活支援、関係機関との協働、そして利用者の権利擁護の視点を身につけさせることを重視している。災害を特別な場面ではなく日常の延長として捉え、いかなる状況下でもケアを継続できる専門性の涵養を目的としている。

### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

- ・ 災害関連法制度の基礎理解を深めるためのレクチャーと図解資料の活用
- ・ 災害時における介護職員の役割を事例や映像教材を通して具体化する工夫
- ・ DWAT等の専門職チームや災害時での多職種連携、避難所での福祉的トリアージなどを、実際のケースを用いて理解させる方法
- ・ 福祉施設や事業所における防災対策とBCPを、チェックリストや実例資料を用いて学ばせる工夫
- ・ 避難時の移動支援技術を、実技演習やロールプレイを通して体験的に習得させる方法
- ・ HUG(避難所運営ゲーム)やDIG(災害図上訓練)を用いた参加型の演習による学びの深化

### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

受講した学生からは、災害介護を学ぶ意義や、介護福祉士が災害時に果たす役割の重要性を強く実感したという声が多く寄せられた。特に、災害時は通常のケアとは異なる判断や対応が求められること、そして介護福祉士として多様なケースを想定し、平時から行動の引き出しを持っておく必要性に気づいたという意見が複数みられ、学習の動機づけにつながったと考えられる。

演習として実施したHUGについては、実際の避難所運営をシミュレーションする中で、

利用者の特性や状況に応じた配置・動線づくりの難しさを体験的に理解したという反応が多かった。グループごとに着眼点が異なり、障害のある人を食堂に配置したり、混乱を避けるために入口を複数の受付に分けたりと、多様な視点が生まれたことを肯定的に捉えていた。他グループの発表を聞くことで、新たな配慮点に気づき、事前に多様な視点を持ち寄って計画を立てることの効果を実感したという意見もあった。

また、授業で扱った災害救助法や災害対策基本法などの法制度に関する内容については、今年度の法改正により福祉的支援が明確に位置づけられた点が印象に残ったという学生が多かった。特に、防災と福祉が連動し、行政・地域・福祉職が協働して支援にあたる必要性を理解したという感想が複数寄せられ、法律の知識を単なる暗記として捉えるのではなく、実際の現場でどのように生かすかを考える契機となったといえる。

さらに、災害時における介護福祉士の倫理や「自立支援」の視点についても、平常時であれば当たり前を意識している事柄が、災害下では後回しになりやすいことへの気づきが述べられていた。災害時であっても、先の生活を見据えた支援や、細かな生活援助に妥協しない姿勢が求められるという認識を持てたことは、介護福祉士としての専門性の理解を深める成果であると考えられる。

総じて、学生は演習や講義を通じて、災害時の介護福祉士に求められる知識・技能・倫理を多角的に学ぶことができ、防災と福祉が密接に結びついていることを理解し、平時からの備えの重要性を実感していたと言える。

## 6. 授業を実施するうえでの課題

災害を扱う授業では、学生の多くが「自分には関係ない」「まだ先のこと」と捉えがちであり、学びを当事者意識につなげることが難しいという課題がある。災害はいつ起こるか分からないという特性を扱う以上、教員側が適度な緊張感と現実性をもって授業に臨み、学生にとっての“自分事化”をどのように促すかが重要なポイントであると考えられる。

また、津波や被災地の映像など、災害の凄惨さを伝える教材は、学習効果が高い一方で、過去の経験や心理状態によっては強いストレスを受ける学生も存在する。そのため、使用する教材の選択や提示方法には十分な配慮が必要であり、必要に応じて視聴を強制しない対応や、授業前後のフォローを行うなど、心理的安全性を確保する取り組みが求められる。

こうした点から、災害を扱う授業では、リアリティの確保と学生の心的負担への配慮という二つのバランスを取りながら、慎重に授業設計を行う必要があると言える。

■DIG(災害図上訓練)の様子(提供:東洋大学 教員)



■避難所運営ゲーム(Hug)のGWの様子(提供:東洋大学 教員)



■災害時の移動支援技術の様子(提供:東洋大学 教員)



### (3) 聖隷クリストファー大学

#### 1. 学校の概要

学校種別	4年制大学	所在地	静岡県浜松市
修業年限	4年	1学年の平均生徒・学生数	約20名

#### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の基本Ⅰ	1年	1コマ(全15回のうち14回目)	○
介護の基本Ⅱ	2年	1コマ(全15回のうち14回目)	○
介護の基本Ⅵ	4年	1コマ(全15回のうち7回目)	○
生活支援技術Ⅲ	2年	2コマ(全30回のうち9,10回目)	○
介護福祉管理論(領域:人間と社会)	3年	1コマ(全8回のうち5回目)	○

#### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

介護の基本Ⅰ:尊厳として、弱者としての被災者の人権を考える機会を持つ(人間の尊厳と自立とのリンクを含む)

介護の基本Ⅱ:介護福祉士に求められる姿勢を主軸にした要配慮者を想定して、他科目との関連の中で対象者別の非常時の対応について考える(2年次に科目配置されている児童福祉論・障害者福祉論・高齢者福祉論とのリンクを含む)

介護の基本Ⅵ:3年次に配当されている地域福祉論、介護管理論などの学びを踏まえ、災害時の福祉避難所の設営などのシミュレーションを行う。

#### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

- 福祉避難所の設営企画:災害時に近隣施設の利用者が大学に避難してきた場合を想定した段ボールベッドの組み立て、大学近隣のハザードマップの作成。
- 防災カードゲーム・ソナエトランプも使用
- 炊き出し訓練:生活支援技術の調理実習では、避難所を想定し、限定的な材料での食事作りを実施(ガスでご飯を炊く、缶詰でおかずを作る 等)

#### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

便利で豊かな時代に暮らしている学生ならではの生活力の無さ、発想の転換の無さ、柔軟性の無さなど教員側が驚くことも多いが、逆説的に考えれば、どのようなことも楽しめる陽気さや初体験に心底驚く純粋さも持ち合わせている。知識不足や経験不足の学生に、いかに体験的理解を促すかが重要だと考える。動画でのレクチャーや、ペーパーシミュレーションではなく、実体験が必要だと痛感している。

福祉避難所を体験した学生の中には、被災地に自主的にボランティアに参加してケースもある。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ 熱海水害などで実際に被災した学生がいたため、心理的な配慮
- ・ 女性問題(生理などの女性特有の困りごと)や、プライバシー侵害など当事者性をもつためにどのような教え方(伝え方)が有効なのか模索している
- ・ 災害時に積極的にボランティア参加を促すも、腰が引ける学生が多い。また大学としての派遣となると稟議などの承認を得るプロセスが多く、結果的に即戦力となる派遣は難しい。

#### ■調理実習の様子(提供:聖隷クリストファー大学 教員)



#### (4) 大阪人間科学大学

##### 1. 学校の概要

学校種別	4年制大学	所在地	大阪府摂津市
修業年限	4年	1学年の平均生徒・学生数	非公開

##### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の概論Ⅰ	1年	1コマ(全 15 回のうち 10 回目)	○
介護の概論Ⅱ	1年	1コマ(全 15 回のうち 8 回目)	○

##### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

近年、地球温暖化による自然災害(地震、大雨等)が多く発生している中で、介護福祉士は、介護福祉ニーズを持つ人が住み慣れた地域で生活を続けるためには、命を守ることを支援することが求められている。そのためには、介護福祉士として支援を必要とする人の安全を守り、被災してしまっても生活を支えることができるように、災害の知識や倫理的判断、災害においても支援を継続できる体制(業務継続計画やその人の情報を他の専門職等に提供できる等)、平時とはことなる災害時の対応や日常を理解しているからこそ支援できることを理解し、個別に支えることができる実践能力を身につける必要がある。

##### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

現状では講義科目として授業を展開しているため、介護の基本的な知識として身につけて欲しい内容を、テキストを基本に伝えている。

授業の内容は、①災害対策基本法や個別避難計画、DWAT(災害派遣福祉チーム)、福祉避難所などの基本的な知識、②災害時の支援として、日常的な支援と災害時の支援のつながり、③新聞記事などを活用して、阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨、大阪北部地震、能登半島地震、南海トラフ地震などを調べてグループディスカッションを行い、授業最後の振り返りシートで何を学んだかを自分の言葉で言語化しアウトプットするなどのワークを行う。

本年度は予防的な対応や福祉避難所、災害時の支援の課題等について感染症を含めて、ゲストスピーカーを招聘したいと考えていたが授業として展開できず、今後の課題となっている。

##### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

介護の基本では、災害の制度政策を伝えることが中心になってしまっているため、学生は災害についての基本的な知識のみで終わり、その知識を十分に活用できる能力を身につけるまでには至っていないと思う。また、実践的な体験や具体的な話、自ら考えることができるようなディスカッションなどのアクティブラーニングを取り入れると理解や考えが深まるように感じる。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

災害についての学びを伝えるためには、災害場面での実践が必要であるが、それが乏しいため、制度的な説明や対応方法、日々の利用者の理解が必要なことは伝えることができるが、実際の対応について十分に伝えることができていない。学生が災害を自分事として、また地域に住む専門職として何ができるかを具体的に考えることができる授業の工夫と仕掛けが必要である。

災害を扱う難しさは、大学の場合は多様な地域から学生が学んでいるため、時に被災した学生が存在することがある。その情報がなく、災害について授業を展開することがあるが、その場合、その学生が自身の体験をどれだけ消化しているのか、消化されていない場合は授業で伝える言葉によって、その学生を傷つける可能性があると考えたと授業展開に難しさがあると考え

多様な授業で災害については取り扱っているが、体系的なカリキュラムの中で災害をどのように享受していくかの検討が必要である。

## 2. 短期大学

### (1) 日本赤十字東北看護大学 介護福祉短期大学部

#### 1. 学校の概要

学校種別	短期大学	所在地	秋田県秋田市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約10名

#### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
防災基礎	2年	8コマ	○
防災福祉論	2年	15コマ	○
防災ボランティア演習	1年	8コマ	○
介護の基本Ⅱ	2年	1コマ(全15回のうち12回目)	○

#### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

災害に関する基本的知識を学び、災害時において支援を必要とする方々の生命および生活を守ることができる実践力を身につけることである。また、平時の支援の重要性と平時のかかわりが災害時の支援の質を左右するという認識を持ち、災害時においても個人の尊厳を最大限に守り、時間の経過や利用者の状況に応じて適切に対応できる判断力や応用力を養うことを目的とする。さらに、災害時に介護福祉士が求められるさまざまな場面や立場での役割を理解し、その責任や専門性に対する自覚、事前準備や組織的な対応の意義を理解する。あわせて各科目で習得した知識・技術を統合しながらグループで検討することを通して、チームワークや多職種連携の重要性を学ぶ。

#### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

1. 災害時の支援に関する科目を設置し、主に座学による基礎的知識の修得、GWによる検討、避難所設営やロールプレイによる実践という流れで段階的に学べるようにしている。また、ロールプレイには1年生にも利用者役として参加してもらい、次年度受講に向けて意識づけを行っている。

##### 「防災基礎」

災害に関連する法制度や経過ごとに必要な支援の内容、ライフライン停止下での個別支援の他、自宅や大学付近のハザードマップの見方や防災ポータルサイトから防災気象情報とともに災害リスクの把握や避難の方法・タイミングについて講義や演習を通して学ぶ。

#### 「防災福祉論」

GW にて大学周辺を架空の施設所在地と想定し、災害時のマニュアルやBCP等を検討するイメージを持てるよう作成したオリジナルの資料により施設周辺のリスク把握や平時、災害時の対応、各役割とタイムライン、利用者(20名前後の事例)への搬送方法、避難先の個別支援について検討を行う。ロールプレイでは、施設職員、利用者を演じ、水害による浸水が発生したものとして、GW で検討した内容を踏まえ垂直避難と避難先での支援を実演する。実施後は各グループの実演を評価し合う。

#### 「防災ボランティア演習」

県内外で起こる災害発生時、被災地域に赴いて復旧活動を行う教員が実際の体験、写真、動画を通して状況を伝えている。また、演習では炊き出し(ビニール袋やハイゼックスなどで調理)や避難所設営(段ボールベッド、簡易ベッド、簡易テントの設営・撤収、避難所を想定した生活スペースの検討・設営)を実際に行い、災害時ボランティアとして専門性を発揮できるようさまざまな演習を行う。

#### 「介護の基本」

災害時の施設体制、災害別の対応と事業継続計画、施設間連携や受援のあり方、福祉避難所の設置・運営と課題などについて講義を行う。

2. 行事や課外活動において災害を想定したプログラムを体験するなど、災害また災害発生時の対応について考える機会を多く設けている。

#### 「防災キャンプ」(養成課程外)

体育館・グラウンド等で、テント、簡易ベッド、避難所を設置し、宿泊する。火おこし、炊き出しなども体験する。冬期には、地域ならではの雪上安全法の習得や極寒の環境下での宿泊訓練も実施する。

#### 「災害救助訓練」(養成課程外)

全学的な取組で、他学科の学生とともに、傷病者のトリアージ、搬送、治療の流れを経験することで、チームワークや負傷者の心理を学ぶ。

上記以外に、赤十字救急法や赤十字生活支援法などで緊急時、災害時の対応を学ぶ。

#### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

- ・ GW では、各科目全体を通しての学びや実習での経験に基づく話し合いがなされ、

介護福祉を学ぶ学生としての知識や技術が身についてきていることを確認できる。

- ・ ロールプレイでは利用者個々の支援について、災害時は焦りから配慮が行き届かないことや災害時の利用者の心理や日頃の様子から起こりうる懸念を考慮できず支援を思うようにできないことから、平時の準備や利用者の把握の重要性に気づく。その他、個々の役割の認識と遂行力、状況判断と柔軟な対応、チームの連携と情報共有の必要性、実践の振り返りと計画の見直しの必要性への気づきがあった。一連を経験した学生からは、反省を踏まえもう一度行いたいという発言が聞かれる。
- ・ 災害時の介護について検討する経験を通して、災害時に必要とされる知識・技術はもちろんであるが、意見を出し合い、協調することやチームとして責任ある行動を取ることなど、多様な場、役割で支援する際に必要な専門職としての態度も養われているのではないかと思われる。
- ・ 参加した1年生は支援を受ける側の不安や戸惑いを感じながら、災害時であっても落ち着いて柔軟に対応することや個別の状況、症状にあわせ安全かつ安心できる支援が重要であることなどを実感している。自分たちが2年次に実践する立場になった際の状況と結び付けて考えていることから、今後災害時の支援について検討していくことを自覚し、学びの連続性を持たせることができているものと思われる。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ 災害時の介護を学ぶための科目を設置でき、恵まれた環境にあるが、教授内容や展開方法は適切か悩みながら実施している。
- ・ 学内でのロールプレイはライフラインが整っていない状況下にあるものとして行うが、実際には室温等に不備がなく、一時的な場面の再現である。したがって時間が経過し、物資等も十分でないなど支援の工夫・応用力を引き出すための実践についてはこちらのアイデアが乏しく現実味が薄い。主に紙面上での検討や振り返り時の補足にとどまっている。
- ・ 養成課程内の科目において他職種、他機関、地域、施設等と連携して実践したいが、実施できていない。

■GW・ロールプレイの様子(提供:日本赤十字東北看護大学 教員)



## (2) 静岡県立大学短期大学部

### 1. 学校の概要

学校種別	短期大学	所在地	静岡県静岡市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約20名

### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護福祉論 I (介護の基本)	1年	1コマ(全15回のうち7回目)	○
基礎介護技術(生活支援技術)	1年	2コマ(全30回のうち27,28回目)	○
福祉経営とリーダーシップ(人間関係とコミュニケーション)	2年	1コマ(全15回のうち6回目)	○

### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

<ol style="list-style-type: none"><li>1. 専門職としての役割と社会的ニーズの理解 「介護福祉論 I」において、近年の社会背景の中で、介護福祉士に医療的ケアや災害支援といった役割が求められている動向を学ぶ。</li><li>2. 実践的な技術の習得 ボディメカニクスを応用した移動支援技術など、実際の避難所等で求められる具体的な技術や留意点を理解する</li><li>3. 組織運営とチームマネジメントの視点 事例をもとに災害時に施設がどのような変化に巻き込まれていくのかをケースメソッドで理解する。DWATのような組織としてのチームマネジメントや、他職種・他機関との連携のあり方を学ぶ。</li><li>4. セルフマネジメントの重要性の理解 災害時という過酷な環境下で活動を継続するための、基盤となる自己管理能力の重要性を伝える。</li></ol>
--

### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

<p>「介護福祉士論 I」</p> <p>中央法規のテキストを基本としつつ、内容を補うために静岡 DWAT の動画を用いて、社会的ニーズや役割のイメージ化を図っている。</p> <p>(<a href="https://www.youtube.com/watch?v=2FdG-Sv_gfw">https://www.youtube.com/watch?v=2FdG-Sv_gfw</a>)</p>
---

#### 「基礎介護技術」

通常の自立支援を目的とした介護技術とは別に、緊急時に「移送」するための「搬送(移送支援技術)」を学ぶ。静岡 DWAT を講師に招き、県内で統一されている移送用具を用いて実技演習を行う。

ボディメカニクスの基本原則をいかに活用するかを重視し、体格差のあるペアをつくり判断力なども養っている。

#### 「福祉経営とリーダーシップ」

以前は、組織運営やチームマネジメントの視点から災害を扱い、オリジナルの教材をもとに、実際の施設被災事例を用いたケースメソッド演習(浸水時の対応や備蓄の考え方など)を重点的に行っていた。現在は静岡 DWAT のメンバーや社協職員などを講師に招き、組織活動としてのチームマネジメントや連携のあり方を伝えている。また、勤務規定や出勤規定の内容を紹介し、災害時の出勤義務の考え方や実際など制度的な学習も行っている。

### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

「基礎介護技術」で行う移送技術などの演習は、普段学んでいるベッドから車椅子への移乗と、災害時の搬送がいかに違うかを実感しやすい。一方で、避難所での実際の活動記録(エスノグラフィ)などの資料を提示しても、基礎知識が不足している段階では、全体像を理解できずに聞いて終わりになってしまう。

### 6. 授業を実施するうえでの課題

2 年制の短期大学であり、かつ教養科目もおいている過密なカリキュラムの中で、災害教育に割ける時間が非常に限られていることが最大の課題である。さらに、新カリキュラムで導入された ICT 活用や生産性向上などの内容を優先することで、以前は時間をかけていた災害時のチームマネジメント演習(ケースメソッド)の時間を縮小せざるを得ない状況になっている。

災害支援の実際を理解するためには、災害の種類や制度、支援チームの役割などの膨大な基礎知識が必要になるが、それを基礎教育の段階で全て網羅することには限界がある。そのため、養成課程ですべてを完結させようとするのではなく、「災害時にも応用できる基礎的な力(コンピテンシー)」を養うことに注力し、より高度な実践力は卒業後のリカレント教育(学び直し)に委ねる方向性が有効だと考えられる。

■移送演習で使用しているテキストおよび資料(提供:静岡県立大学短期大学部 教員)

**静岡DWAT登録員出前講座移送支援技術チェック表**  
(テキストp115~125)

学生氏名	DWAT 指導者サイン
------	-------------

**1. 移送支援の前提となる介護技術の基本確認 (演習前に確認)**

- 支援における支持基底面積・重心の捉え方などが biomechanics が理解できている。
- 支援に必要な体位の名称 (仰臥位、側臥位、端座位等) を正しく理解できている。
- 徒手搬送、支援具の使用にあたって、下記の技術 (手順、留意点) が理解できている
  - ① 仰臥位や側臥位の体位変換技術 (麻痺がある場合含む)
  - ② 車いすの事前点検、ベッド⇄車いすの移乗技術 (麻痺がある場合含む)

**2. 移送支援に必要な留意点 (演習後に確認)**

- 支援具のすべての名称・管理方法 (ひろげ方、装着、保管) が理解できた。
- 担架搬送 (ベルカ等) に必要な体位変換技術 (仰臥位から側臥位等) が実施できた。
- 支援者同士の身長差に配慮した役割、ベルトの長さ等が調整できた。
- 移送時は、前腕ではなく、上腕に力を入れ、20M以上の距離を搬送できた。
- 移送時の方向転換は、頭を軸に足から回転することができた (頭を揺らさない)。
- 進行方向、搬送経路等を事前に確認し、号令者の合図のもと息のあった行動ができた。
- 搬送開始時 (片膝を立てる、終了時のぐらつき (腰、足、頭の脚で降ろす等)、 biomechanics を活用し、自身の負担や衝撃を軽減した行動ができた。

**3. 徒手搬送に必要な留意点**

- 体格差に配慮し、搬送可能な対象者とペア (支援者) を判断できた。
- ふらつきのない状態で搬送を開始、終了できた。
- 実施後、対象者・支援者双方に過剰な負担感がなかった

※演習終了後にこのチェック表を活用して DWAT 指導者とふりかえりを行うこと。

静岡県立大学短期大学部：総合文化課 (2025.7 更新)



■ケースメソッドで使用しているオリジナル教材の一部(提供:静岡県立大学短期大学部 教員)

介護事業所・福祉避難所における  
事業運営(事業の機能維持)という観点

災害を未然に防ぐために行われる取り組み・行動である。  
災害を未然に防ぐ被害抑止のみを指す場合だけでなく、  
被害の**拡大を防ぐ**被害軽減や、被災からの**復旧まで含める**

「災害過程における基本的視点」

- ①設備・ライフラインの損害と事業運営
- ②備蓄・救援物資を活用した介護業務
- ③福祉避難所としての役割の追加
- ④マンパワーを維持するためのネットワーク形成
- ⑤通常業務に戻る(戻す)ための資源開発・活用

介護事業所・福祉避難所における  
災害(防災)対応訓練の検討材料になっている

巻き込まれる変化①

①どうなる?! ライフラインが途絶えた時  
—設備・ライフラインの代替品が支える通常業務—

災害時とはいえ、介護内容は通常業務と大きく変わらない。  
(むしろ変わらないことを目指すべき)。  
変わらないことを目指すためには、食事や排泄、入浴等の**日常生活上の介護内容の機能維持**のために必要な水・電気・ガスといった**ライフラインの確保**が不可欠であり、これらの代替品が確保できれば、早い段階でその質を支えることが可能です。

水・ガス・電気が断絶!

ライフラインの損害に対応した施設の備蓄品1週間分を考えましょう

### (3) 中部学院大学短期大学部

#### 1. 学校の概要

学校種別	短期大学	所在地	岐阜県関市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約70名

#### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の基本 C	2年	1コマ(全15回のうち14回目)	○
災害介護	1年	15コマ	

#### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

災害の概要や被災者支援に関する法制度・現状を理解し、介護福祉職として災害時に求められる役割と活動について学ぶ。自然災害が発生した環境下で、高齢者や要介護者の生活を支援するために、場面に応じた適切な支援方法を身につけることを目指す。

また、災害時における生活支援の重要性を理解し、介護福祉職が活動する場所や状況に応じた対応力を養う。さらに、多職種連携を円滑に行うための知識を習得し、地域や関係機関と協働できる実践力を育成する。加えて、介護者自身の命が守られなければ支援は継続できないため、「まず自分の命を守ること」、そして「自分にできること・できないこと」を判断する重要性を伝える。

#### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

「介護の基本 C(リスクマネジメント)」

「最新 介護福祉士養成講座6 生活支援技術 I 第2版(中央法規)」を参考にパワーポイントを作成し、座学の授業を実施。

「災害介護」(選択科目)

テキストを使用しないで教員が作成したパワーポイントと演習資料で、座学とGWを行っている。具体的には、施設の平面図を用いて、「一般の避難者が来た場合の住み分け」を考えたり、台風接近時などの時系列に沿って「どのタイミングでどのような介護(入浴、排泄等)を優先するか」を判断させる演習等を行っている。さらに、避難所支援を想定した「搬送方法」や「床からの立ち上がり」などの生活支援技術や非常食体験などを行っている。

「緊急時は経験したことしかできない」との考えから、講義による知識提供の時間と共に演習時間を多く確保するようにして、『学生自身が考え⇒実践する』時間を多く確保している。また、災害場面の写真や動画(YouTube)などを学生に提示したり、教員のボラン

ティア経験を伝えることで、場面のイメージを持つことができるようにしている。

2026年度より同科目の受講と下記「岐阜県 DWAT 後方支援員」への参加、さらに介護福祉士受験資格の必要単位を取得した学生に、大学認定資格「災害支援介護士」を認定する仕組みの構築を進めている。

岐阜県 DWAT の後方支援(養成課程外)

短大も含めた大学全体を対象として、「DWAT 後方支援員」という学生チームを結成し、岐阜県内で災害が発生し、県 DWAT が活動を開始した際に、要請に応じて学生が支援チームとして派遣される組織的な仕組みを構築している。県社協と連携し、定期的に養成研修や継続研修を実施しているほか、県 DWAT が主催する外部の研修にも、希望する学生が参加できる体制になっている。

#### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

「授業評価」による授業した学生の声は概ね好評のように受け取っている。座学については、正直、理解を得ているとの手ごたえは弱いのが、演習では学生自身が考える機会としており、積極的に発言するなどの様子から、印象に残っているように感じる。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

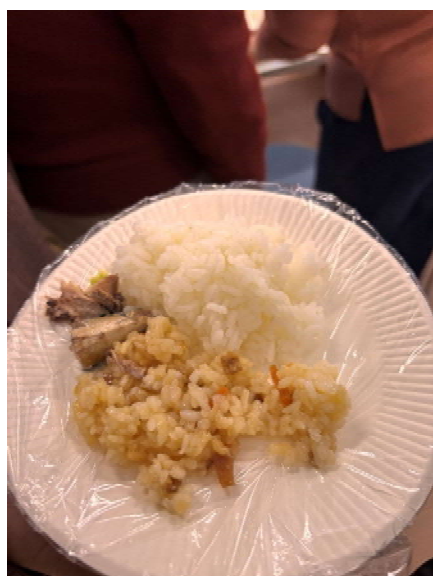
今年度はミャンマーで大規模地震が発生したため、災害に対する関心が高い留学生が多くいた。留学生の入学者数が増えている近年の状況を鑑みると、災害に関心を示す留学生が増える傾向は続く予測されるため、対応を考えていく。

災害を経験していない学生に対し、リアルに理解を求めることは難しいと感じている。そのため、上記4でも記したように映像や動画などを取り入れるようにしている。また、納得のいくテキストに出会っていないため、オリジナル資料を授業で活用しているが、正しい内容を伝えられているか不安を感じている。

何より教育を行う教員自身が災害に関する知識を持っていないと学生に伝えられないため、時間の許す限り自己学習に努めている。さらに、同テーマを扱っている者の社会的使命として災害ボランティアには可能な範囲で参加するようにしている。

災害の授業を行う中で気を付けていることは、発災時における介護福祉職の重要な役割と社会的使命を何度も伝えるようにしている点である。同時に、役割と使命の大きさから介護福祉職を目指すことを断念するとの選択にならないよう、大切さを強調するように意識している。

■科目「災害介護」での演習の様子(提供:中部学院大学短期大学部 教員)



■演習で使用している資料一部(提供:中部学院大学短期大学部 教員)

災害介護 演習

特別養護老人ホーム勤務中に発生した地震への対応

特別養護老人ホームで夜勤を行っている介護福祉職員の立場で、それぞれの場面での対応を検討してください。

11月●日 午前4時に震度7の地震が発生。近隣の家屋は崩壊し、ライフライン(ガス、電気、水道)も使用不可となる。また固定電話は不通状態であるが、携帯電話のlineなどによる発信は可能。

昨日までの数日間、豪雨が続けていたため、川が増水している。現在も小雨が降り続けている。

【施設の条件】

- ・特別養護老人ホーム(従来型 全室個室) 入居定員50名(満床)
- ・ショートステイ利用者なし
- ・要介護平均4
- ・酸素の常時吸入が必要な方はいないが、定期的に喀痰吸引の実施が必要な方が2名
- ・施設は、主な市街地から離れた場所にあるが、30件ほどの住宅が隣接している。施設隣には川が流れている。
- ・3階建てで1、2階に利用者の居室があり、3階に食道や浴室があるため、普段はエレベーターで上下移動をしている。
- ・施設の備蓄品
  - 70名×3日分の食料と水、自家発電装置、カセットコンロ
  - 倉庫にはオムツや医療器具が数日分保管されている。
- ・開所して3年目の施設で、福祉避難所には指定されていない。
- ・2km程はなれた小学校が指定避難所となっている。

【職員の条件】

- ・職員配置:介護職員20名、看護職員3名、相談員1名、事務員2名、施設長1名  
※厨房職員は外部委託
- ・勤務形態:日勤(8:30~17:30)、早番3名(6:30~15:30)、  
遅番3名(10:00~19:00)、夜勤3名(16:30~8:30)
- ・すべての職員が自動車出勤している。

場面1 検討時間:5分

巡視のため懐中電灯を持って各部屋をまわっている最中に地震が発生しました。

施設職員は何に注意をして、どのような行動をとるべきでしょうか?

場面2 検討時間:10分

数回の余震もふくめ地震がおさまり周りを見ると、非常灯以外の電気が消え、エアコンも停止しています。館内の家具等は散乱し、ガラスも部分的に割れています。さらに、つり天井からの落下物が心配されます。

施設職員は何に注意をして、どのような行動をとるべきでしょうか?

■演習で使用している資料一部(提供:中部学院大学短期大学部 教員)

2025年10月3日  
災害介護 3回目

## 発災前の取り組み 【準備期】

### 介護事業所における災害対策準備

- 事業所周辺地域のハザードマップ確認
- 避難場所の確認  
(事業所周辺、利用者宅周辺、災害種類の応じた避難場所)
- 安否確認の方法(職員、利用者)
- 安否確認出来なかった場合の対応
- 発災時に予測される利用者の問題と対応策
- 発災時の職員の役割分担
- 緊急連絡先、連絡方法

資料:災害対策マニュアル:www.cem.ac.jp/center/0000000001\_0004.pdf

### 災害時に必要な自助意識

多発する自然災害と頻発する特別警報  
国民が逃げて遅れる事例が多い。

行政主導の防災には限界がある  
【長年、行政主導で進めてきた防災のなかで国民が「災害過保護」になっている】  
【防災が「行政サービス」から「行政サポート」へ】

災害を自分のこととして認識をもち、自ら判断して避難する「自助意識」が、これからは必要となる。

出典:「人々の防災意識」調査報告(2020)

### 災害に対するリスクシュミレーション

事業所のリスク評価 → リスク対応の優先順位 → 具体的な被害想定 → 損害軽減策の実施

事業所のハザードマップなどを活用し、事業所のリスクを調査する。

リスクの高い順に優先順位をつける。

ライフラインの停止などを含み、具体的な被害を想定する。

優先順位に沿って対応する。

資料:「災害リスク評価と対応策」(2021)

### 訓練の種類

訓練	種類	内容
実動訓練		人々を実際に動かす、避難などを実施する訓練 定例の機会を確保することができる。
読み合わせ訓練		作成したBOPを復讐人で読み上げ、不備などが無いを確認する。
机上訓練	シミュレーション訓練 ロールプレイング訓練	仮定された状況に対し、参加者が行動を決定したり、判断などの意思決定を練習する。 訓練の付年、状況不変を考慮し、対応しておかない、変化していく状況にあわせて見直しや行動を適切におこなうことを確認する。

資料:「災害リスク評価と対応策」(2021)

### 平時での備蓄方法(ローリング・ストック方式)

非常時に特別に使用する備蓄ではなく、平常時に使用している用品などは、意識的に多めに用意しておき、被災時の備蓄として活用する。

備える → 日々使う → 買い足す

資料:「災害リスク評価と対応策」(2021)

### 緊急時の協力依頼

近隣地域や同一の災害で被災しない事業所等との協定を結び、緊急時の協体制を整えておく。

(例) 避難時の地域住民の協力  
避難場所の確保  
相互の救援活動 など

日頃の備えの重要性  
自助 → 共助

### 日ごろの医療的ケアへの備え (喀痰吸引が必要な場合)

吸引器に内部バッテリーがあるか確認

- 内部バッテリーを充電し、持続時間の確認
- 内部バッテリーが無い場合、外部電源を準備するが、電気を使用しない吸引器を準備しておく  
→ シリンダ+吸引カテーテル  
・手動式吸引器  
・足踏み式吸引器

資料:「災害リスク評価と対応策」(2021)

#### (4) 富山短期大学

##### 1. 学校の概要

学校種別	短期大学	所在地	富山県富山市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約30名

##### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
生活支援技術Ⅷ	2年	8コマ(全15回)	○
地域福祉論	2年	1コマ(全30回)	

##### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

<p>いついかなる場所でも、台風や地震、洪水などの災害が起こりうる状況にあり、高齢者や障害者などの要支援者の生活を支える介護福祉士にとって重要な役割と考えている。</p> <p>そこで、自助、共助、公助の視点から防災、災害対応の学習をしている。また、災害時の介護福祉士の役割や支援方法について学習している。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 自分の命を守るための災害情報やマイタイムラインなどの知識、技能</li><li>・ 災害時の地域における要配慮者の支援と課題についての知識</li><li>・ 災害時の介護施設の取り組みについての知識、実際の介護施設をもとに災害リスクについて考える。</li><li>・ 介護福祉士の災害支援の役割や支援方法などについての知識や技術</li></ul>
--

##### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

<p><b>【演習】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 避難所運営ゲーム HUG を活用し、高齢者、疾患を患っている方、子どもなどの要配慮者への環境づくりや対応を学ぶ。</li><li>・ マイタイムラインシートを活用し、災害への備えとして、学生自身が、どのような行動をいつするのかを考えてもらっている。</li><li>・ ハザードマップを活用し、自分や介護施設の津波や浸水などの危険度を実際に調べる。</li><li>・ 認知症高齢者、身体、知的、精神障害者の方々の避難所における具体的な支援方法について説明する。</li><li>・ 避難所での支援に関する動画など視聴覚教材を活用している。</li></ul> <p><b>【介護実習】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 介護実習において、実習施設の備蓄やマニュアルの説明や見学を促している。</li></ul>
--

【振り返り】

- ・ 確認テストを実施

5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

良い反応

- ・ 災害は、自分の身近に起こりうることと災害への意識が変わった。
- ・ 自分の住んでいる地域についての演習をすることで、興味を引きやすい。
- ・ 災害時、避難している人の生活でどんな課題があるのかわかったと意見があった。

課題

- ・ 避難所での要配慮者への支援内容は、知識として理解しているが、実際のイメージができないようである。

6. 授業を実施するうえでの課題

学生について

- ・ 本県は、比較的地震、台風、洪水の災害、被害が少ないため、災害への意識、災害時の対応を学ぶ興味関心、イメージが持ちづらい。

教員について

- ・ 私自身、東日本大震災の支援に行ったが、それ以降、日程調整が難しく行けていない。実際の経験が少なく、学生に事例を伝える引き出しが限られている。
- ・ 避難所での介護福祉職の支援に関する教材が少ない。(事例、アセスメントシート、多職種連携など)
- ・ 手探りで取組んでおり、養成校での到達目標やそれにつながる授業内容の妥当性に不安がある。
- ・ 教員が、災害支援について学習する機会があまりない。私の場合は、富山県介護福祉士会や防災士会の研修への参加、防災士を取得して、スキルを磨いている。
- ・ 実際に地域や避難所支援など、実際に体験する授業を増やしたいが、その機会が作れない。

(5) 佐久大学信州短期大学部

1. 学校の概要

学校種別	短期大学	所在地	長野県佐久市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約10名

2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の基本 I	1年	4コマ(全 30 回のうち 25~28 回目)	○
介護の基本IV	2年	1コマ(全 15 回のうち 6 回目)	○

3. 災害時の介護に係る授業の狙い

- ・ 自然災害発生時に、避難所における生活が中長期化した場合に備えて、要配慮者に対して多職種連携・協働して支援を行う必要があることを理解する。
- ・ 高齢者、障害者、乳幼児、妊婦等の要配慮者は、個人差、個別性が高く、避難所における支援も千差万別なので、要支援者それぞれの特性を理解したうえで、適切な支援を行う必要があることを理解する。
- ・ 避難生活の早期の段階から、福祉ニーズを的確に把握し、可能な限り個々のニーズに対応し、生活機能の維持のために支援すること理解する。
- ・ 避難生活終了後も、安定した日常生活へと円滑に移行できるとは限らないので、廃用症候群や生活不活発発病の予防のための支援も必要なことを理解する。
- ・ 福祉専門職による災害派遣福祉チーム(DWAT)の被災地や避難所における役割と専門性について理解する。
- ・ 災害発生時においても、被災者の自立支援、被災者の意思を尊重するケアが基本であり、その人らしい本来の生活に戻れるように支援する必要性を理解する。

4. 生徒・学生の理解を促す工夫

- ・ 授業の学び、気づき、感想について授業内で「振り返りシート」に記述させて、全員に提出させる。
- ・ 「振り返りシート」にコメントを添えて次回授業で返却する。感想について全員分まとめ次回授業内で配布して共有する。
- ・ 災害関連のDVD、YouTube 動画を視聴する。
- ・ 新聞記事のコピーを配布して資料として活用する。

5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

- ・ 防災意識が高まり、地震や台風等の自然災害のネットニュース、新聞報道に関心を抱くようになった。
- ・ 災害に備えて防災グッズを準備する学生が増えた。
- ・ 地元の避難場所、避難所、指定福祉避難所の場所を確認することを宿題とした。
- ・ 個人情報の保護に配慮して、自宅近隣の高齢者、障害者の状況を可能な限り把握することを宿題にした。
- ・ 将来、災害発生時に災害ボランティアやDWATへ参加したいか GW を行い意見交換させた。「参加したい」「何らかの役に立ちたい」という学生が多数いた。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ 自宅周辺の避難場所、避難所、指定福祉避難所の把握は容易にできるが、自宅近隣に避難時の要配慮者がいるかどうかの把握は、学生の立場では個人情報保護の配慮上きわめて難しい。隣近所の付き合いが希薄になっている現状がある。
- ・ 津波の心配がない、大きな地震が発生しない地域のため、自然災害に対する危機感が子どもの頃よりないので、災害がテーマの授業への関心度に学生の温度差がある。

(6) 湘南医療大学介護福祉別科

1. 学校の概要

学校種別	2年制大学	所在地	神奈川県横浜市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約30名

2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の基本Ⅰ	1年	2コマ(全15回のうち5、6回目)	○
介護の基本Ⅱ	2年	3コマ(全15回のうち8～10回目)	○
生活支援技術Ⅳ	2年	2コマ(全15回のうち14、15回目)	○
医療的ケアⅠ	2年	2コマ(全30回のうち5、6回目)	○
医療的ケアⅡ	2年	3コマ(全30回のうち28～30回目)	○

3. 災害時の介護に係る授業の狙い

災害時は、人命をどう守るか最重要課題となる。災害発生直後から、災害派遣医療チームと共に緊急災害医療の専門性が高い組織による救命等が必要である。適切な医療・介護等の支援を受けられるようにしていく必要がある。さらに、助かった「命」を介護福祉職は、災害による環境の変化に合わせて生活の支援を行うことも求められる。この学習によって、災害時における介護福祉職の役割を学び事前に以下のことを学習・演習をしておかなければならない。

具体的な学習(知識・技術内容)

- ・ 応急手当の知識と技術(応急手当について・応急手当の実際)
- ・ 災害時における生活支援についての知識、方法などの理解
- ・ 応急手当の方法・実践
- ・ 災害時の介護福祉職の役割(ボランティアとしての活動)を理解する

「介護の基本Ⅰ」

- ・ 災害時の支援、介護
- ・ 災害派遣福祉チーム(講義・DVD鑑賞等)

- ・ 災害支援からみえる介護福祉士の役割と専門性

「介護の基本Ⅱ」(予定)

- ・ 介護における安全の確保とリスクマネジメント
- ・ 感染症対策(映像鑑賞・体験者の聴講)
- ・ 災害による負傷者に対する応急手当方法等
- ・ 協働する多職種の機能と役割

「生活支援技術Ⅳ」(予定)

- ・ 災害時における「生活支援」の意義と目的
- ・ 災害時に安全に活動するために
- ・ 支援者としての在り方
- ・ 応急手当の知識と技術(応急手当の実演)

「医療的ケアⅠ」(予定)

- ・ 救急蘇生 ①応急手当の目的 ②応急手当
- ・ 救急蘇生法に手順・実際(心肺蘇生、顎先拳上法、指拭法、背部叩打法ハイムリック法、人工呼吸法など)
- ・ AED(AEDの活用法・実際の演習)

「医療的ケアⅡ」(予定)

- ・ AED(救急蘇生法の手順とポイント)学修
- ・ 人工呼吸の手順・気道遺物の除去法(演習)
- ・ AED使用して実際(体験・演習)
- ・ 清潔保持と感染予防(講義・実演)
- ・ 健康状態の把握(バイタルサインの確認方法)

4. 生徒・学生の理解を促す工夫

学習、演習、災害時の実際の映像など見ながら、イメージトレーニングや演習を実施していく。

- ・ 実際の活動に関しては、災害に関する映像等を見ながら実際の災害の状況を知る。
- ・ 視聴した災害の状況からどのような支援が必要か学生の意見を出し検討する。
- ・ 支援に関する知識・技術、演習など行い実際の支援活動ができるように育成していく。

5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

2025 年度 4 月に開校。現在は、1 学年であり、履修した科目は、「介護の基本 I」での「介護福祉士の活動の場と役割」として、以下の項目の概要の学習のみである。

- ・ 災害時要配慮者支援が求められる背景
- ・ 災害派遣福祉チーム
- ・ 災害時の介護

したがって、災害場面のイメージや活動内容のトレーニングもできていない。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

介護福祉別科は、全学生が多国籍の留学生である。日本語の言葉の理解度が困難・国によって文化的背景の違い、体験がない等、座学のみでは理解力が乏しい状況である。

しかし、災害はいつ起こるか予想がつかないことから、要点を抑えながら「災害時の教育」を進めていく必要がある。

今後は、具体的な災害場面の映像を鑑賞し、実際に模擬体験できる施設への訪問等が必要と思う。例えば、都道府県に避難訓練、防災訓練などの模擬体験ができるような施設があることが望ましい。

## (7) 名古屋経営短期大学

### 1. 学校の概要

学校種別	短期大学	所在地	愛知県尾張旭市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約30名

### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
リスクマネジメント(介護の基本)	2年	6コマ(8~15回目)	○
介護総合演習Ⅲ	2年	2コマ(12,13回目)	○
生活支援技術Ⅳ	1年	2コマ(23,24回目)	○
社会福祉概論Ⅰ(社会の理解)	1年	1コマ(8回目)	○
介護福祉特別講座(介護の基本)	2年	2コマ(8,9回目)	○

### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

災害を扱う授業では、災害に関する基礎的理解を踏まえたうえで、介護福祉士として災害時にどのような判断や支援が求められるのかを考え、自身の役割を具体的にイメージできるようにすることを狙いとする。

### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

#### 1. 外部講師の活用

実際の災害現場で福祉支援に携わった外部講師による講話を実施し、災害時に行われた具体的な福祉支援の事例を紹介した。これにより、教科書だけでは理解しにくい災害時の介護福祉の役割について、現実的かつ具体的に理解を深められるよう工夫した。

#### 2. 講義と演習を組み合わせた学習構成

社会福祉協議会主催の災害ボランティアコーディネーター講習会に参加し、災害ボランティアコーディネーターの役割や災害時の支援体制について講義形式で基礎的知識を学んだ。その後、ワークショップや演習を取り入れることで、知識の定着を図るとともに、実際の災害対応を具体的にイメージできるよう配慮した。

#### 3. 体験型学習の導入

視覚障害者の避難誘導体験を行い、障害のある人役と介助者役の双方を体験させた。実際に体を動かして体験することで、災害時における高齢者や障害のある人の避難の困難さや、支援時に求められる配慮について理解を深める工夫とした。

#### 4. 地域を活用した実践的学習

防災福祉マップ作りでは、学生が実際に地域を歩いて調査を行い、介護の視点から危険箇所や支援が必要となる場所を考察した。机上の学習にとどまらず、地域の現状を踏まえて考えることで、災害と日常生活とのつながりを理解できるよう工夫した。

#### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

本取組みに対する学生の反応は概ね良好であり、災害と福祉を結び付けて考える視点が養われていることが確認できた。

被災地で支援にあたった福祉専門職の体験談を聞くことで、災害時における介護福祉士の具体的な役割を現実のものとしてとらえることができ、「将来、自分が同じ立場で何ができるのか」を考える姿勢が見られた。

災害ボランティアコーディネーター講習会において、地域住民と協働しながら役割を担う体験を通じ、災害時の支援は専門職だけでなく、地域との連携が不可欠であることを理解したという声が聞かれた。

災害防災マップ作りでは、防災の視点だけでなく、高齢者や認知症のある人、障害のある人など、支援が必要となる人を想定しながら地域を見直すことができた。「これまで気づけなかった危険場所に気づいた」「介護福祉士の視点で地域を見る大切さを実感した」という感想があり、福祉専門職としての視点を確認できた。

一方で、防災福祉マップについては、「作成して終わってしまっている」「実際にどのように活用されるのかわかりにくい」といった意見もあり、実践的な活用場面までむすびついていない。この点は、今後の改善課題である。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ 学生の中には、過去に災害を経験している場合もあるため、不安や恐怖を与えないよう配慮しながら進行する必要があるように思う。
- ・ 近年、介護福祉士を志す学生は、現役の日本人学生に加え、外国人留学生や社会人など多様化しており、災害や防災に関する知識や経験にはばらつきがみられる。そのため、災害に関する基礎的事項から説明する必要があるが、限られた授業時間の中で十分に扱うことは難しい。

■防災福祉マップ作りの様子(提供:名古屋経営短期大学 教員)



■災害ボランティアコーディネーター講習会の様子(提供:名古屋経営短期大学 教員)



## (8) 佐賀女子短期大学

### 1. 学校の概要

学校種別	短期大学	所在地	佐賀県佐賀市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約40名

### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
生活支援技術	1年	2コマ	
生活支援技術	2年	4コマ	○
介護の基本	1年	2コマ	○

### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

現在福祉施設では、業務継続計画(BCP)が義務づけられ、卒業後、介護福祉士として福祉施設等で勤務する学生は、近年の新型コロナウイルス感染症、大規模災害などが起こった時に対応できる人材の育成が必要とされている。

そのためには、平時より、防災・減災の知識を身につけ、避難訓練や災害時の対応の学習、災害ボランティアの方との連携を図り、今後の地域に根ざした人材育成を図る必要がある。

### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

- ・ 留学生が多いため、日本の災害対策について説明が必要である。
- ・ 佐賀県の外国人に特化した団体「佐賀県国際交流協会」や佐賀県の防災課との連携を図り、講演を行っている。
- ・ 学校の敷地内に災害支援活動・フードバンクの拠点である倉庫があり、支援物資や物資の搬出入などのボランティア活動ができる環境が多く、日頃から身近に災害時への対応を感じることができる。
- ・ 災害ボランティア活動に参加した学生・教員の体験談などの講演会を行っている。
- ・ 避難所の災害用トイレや段ボールベッドの組み立て体験、非常食づくりを行っている。
- ・ 地域の指定避難所となる公民館へ訪問し、地域の方々との交流会を行う。

### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

#### 学生の意見

- ・ 佐賀県で安心できる暮らしを考えることができた。
- ・ 非常用持ち出し袋を準備した。

- ・ 災害時のことを意識して、行動ができた。
- ・ 1年間学んだ学生が後輩へ、説明ができています。

#### ボランティア活動

- ・ 同じ敷地内での支援物資など搬出入のボランティア活動ができています。
- ・ 災害ボランティア活動、能登半島への炊き出し支援を行った。
- ・ 被災地におけるボランティア活動を実施するにあたり、参加する学生等の移動に伴う交通費および現地での宿泊費など、活動に必要な諸経費について支援であった。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ 留学生と日本人との災害教育に対する教育の違い。
- ・ 被災している学生もいるため、事前に授業内容などの伝え、配慮を行う。
- ・ 防災グッズ・非常食などの購入の経費
- ・ 防災・減災の講師の方への謝礼の経費

#### ■災害用トイレや段ボールベッドの組み立て体験の様子(提供:佐賀女子短期大学 教員)



#### ■指定避難所となる公民館での住民との交流の様子(提供:佐賀女子短期大学 教員)



### 3. 専門学校

#### (1) 早稲田速記医療福祉専門学校

##### 1. 学校の概要

学校種別	専門学校	所在地	東京都豊島区
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約60名

##### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の基本Ⅱ	1年	1コマ	○
生活支援技術Ⅱ	1年	2～3コマ	○
介護福祉ゼミⅠ	1年	2～4コマ	

##### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

- ・ 「日頃できていないことは、災害時にもできない」という考えから、災害を特別扱いせず、日々の質の高い介護や適切な情報共有がそのまま災害時の役割を果たすことに繋がることを伝える。
- ・ 単なる知識ではなく、五感を用いた時間を伴う学びにより思考力や実践力を養う。
- ・ どんなに過酷な環境でも「自分の頭の中は自由」という考え方を伝え、自分自身の心と体を守る力を養う。

##### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

###### 生活支援技術Ⅱ

被災経験がない学生は、通常のロールプレイではリアリティが欠けて学習効果が低いと考え、火災時の低い姿勢を長時間保つ、狭い空間で頭と足が逆になるような距離感で過ごすなど、身体的な痛みや不自由さを実感できる五感を用いた学びで想像力を補うようにしている。

全学的な取組として、避難訓練や豊島区の消防団と連携した上級救命技能講習を実施しており、いざという時に動ける力を身に付けられるように促している。

###### 介護福祉ゼミⅠ

応用インプロを用いたワークを行い、即興で与えられたテーマについて考え、言葉を使わずに情報を共有したり、想定外の事態に創造性を発揮して対応できる思考力・行動力を養成している。

学生(留学生含む)の中には、言葉の意味は理解できても、それが実際に何を引き起こし、どのような事態を招くかという具体的な想像(文脈の理解)が難しい者もいるため、複

雑な言葉と文字による説明ではなく、わかりやすい言語表現＋色・形・重さ・匂い・動きといった五感に働きかける表現を用い、個々のインテリジェンスの違いを超えて共有できるよう工夫している。

・看護科との合同授業(年1回)

看護科と合同で、能登半島地震などの現地ボランティアに入った教員の体験を基に、段ボールを用いて避難所設計を考える GW を実施。他職種との価値観の違いを知り、合意形成やコミュニケーションの重要性を学ぶ貴重な機会となっている。

5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

- ・ 即興のゲーム性(遊び)を活用した授業では、学生が本気で取り組んだ時に大きな力を発揮しており、潜在的な能力とその成長が感じられる。
- ・ 学生にとって身近な事柄や関心事に災害の視点が結びついたときに具体的なイメージや事象とつながっている様子が見られる。

6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ ほとんどの学生に被災経験がないため、学びが「浅い・薄い」ものになりがちである。写真や動画は有効だが、現場の匂いや不快感、痛み、長時間の不自由さといった五感情報は伝わりにくいため、いかに実感を伴う疑似体験を作り出すかを考えている。
- ・ 現在の1年生の大半が留学生であり、日常の感覚や災害時の優先順位、判断基準が異なる。これにより、意見の衝突や心理的な距離感が生まれるリスクもあるが、「簡単に分かり合えない現実」を知ること自体を、多職種連携や多文化共生の重要な学びになるよう、学習効果の向上に努めている。
- ・ 出身地(出身国)で被災経験(紛争等含む)を持つ学生もいるため、個別の面談を通じて、授業内容が心理的な負担にならないよう注意している。

■看護科との合同授業の様子(提供:早稲田速記医療福祉専門学校 教員)



## (2) 東北保健医療専門学校

### 1. 学校の概要

学校種別	専門学校	所在地	宮城県仙台市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約10名

### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の基本Ⅰ	1年	1コマ(全30回のうち14回目)	○
介護の基本Ⅲ	2年	2コマ(全30回のうち22、23回目)	○

### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

#### 1年生

災害時において、介護福祉士が DWAT などの一員として活動する場があること、DWAT は自ら志願して登録するものであること、被災地では非日常生活の中で健康状態を維持し要介護状態に陥らないよう支援する役割があることを理解できることを授業目標とし、被災者支援を主体的に行える人材育成を目的としている。

#### 2年生

自分の勤務する介護施設が福祉避難所になった場合、災害対応を自分のこととして考え、行動でき、またどのような事例が起こり得るのかを知ることが授業目標とし、実際の災害対応で即戦力として力を発揮できる人材育成を行うことを目的としている。

### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

- 令和6年能登半島地震において1.5次避難所介護支援を行った教員(私)の体験談を活動記録にまとめ、それを元に、現場の様子、被災者の様子、支援者の覚悟、支援内容、課題について説明した。また、同1.5次避難所介護支援にあたった他科の教員(作業療法士)の先生からも体験談をお話いただいた。人口の規模感など、伝わりやすいように地元の人口と比較し説明した。
- 「HUG 社会福祉施設バージョンゲーム」を使用した疑似体験を実施した。

### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

- 体験談については、特に質問があるわけでもなく、そうなんだ、という感じで聞いていた。

- ・ HUG は楽しみながら、かつスピード感を持って実施できた。グループ同士の対応を質問し合い確認することで、より想像力を働かせることができていた。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ 東日本大震災を経験した学生たち(当時 5 歳)であり、被災している可能性もあるため、津波の写真などをスライドに映す前に説明し、見なくても良いことを伝えた。
- ・ 体験談を聞くだけでなく、自分事として考える GW の時間も設けたいと考えている。

### (3) アール医療福祉専門学校

#### 1. 学校の概要

学校種別	専門学校	所在地	茨城県土浦市
修業年限	1年	1学年の平均生徒・学生数	約40名

#### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の基本Ⅱ	1年	1コマ(全30回の18回目)	○

#### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

1. ボランティア活動について ボランティアシステムの成功例の伝達と「三条市災害ボランティアセンター」の組織運営と連携の強化等
2. 他人事ではない関心の植え付け

#### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

<ul style="list-style-type: none"><li>東日本大震災の被害状況についての説明</li><li>復興への役割(市民・市町村役場・民間企業・ボランティア団体等)の説明</li><li>ハザードマップと防災マップの違いを説明</li></ul>
---

#### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

<ul style="list-style-type: none"><li>母国(ベトナム・ネパール・スリランカ)の現状について共有</li><li>防災意識の向上、関心、身近な人への心配など</li></ul>
--

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

<ul style="list-style-type: none"><li>防災意識を普段から持ち続ける方策</li><li>茨城県土浦市、かすみがうら市のハザードマップの見方、活用の方法の教授</li><li>災害へのリスクマネジメントの検討</li></ul>
--

#### (4) 平岡介護福祉専門学校

##### 1. 学校の概要

学校種別	専門学校	所在地	福岡県小郡市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約40名

##### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
人間と社会の理解	1年、2年	3コマ(全45回のうち31~33回目)	○

##### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

地震や台風、豪雨、大雪などの自然災害をはじめとする様々な事象に対して、介護福祉士としてどのように動かなければならないのかを学生時代にBCPを学ぶことで、施設の現場に入ったときに、BCPのマニュアルやその訓練について、確認できるリスクに関する感覚を磨いていく。利用者の命を守り、職員の命を守りながらも事業を継続するための知識を机上訓練でイメージ化させていく。机上訓練の経験を現場で働きだしてから、BCPのマニュアルだけで終わるのではなく、机上訓練を施設で実施していく人材の育成。

##### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

小郡市の防災課の職員に来ていただいて、地域の避難MAPや地域の福祉避難施設等の場所とその役割を教えて頂き、BCP机上訓練を行う。

学校で災害の想定、施設の想定を作成、BCPを作成し、それに沿って机上訓練を小郡市の防災課の方がファシリテーターになり、進行をしていく。

##### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

介護施設現場で、災害時には勤務中であれば自分が動かなければいけないという意識づけになった。又、地震が起きた際に施設がどのような状況になるのかをイメージすることができた。利用者の命を守るにしても、夜勤2名の時、助けられる命、助けられない命を自分たちが判断しなければいけないのかという究極の選択をしなければいけないのは荷が重い。地震も豪雨も身近になっているので訓練は大事。災害が起きた時には勤務にかかわらず、利用者の命を助けるためにどのように動くのかを学べた。

##### 6. 授業を実施するうえでの課題

実際に熊本の地震や大分の火災でも福祉の方たちが活躍されていた。実際にどのように動いたのかを経験者に聞きたいところである。一専門学校ではそのような当事者の経

験を話していただくイベントの開催は難しい。

■市の防災課の職員を招いた講義(提供:平岡介護福祉専門学校 教員)



## (5) A校

### 1. 学校の概要

学校種別	専門学校	所在地	徳島県徳島市
修業年限	2年	1学年の平均生徒・学生数	約30名

### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護の基本Ⅲ	2年	2コマ	○
生活支援技術Ⅱ	1年	3コマ	○
介護過程Ⅳ	2年	2コマ	○
介護総合演習Ⅳ	2年	2コマ	○

### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

施設や地域などで災害が起きた時の介護福祉士としてのどのような行動をとるべきか、また、災害時の支援についての考えを深める。

### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

教員が作成した資料と、教科書のみ使用

### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

- ・ 実際に災害などにあつたことがないため、ピンときていなことも多い。
- ・ 留学生には言葉やシステムなどの理解が難しく、想像がつきにくいところもある。

### 6. 授業を実施するうえでの課題

国試もあるため、最低限の知識は理解してほしいと思い、授業を行っている。しかし、教員も知識や経験がなく、教科書のみを頼っている状況である。

本来は、身近なもので災害グッズを作ったりしてみたり、実際に避難所の見学や防災センターにも行きたいと思うことは多くあるがそこまで至らない状況である。

#### 4. 福祉系高等学校

##### (1) 石川県立田鶴浜高校

###### 1. 学校の概要

学校種別	福祉系高等学校	所在地	石川県七尾市
修業年限	3年	1学年の平均生徒・学生数	約10名

###### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
社会福祉基礎	1年	1コマ(全35回)	○
社会福祉基礎	2年	1コマ(全35回)	○
社会福祉基礎	3年	1コマ(全70回)	○
介護福祉基礎	1年	1コマ(全105回)	○
介護福祉基礎	2年	3コマ(全70回)	○
介護総合演習	1年	1コマ(全35回)	○
介護総合演習	2年	1コマ(全35回)	○
介護総合演習	3年	1コマ(全35回)	○
介護実習	1年	3コマ(全70回)	○
介護実習	2年	3コマ(全175回)	○
介護実習	3年	3コマ(全210回)	○

###### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

- ・ 「自分の身は自分で守る」ことを最優先の原則とし、自分が元気であってこそ、助ける側になれるという考えを、介護技術の根拠と結びつけて伝える
- ・ 災害には決まった正解がないため、マニュアル通りではなく、常に考え、臨機応変に動ける思考力と実践力を育成する

###### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

「介護総合演習」

制約された環境でも利用者の生活支援を継続できる思考力と実践力を養うための演習を実施。たとえば、避難所を想定し、制約された物資と要配慮者の情報を提示したうえでのおむつ交換を行う。そのなかで、応用力を身に付けるだけでなく、グループ間で必要な工夫を話し合ったり、他のグループの発表を見て新たな視点に気づいたりする。

また、教員は生徒が気づいていない部分について正解を教えるのではなく、問いを投げかけ、生徒が粘り強く続けることを促す。

#### 現実に近づけた避難訓練(養成課程外)

能登半島地震の経験を踏まえ、避難訓練では住民にも参加してもらい、リアリティを追求するようにしている。具体的には、避難経路を定めずに状況に応じて最適な経路を判断させたり、数人の生徒をグループから外して「誰がいつからいないのか」といった情報を収集したりする。また、避難して終わりではなく、学校の中で一晩過ごす場合は、親にどう風に連絡するかなど、自分たちの実際の動きを考えることを促している。

#### 災害に備えたまちづくりプロジェクト

能登半島地震の経験を踏まえ、県事業を活用し、看護科と合同で以下の取組を実施した。

- ・ ボランティア活動として、仮設住宅への荷物運びや街の掃除を実施した。また、輪島市や能登町の仮設住宅で被災者と交流し、被災者の心に寄り添う重要性を学んだ。
- ・ 震災後の健康を守るための具体的な支援策の検討として、家庭にあるものを使って、どれが一番体を温める効果があるのかをサーモグラフィーを用いて検証するなど、具体的な知識を得る取組をした。
- ・ 地域団体とともに、地域の未来を考えるジオラマづくりを実施。能登半島地震の前からフィールドワークを実施して避難マップを作る取組を行っており、要配慮者の視点で地域を見る目を養っている。

#### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

- ・ 被災した生徒が、自分の言葉で何が起こったかを発信し始めるなど、「学びのリーダー」としての役割を果たすようになっている。被災の有無にかかわらず、他人事ではないという意識が強まり、自らの立場で何ができるかを主体的に考える姿勢が見られている
- ・ ボランティア活動を通じて、「自分も何か役に立てた」という実感を伴う喜びを感じられている。
- ・ フィールドワークの際、高齢者の目線に合わせて「下(段差やバリア)を見て歩く」専門職特有の視点が身についている
- ・ 被災しながら福祉避難所を運営した施設長の講話などの体験談に対しては強い関心を示している。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ 既存のカリキュラムは時間的な制約が多く、災害に関する内容を特別に扱うことが難しいため、教科横断的な工夫で時間を捻出している。
- ・ 実際に家が全壊した学生から、直接的な被害を受けていない学生まで、「温度差」があった。授業で災害を扱う際は、事前に個別に声をかけるなどの注意を払っている。

- ・ 震災から時間が経過し生活が落ち着くと、被災した学生ですら当時のことを忘れがちになるため、教育を継続し、いかに「自分事」として捉え続けさせるかが課題
- ・ 生徒数の減少により、GW を行っても多様な意見が出にくくなっているため、教員による仕掛けや誘導が重要になっている。

■避難所を想定したおむつ交換の演習の様子



■避難所でのボランティア活動の様子(提供:田鶴浜高校 教員)



■体を温めるものを検証した実験の、生徒作成の報告資料(提供:田鶴浜高校 教員)



## (2) 宮城県立迫桜高等学校

### 1. 学校の概要

学校種別	福祉系高等学校	所在地	宮城県栗原市
修業年限	3年	1学年の平均生徒・学生数	約5名

### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護福祉基礎	1年	1コマ(第2編全17回)	○
介護福祉基礎	2年	1コマ(第3編全34回) 2コマ(第4編全18回)	○

### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

- ・ 災害を自分事として捉える
- ・ 災害が起きた際の介護者・専門職としての視点を育てる
- ・ 「博愛心」を育てる

※個人的には、「災害時に発揮された“助け合いの力”」も学ばせたいと思っている。東日本大震災では、震災後すぐに全国から多くのボランティアが集まり、各地から支援物資が届けられた。その出来事を通して、人々が互いに支え合い、助け合おうとする温かさや団結力が日本人にはあると気付いた。そのため、生徒達にもこの「日本人の素晴らしさ」を伝え、学ばせたいと思っている。

### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

介護福祉基礎の中で、「第2編第2章の災害時における支援、平常時の防災活動」や「第3編第3章の聴覚・言語障害者の生活と支援」、「第4編第1章介護現場における防災対策」において災害について取り扱っている。授業では、生徒が「自分ごと」として災害を考えられるよう、次の工夫をしている。

- ① 聴覚障がいのある方から直接伺った体験を紹介(東日本大震災)  
災害時にどんな困難があったのか、どのように情報を得たのかなど、当事者の声を伝えることで、教科書だけでは分からないリアルな状況を学ばせている。
- ② 指導教員自身が、災害発生1ヶ月後からボランティアとして避難所・仮設住宅で活動した経路を紹介(東日本大震災)  
現場で見たこと、感じたこと、支援の難しさなどを具体的に伝えることで、生徒が災害時の現実をより深く理解できると思い、指導している。

③ 新聞スリッパ(靴下)の作成 (URL:<https://grapee.jp/111613>)

小学生が夏休みの自由研究で発表した新聞スリッパについて生徒に伝え、一緒に作成している。このスリッパにより、ガラスの破片から足を守ることが出来る他、寒さもしのぐことが出来るため、紹介し、災害の時に役立つ知識として指導している。

これらの話を伝えることで、生徒は「災害は特別な誰かの話ではなく、自分にも起こりうる現実」だと気付くのではないかと考えている。その上で、もし自分がその場にいたらどう行動するか、介護者として、人として何が出来るのかを考えるきっかけになるよう、工夫しながら授業を展開している。

5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

新聞スリッパ作りについては、多くの生徒が楽しそうに取り組んでおり、活動自体への興味や参加意欲は高いと感じられる。また、教師自身の災害ボランティア経験や、聴覚障がいのある方の体験談を紹介する場面では、表情や態度においても真剣に耳を傾けている様子が見られる。実際の声やリアルな経験談は、生徒にとって強い関心を引きつける要素になるのではないかと感じている。

一方で、話を聞いたうえで「では自分はどうかわるのか」「災害時にどのように動きたいのか」「施設で災害に直面した場合」といった“自分ごととしての深い思考”に結びつける段階では、まだ十分に考えを深められていない印象がある。これは、災害経験が乏しいことや、状況を具体的に想像する力が育ちきっていないことが影響していると考えられる。そのため、今後は体験的な学習や具体的な事例提示をさらに取り入れ、生徒が「自分ならどうするか」をよりイメージしやすい授業づくりが必要であると感じている。しかし、写真や動画については観ることにより、精神面に負担を与える場合もあるため、気を付けて取り扱っていきたい。

6. 授業を実施するうえでの課題

現在の生徒は、東日本大震災発生時、生まれて間もないということもあり、震災を「経験として知らない」ことに授業において困難を抱えることが多い。また、近年発生した熊本地震や能登半島地震についても、宮城県から地理的に離れていることから、被害の実感を持ちにくい状況にある。そのため、災害を授業で扱っても、どこか他人事のように受け止められ、災害の恐ろしさや避難生活の厳しさを十分に想像できない学生が多いように感じられる。避難訓練においても、「どうせ訓練だから」という姿勢が見られ、真剣に自分の命を守る行動として捉えられない様子がある。これは、災害経験の欠如だけでなく、日常生活の中で危機を想像する機会が少ないことも影響していると考えられる。こうした背景を踏まえ、授業では学生が少しでも「自分ごと」として災害を捉えられるよう、上記のような

工夫をしながら授業を行っている。

一方で、震災直後の教育現場では、地震や津波の話題に触れることで、過去の体験を思い出し、強い不安や恐怖を感じる生徒もいた。そのため、授業内容や避難訓練の進め方については、PTSD への配慮が欠かせなかった。刺激の強い映像を避けたり、事前に内容を知らせて心の準備ができるようにしたり、必要に応じて個別に声をかけるなど、生徒の心の安全を最優先にした対応が求められていた。

### ■聴覚障がいに関する説明資料(提供:宮城県迫桜高等学校 教員)

<h4>地震・火災等の災害について</h4> <p>●地震が夜に起きた</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・電気がつかない →家族と話ができない(手話が見えない・口が見えない)</li><li>・テレビがつかない →ニュースが見れず状況が把握できない(ラジオも)</li><li>・ファックスが使えない →友達と連絡が取れない (※現在はスマホが普及しているため、少しずつファックスの問題は減少。しかし、ご高齢でスマホが使えない場合もある)</li></ul> 	<p>●避難したとき</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・食べ物や飲み物の配布放送が聞こえない →耳が聞こえずもらえなかった方が実際にいる</li><li>・周囲の人の声が聞こえない →仲間に入れない(手話ができる人がいない)</li><li>・テレビに字幕が付かない →何を言っているのか分からない(特に生放送)</li></ul> <p>★耳の聞こえない人は「聞こえない」という事が外から見てもわからないため、助けが遅れてしまう！とても困難を抱えているという事を理解してほしい</p> 
--	---

### ■新聞スリッパ作りの様子(提供:宮城県迫桜高等学校 教員)



### (3) 栃木県立真岡北陵高校

#### 1. 学校の概要

学校種別	福祉系高等学校	所在地	栃木県真岡市
修業年限	3年	1学年の平均生徒・学生数	約20名

#### 2. 災害時の介護に係る授業

カリキュラム	配当学年	授業時間	養成課程
介護福祉基礎	1年	4コマ(全70回)	○
生活支援技術	2年	2コマ(全140回)	○

#### 3. 災害時の介護に係る授業の狙い

災害について知るとともに、いざ災害が起こった際の介護福祉士としての対応は勿論のこと、自分の生活をまもる手立てを習得できるようにする。

#### 4. 生徒・学生の理解を促す工夫

- ・ 真岡市のハザードマップ
- ・ 自分が住んでいる自治体のホームページ等の閲覧

#### 5. 受講した生徒・学生の反応・手応え

- ・ 災害は、いつ起きるかわからないので、常日頃から災害に関する情報等が入るようにしておきたいと思った。また、自分の住んでいる地域の避難経路を家族で確認しておきたい。
- ・ 災害時に高齢者の方がどのような困難にぶつかってしまうのかはある程度予測はしていたけれど、実際に介護従事者がどのような行動をとれば良いのかまでは知らなかったもので、とてもよい勉強になった。

#### 6. 授業を実施するうえでの課題

- ・ 災害を実際に経験している生徒がいる場合もあるので、事前に生徒の背景などを把握した上で授業展開を行う必要がある。
- ・ ハザードマップの見方では、今後の自分たちの生活(一人暮らしを行う生徒もいる)のために時間をかけた。
- ・ 授業の後、栃木県防災館に見学に行き、地震・大雨・強風体験を通して、日頃の家庭での備えや介護従事者としての備えについて、学びを深めている。



第4章 災害時に介護福祉士に求められる資質・能力  
を養う教育事例

---

本章では、災害時に介護福祉士に求められる資質・能力を養うための教育事例を、資質・能力ごとに整理して示す。

ここで示す事例や実施上のポイントは、災害に関する知識を単に付加することを目的とするものではなく、平時の学びを災害時の実践へとつなぎ、現場で発揮できる力として育成することを意図している。

各養成施設等においては、教育課程や地域特性、生徒・学生の実情に応じて、既存科目との関連を図りながら活用されることを期待したい。

## 0. 災害に関する基本知識・災害時における介護福祉士の役割と活動の理解

### 【参考教育事例】

#### ①知識による学び

- ✓ テキストを用いた災害に関する基本知識の教授(4年制大学)
- ✓ 教科書をもとに作成したオリジナル教材での基本事項の説明(短期大学)
- ✓ 教員が作成した資料と教科書で災害時の介護福祉士の役割を講義(専門学校)
- ✓ 有事でも平時でも、介護福祉士の役割は対象者の生活支援であることを介護の基本で教授(4年制大学)
- ✓ 過去の災害についての調べ学習とグループディスカッション(4年制大学)
- ✓ 災害ボランティアの成功例の伝達(専門学校)
- ✓ 教員の1.5次避難所の体験談を話し、現地の活動を共有(専門学校)
- ✓ 被災地での活動経験のある外部講師を招いた体験談の共有(短期大学)
- ✓ 応急手当の知識・技術の実践(2年制大学)
- ✓ 介護実習施設の備蓄やマニュアルの説明や見学(短期大学)

#### ②演習・体験による学び

- ✓ 科目「医療的ケア」での救急対応の理解と実践(2年制大学)
- ✓ 県防災館の見学、地震・大雨・強風体験(福祉系高等学校)

## 1. 災害時でも一貫して要配慮者中心の視点を維持する力

### 【参考教育事例】

#### ①知識による学び

- ✓ 災害時における介護職員の役割を、事例や映像教材を通して教授(4年制大学)
- ✓ 生活支援技術の授業で、災害に特化せず、湯たんぽやポータブルトイレの活用方法を教授(4年制大学)
- ✓ 聴覚障がいのある方による東日本大震災の被災体験談の講話(福祉系高等学校)

#### ②演習・体験による学び

- ✓ 狭い場所で体を寄せて寝たり、火事を想定して低い姿勢を保ったりする五感を使った疑似体験(専門学校)
- ✓ 避難時の移動支援技術を、実技演習やロールプレイにて実施(4年制大学)
- ✓ 避難所支援を想定した「搬送方法」や「床からの立ち上がり」などの生活支援技術、非常食体験(短期大学)
- ✓ 視覚障害者の避難誘導体験を行い、障害のある人役と介助者役の双方を体験(短期大学)
- ✓ HUG を用いたさまざまな要配慮者への環境づくりや対応の演習(短期大学)
- ✓ 利用者の命を守り、職員の命を守りながらも事業を継続するための知識を机上訓練でイメージ化(専門学校)
- ✓ 全学的な防災キャンプへの参加(短期大学)

### ★教育を実施するうえでのポイント

災害時においても要配慮者中心の視点を一貫して維持する力を養う教育の核心は、平時と有事の連続性の理解にある。たとえ災害時という過酷な状況下にあっても、災害を日常から切り離された特殊な事態と捉えるのではなく、限られた人的物的資源で、支援者も要配慮者も限られた力を発揮しつつ日頃の生活支援の延長線上として捉えることが重要である。

災害支援において、要配慮者の状況把握が困難な場合や関係性を構築する時間が十分でない環境下においては、支援が一時的な施しに陥りやすく、それが結果として自立を妨げる要因となる可能性があることを理解する必要がある。また、いかなる状況でも要配慮者とその家族介護者等の状況に応じた必要な支援を行い、介護福祉士としての高い倫理性を保持するための教育が求められる。

具体的なポイントは、個々の生活史や現状に基づく要配慮者の個別性の理解と、避難所等からの在宅への復帰等の将来を見据え本人の状況に応じた自立支援を考える力が求められ、過剰な支援や適切な支援が不足することがないように多面的な視野の育成が必要である。単なる災害支援や単発的な救助に留まらず、避難生活の早期からその後の自立した生活への移行を見据え、災害関連死や廃用症候群の予防等を含めた暮らしの再構築の視点を持ち、尊厳の保持と自立を支援する力を養う必要がある。

(本事業検討委員会)

## 2. 支援に必要な情報を見極め、収集する力

### 【参考教育事例】

#### ①知識による学び

- ✓ 多職種連携や福祉的トリアージについて実例をもとに説明(4年制大学)
- ✓ 過去の災害についての調べ学習とグループディスカッション(4年制大学)
- ✓ 学校所在地のハザードマップを用いた授業(福祉系高等学校)
- ✓ ハザードマップを活用した、自宅や介護施設の津波や浸水などの危険度の調べ学習(短期大学)

#### ②演習・体験による学び

- ✓ 即興で与えられたテーマについて考え、実践する授業で情報の共有や思考力・実践力を養成(専門学校)
- ✓ 避難所支援を想定した「搬送方法」や「床からの立ち上がり」などの生活支援技術、非常食体験(短期大学)
- ✓ 災害時の移送における計画や実践のGW、ロールプレイの実施(短期大学)
- ✓ 看護科との合同授業で、避難所設計を考えるGWを実施(専門学校)
- ✓ 小平市版のHUGを作成し、授業で大学の地域資源にあてはめたGWの実施(4年制大学)
- ✓ HUG(避難所運営ゲーム)やDIG(災害図上訓練)を用いた参加型の演習(4年制大学)
- ✓ HUGを用いたさまざまな要配慮者への環境づくりや対応の演習(短期大学)
- ✓ HUG 社会福祉施設バージョンゲームを使用した疑似体験を実施(専門学校)
- ✓ 炊き出しや避難所運営を実際に行い、さまざまな用具の取り扱いを体験(短期大学)
- ✓ 全学的な防災キャンプへの参加(短期大学)

#### ③地域・現場での実践による学び

- ✓ フィールドワークを踏まえた地域の防災福祉マップ作り(短期大学)
- ✓ 安全な避難を生徒が考えるよう、避難訓練を住民参加型で現実に近い形で実施(福祉系高等学校)
- ✓ 地域の指定避難所となる公民館へ訪問し、地域の方々との交流会を実施(福祉系高等学校)

### ★教育を実施するうえでのポイント

災害時に必要とされる情報は多岐にわたり、どの情報が必要かは一律ではなく、支援者として活動する場所、対象者の状態や背景に応じて異なることの理解が必要になる。また、災害時は情報が不足し、錯綜する中で迅速な判断が必要であり、正確な情報をすべて集めてから行動するのではなく、不完全な情報の中で優先順位をつけて判断し、行動する力を育てることが求められる。

そのため教育を実施する上では、正解ではなく、思考過程や判断の根拠を重視し、不足や矛盾を含む情報から信頼性を見極める力、観察も重要な情報源であることや更新されていく情報を確認する視点、さらには個人情報の取り扱いや本人の意思の尊重といった倫理的配慮も災害時だからこそ重要であることを伝える必要がある。

こうした力を身につけるためには、HUG や模擬避難所、ロールプレイを取り入れ、多職種連携の中で情報収集・共有したり、グループディスカッションや振り返りを組み合わせ、断片的情報から全体像を推測する思考力を養うことも効果的である。その他、ICTや災害時ツールの活用方法も扱い、情報収集の方法の多様性を理解してもらうことも有効である。こうした学びは短時間の演習や一つの事例からでも実践可能であり、介護過程等既存の科目と関連づけながら継続的に取り組むことが望まれる。

(本事業検討委員会)

### 3. チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力

#### 【参考教育事例】

##### ①知識による学び

- ✓ 多職種連携や福祉的トリアージについて実例をもとに説明(4年制大学)
- ✓ 過去の災害についての調べ学習とグループディスカッション(4年制大学)
- ✓ DWAT を講師として招き、チーム活動の体験談の共有(短期大学)
- ✓ 廃用症候群や生活不活発病の予防や DWAT の役割、専門性の説明(短期大学)
- ✓ 東日本大震災の被災状況や復興に向けた各機関の役割の講義(専門学校)
- ✓ 就職先における災害時のリスクに気づく感覚を磨くために、BCP について教授(専門学校)
- ✓ 「佐賀県国際交流協会」や佐賀県の防災課と連携した講演の実施(短期大学)

##### ②演習・体験による学び

- ✓ 災害時の移送における計画や実践の GW、ロールプレイの実施(短期大学)
- ✓ 避難時の移動支援技術を、実技演習やロールプレイにて実施(4年制大学)
- ✓ DWAT を招いた移送支援技術の訓練の実施(短期大学)
- ✓ 看護科との合同授業で、避難所設計を考える GW を実施(専門学校)
- ✓ 小平市版の HUG を作成し、授業で大学の地域資源にあてはめた GW の実施(4年制大学)
- ✓ HUG(避難所運営ゲーム)や DIG(災害図上訓練)を用いた参加型の演習(4年制大学)
- ✓ HUG を用いたさまざまな要配慮者への環境づくりや対応の演習(短期大学)
- ✓ 市の防災課の職員を招き、地域の避難 MAP や福祉避難施設等の講義の後、BCP 机上訓練を実施(専門学校)
- ✓ 福祉避難所の設営企画(段ボールベッドの組み立て、大学近隣のハザードマップの作成)(4年制大学)
- ✓ 生活支援技術の調理実習で、避難所を想定し、限定的な材料での炊き出し訓練の実施(4年制大学)
- ✓ 炊き出しや避難所運営を実際に行い、さまざまな用具の取り扱いを体験(短期大学)
- ✓ 全学的な防災キャンプへの参加(短期大学)
- ✓ 社協主催の災害ボランティアコーディネーター講習会に参加し、その後ワークショップや演習で知識を具体化(短期大学)

##### ③地域・現場での実践による学び

- ✓ 社協や青年会議所、地域住民と連携した防災イベントの企画・運営に学生が参加(4年制大学)
- ✓ フィールドワークを踏まえた地域の防災福祉マップ作り(短期大学)
- ✓ 安全な避難を生徒が考えるよう、避難訓練を住民参加型で現実に近い形で実施(福祉系高等学校)
- ✓ 消防団と連携した避難訓練のなかで要配慮者の対応訓練などを経験(専門学校)
- ✓ 被災地の清掃や避難所・仮設住宅でのボランティア活動(災害に備えたまちづくりプロジェクト)(福祉系高等学校)
- ✓ 看護学科と連携した課外活動(災害に備えたまちづくりプロジェクト)(福祉系高等学校)
- ✓ 地域の指定避難所となる公民館へ訪問し、地域の方々との交流会を実施(短期大学)

#### ★教育を実施するうえでのポイント

介護福祉士養成課程において、災害時に「チーム・多職種間で連携して情報をつなぐ力」を養うには、想定外の事態に即応できる実践的な演習が不可欠となる。

災害現場では状況が刻々と変化するため、場面に応じて臨機応変に判断し、行動する能力が求められる。生活支援は途切れなく続くものであり、一人の力で抱え込むことは支援の停滞を招いてしまう。さらに、支援が断片的にならないためにも、多職種連携によって多角的な視点から難局を乗り越える姿勢を学ぶ必要がある。

具体的な授業展開としては、HUG(避難所運営ゲーム)やDIG(災害図上訓練)等といった机上訓練を取り入れ、生徒・学生自身が主体的に考える機会を作ることが効果的である。その際には、実際の災害経験者をゲスト講師として招き、リアルな情報に基づいた多様な場面を設定することは、現場の切迫感を共有することができる。また、他分野の専門家や生徒・学生、さらに地域を巻き込んだ演習を行うことによって、それぞれが大切にしている視点の違いを理解し、チームでどのように情報をつなぎ、マネジメントを行うべきかを体験的に学ぶことが期待される。

このように、情報の伝達方法とその必要性を肌で感じる教育が、将来の災害現場で機能する連携力につながると思われる。

(本事業検討委員会)

#### 4. 被災した環境下でも、柔軟に対応し、工夫できる応用力・創造力

##### 【参考教育事例】

##### ①知識による学び

- ✓ 生活支援技術の授業で、災害に特化せず、湯たんぽやポータブルトイレの活用方法を教授(4年制大学)
- ✓ 多職種連携や福祉的トリアージについて実例をもとに説明(4年制大学)
- ✓ 写真や動画の共有や体験談の共有による学びの具体化(短期大学)
- ✓ 教員の災害ボランティア経験の共有(福祉系高等学校)
- ✓ 被災地での活動経験のある外部講師を招いた体験談の共有(短期大学)
- ✓ 聴覚障がいのある方による東日本大震災の被災体験談の講話(福祉系高等学校)
- ✓ 災害関連のDVD、YouTube 動画や新聞記事の視聴(短期大学)
- ✓ 学生自身が、災害時にどのような行動をいつするのかを考えるために、マイタイムラインシートを活用(短期大学)
- ✓ ハザードマップを活用した、自宅や介護施設の津波や浸水などの危険度の調べ学習(短期大学)
- ✓ 学校所在地のハザードマップを用いた授業(福祉系高等学校)
- ✓ 介護実習施設の備蓄やマニュアルの説明や見学(短期大学)

##### ②演習・体験による学び

- ✓ 即興で与えられたテーマについて考え、実践する授業で情報の共有や思考力・実践力を養成(専門学校)
- ✓ 狭い場所で体を寄せて寝たり、火事を想定して低い姿勢を保ったりする五感を使った疑似体験(専門学校)
- ✓ 避難時の移動支援技術を、実技演習やロールプレイにて実施(4年制大学)
- ✓ 災害時の移送における計画や実践の GW、ロールプレイの実施(短期大学)
- ✓ 避難所支援を想定した「搬送方法」や「床からの立ち上がり」などの生活支援技術、非常食体験(短期大学)
- ✓ 避難所の災害用トイレや段ボールベッドの組み立て体験、非常食づくりの実施(短期大学)
- ✓ DWAT を招いた移送支援技術の訓練の実施(短期大学)
- ✓ 視覚障害者の避難誘導体験を行い、障害のある人役と介助者役の双方を体験(短期大学)
- ✓ 限られた物資のなかでのおむつ交換の演習を実施(福祉系高等学校)
- ✓ 小平市版の HUG を作成し、授業で大学の地域資源にあてはめた GW の実施(4年制大学)

- ✓ HUG(避難所運営ゲーム)や DIG(災害図上訓練)を用いた参加型の演習(4年制大学)
- ✓ HUG を用いたさまざまな要配慮者への環境づくりや対応の演習(短期大学)
- ✓ HUG 社会福祉施設バージョンゲームを使用した疑似体験を実施(専門学校)
- ✓ 新聞でスリッパを作成(福祉系高等学校)
- ✓ 福祉避難所の設営企画(段ボールベッドの組み立て、大学近隣のハザードマップの作成)(4年制大学)
- ✓ 生活支援技術の調理実習で、避難所を想定し、限定的な材料での炊き出し訓練の実施(4年制大学)
- ✓ 炊き出しや避難所運営を実際に行い、さまざまな用具の取り扱いを体験(短期大学)
- ✓ 全学的な防災キャンプへの参加(短期大学)
- ✓ 社協主催の災害ボランティアコーディネーター講習会に参加し、その後ワークショップや演習で知識を具体化(短期大学)
- ✓ 応急手当の知識・技術の実践(2年制大学)
- ✓ 科目「医療的ケア」での救急対応の理解と実践(2年制大学)
- ✓ 看護科との合同授業で、避難所設計を考える GW を実施(専門学校)
- ✓ 県防災館の見学、地震・大雨・強風体験(福祉系高等学校)

### ③地域・現場での実践による学び

- ✓ 社協や青年会議所、地域住民と連携した防災イベントの企画・運営に学生が参加(4年制大学)
- ✓ フィールドワークを踏まえた地域の防災福祉マップ作り(短期大学)
- ✓ 介護実習先で防災委員会や避難訓練などに参加できるよう、実習先に依頼(4年制大学)
- ✓ 安全な避難を生徒が考えるよう、避難訓練を住民参加型で現実に近い形で実施(福祉系高等学校)
- ✓ 被災地の清掃や避難所・仮設住宅でのボランティア活動(災害に備えたまちづくりプロジェクト)(福祉系高等学校)

### ★教育を実施するうえでのポイント

応用力は既存の知識を活かす力、創造力は新たな価値を生み出す力であり、応用の積み重ねが創造の基盤となり、両者は循環的に発展していく関係にある。本教育で重要なのは、応用力や創造力の前提となる「基礎力」を徹底して養うことである。

応用力とは単なる手順の暗記ではなく、「なぜそうするのか」という原理・本質の理解に基づく力である。例えば介護方法においても、身体力学や安全性、本人の力の活用を理解していれば、対象者や状況が変化しても柔軟に対応できる。さらに、相手の状態や環境、リスクを的確に捉える観察力や経験の蓄積、比較・分解・類推といった思考力も不可欠であり、「この状況は過去のどの経験に似ているのか」と過去の経験と結び付けて考える力が応用力を支える。

これらを踏まえ、災害時の対応も特別なものではなく、日常の生活支援の延長として捉えることが重要である。さらに、失敗を許容し試行錯誤を促す教育環境の整備に加え、シミュレーションや反復学習(学年毎に行う等)、OODA ループ、クリティカルシンキングおよびラテラルシンキングの活用により、「考え続ける力」を育むことが求められる。

(本事業検討委員会)

## 5. 自らの役割を見出し、主体的に行動する力

### 【参考教育事例】

#### ①知識による学び

- ✓ 防災カードゲーム・ソナエトランプを活用した学習(4年制大学)
- ✓ 写真や動画の共有や体験談の共有による学びの具体化(短期大学)
- ✓ 学生自身が、災害時にどのような行動をいつするのかを考えるために、マイタイムラインシートを活用(短期大学)
- ✓ ハザードマップを活用した、自宅や介護施設の津波や浸水などの危険度の調べ学習(短期大学)
- ✓ 介護実習施設の備蓄やマニュアルの説明や見学(短期大学)
- ✓ 廃用症候群や生活不活発病の予防や DWAT の役割、専門性の説明(短期大学)
- ✓ 災害関連のDVD、YouTube 動画や新聞記事の視聴(短期大学)
- ✓ 実際の映像など見ながら、イメージトレーニングや演習を実施(短期大学)
- ✓ 留学生による母国の災害に関する現状についての共有(専門学校)
- ✓ 就職先における災害時のリスクに気づく感覚を磨くために、BCP について教授(専門学校)
- ✓ 災害ボランティア活動に参加した学生・教員の体験談の共有(短期大学)

#### ②演習・体験による学び

- ✓ 避難時の移動支援技術を、実技演習やロールプレイにて実施(4年制大学)
- ✓ HUG(避難所運営ゲーム)や DIG(災害図上訓練)を用いた参加型の演習(4年制大学)
- ✓ 福祉避難所の設営企画(段ボールベッドの組み立て、大学近隣のハザードマップの作成)(4年制大学)
- ✓ 生活支援技術の調理実習で、避難所を想定し、限定的な材料での炊き出し訓練の実施(4年制大学)
- ✓ 災害時の移送における計画や実践の GW、ロールプレイの実施(短期大学)
- ✓ 全学的な防災キャンプへの参加
- ✓ 応急手当の知識・技術の実践(2年制大学)
- ✓ 科目「医療的ケア」での救急対応の理解と実践(2年制大学)
- ✓ 即興で与えられたテーマについて考え、実践する授業で情報の共有や思考力・実践力を養成(専門学校)
- ✓ 看護科との合同授業で、避難所設計を考える GW を実施(専門学校)
- ✓ 全学的に 2 年次に消防団と連携した上級救命技能講習の実施(専門学校)
- ✓ 県防災館の見学、地震・大雨・強風体験(福祉系高等学校)

- ✓ 避難所の災害用トイレや段ボールベッドの組み立て体験、非常食づくりの実施(短期大学)

### ③地域・現場での実践による学び

- ✓ フィールドワークを踏まえた地域の防災福祉マップ作り(短期大学)
- ✓ 社協や青年会議所、地域住民と連携した防災イベントの企画・運営に学生が参加(4年制大学)
- ✓ 介護実習先で防災委員会や避難訓練などに参加できるよう、実習先に依頼(4年制大学)
- ✓ 安全な避難を生徒が考えるよう、避難訓練を住民参加型で現実に近い形で実施(福祉系高等学校)
- ✓ 被災地の清掃や避難所・仮設住宅でのボランティア活動(災害に備えたまちづくりプロジェクト)(福祉系高等学校)

### ★教育を実施するうえでのポイント

災害時に生じる事象を学習者が具体的に想像できる教材や学習環境を工夫し、災害時の環境や利用者の様子に思いを巡らせながら、「自分には何ができるのか」「優先して取り組むべきことは何か」といった問いを学習者自身が立て、展開する学習は、災害時の対応を自分事として捉え、役割を見出し、主体的に行動しようとする資質・能力の育成に資する。しかしながら、十分な教材等を常に準備できるとは限らない。そのため、まずは平時の学習において、発展的な学習として、限られた人員や物資、情報の中で判断が求められる状況を取り入れるなど、災害時を想定した学びへとつなげ、考えを深めることも有効である。さらに、災害時の対応は正解が明確でない課題であることから、教員と生徒がともに検討しながら学び合うことにも意義がある。

また、学習者が多様なアイデアを検討することにとどまらず、「どのような状況で」「何に迷い」「どのように判断したのか」といった思考過程を可視化し、共有・振り返りを行うことが重要である。加えて、被災地での経験を有する専門職や有識者との対話を通して、学習者の考えに対する価値づけを行うとともに、それらが実際の災害現場でどのように活用されるのか、どのような行動がとられていたのかといった実践と照らし合わせることで、新たな気づきを促し、生活者の視点から専門職としての視点へと発展的に学びを深めることができる。

さらに、災害を経験していない地域においても、災害への備えは共通の課題である。地域や事業所等と課題を共有し、ともに考える機会を設けることは、学習者が学びを自分事として捉える契機となるとともに、地域や利用者のために自らの力を活用できたという有用感や達成感を育み、主体的に行動しようとする態度の育成に寄与する。

(本事業検討委員会)

## 6. 自分自身を守り、支援を続けるためのセルフマネジメント力

### 【参考教育事例】

#### ①知識による学び

- ✓ 勤務規定や出勤規定の内容を紹介し、災害時の出勤義務など制度的な学習(短期大学)
- ✓ 学生自身が、災害時にどのような行動をいつするのかを考えるために、マイタイムラインシートを活用(短期大学)
- ✓ ハザードマップを活用した、自宅や介護施設の津波や浸水などの危険度の調べ学習(短期大学)
- ✓ 全学的に2年次に消防団と連携した上級救命技能講習の実施(短期大学)
- ✓ 就職先における災害時のリスクに気づく感覚を磨くために、BCPについて教授(専門学校)
- ✓ 学校所在地のハザードマップを用いた授業(福祉系高等学校)

#### ②演習・体験による学び

- ✓ 全学的な防災キャンプへの参加(短期大学)
- ✓ 市の防災課の職員を招き、地域の避難MAPや福祉避難施設等の講義の後、BCP机上訓練を実施(専門学校)
- ✓ 利用者の命を守り、職員の命を守りながらも事業を継続するための知識を机上訓練でイメージ化(専門学校)
- ✓ 県防災館の見学、地震・大雨・強風体験(福祉系高等学校)

#### ③地域・現場での実践による学び

- ✓ 介護実習先で防災委員会や避難訓練などに参加できるよう、実習先に依頼(4年制大学)

### ★教育を実施するうえでのポイント

災害時に介護福祉士が支援を継続するためには、まず自分自身の安全を確保し、心身の状態を適切に整える視点を持つことが重要である。介護福祉士は利用者の生活を支える専門職であるが、災害時には支援する側もまた被災者となり得る。そのため教育においては、「自分を守ること」と「支援を続けること」は対立するものではなく、自身の命と生活を守る備えが、利用者への支援の継続につながることを理解できるようにする必要がある。

具体的には、ハザードマップやマイタイムライン、勤務規定、出勤規定、BCP 等を活用し、自分がどこで被災する可能性があるのか、どのような行動を優先すべきか、勤務先や地域でどのような役割が求められるのかを具体的に想定する学びが有効である。また、机上訓練や避難訓練、防災キャンプ、救命講習などを通して、限られた情報や資源の中で判断する力、無理を抱え込まず周囲に助けを求める力、支援を継続するために休息や連携を調整する視点も育てたい。

さらに、セルフマネジメント力を個人の努力や責任のみに帰すのではなく、組織的な支援体制や地域とのつながりの中で発揮される力として理解させることも大切である。自分自身を守ることは、持続可能な支援を可能にする専門性の一部であることを、教育を通して丁寧に伝えていく必要がある。

(本事業検討委員会)



令和7年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金  
社会福祉推進事業  
「介護福祉士養成課程における災害時の介護に係る  
教育のあり方に関する調査研究事業」

介護福祉士養成施設等における災害時の介護に係る教育事例集

令和8年3月

発行：株式会社 日本能率協会総合研究所  
住所：〒105-0011 東京都港区芝公園3-1-22  
電話：03-3578-7500



令和7年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金  
社会福祉推進事業

介護福祉士養成課程における  
災害時の介護に係る教育のあり方に  
関する調査研究事業

令和8年3月

発行:株式会社 日本能率協会総合研究所  
住所:〒105-0011 東京都港区芝公園3-1-22  
電話:03-3578-7500